

茨城県教育財団文化財調査報告第226集

# 松田古墳群

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書V

平成16年3月

日本道路公団  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第226集

# 松田古墳群

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書V

平成16年3月

日本道路公団  
財団法人 茨城県教育財団



松田古墳群全景



第1号墳第1主体部遺物出土状況



第1号墳第1主体部出土 五獸形鏡



松田古墳群出土 繩文土器

## 序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、日本道路公団は、岩瀬町松田地区において、北関東自動車道（協和～友都）建設事業を決定いたしました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である松田古墳群が所在します。

財團法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年1月から平成14年6月まで発掘調査を実施しました。

本書は、松田古墳群の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本道路公団から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、岩瀬町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 斎藤 佳郎

## 例　　言

1 本書は、日本道路公团東京建設局水戸工事事務所の委託により、財團法人茨城県教育財團が平成13年度及び14年度に発掘調査を実施した、茨城県西茨城郡岩瀬町大字松田字瀧711番地の4ほかに所在する松田古墳群の発掘調査報告書である。

2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調査 平成14年1月1日～平成14年3月31日、平成14年4月1日～平成14年6月30日

整理 平成15年4月1日～平成15年11月30日

3 当遺跡の発掘調査は、埋蔵文化財部長兼調査第一課長阿久津久、調査第二課長鈴木美治のもと、以下の者が担当した。

平成13年度

調査第一課第1班長 海老澤 稔 平成14年1月1日～平成14年3月31日

首席調査員 荒井 保雄 平成14年1月1日～平成14年3月31日

主任調査員 萩木 悅男 平成14年1月1日～平成14年3月31日

主任調査員 藤田 肇也 平成14年1月1日～平成14年3月31日

主任調査員 黒澤 秀雄 平成14年3月1日～平成14年3月31日

調査員 梅澤 貴司 平成14年3月1日～平成14年3月31日

調査員 寺門 義信 平成14年1月1日～平成14年3月31日

平成14年度

調査第二課第2班長 枝野谷 哲 平成14年4月1日～平成14年6月30日

主任調査員 横倉 要次 平成14年4月1日～平成14年6月30日

主任調査員 柳 雅彦 平成14年4月1日～平成14年6月30日

4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、主任調査員横倉要次が担当した。

5 本書の作成にあたり、刻書上器の文字については国立歴史民俗博物館副館長兼教授の平川南氏に、繩文上器については千葉大学教授の柳澤清一氏に御指導いただいた。

## 凡　　例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅷ系座標を原点とし、X軸=+37,720m, Y軸=+27,520mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。

3 遺構・遺物・土層の実測図、一覧表、遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 土坑-S K 堀跡-SD 整地面-S J 土壘跡-SA 古墳-T M  
塚-T K 柱穴-P

遺物 土器・陶器-P 拓本記録土器-TP 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品-M  
瓦-T 自然礫-S

土層 扰乱-K

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

焼土・旧表土・施釉・赤彩 ■ 炉・織維土器断面 ■ 粘土・黒色処理・赤変 ■ 油煙・煤 ■  
土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品△ 瓦▲ 硬化面-----

6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は500分の1、各遺構は60分の1に縮尺して掲載することを基本とした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

7 「主軸方向」は、住居については炉の中心を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その他の遺構については、長軸（長径）方向を主軸とみなした。主軸方向は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。なお、〔 〕を付したもののは推定である。

8 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

- (1) 計測値の単位は、法量がcm、重量がgである。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。
- (2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号については、上器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石器・石製品、金属製品、瓦ごとに通し番号とし、観察表の備考欄に示した。挿図番号は遺構ごとし、写真図版に記した番号も同一である。
- 9 遺構一覧表における計測値の単位は、m・cmである。現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。

# 抄 錄

ふりがな	まつだこあんぐん							
書名	松田古墳群							
副書名	北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
番号	V							
シリーズ名	茨城県教育財团文化財調査報告							
シリーズ番号	第226集							
著者名	横倉要次							
編集機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所取道	ふりがな 所 在 地	コード	北 緯	東 経	標 高	調査期間	調査面積	調査原因
松田古墳群	茨城県西茨城郡那珂川町 松田字瀬711番地の4ほか	08324	36度 20分 020 (36度 20分 31秒)	140度 08分 30秒 (140度 08分 18秒)	86 ~ 105m	20020101 ~ 20020630	10,883.71m <sup>2</sup>	北関東自動車道(協和~友部)建設事業に伴う事前調査
所 取 得 路 名	種 別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
松田古墳群	集落跡	桃文	縦穴住居跡	17軒	绳文上器(深鉢・浅鉢)、石器	绳文時代中期から古墳時代中期にかけて断続的に営まれた集落跡と、古墳時代後期の古墳群が中心の複合遺跡である。		
			防衛穴	10基	(有茎・石斧・磨石・敲石・凹石・右面)、土製品(土器片門型)			
			陥し穴	22基				
			その他の土坑	15基	石製品(石棒・熱粘石)			
	森	生	縦穴住居跡	17軒	生火上器(壺・高环)、土製品	绳文時代の住居跡から、石棒と熱粘石が確認された。		
			土器棺墓	1基	(筋鉢車)、石器(石斧・石皿・磨石)			
		古	墳	堅穴住居跡	11軒	十輪器(壺・壺・壺・台付壺)	前方後円墳は、後円部の墳丘内と埴丘下に粘土都を有し、稀有な事例と言える。	
			土坑	2基	替台(高环・壺)、金属製品(リ子)			
	古 墓 群	古	墳	前方後円墳	1基	土師器(壺)、埴輪(円筒)、金	副葬品の鏡鏡(五獸形鏡)は、发掘調査による墓内初	
			円墳	3基	銅製品(直刀・刀子・鉄鎌・劍鏡・銅鏡)、ガラス製品(小玉)	の出土資料である。		
	塚 群	中・近世	塚	7基	上師質土器(小皿・焰焰)、瓦質土器、陶器、丸(軒丸瓦・軒瓦)			
	仏教開造施設跡	中・近世	墓地	1か所	半瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦・瓦斗瓦・道具瓦)、石製品(五輪塔)、			
	そ の 他	古	溝路	1条	石器(砥石)、古鏡(元祐通寶・寛永通寶)			
		中・近世	土壙跡	1条				
			土坑	4基				
			甃跡	1条				
		不 明	土坑	80基				
			溝跡	2条				

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 錄	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 綱文時代の遺構と遺物	8
(1) 壺穴住居跡	8
(2) 土坑	49
(3) 遺構外出土遺物	83
2 弥生時代の遺構と遺物	91
(1) 壺穴住居跡	91
(2) 土器棺墓	131
(3) 遺構外出土遺物	132
3 古墳時代の遺構と遺物	136
(1) 古墳	136
(2) 壺穴住居跡	166
(3) 土坑	188
(4) 溝跡	190
(5) 遺構外出土遺物	192
4 中・近世の遺構と遺物	194
(1) 繁地面	194
(2) 堀跡・土壘跡	206
(3) 塚	209
(4) 土坑	215
(5) 遺構外出土遺物	218
5 その他の遺構と遺物	219
(1) 上坑	219
(2) 溝跡	221
(3) 旧石器時代の遺物	223
第4節 まとめ	224
付 章 茨城県岩瀬町松田古墳群出土銅鏡付赤色顔料の成分分析調査	241
茨城県岩瀬町松田古墳群出土銅鏡の成分分析調査	242
写真図版	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成10年12月15～18日に現地踏査を、平成12年2月8日と平成13年10月11日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年9月11日と平成13年10月11日に、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに事業地内に松田古墳群が存在する旨回答した。

平成13年7月12日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成13年7月13日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成13年10月9日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成13年10月26日、茨城県教育委員会教育長は、日本道路公団東京建設局事務所長あてに、松田古墳群について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

茨城県教育財團は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年1月1日から平成14年6月30日まで、松田古墳群の発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

松田古墳群の発掘調査は、平成14年1月1日から平成14年6月30日まで実施した。調査経過については、下表の通りである。

年度 月	平成13年度				平成14年度		
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
調査準備	■				■		
表土除去	■	■				■	
遺構調査			■■■■■		■■■■■		
遺物洗浄 注写整理			■■■■■		■■■■■		
搬出準備					■		■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

松田古墳群は、茨城県西茨城郡岩瀬町大字松田字瀧711番地の4ほかに所在する。

岩瀬町は、茨城県の中西部に位置している。町北部には富谷山、兩巻山及び高峰山、町東部には羽黒山、南部には加波山と南引山があり、三方を丘陵性の山地で取り囲まれた盆地を中心とした町域をなしている。町北東部に位置する筑波山塊の鏡ヶ池に源を発する桜川が、町の中央部を東西に貫流している。平地は、桜川、大川、筑輪川などの流域と、山間部に入り込んだ谷状の低地などに見られる。

当町を取り囲んでいる八溝山系は、八溝山塊、鶴の子山塊、鶴足山塊及び筑波山塊の4つの山塊群から成り立っている。これらの山塊の地質は、中・古生代の地向斜に堆積された地層と、これを貫く花崗岩類から形成されている。特に、鶴足山塊と筑波山塊の境界付近にあたる町東部周辺は、広く花崗岩が分布している。さらに、これらの山塊群から延びる台地の大部分は、関東ローム層に厚くおおわれた洪積台地である。また、水田が広がる桜川流域一帯などは、河川の浸食・堆積作用による沖積地である<sup>1)</sup>。

当遺跡は、岩瀬町の南東部に位置し、筑波山塊の北部から東側に延びる標高82~98mの丘陵性の舌状台地上に立地している。台地周辺の東部から南部は、桜川の支流である筑輪川によって形成された沖積地が広がり、水田として利用されている。当遺跡の調査前の現況は、山林である。

### 第2節 歴史的環境

岩瀬町内における遺跡数は、現在までに90遺跡が周知されている<sup>2)</sup>。遺跡は、町域内を東西に貫流する桜川及びその支流域の台地上に多く見られ、岩瀬盆地を取り囲むように縄文時代から中・近世にかけての遺跡が形成されている。ここでは、松田古墳群と位置的・時期的に密接な関係があると思われる周辺遺跡を中心に、各時代を概観していきたい。

旧石器時代の遺跡については、遺構や出土状況など明確ではないが、これまでに上野原内地で尖頭器が、宮谷地内と高幡地内で石槍がそれぞれ発見されている<sup>3)</sup>。近年では、発掘調査が実施された町域西部の辰海遺跡<sup>4)</sup>・当遺跡<sup>5)</sup>でも旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代の遺跡は、当町域内で60か所以上が知られ、主に桜川流域の沖積地から入り込む支谷に面した台地縁辺部に形成されている。遺跡は町東部に多く、早期から晩期までの各時期の遺跡が確認されているが、一期または断続的に営まれた遺跡がほとんどである。当遺跡の周辺では、松田遺跡(1)・原遺跡(4)・曾根宮下遺跡(6)・曾根東台遺跡(8)・花園遺跡(17)等が知られている。発掘調査が実施された遺跡としては、当遺跡の北方約3kmに位置する裏山遺跡(30)があり、中期の住居跡6軒やプラスコ状土坑50基などが確認されている<sup>6)</sup>。また、町域西部の大田神社前遺跡においても、同様の遺構が調査されている<sup>7)</sup>。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と同じような台地上に分布し、16遺跡が確認されている。これまでに、橋本県との県境に近い大泉地区から網頸壺形土器と筒形土器が、鐵部遺跡(29)からは石庖丁<sup>8)</sup>が出土している<sup>9)</sup>。これらの遺物は単独発見ではあるが、弥生時代中期の資料として特筆されるものであろう。また、南飯田遺跡と番匠免遺跡からも弥生土器が出土しており<sup>10)</sup>、那珂川・久慈川流域に分布する弥生時代後期から終末期の土

器との関係をうかがうことができる。当遺跡周辺では、縄文時代と複合する原遺跡（4）・磐根東台遺跡（8）や、高幡遺跡（10）・加茂遺跡（13）・花園遺跡（17）等が知られている。これらの遺跡のうち、花園遺跡では複合する古墳群の発掘調査の際に、弥生土器が出土している<sup>10</sup>。高幡遺跡も一部発掘調査が実施され、弥生時代の住居跡や弥生土器・紡錘車などが確認されている<sup>11</sup>。さらに、前述の裏山遺跡においても、後期の住居跡2軒が確認されている<sup>12</sup>。また、町域西部で調査が実施された辰海道遺跡<sup>13</sup>・当向遺跡<sup>14</sup>でも住居跡などが確認されており、当遺跡とともに弥生時代後期の集落分布が明らかになりつつある。

古墳時代になると、遺跡数は古墳を中心に増加の傾向を見せるようになる。現在までの分布調査によると、古墳群46か所、古墳の総数は170基を超えている<sup>15</sup>。これらの古墳群や古墳は、桜川流域の沖積地を望む丘陵上に位置し、町域内における古墳の発掘調査例も比較的多い。これまでに調査された古墳としては、狐塚古墳（26）、岡中古墳群、青柳古墳群（第1・2号墳）（23）、花園古墳群（第3号墳）（16）、福古墳群（第2・7号墳）（35）、西沢古墳などがある。その中で狐塚古墳は、当遺跡から北西へ約4kmの長辻寺山西麓部に所在し、工場建設に伴って緊急調査が実施された<sup>16</sup>。この古墳の規模は全長約40m、高さ約4m（後方部墳丘）の前方後方墳で、出土遺物等から4世紀代に位置付けられている。また、標高約130mの長辻寺山山頂には、長辻寺山古墳（25）が所在する。この古墳は未調査で墳丘の規模等については明確ではないが、全長約120m、前方部を南東に向けて築造された前方後円墳とされ、採集された埴輪の検討から古墳時代初期の様相を示すとされている<sup>17</sup>。この二つの古墳は、岩瀬盆地のほぼ中央の独立丘陵上に築造された旧新治國東部では最大規模の古墳で、古墳時代前期の首長墓と考えられている。さらに、青柳第2号墳の調査では、墳頂部で並列する粘土壠を確認するとともに、墳裾部に5基の石棺が検出されている<sup>18 19</sup>。当遺跡に近い花園古墳群は、前方後円墳と6基の円墳で構成されるが、宅地造成中に第3号墳から彩色壁画を有する横穴式石室が発見されている<sup>20</sup>。このように、当町内の古墳は注目されることが多い。

古墳時代の聚落とされる遺跡は、古墳群の数と比べると少ないが、辰海道遺跡、金谷遺跡、当向遺跡、大田神社前遺跡、磯部遺跡（29）、裏山遺跡（30）、高幡遺跡（10）等が所在する。これらの遺跡はすでに発掘調査が実施されており、特に辰海道遺跡、金谷遺跡、当向遺跡は、古墳時代から平安時代まで続く比較的大きな聚落であることが確認されている<sup>21</sup>。古墳時代に拠点的な聚落形成がすすめられ、やがて律令体制下へ組み入れられていったと考えられる。当遺跡周辺の裏山遺跡では、前期から後期にかけての住居跡30軒が調査された<sup>22</sup>。特に中期の住居跡からは石製模造品が出土し、聚落内の祭祀を考えるうえでの貴重な資料を提供している。また、当遺跡と低地を挟んで立地する高幡遺跡でも、中期から後期にかけての住居跡が確認されている<sup>23</sup>。

奈良・平安時代の遺跡としては、町域西部の上野原瓦窯跡、堀ノ内古窯跡群、鐵砲古窯跡群等の生産遺跡が学史的にも知られている。また、聚落遺跡としては、辰海道遺跡、金谷遺跡、山王遺跡、当向遺跡などが、町域西部を中心に存在している。これらの遺跡は、生産遺跡とともに新治郡衙との関わりを持ちながら、形成されていった可能性が考えられている。

中世になると、岩瀬町の大部分は京都の進幸王院の莊園領となり、中郡氏が在地領主としての地位を固めていく。中世の遺跡としては、南北朝時代の中郡城といわれている羽黒山城跡、結城氏の家臣加藤大隅守が築いた畠谷城跡、小宅高国が築いた坂戸城跡をはじめとし、棟梁城跡、岩瀬城跡などが確認されている<sup>24</sup>。当遺跡の周辺では、松田城跡（2）、橋本城跡（19）、谷中城跡（22）、磯部城跡（31）などが所在するが、これら城館跡の詳細については不明な部分が多く、今後の調査研究が待たれる。

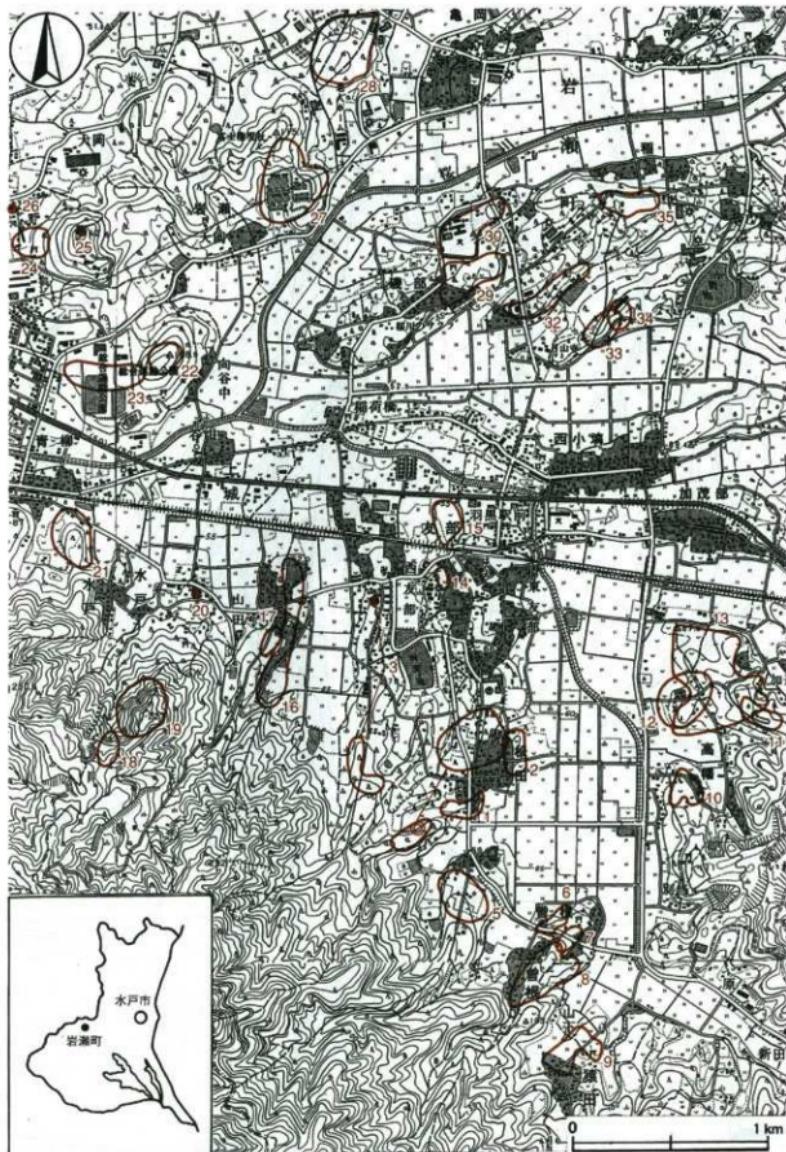
※文中の（ ）内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註)

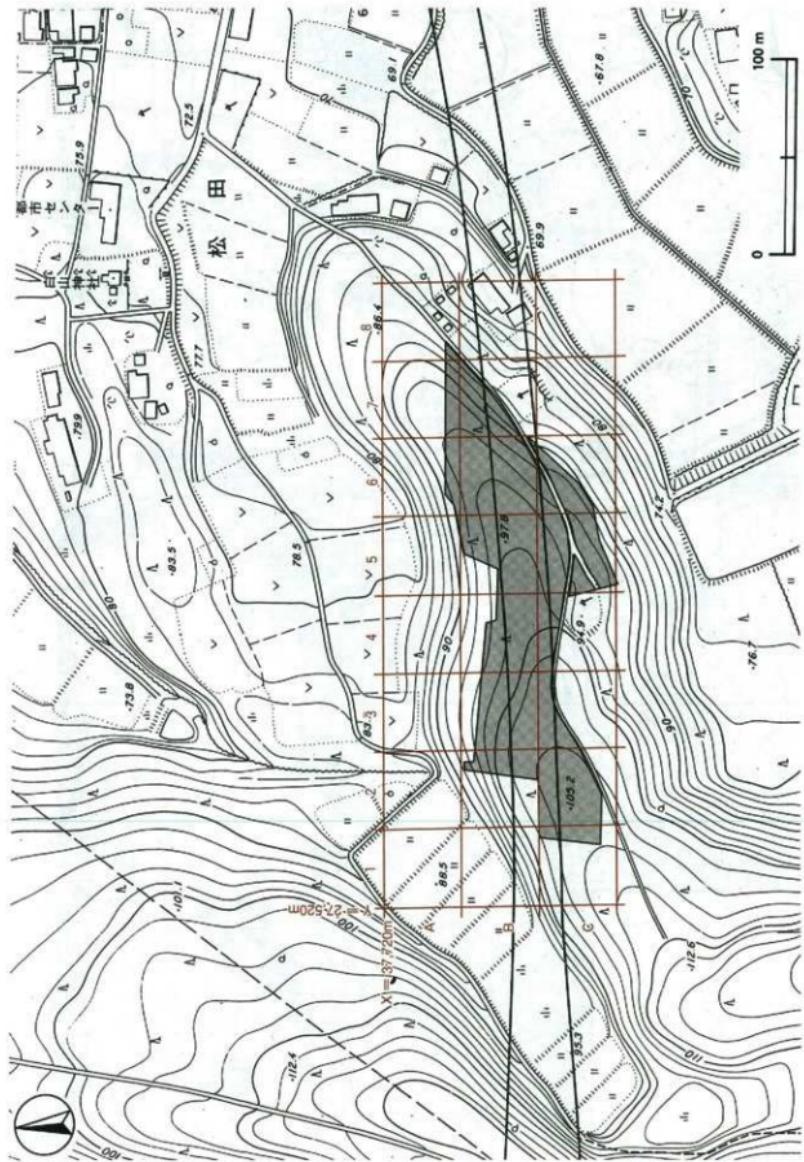
- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会 『日本の地質3 関東地方』 共立出版 1986年10月
- 2) 茨城県教育文化課 『茨城県遺跡地図(地名表欄)(地図欄)』 茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 遺史編』 岩瀬町 1987年3月
- 4) 財團法人茨城県教育財團 『年報』21 (財) 茨城県教育財團 2002年6月
- 5) 財團法人茨城県教育財團 『年報』22 (財) 茨城県教育財團 2003年6月
- 6) 黒澤秀雄 『一般県道西小堀真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 菓山遺跡』 『茨城県教育財團文化財調査報告』 第73集 (財) 茨城県教育財團 1992年3月
- 7) 5) と同じ
- 8) 3) と同じ
- 9) 3) と同じ
- 10) 川又清明 『岩瀬町花園遺跡出土弥生式土器』『婆良岐考古』第6号 婆良岐考古回人会 1984年4月
- 11) 伊來重敏・川崎純徳 『花園壁面古墳(第3分墳)調査報告』『岩瀬町文化財調査報告』第7集 岩瀬町教育委員会 1985年3月
- 12) 5) と同じ
- 13) 4) と同じ
- 14) 5) と同じ
- 15) 2) と同じ
- 16) 西宮一男 『常陸風塚古墳調査報告書』 岩瀬町教育委員会 1969年4月
- 17) 大幡泰夫・萩 悅久・水沼良介 『常陸長辺寺山古墳の円筒埴輪』『古代』第77号 早稲田大学考古学會 1984年6月
- 18) 伊來重敏 『青柳2号墳調査報告』『岩瀬町文化財調査報告』第6集 岩瀬町教育委員会 1983年3月
- 19) 丸次 堅 『岩瀬盆地考古学点描』『領域の研究・阿久津久先生遺作記念論集』阿久津久先生遺作記念事業実行委員会 2003年4月
- 20) 11) と同じ
- 21) 5) と同じ
- 22) 6) と同じ
- 23) 5) と同じ
- 24) 3) と同じ

表1 松田古墳群周辺遺跡一覧表

番 号	遺跡名	時代					番 号	遺跡名	時代						
		旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	余 ・ 世	中 世	近 世	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 ・ 世	中 世	近 世
◎	松田古墳群	○	○	○	○	○	○	○	18	車塚古墳群	○	○	○	○	○
1	松田遺跡	○							19	楠木城跡				○	
2	松田城跡						○		20	御領塚古墳			○		
3	ますみ古墳群				○				21	防人遺跡	○	○	○	○	
4	原遺跡	○	○	○					22	谷中城跡				○	
5	庚申塚古墳				○				23	青柳古墳群			○		
6	曾根宮下遺跡	○							24	長辺寺遺跡	○	○			
7	曾根古墳群			○					25	長辺寺山古墳			○		
8	曾根東台遺跡	○	○						26	狐塚古墳			○		
9	旅田門塚遺跡	○	○						27	大岡古墳群			○		
10	高幡遺跡	○	○	○		○			28	向原遺跡	○				
11	加茂B古墳群				○				29	磯部遺跡	○	○			
12	加茂A古墳群				○				30	裏山遺跡	○	○	○		
13	加茂遺跡	○	○	○					31	磯部城跡				○	
14	宮前遺跡	○	○						32	西小塙遺跡	○	○			
15	木曾宮西遺跡				○	○			33	月山寺東遺跡	○	○			
16	花園古墳群				○				34	池下古墳群			○		
17	花園遺跡	○	○	○					35	船古墳群			○		



第1図 松田古墳群周辺遺跡位置図



第2図 松田古墳群調査区設定図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

松田古墳群は、岩瀬盆地の中央を東西に貫流する桜川の支流である筑輪川流域に広がる低地に張り出した舌状台地上と、雨引山から北東に延びて低地を臨む丘陵性の台地上に立地する。調査が実施された区域は標高86～105mの丘陵性の台地部分で、面積は10,883.71m<sup>2</sup>、調査前の現況は山林である。

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代の堅穴住居跡17軒、貯蔵穴や陥穴を含む土坑47基、弥生時代の堅穴住居跡17軒、土器棺墓1基、古墳時代の堅穴住居跡11軒、土坑2基、溝跡1条、前方後円墳1基、円墳3基、中・近世の整地面1か所、堀跡1条、土塁跡1条、塚7基、上坑4基、時期不明の溝跡2条、土坑80基である。

遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）、弥生土器（広口壺・高壺）、土師器（壺・高壺・壺・壺・台付壺・瓶・壺・器台）、土師質土器（小皿・焼焰）、石器（ナイフ形石器・石鏃・石匙・石斧・石鋸・磨石・敲石・凹石・石皿・砥石）、石製品（石棒・独鉛石・五輪塔）、埴輪（円筒）、土製品（鋤耕車）、金属製品（直刀・刀子・鐵鎌・銅鏡・銅鏡）、ガラス製品（小玉）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・瓦斗瓦・道具瓦）、古錢等が出土し、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）84箱に収納された。

このように、当遺跡は旧石器時代の遺物散布と縄文時代の狩猟場跡、縄文から古墳時代にかけての集落跡、古墳群、中・近世の宗教関連施設の整地面と塚群、土塁跡と堀跡等が確認された複合遺跡である。

### 第2節 基本層序

調査区西部のC1 g8区にテストピットを設定し、約2m掘り下げて基本土層の観察を行なった（第3図）。

第1層 暗褐色の表土層で、腐植土が混じる。層厚は12～35cmである。

第2層 暗褐色のソフトローム層で、層厚は8～17cmである。

第3層 暗褐色のハードローム漸移層で、炭化粒子を少量含んでいる。層厚は28～50cmである。

第4層 暗褐色のハードローム漸移層であるが、第3層より締まりは弱い。層厚は23～44cmである。

第5層 明褐色のハードローム層で、粘性をやや欠くが締まりは強

まりは強い。層厚は22～64cmである。

第6層 暗褐色のハードローム層で、鹿沼軽石層の漸移層と

考えられる。鹿沼軽石を含み、粘性と締まりは弱い。

層厚は8～32cmである。

第7層 黄褐色の鹿沼軽石層で、粘性を欠くが締まりは極

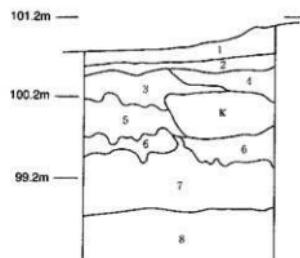
めて強い。層厚は32～78cmである。

第8層 暗褐色のハードローム層で、砂粒を少量含み粘性

と締まりはともに強い。以下、未掲のため本来の層

厚は不明である。

遺構の多くは、第2層から第4層上面で確認され、第2～6層を掘り込んでいる。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、中期中葉から後期前葉の住居跡17軒と、貯蔵穴や陥し穴を含む土坑47基が確認された。住居跡は調査区西部から東部にかけて広く分布し、丘陵性台地の尾根部近くに立地していた。土坑のうち貯蔵穴と考えられるものは、調査区中央部の北東斜面に、陥し穴は主に調査区西部の尾根部に近い北向き緩斜面に、それぞれ立地していた。しかし、遺構や遺物の遺存状況は、斜面部でしかも木根による搅乱などを受けているため、あまり良好でなかった。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

##### (1) 壴穴住居跡

###### 第1号住居跡（第4・5図）

位置 調査区西端部のB2+8区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

重複関係 南東部を第29号土坑にわずかに掘り込まれ、炉の脇は第11号土坑を埋め戻して床面を構築している。

規模と形状 北側は緩斜面となり壁を遺存していないが、平面形は径約5.40mの円形と推定される。主軸方向は、N-34°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は最大で34cmである。

床 緩やかに北側に向かって傾斜しており、南側から西側にかけては、炉を開むように踏み固められ、硬化している。第11号土坑の周囲には硬化面が見られず、遺物等も確認されてはいない。南部壁際付近と炉の南西側で、焼土塊が確認された。炉の使用に伴って投棄されたものと考えられる。

炉 北東寄りに、径約70cmの円形の石開炉を付設している。床面を13cmほど掘りくぼめ、自然隕と凹石を転用した石材を並べて構築している。各炉石の内側および炉床部は被熱して赤変しているが、硬化は見られない。

###### 炉土層解説

1. 壁	褐色	燒土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量	3. 壁	褐色	燒土粒子多量、炭化粒子中量
2. 壁	褐色	燒土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量			

ピット 15か所。P1-P6は深さ10~47cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。また、内側に同心円状に配されたP7~P11や主柱穴に添うP12~P15は、深さ12~42cmで、補助柱穴の可能性がある。

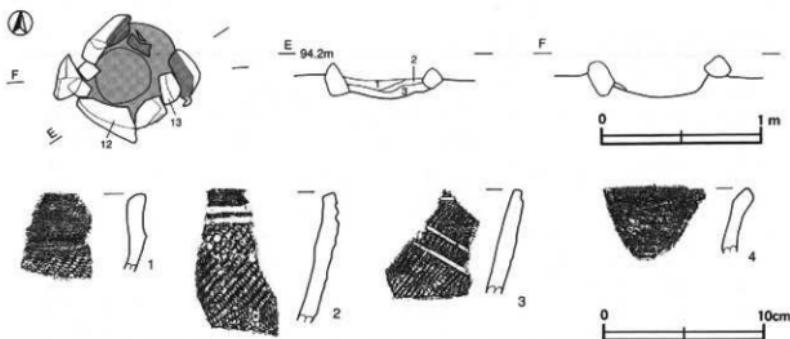
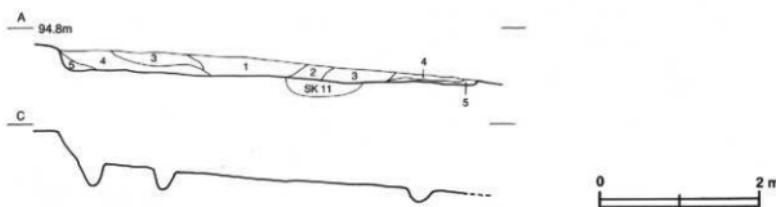
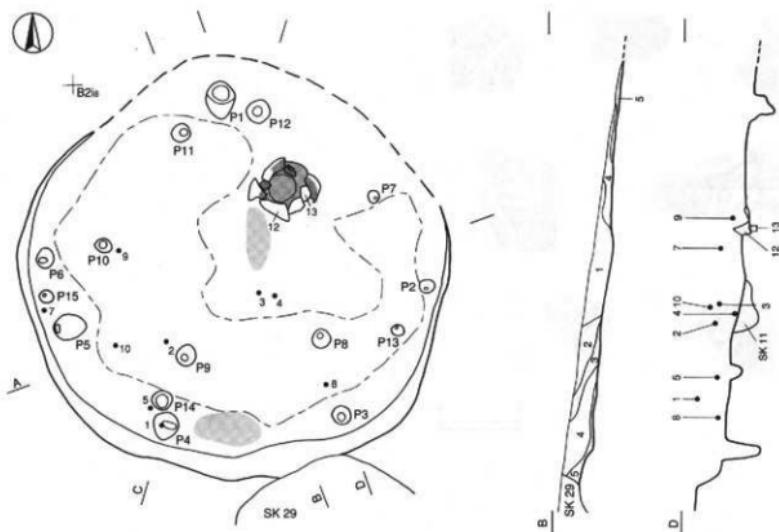
覆土 5層に分層される。全体的に褐色を基調とし、粘性としまりは弱い。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

###### 土層解説

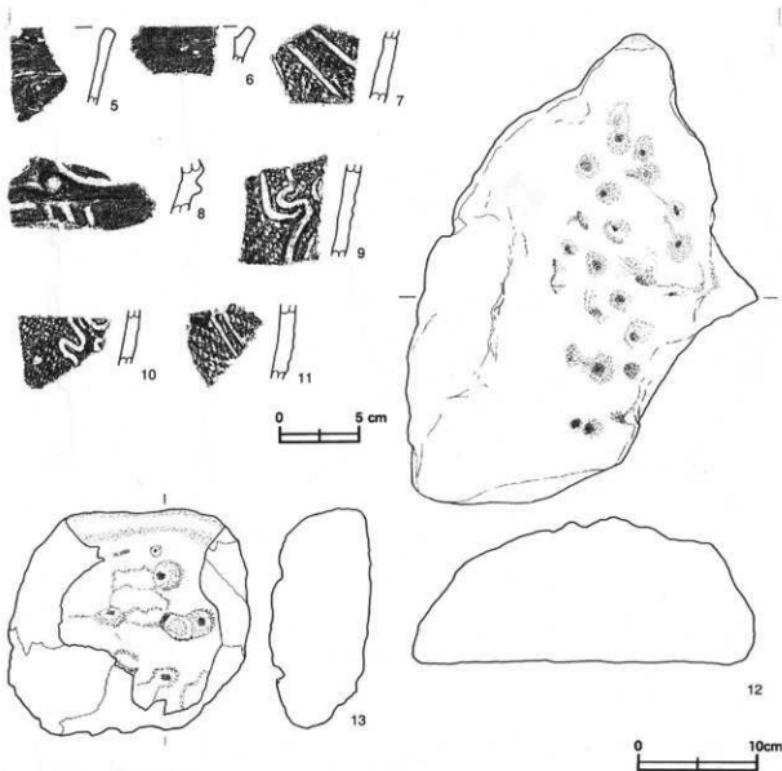
1. 壁	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
2. 壁	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
3. 壁	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色

遺物出土状況 縄文土器片59点（口縁部片4、胴部片53、底部片2）、石器2点（円石2）が出土している。遺物は、主に南部および南西部の覆土中層から床面上で確認されているが、器形全体をうかがえるようなものではなく、小破片が多い。また、覆土中からはこぶしだから人頭大の自然隕が約30点検出され、そのうちの半数近くに被熱痕が確認された。第5図12・13は炉の構築材に転用された凹石である。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から縄文時代後期前葉と考えられる。



第4図 第1号住居跡・出土遺物実測図



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

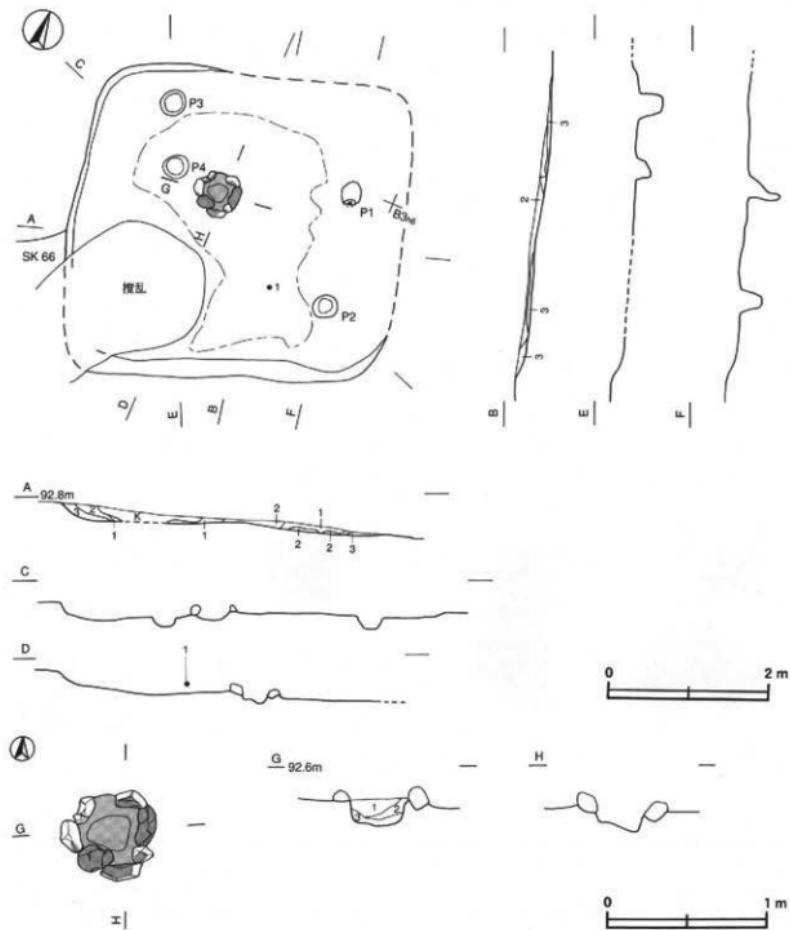
第1号住居跡出土遺物観察表 (第4・5図)

番号	種別	器種	粘土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい程	普通	口辺部は無文で、微隆起帯で崩部と区画。胴部はR L 単節縄文施文。	P4台付置土中	TP3
2	縄文土器	深鉢	長石・雲母	浅黄	普通	口辺部直下に平行沈縄文周留。胴部にL R 単節縄文を縱方向に施文。	P9竹道覆土下	TP1
3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい程	普通	L R 単節縄文上に、斜行する沈線等により文様構成。	中央部覆土中場	TP8
4	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい程	普通	口辺部は無文帯を形成。	中央部床面	TP2
5	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい程	普通	口唇部やや肥厚。口辺部に沈縄文を施文。	P14付近床面	TP5
6	縄文土器	深鉢	長石・石英	程	普通	L口辺部は無文帯を形成。	北東部覆土中	TP4
7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい程	普通	L R 単節縄文上に、沈線を斜行させて文様構成。	東西壁付近床面	TP9
8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい程	普通	刺突文を有する腰帶と沈縄文によって文様構成。	P3付近床面	TP6
9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい程	普通	L R 単節縄文上に、沈縄による腰手文または蛇行文を施文。	P10付近床面	TP7
10	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい程	普通	R L 单節縄文上に、沈線による蛇行文を施文。	南西部覆土中場	TP10
11	縄文土器	深鉢	長石・雲母・鉄鉱石	にぶい程	普通	R L 单節縄文上に、鉤鉗状の沈縄文を施文。	覆土中	TP11

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	四石	38.7	29.3	18.3	14,500	花崗岩	自然石素材。表面に24か所穿孔。被熱して赤変。	伊南部	Q1段 ~40m
13	四石	16.7	20.1	8.3	4,300	花崗岩	自然石素材。表面に8か所穿孔。被熱して赤変。	伊東部	Q2段 ~40m

### 第2号住居跡（第6・7図）

位置 調査区西部のB3-h5区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。



第6図 第2号住居跡実測図

**重複関係** 南西部は第66号土坑を掘り込み、さらに、南西部コーナーは風倒木痕による擾乱を受けている。  
**規模と形状** 北東側から東側は斜面部となり壁を遺存していないが、北西部と南東部コーナーの形状から判断して、平面形は南北軸3.92m、東西軸約4.30mほどの不整方形と考えられる。南北の軸線と炉の位置をもとにした主軸方向は、N-14°-Wである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、壁高は最大で18cmである。

**床** 緩やかに北東部に向かって傾斜し、やや北寄りの炉を開むように、硬化面が見られる。南西部は第66号土坑を埋設して床面を構築している。

**炉** やや北寄りに、径約60cmの円形の石囲炉を付設している。床面を18cmほど掘りくぼめ、自然礫を並べて構築している。炉石に一部欠落があるが、すべて内側は被熱し赤変している。炉床も赤変が確認され、硬化している。

#### 炉土層解説

1 希薄褐色	地上粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量	3 明赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
2 赤褐色	地上粒子少量、炭化粒子・ロームブロック微量		

**ピット** 4か所。P1-P3は深さ28~42cmで、位置的に柱を長方形状に巡らす主柱穴と考えられる。P4の性格は、不明である。

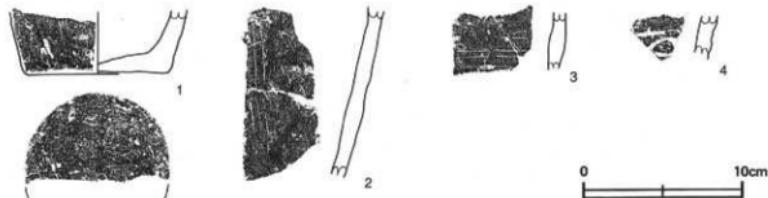
**覆土** 3層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層ともローム粒子を少量含んでいる。壁際から床面の傾斜に沿って緩やかなレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック微量、炭化粒子微量		

**遺物出土状況** 繩文土器片12点（口縁部片1、胴部片10、底部片1）が出土している。遺物量は少なく、すべて細片である。第7図2~4は、いずれも南部の覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から繩文時代後期前葉と考えられる。



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	底上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	8.6	断・砾・丸仔子二重い壺普通胴下頸と底部無文。	東部覆土上	P2 5%

番号	種別	器種	底上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	長石・石英・蛋白	に深い壺	普通	3本1単位の条縞文を、格子目状に施文。	北部覆土中層	TP13
3	縄文土器	浅鉢	長石・蛋白	灰	普通	3本1単位の条縞文を、横状に施文。	北部覆土中層	TP14
4	縄文土器	深鉢	長石・石英	に深い壺	普通	R.L. 単節縞文上に、沈線によって文様描出。	北部覆土中層	TP15

### 第3号住居跡（第8・9図）

位置 調査区西部のB3・8区に位置し、丘陵性台地中央の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

重複関係 中央部は、第16号土坑に掘り込まれている。さらに、北西部は木根により搅乱を受けている。

規模と形状 北側は斜面となり壁と床は遺存しないが、平面形は長径4.48m、推定短径3.70mほどの橢円形と考えられる。長軸をもとにした主軸方向は、N-68°-Eである。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は最大で18cmである。

床 細やかに北側に向かって傾斜している。東南部と北西部の床面に、硬化面が確認された。

炉 確認されなかった。中央部で重複する第16号土坑によって、掘り込まれてしまったものと推定される。

ピット 3か所。P1は深さ15cm、P2は深さ34cmで、規模と配置から土柱穴と考えられる。P3の性格は明らかでないが、覆土上は4層からなる人為堆積と考えられ、第9図3を含む绳文土器片2点が出土している。

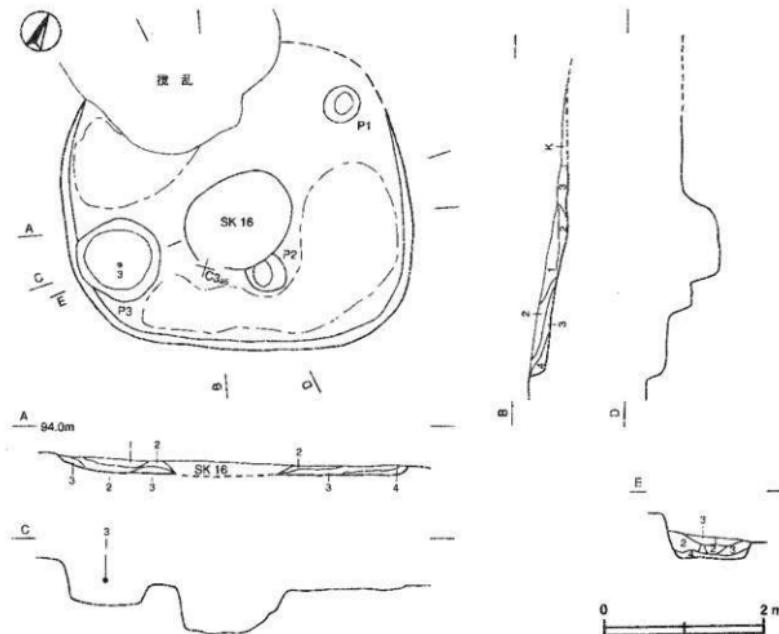
#### P3土層解説

1 白 淡色	炭化粒子・ローム粒子少量	3 白 淡色	カーブブロック少量
2 黒 深色	カーブ粒子少量、炭化粒子微量	4 黑 深色	ローム粒子中量

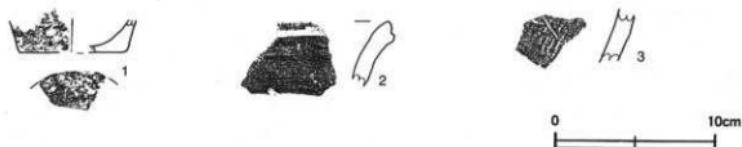
覆土 4層に分層される。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黑 深色	焼土粒子少量・ローム粒子少量	3 塗 淡色	ローム粒子中量
2 黑 深色	焼土粒子少量・ローム粒子中量	4 塗 淡色	ロームブロック中量



第8図 第3号住居跡実測図



第9図 第3号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片5点（口縁部片1，胴部片3，底部片1）が出土している。遺物量はわずかであり、すべて南部を中心に覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から縄文時代後期前葉と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	—	(2.0)	6.7	石英・雲母	にい青	普通	胴部下端と底部無文。摩耗が著しい。	南西部覆土中	P17 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にい赤褐色	普通	口唇部に沈線周回。口辺部は無文帯形成。	西部覆土中	TP16
3	縄文土器	深鉢	長石・石英	にい青	普通	L R 単節縄文上に、斜位の沈線を施す。	南西部P3上面	TP18

第4号住居跡（第10・11図）

位置 調査区北西部のB4-h0区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

確認状況 他の遺構との重複はないが、北部から北西部は斜面部のため壁を流失している。南部は木板によつて搅乱を受けている。

規模と形状 残存する南西部と南東部コーナーの形状から判断して、長径3.88m、推定短径3.70mほどの梢円形と考えられる。主軸方向は、N-7°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は最大で18cmである。

床 北側はやや傾斜するがほぼ平坦である。炉を囲むように南東部から西部と北東の一部に、硬化面が見られる。

炉 ほぼ中央に、長径65cm、短径50cmの梢円形の石壠炉を付設している。床面を15cmほど掘りくぼめ、自然疎と凹石を転用した石材を並べて構築している。炉石の内側と炉床は被熱し、赤変硬化している。

#### 炉土層解説

1 塚塔赤褐色	燒土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量	3 塚赤褐色	燒土粒子中量・ローム粒子少量・炭化粒子微量
2 塚赤褐色	燒土粒子・ローム粒子少量・炭化粒子微量		

ピット 3か所。P1-P3は深さ22~29cmであり、配置から主柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層される。壁際から流れ込む4・5層は自然堆積で、1~3層は平行堆積であることから人為堆積と考えられる。

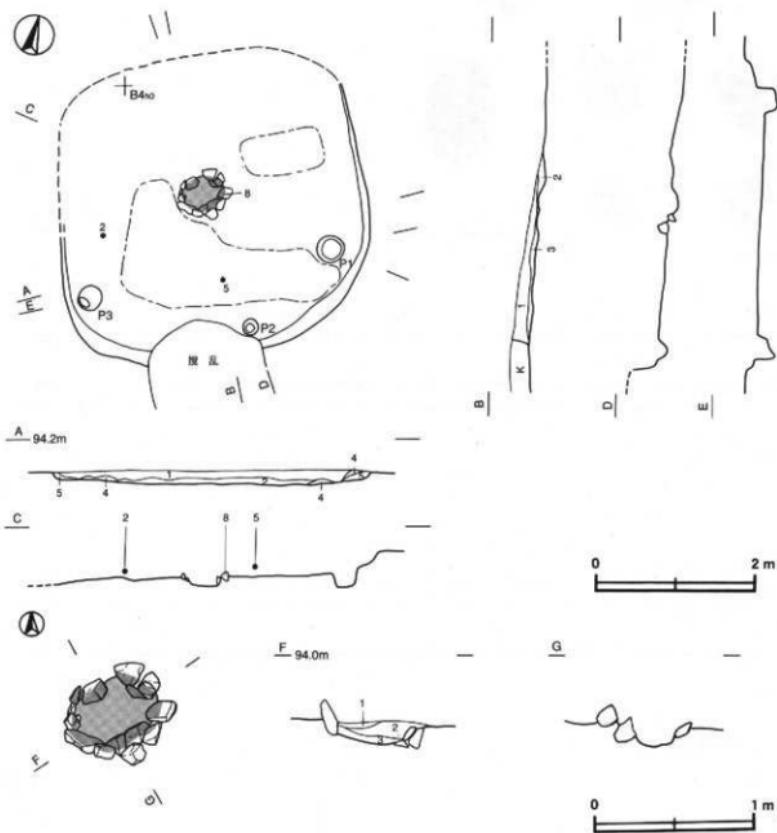
#### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量・燒土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子少量・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	5 明褐色	ローム粒子中量
3 黑褐色	燒土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量		

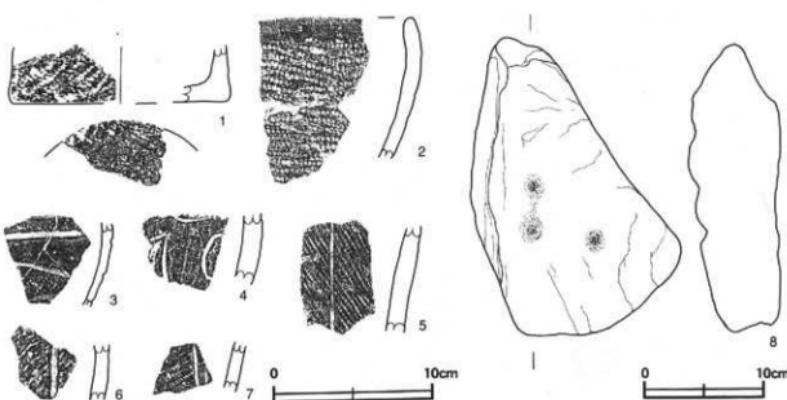
遺物出土状況 縄文土器片49点（口縁部片2、胴部片46、底部片1）、石器1点（凹石）、剥片26点と、混入と考えられる弥生土器片6点が出土している。遺物の多くは、西部から南部にかけての覆土中層から床面上で出

土している。第11図2・5は、覆土下層及び床面上から出土している。8は炉石へ転用されたものである。また、全城の覆土中から、チャートを主体とする剥片が検出されている。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉と考えられる。また、剥片が多く確認されたことから判断すると、本跡内で石器の製作を行なっていた可能性が高い。



第10図 第4号住居跡実測図



第11図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	織文土器	深鉢	—	(3.5) [33]	石英	明 焼普通 R L 単節織文を横方向に施す。底部無文。	西東部覆土中	P19 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	織文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口唇部は無文帯形成。胴部にR L 単節織文を施す。	西東部床面	TP20
3	織文土器	深鉢	石英・長石	にぶい褐	普通	曲線的な沈線区画により磨消織文部と無文部を構成。	南東部覆土中	TP23
4	織文土器	深鉢	石英・雲母	にぶい褐	普通	熱糸文を地文とし、曲線的な沈線により文様描出。	南東部覆土中	TP22
5	織文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	R L 単節織文上に、1条の沈線を垂下。	南部床面	TP21
6	織文土器	深鉢	石英・長石	にぶい褐	普通	L R 単節織文上に、沈線を垂下。	南東部覆土中	TP24
7	織文土器	深鉢	長石	にぶい褐	普通	R L 単節織文上に、2条の沈線を垂下。	南東部覆土中	TP25

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
8	凹石	24.6	17.3	7.6	3,800	花崗岩	自然石表材。表面に3か所穿孔。前面と裏面は被熱して赤変。	炉東部	Q33N石へ転用 PL4

第12号住居跡 (第12・13図)

位置 調査区中央部やや北寄りのB 6 C2区に位置し、丘陵性台地北端の緩斜面部に立地している。

確認状況 住居跡の北側は、後世の土壌掘部の下面に当たる。第13号住居跡が東側に隣接している。

規模と形状 東側壁を流失しているが、残存する壁とピットから判断して、平面形は径約5.0mの円形と考えられる。炉の長軸をもとにした主軸方向は、N-57°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は最大7cmである。

床 北東部に向かってやや傾斜しているが、ほぼ平坦である。炉を囲むように、北東部から西部にかけて踏み固められ硬化している。

炉 炉の掘り込みは確認されなかった。焼土の散布範囲から判断して、やや北東部寄りに長径110cm、短径65cmの楕円形の地床炉が付設されていたと考えられる。

ピット 8か所。P1・P3・P7は深さ21~27cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2・P5・P6・P8は深さ10~17cmで、補助柱穴の可能性が考えられる。P4の性格は不明である。

覆土 遺存する覆土は薄いが、4層に分層される。1~3層がレンズ状の堆積状況で、自然堆積と考えられる。4層は土壌に伴う土層である。

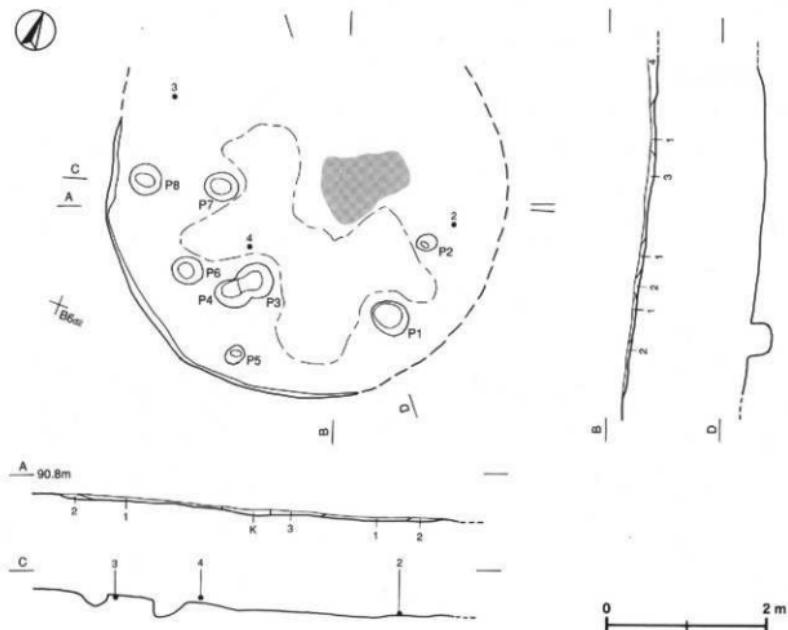
#### 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2	褐色	ローム粒子中量
3	赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土ブロック ・炭化粒子微量

4 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 繩文土器片35点（口縁部片4、胴部片29、底部片2）と、混入と考えられる弥生土器片16点、土師器片1点が出土している。遺物の多くは、全域の覆土下層から床面上で確認されたが、小破片がほとんどである。第13図2~4は、床面上から出土している。

所見 本跡の北部は土壌の構築によって残存しないが、急傾斜地へと地形が変化する台地北端部に構築されている。時期は、出土土器及び遺構の形態から繩文時代中期中葉と考えられる。



第12図 第12号住居跡実測図



第13図 第12号住居跡出土遺物実測図

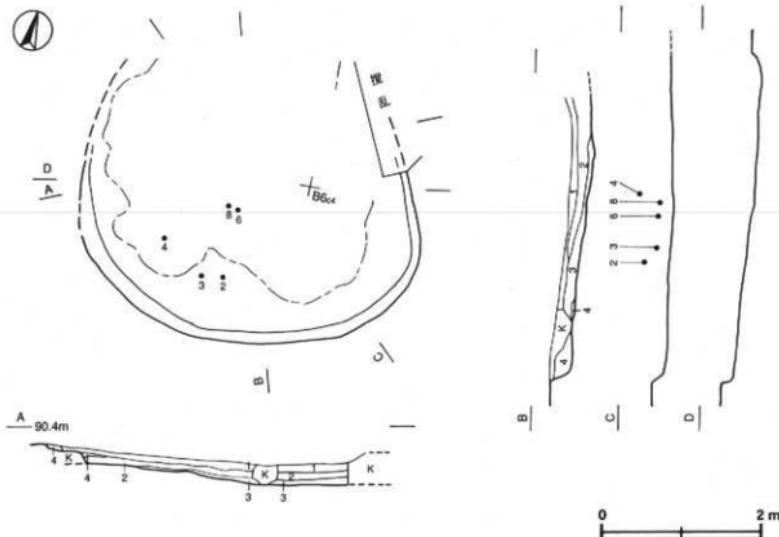
第12号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	褐	普通	覆土中	TP26
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にじみ青	普通	口縁部には陰帯に沿って爪形文と波状沈線を施文。	東部床面	TP27
3	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にじみ青	普通	口縁に平行する沈線を横位に施文。	北西部床面	TP29
4	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にじみ青	普通	条縦状の文様を縱位に施文。	南西部床面	TP28
5	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にじみ青	普通	R L 単縦織文上に、斜位の平行沈線を施文。	北西部覆土中	TP30

第13号住居跡 (第14・15図)

位置 調査区中央部やや北寄りのB 6 c3区に位置し、舌状台地北端の緩斜面部に立地している。

確認状況 北部は後世の土塁裾部の下面に当たる。西側に第12号住居跡、東側に第2号溝跡が隣接している。



第14図 第13号住居跡実測図

**規模と形状** 北西側は斜面部に当たり、さらに土壌の構成によって壁が流失しているが、南半部に残る壁と床面の範囲から判断して、推定長径5.40m、短径4.20mほどの楕円形と考えられる。主軸方向は、N-52°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は最大で28cmである。

**床** 北東側に向かってやや傾斜している。北東側の一部を除き、ほぼ全体に硬化面が見られる。

**炉** 確認されなかった。

**ピット** 確認されなかった。

**覆土** 4層に分層される。壁際から中央に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

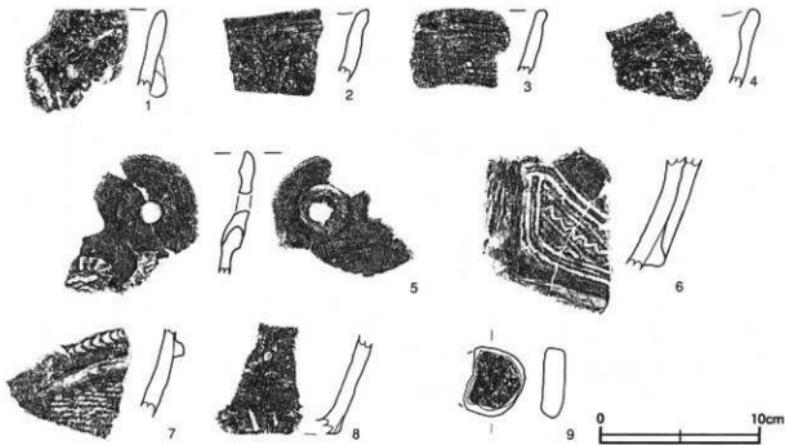
#### 土層解説

1 黄色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量  
2 黄色 ロームブロック少量

3 赤褐色 ローム粒子少量  
4 にぶい褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 繩文土器片53点（口縁部片6、胴部片46、底部片1）、土製品1点（土器片円盤）、剝片3点と、混入と考えられる弥生土器片2点、陶器片1点が出土している。遺物量はわずかで、すべて小破片である。主に南西部の覆土下層及び床面上から、やや浮いた状態で出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期中葉と考えられる。



第15図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第15図）

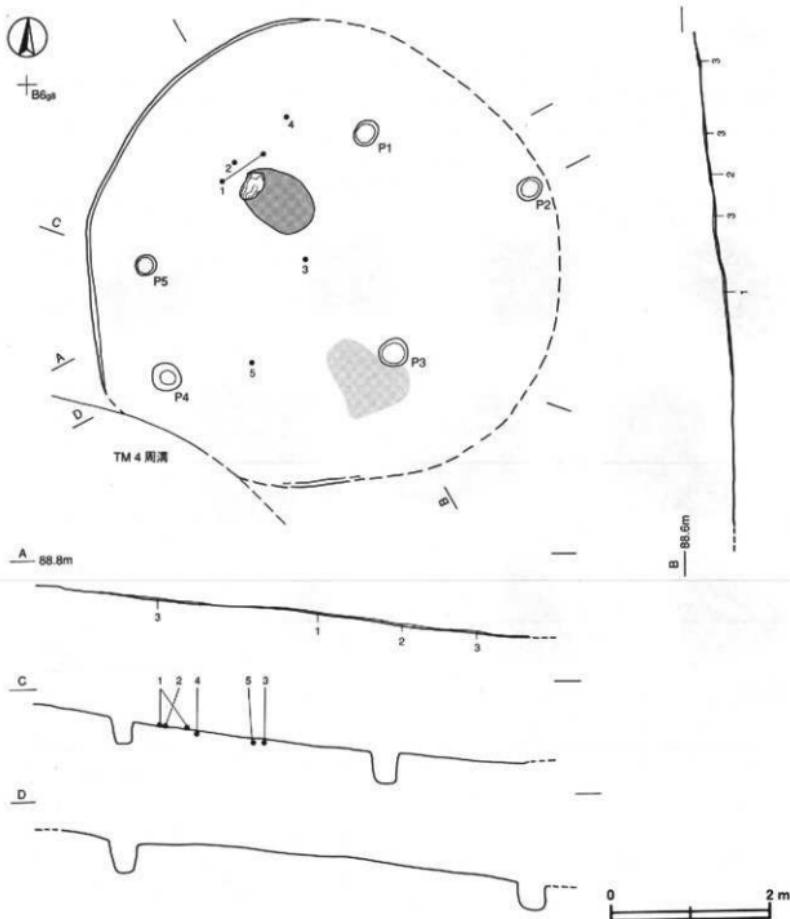
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵石	にぶい黄	普通	無地にV字状の陰帯貼付。	覆土中	TP33
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・青母	にぶい褐	普通	口縁部無文帯形成。	南西部覆土上層	TP35
3	縄文土器	深鉢	長石	にぶい黄	普通	口縁部やや肥厚。口縁部無文帯形成。	南西部床面	TP36
4	縄文土器	深鉢	石英・長石・青母	にぶい黄	普通	磁やかな波状口縁。口縁部無文。	南西部覆土上層	TP34
5	縄文土器	深鉢	石英・長石・青母	にぶい黄	普通	円形の把手中央に貫孔。口縁部に爪形文を沿わせた陰帯貼付。	確認面	TP32 PL44
6	縄文土器	深鉢	石英・長石・青母	にぶい褐	普通	陰帯による区画文。区画内に平行沈線文と縦齒状文を施す。	中央部覆土下層	TP31
7	縄文土器	深鉢	石英・長石・青母	にぶい黄	普通	曲線的な陰帯貼付。貼付部に系形文、途文はL字単節縄文施す。	北西部覆土中	TP37
8	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄	普通	胸部無文。底部外縁2か所にキザミ有り。	中央部覆土下層	TP38

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特 約	出土位置	備考
9	土器片円盤	4.3	(3.8)	1.4	(23.4)	長石・雲母・赤色粒子	にふい橙	漆鉢の刷毛部片素材か。周縁を研磨。一部欠損。	発掘面	DP 1

### 第16号住居跡（第16・17図）

位置 調査区南東部のB 6 g 8区に位置し、丘陵性台地の南東斜面部に立地している。

重複関係 北西部は、第4号墳の周溝に掘り込まれている。



第16図 第16号住居跡実測図

**規模と形状** 斜面部に立地し壁と覆土の流失が著しいが、残存する壁とピットから判断して、平面形は径5.90mほどの円形と推定される。炉の位置をもとにした主軸方向はN-45°-Wである。残存する壁高は、最大で4cmである。

**床** 地形に合わせて南東部に向かって傾斜している。床面は木根によって乱され、硬化面は確認されなかった。

**炉** やや北部寄りに、焼土の散布と赤変した自然縞が確認された。掘り込みはなかったが、長径87cm、短径60cmの楕円形の石圓炉または地床炉が付設されていたと考えられる。また、南部に焼土の散布が見られたが、P3に近接することから炉の痕跡とは考えにくい。

**ピット** 5か所。P1～P5は深さ32～43cmで、傾斜する床面に対しての掘り込みがほぼ一定している。規模と配置から主柱穴と考えられる。

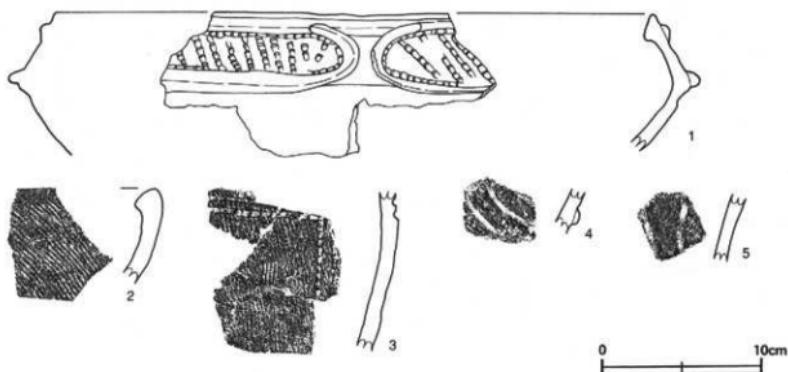
**覆土** ほとんど遺存していないが、全体的に褐色土を基調としている。壁際で確認できた流れ込み状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	3	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子極微量
2	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量			

**遺物出土状況** 繩文土器片13点（口縁部片2、胴部片11）、剝片1点が出土している。第17図1～4は、すべて炉と考えられる周囲の床面上から出土したものである。なお、第17図1と同一個体である土器片が、本跡から約12m離れた緩斜面下部に位置する第29号住居跡の確認面からも出土している。

**所見** 時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。また、立地や第17図1の土器片出土状況から考



第17図 第16号住居跡出土遺物実測図

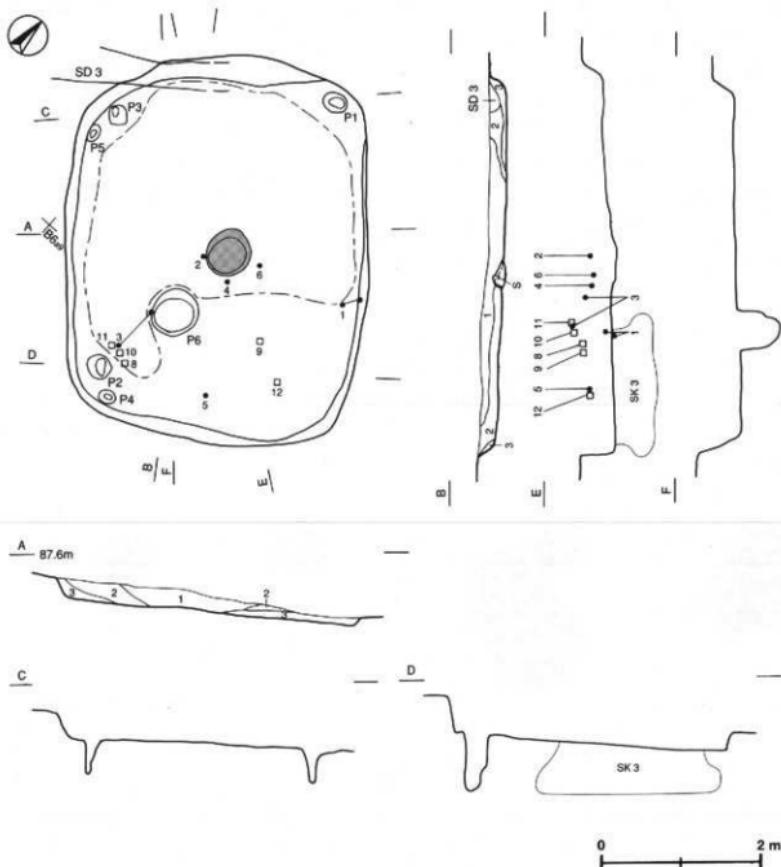
第16号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器型	口径	器高	底径	胎上	色調	表面	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	立径 (9.0)	—	右英・長石・雲母	にぶい	普通	陰唇による楕円形の区画文形成。区画内は縦帯に沿って結節沈紋を施し、内側は斜位の結節沈紋を充填。	北西側床面	P9	56

番号	種別	器種	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にじみ青灰	普通	口唇内面に棱を持つ。口唇部は無文。腹部にR.L.单面縄文施文。	東北西側床面	TP40
3	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	黒	普通	R.L.单面縄文上に、横位と縱位に結節沈縄文施文。	東南側床面	TP41
4	縄文土器	深鉢	石英・長石	にじみ青灰	普通	曲線的な縁帯を貼付し、貼付部に沈縄文施文。	東北側床面	TP42
5	縄文土器	深鉢	石英・長石	にじみ青灰	普通	沈縄区画による避済縄文を施文。	南西部床面	TP43

えると、覆土のほとんどは後世の古墳や塚の構築により削平され、失われたものと推定することができる。

第20号住居跡（第18～20図）



第18図 第20号住居跡実測図

**位置** 調査区中央部や北寄りのA6・9区に位置し、丘陵性台地北東斜面部に立地している。

**重複関係** 北西部の覆土上層は、第3号溝に掘り込まれ、南東側は第3号土坑上部を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸4.86m、短軸3.78mの隅丸長方形である。長軸をもとにした主軸方向はN-42°-Wである。壁高は6~56cmで、やや外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で、南西部から北部には壁付近まで硬化面が見られる。南東部は第3号土坑上部を掘り込んで構築しており、縁まりを欠いている。

**炉** ほぼ中央に、径約54cm、深さ8cmの円形の掘り込みが確認された。焼土及び赤変硬化面はないが、規模と配置から炉跡と考えられる。床面上に赤変した自然疊が多く確認されたことから、石開炉であった可能性がある。

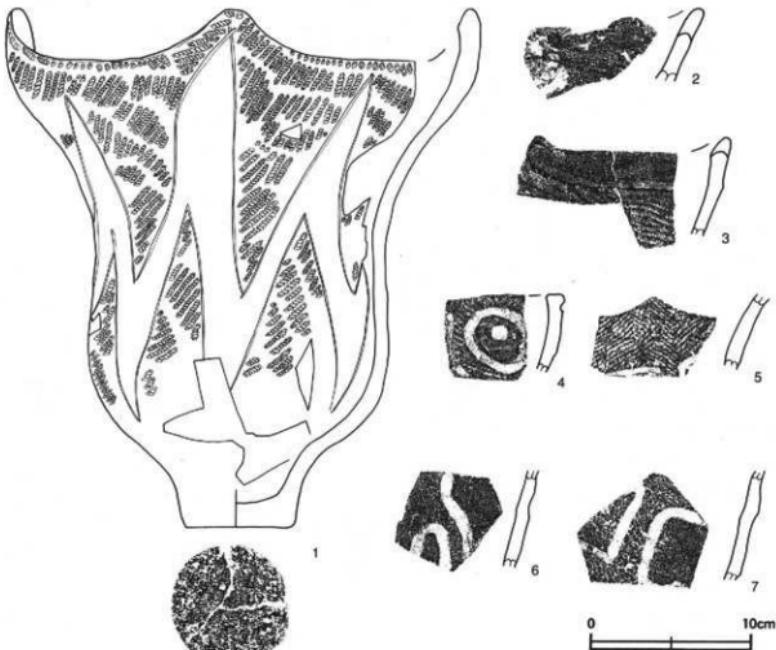
**ピット** 6か所。P1~P3は深さ36~72cmで、規模と配置から主柱穴と考えられ、P4・P5は補助柱穴と考えられる。P6の性格は不明である。

**覆土** 3層に分層される。褐色土を基調とし、壁際からのレンズ状堆積を示すことから、自然堆積と考えられる。

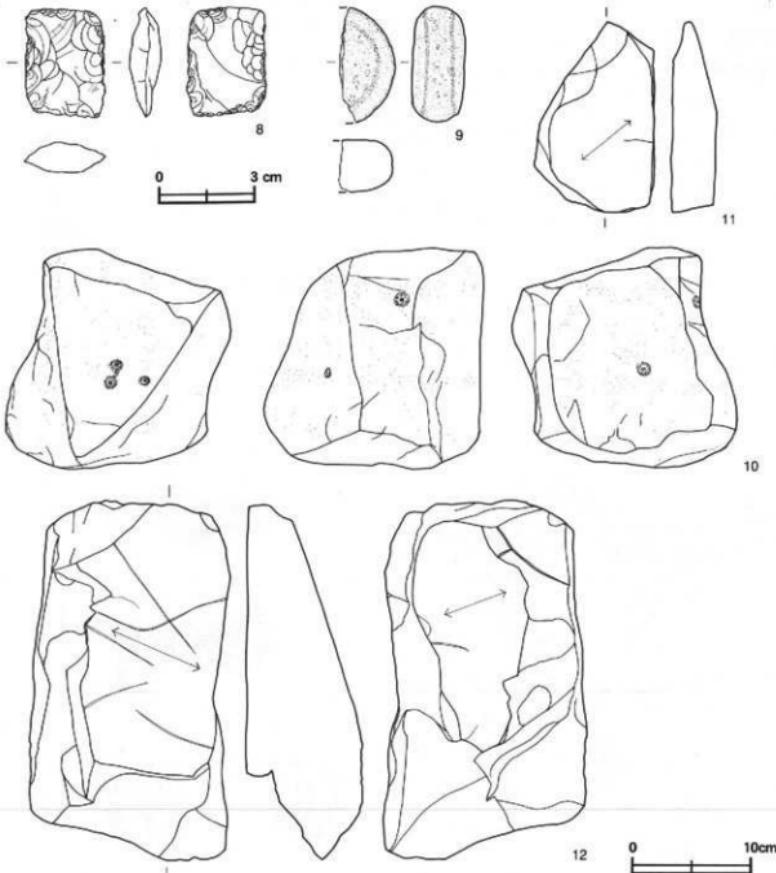
土層解説

1 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子微量、焼土粒子極微量  
2 暗褐色 ローム粒子微量

3 浅褐色 ローム粒子中量、焼土粒子極微量



第19図 第20号住居跡出土遺物実測図（1）



第20図 第20号住居跡出土遺物実測図（2）

**遺物出土状況** 完形に近い深鉢1点と縄文土器片45点（口縁部片6、胴部片39）、石器5点（楔形石器1、磨石1、凹石1、砥石2）が出土している。第19図1は東部の壁際に近い床面上から、つぶれた状態の横位で出土している。その他の遺物は、主に炉から南側部分の覆土中層から下層で出土している。小破片がほとんどであり、床面上で確認された遺物は少ない。また、土器片とともに被熱した自然疊も、全域の覆土中層から下層において確認されている。

**所見** 時期は、出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表 (第19・20図)

番号	種別	名稱	口径	底径	高さ	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	28.5	32.3	7.0	七系・長石・雲母	に高い唇 普通	口縁部上半位の波状。波状部と底底部を基準に籠巻状の沈澱区画を行い、区画外に構文充填。R.L. 単純縄文で輪郭横方向、側部輪方向施文。	東端部裏面 付近底面	TP18 TP35

番号	種別	名稱	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	褐色	普通	波状部突出。口縁部無文帯形成。	西側腰腹裏下部	TP18
3	縄文土器	深鉢	石英・雲母	に高い唇 普通	普通	波状部突出。微隆起部と無文部を構成。脇部R.L.單純縄文施文。	P.2.に齊賀土印	TP46
4	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	に高い唇 普通	普通	脇りの深い沈澱と押出す凹形の文様は区画。区画内にR.L.單純縄文施文。	中央側腹上中段	TP47
5	縄文土器	深鉢	石英・雲母	に高い唇 普通	普通	L.R.単純縄文を施位と施位に施文。沈澱による区画文括出。	南部腹土中層	TP51
6	縄文土器	深鉢	石英・雲母	褐色	普通	影りの深い沈澱で曲線的文様を構成。	印光側腹土下部	TP52
7	縄文土器	深鉢	石英・雲母	に高い唇 普通	普通	垂りの深い複数の沈澱でクランク状の文様を呈現。沈澱施文後、平路陶文充填。	南東部腹土中	TP50

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	複彩石器	3.4	2.6	1.0	9.0	チャート	表裏両面の輪絞を調整。両面はシムズ状。	南北コナー覆土堆	Q3
9	磨石	9.5	(4.5)	4.3	(252)	安山岩	自然埋蔵石材。全面を研磨面に使用。側面の磨痕顯著。	南部覆土中層	Q4
10	磨石	18.3	18.8	14.8	6,800	花崗岩	自然石素材。表面3か所、奥山1か所、側面1か所空孔。	赤松コナー覆土堆	Q5
11	磨石	15.7	9.9	3.7	840	安山岩	自然石素材。表面を研磨面に使用。台石と兼用か。	南北コナー覆土堆	Q8
12	帆石	29.8	16.8	9.6	6,300	安山岩	自然石素材。表裏両面を研磨面に使用。台石と兼用か。	南北部覆土中層	Q6

第21号住居跡 (第21・22図)

位置 調査区北東部のA 7号区に位置し、丘陵性台地中央の平坦面に立地している。

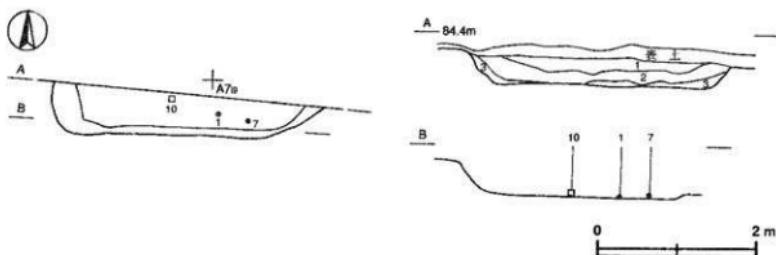
確認状況 住居跡の南部をわずかに確認した。北部大半は、調査区域外に広がっていると考えられる。

規模と形状 南側で確認された東西の壁の一辺は3.42mで、南北の壁は0.64mが確認された。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定される。壁高は7~36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。調査した範囲内では、硬化面は確認されなかった。

炉 調査した範囲内では、確認されなかった。

ピット 調査した範囲内では、確認されなかった。



第21図 第21号住居跡実測図

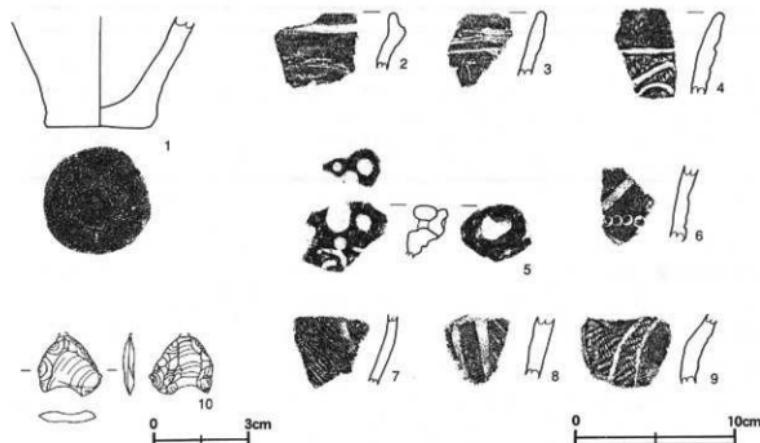
覆土 3層に分層される。褐色土を基調とし、壁際からのレンズ状堆積状況から、自然堆積と考えられる。

土層解説

- |       |                         |      |                  |
|-------|-------------------------|------|------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子・ローム粒子微量、焼土粒子微量     | 3 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量、焼土粒子微量 |      |                  |

遺物出土状況 繩文土器片63点（口縁部片9、胴部片52、底部片2）、石器1点（石鏃）と、混入と考えられる弥生土器片28点、土師器片2点が出土している。第22図1は、南壁際の床面上から破損した状態で確認されている。7・10も南壁際の床面上で出土している。

所見 時期は、出土遺物から繩文時代後期前葉と考えられる。



第22図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口縁	唇高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	繩文土器深鉢	-	(6.9)	6.4	6.9	石英・長石	褐色	普通	口縁部と底部無文。	南部覆土中	約30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
2	繩文土器	深鉢	石英・長石	灰	黄	普通	口縁部直下に沈線を周回。	南部覆土中	TP55
3	繩文土器	深鉢	長石	灰	黄	普通	口縁部直下に平行沈線を周回。	南部覆土中	TP57
4	繩文土器	深鉢	石英・長石	灰	黄	普通	口唇部外面は無文。L R 単筋縄文を地文とし、沈線により文様描出。	南部覆土中	TP54
5	繩文土器	深鉢	石英・長石	灰	黄	普通	波頭部に突起を有し、凹孔と円形刺突文を配する。胴部に沈線施文。	南部覆土中	TP56
6	繩文土器	深鉢	長石	灰	黄	普通	彫りの深い幅広の沈線と竹管状の円形刺突文により文様描出。	南部覆土中	TP60
7	繩文土器	深鉢	石英・長石	灰	黄	普通	彫りの深い幅広の沈線でクラシク状に区画。区画内に単筋縄文充填。	南部埋削床面	TP58
8	繩文土器	深鉢	石英・長石・墨付	灰	褐	普通	複数の沈線区画後、区画内にR L 単筋縄文充填。	南部覆土中	TP61
9	繩文土器	深鉢	長石	灰	褐	普通	L R 単筋縄文上に、曲線的な沈線を施して文様描出。	南部覆土中	TP59

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	石器	(0.9)	1.9	0.4	(1.1)	チャート	円基無茎葉、先端部欠損。	南壁際床面	語 面

### 第27号住居跡（第23・24図）

位置 調査区北東部のB 7 a2区に位置し、丘陵性台地中央の平坦面に立地している。

重複関係 南部は第28号住居に、南東部は第24号住居に掘り込まれている。また、北西の上部には第23号住居が構築されている。床面と壁面の一部だけを確認した。

規模と形状 第23号住居跡の下に残存していた北側から西側にかけての壁で判断すると、北西側が直線的で、辺が4.03mであることから、平面形は隅丸方形または隅丸長方形と考えられる。壁高は最大17cmで、外傾して立ち上がりっている。

床 平坦で、残存する床には、硬化面が確認されなかった。

炉 残存する範囲内には、確認されなかった。

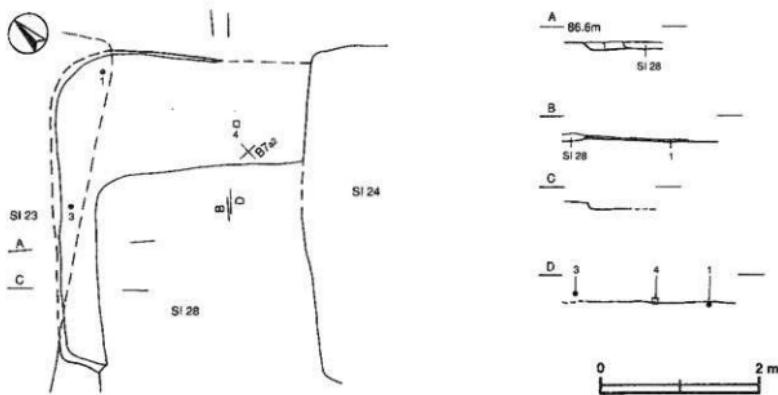
ピット 残存する範囲内では、確認されなかった。

覆土 単一層である。縁際からロームと鹿沼バミスを含む褐色土が流れ込んでおり、自然堆積と考えられる。

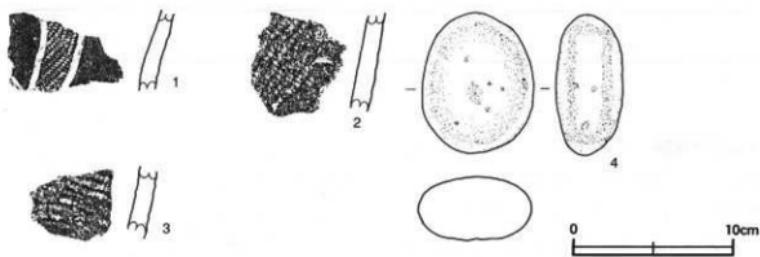
土壤解説  
1. 地色 ロームブロック中量、鹿沼バミス少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片13点（胴部片13）、石器1点（磨石）と、第28号住居跡からの混入と考えられる弥生土器片が出土している。遺物量はわずかですべて小破片であるが、第24図1・4は床面上から、3は覆土下層から出土したものである。

所見 時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。



第23図 第27号住居跡実測図



第24図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
1	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	明	赤褐色	普通	曲線的な沈線区画後、区画内にL.R. 単節縄文充填。	縁コート付光面 TP63	
2	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄	普通	L.R. 单節縄文を斜め方向に施す。	東部覆土中	TP62	
3	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい黄	普通	L.R. 单節縄文を縦方向に施す。	北西部覆土層	TP64	
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	磨石	8.7	7.0	4.1	363	安山岩	自然研磨材。全面を研磨面に使用。表面に浅いくぼみ有り。	中央部床面	30 m

第30号住居跡（第25・26図）

位置 調査区南東部のB 7 e3区に位置し、丘陵性台地中央の緩斜面部に立地している。

確認状況 南東部の床面と壁は、斜面部により一部を流失し、西側には木根による搅乱が入っている。南東側の一部は、調査区域外となっている。

規模と形状 平面形は長径5.05m、短径は推定約4.70mで、円形と考えられる。長径をもとにした主軸方向はN-4°-Eである。壁高は最大16cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 北西部から南東部に向かって、緩やかに傾斜している。中央部からやや西寄りに硬化面が確認された。

炉 確認されなかった。

ピット 3か所。P 1～P 3の深さは15～25cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。

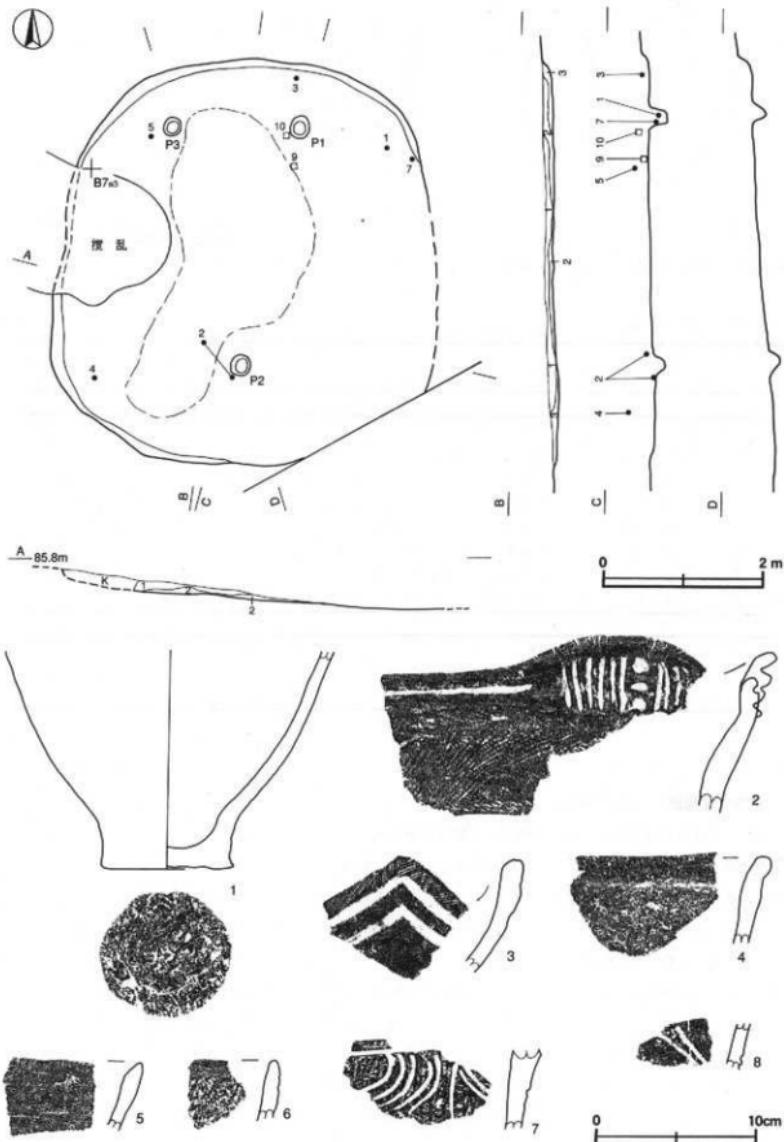
覆土 3層に分層される。褐色土を基調とし、壁際からのレンズ状堆積状況から、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

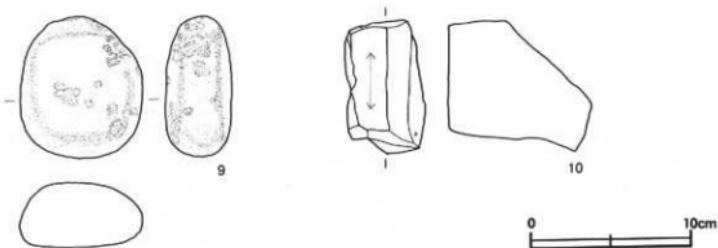
1	褐色	ローム粒子少量、燒土粒子微量、炭化粒子無微量	3	明褐色	ロームブロック少量
2	褐色	ローム粒子中量、塵泥バミス微量			

遺物出土状況 縄文土器片65点（口縁部片5、胴部片55、底部片5）、石器2点（磨石、砥石）と、混入と考えられる弥生土器片1点が出土している。遺物量は少なく、ほとんど小破片である。遺物は主に北部寄りの覆土中層から床面上で確認された。わずかに自然縫も検出されている。第25図1はつぶれた状態で北東壁際の床面上から、2はP 2付近の床面上から、9・10はP 1付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物から縄文時代後期前業と考えられる。



第25図 第30号住居跡・出土遺物実測図



第26図 第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表 (第25・26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	淀度	手法の特徴	出土位置	備考
1	繩文土器	深鉢	—	(13.5)	8.2	石英・長石・石英	明	褐	普通	底部外縁はやや突出。	北東部覆土面 TP65 10a

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	繩文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にい・橙	普通	半円形の波状部に短矢線と斜交矢文。口唇部に浅縫。頭部にRL単節繩文施文。	P 2付近床面	TP66 PL44
3	繩文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にい・赤褐色	普通	口縁に沿って平行双綴施文。口唇直下に単節繩文充填。	北東部覆土下層	TP67
4	繩文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にい・赤褐色	普通	口唇部肥厚。口辺部は無文。	東西南部土中層	TP68
5	繩文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰・黄	普通	口唇部は内側が块を呈し棱を有する。口辺部は無文。	P 3付近土中層	TP69
6	繩文土器	深鉢	石英・長石・赤色岩子	黒	褐	口唇部は丸みを帯び無文。胴部はLR単節繩文を横方向に施文。	北東部覆土中	TP70
7	繩文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にい・赤褐色	普通	RL単節繩文上に、横位の沈線と連弧状の沈縫を配して文様構成。	北東部床面	TP71
8	繩文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にい・褐色	普通	無文地に斜位の沈縫を2条配して区画。区画内に単節繩文充填。	西北部覆土中	TP72

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	磨石	8.7	7.5	4.1	381	安山岩	自然礫素材。全面を研磨面に使用。	P 1南側覆土下層	Q1 PL6
10	砥石	8.3	5.0	8.9	398	砂岩	自然礫素材。板状の側面1面に研磨痕。被熱し赤変。	P 1西側覆土下層	Q12

第33号住居跡 (第27・28図)

位置 調査区南東部のB 7 e3区に位置し、丘陵性台地中央の緩斜面部に立地している。

重複関係 南東部は第43号住居に、西側は第8号土坑に、東側は第9号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

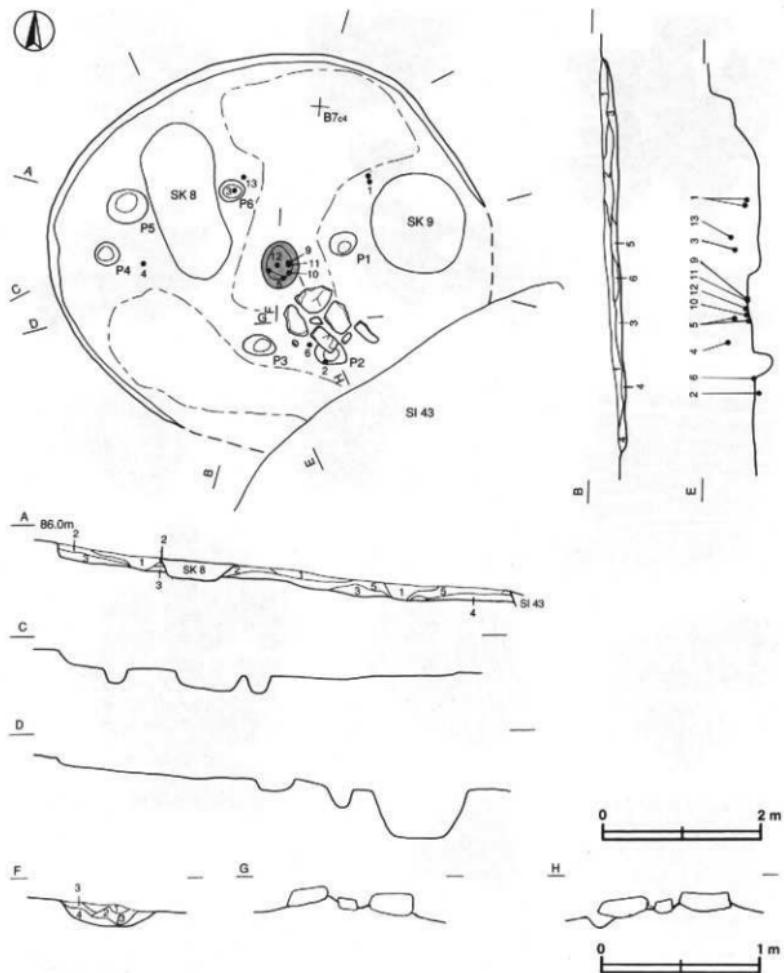
規模と形状 斜面部のため南東側の壁が流失し、さらに第43号住居との重複で一部床面を欠いている。平面形は長径5.16m、短径約5.0mの円形と考えられる。主軸方向はN-35°-Wである。壁高は最大28cmで、やや外傾して立ち上がりっている。

床 北西部から南東部に向かって、わずかに傾斜している。また、炉の南東側には、自然石を用いた配石が確認された。床面よりやや浮いた状態ではあるものの、扁平な4枚の大形自然礫と小さな礫を組み合わせて、平坦面を構築している。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径116cm、短径80cmの楕円形で、床面を皿状に21cmほど掘りくぼめて、炉床としている。第3層の対称的な堆積状況と炉確認面上の繩文土器の出土状況から、土器埋設炉の可能性がある。

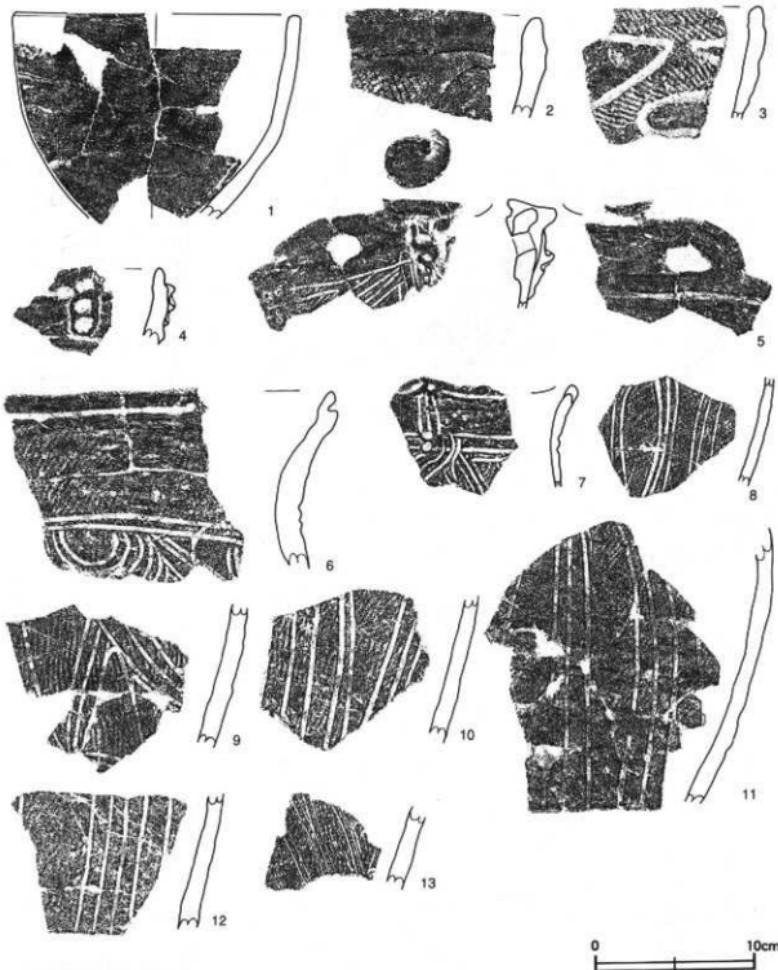
#### 炉土層解説

1	暗赤褐色	燒土粒子中量。炭化粒子・ローム粒子少量	3	にい赤褐色	ローム粒子少量。燒土粒子・炭化粒子微量
2	赤褐色	燒土粒子・ローム粒子少量	4	明褐色	ローム粒子中量。炭化粒子・鹿沼バミス少量



第27図 第33号住居跡実測図

ピット 6か所。P 1～P 6の深さは15～25cmである。P 3とP 5は、その規模と配置などから主柱穴と判断される。その他のピットについては、性格を明確にすることはできなかった。



第28図 第33号住居跡出土遺物実測図

覆土 6層に分層される。全体的に褐色を基調として、各層にロームブロックまたはローム粒子・鹿沼バミスを含んでいる。また、平行な堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量  
2 暗 褐 色 炭化粒子・ロームブロック微量  
3 褐 色 ロームブロック・鹿沼バミス少量

4 明 色  
5 結 色  
6 濃 色

ローム粒子中量、焼土粒子微量  
ローム粒子少量、炭化粒子微量  
ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片165点（口縁部片15、腹部片149、底部片1）と、混入と考えられる弥生土器片50点、上部器片38点が出土している。遺物は主に炉周辺部の覆土下層から床面上で多く確認されたが、すべて小破片であった。第28図1は北東部床面上から、9~12などの大形深鉢土器の破片は炉付近の床面上から、それぞれ出土している。深鉢土器は出土位置から判断して、炉の埋設土器に用いられていた可能性がある。また、全城でこぶし大から人頭大ほどの礫が、約30点確認されている。

所見 本跡内で検出された配石は、炉に隣接して構築されており、関連する施設と推定する。時期は、出土遺物から繩文時代後期前葉と考えられる。

第33号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	基部	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	繩文土器	深鉢	17.7	12.7	-	石英	青白	普通	口縁部は丸味を帯びる。胎部は無文。	北東部床面	P3

番号	種別	胎様	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	繩文土器	深鉢	石英	青白	普通	胎部にRし半周旋文施文。口縁部と側面にナブリによる斜面造形。	P2付近床面	TP77
3	繩文土器	深鉢	石英・長石	青白	普通	胎部の光沢で曲線状に仄闊。口唇から仄闊部内に半周旋文を充填。	北東部床面	TP78
4	繩文土器	深鉢	石英・雲母	青白	普通	底面部と波筋部外側に格円形の浮文刻付。浮文上に押印による苔孔作成。	P1付近床面	TP79
5	繩文土器	深鉢	石英・赤色粒子	青白	普通	底面部に円形突起と横状把手貼付。Rし半周旋文上に刺文を加えた。	北東部床面	TP80
6	繩文土器	深鉢	石英・赤色	青白	普通	口唇部に波筋施文。底部以下に地丸のRし草筋旋文上に2~4条単位の波筋施文。	南部床面 P3~P4 P5~P6	TP81
7	繩文土器	深鉢	石英・泥母	青白	普通	胎部に幾文字に刷文と3本単位の波筋で文様施用。	覆土中 P1~P2 P3~P4	TP82
8	繩文土器	深鉢	石英・泥母	青白	普通	地丸のRし半周旋文上に、3~4条単位の曲線的波筋を配して文様施成。	覆土中 P3~P4	TP83
9	繩文土器	深鉢	石英・泥母	青白	普通	地丸のRし半周旋文上に、3~4条単位の曲線的波筋を配して文様施成。	炉内覆土中	TP84
10	繩文土器	深鉢	石英・泥母	青白	普通	地丸のRし半周旋文上に、3~4条単位の曲線的波筋を配して文様施成。	炉内覆土中	TP85
11	繩文土器	深鉢	石英・泥母	青白	普通	上端に残文が残るが下半は無文。曲線的な3条単位の波筋を施す。	炉内覆土中	TP86
12	繩文土器	深鉢	石英・泥母	青白	普通	地丸のRし半周旋文上に、2条単位の波筋を斜行させて施す。	北東部床面	TP87
13	繩文土器	深鉢	石英・雲母	青白	普通	地丸のRし半周旋文上に、2条単位の波筋を斜行させて施す。	北東部床面	TP88

第34号住居跡（第29~31図）

位置 調査区南東部のB7 b5区に位置し、丘陵性台地中央の緩斜面部に立地している。

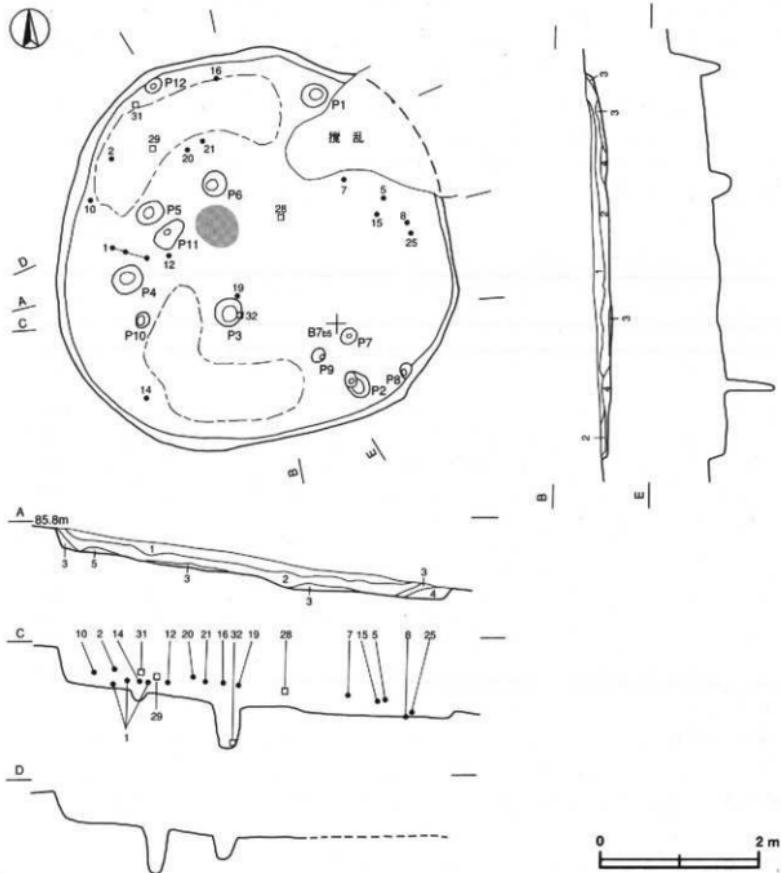
確認状況 住居跡北東側の床面と壁の一部は、木根による搅乱を受けているが、全体的に残存状態は良好である。

規模と形状 平面形は、長径5.15mで、短径は約4.90mであることから、円形と考えられる。主軸方向はN-47°-Wである。壁高は9~47cmで、ほぼ直立している。

床 北西部から南東部に向かって、緩やかに傾斜している。壁に沿うように、北西部と南西部に硬化面が確認された。さらに、北部と南西部の壁際には、焼土の集積が確認された。

炉 挖り込みは確認されなかったが、やや北西寄りに長径57cm、短径51cmの範囲で焼土の散布が確認できたので、この位置に炉が付設されていたと考えられる。覆土中からは被熱した自然礫が多量に出土していることから、炉の構築材であった可能性が高い。

ピット 12か所で、深さは14~61cmである。P1~P6の深さは17~56cmで、その規模と配置から土柱穴と考えられる。その他のピットについては、深さが一定ではなく配置も不規則で性格等は不明である。

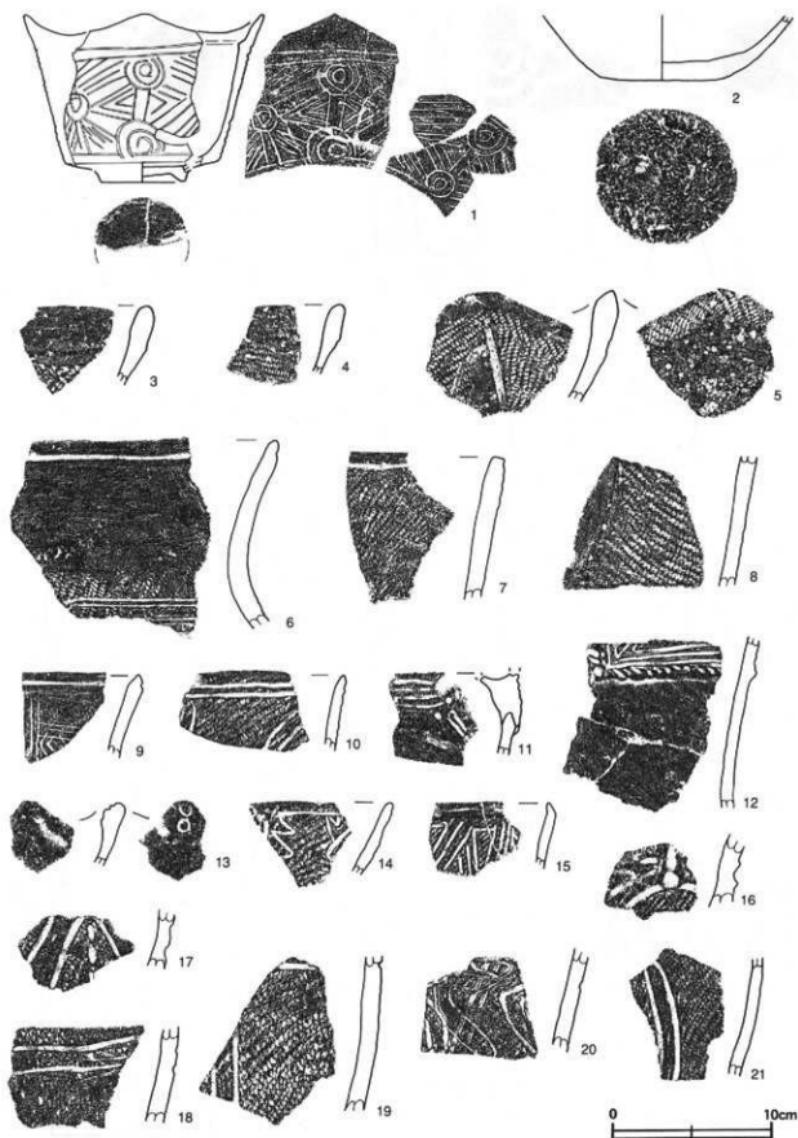


第29図 第34号住居跡実測図

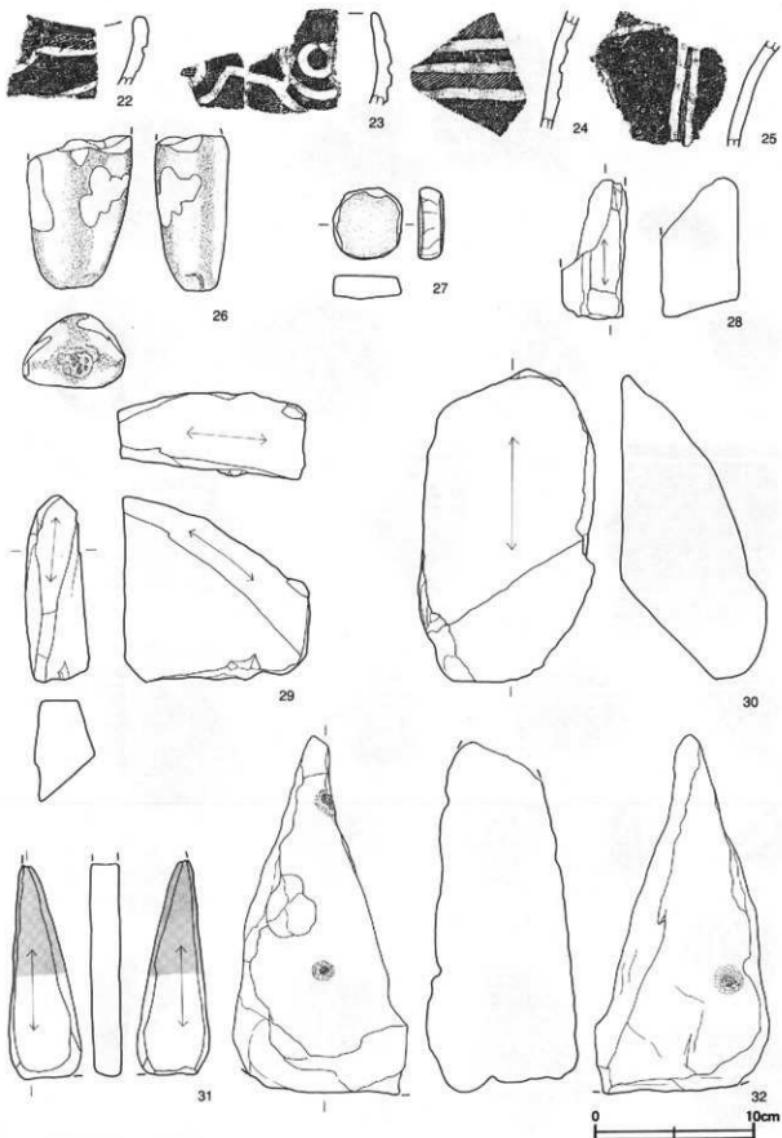
覆土 5層に分層される。褐色土を基調とし、各層にロームブロックまたはローム粒子を含むとともに、平行な堆積状況を示すことから人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	褐色土粒子・炭化粒子・ロームブロック微量	4	褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量、炭化粒子微量
2	褐色	褐色土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量	5	にぶい赤褐色	褐色土粒子中量、炭化粒子・ロームブロック少量
3	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量			



第30図 第34号住居跡出土遺物実測図（1）



第31図 第34号住居跡出土遺物実測図（2）

遺物出土状況 純文土器片478点（口縁部片54、胴部片411、底部片13）、石器6点（敲石1、凹石1、砥石4）、石製品1点（石製円盤）、剥片4点と、混入と考えられる弥生土器片8点、土師器片21点が出土している。遺物は全域の覆土上層から下層にかけて多量に確認されているが、そのほとんどが小破片である。また、こぶし大を超える自然縞50点以上が覆土中から検出され、そのうちの約半数に被熱の痕跡が確認された。第30図1は床面と覆土下層から、2・5・7・8・14・15と第31図25は、床面上からの出土である。32はP3の底面から、29・31は覆土中層から出土している。

所見 純文土器は、中期末葉から後期前葉までの時期が混在している。また、砥石と考えられる石器には、跡実に本跡に伴うと判断することが困難なものも含まれる。床面付近の出土遺物から判断すると、時期は純文時代後期前葉と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表（第30・31図）

番号	種別	器名	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
1	純文土器	盆	10.5	15.0	5.4	石英・長石	明赤褐	墨	口縁部は4単位の波状。内面に核が並ぶ。円形や菱形の沈線文を複数組み合わせた幾何学的な文様構成。底面に高台を有する。	西側床面	P36 Q4
2	純文土器	鉢	-	(4.1)	7.4	石英・長石	灰	灰	口縁部下端は無し。	西側床面	P37 Q3

番号	種別	器種	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
3	純文土器	深鉢	石英・長石・空気	灰	普通	口縁部にナゾリの沿う微隆起部形成。胴部施文にLR平筋純文施文。	西北部覆土中	TP96
4	純文土器	深鉢	石英・長石	灰	普通	口縁部にナゾリによる微隆起部を展開。胴部施文にLR單筋純文施文。	東北部覆土中	TP98
5	純文土器	深鉢	石英・長石・空気	灰	普通	角丸的な沈線区画を行い、LR縫合部と口縁部内面にLR單筋純文充填。	北東部床面	TP99 P45
6	純文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	普通	口縁部に沈線を形成。面部は逢文のLR平筋純文施文に平行沈線文施文。	北東部覆土中	TP98
7	純文土器	深鉢	石英・雲母	灰	普通	口縁部直下に沈線を周回。胴部施文にLR單筋純文施文。	北東部床面	TP90
8	純文土器	深鉢	石英・長石・空気	明赤褐	普通	ナゾリによる曲線的な微隆起部で区画。区画内にLR平筋純文施文。	東南部床面	TP102
9	純文土器	深鉢	石英・雲母	灰	普通	口縁部直下に沈線を周回。単筋純文上に条紋状の沈線施文。	北東部覆土中	TP94
10	純文土器	深鉢	石英・雲母	灰	普通	地文のLR單筋純文上に、平行沈線を配して文様構成。	北西部覆土下層	TP91
11	純文土器	深鉢	石英・雲母	灰	普通	底面頭部に柱状の突起部付。外縁に網目文を基点とする沈線文施文。	北東部覆土中	TP93
12	純文土器	深鉢	石英・長石・純R2	黒	普通	キダミを有する露脊で堅韌な骨格文を形成。上半は露脊と沈線文を施す。下半は逢文。	P11付近土下層	TP101
13	純文土器	深鉢	(4.5-24・純R2)	明	普通	底面頭部に2個1單位の円形刺突を施文。	南東部覆土中	TP100
14	純文土器	深鉢	石英・長石	明赤褐	普通	地文のLR平筋純文上に、焼行する沈線を配して文様構成。	南西部床面	TP97
15	純文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	普通	地文のLR平筋純文上に、焼文および曲線的な沈線区画を施して文様構成。	東部床面	TP99
16	純文土器	深鉢	石英	灰	普通	地文のLR單筋純文上に、焼文および曲線的な沈線区画を施して文様構成。	北東部覆土下層	TP109
17	純文土器	深鉢	石英・雲母	灰	普通	底面区画による層消純文によって文様構成。LR平筋純文上に透底網目文を施文。	西北部覆土中	TP110
18	純文土器	深鉢	石英	灰	普通	底面頭部に焼行の沈線文および網目文を施文。	西北部土中	TP105
19	純文土器	深鉢	石英・長石	灰	普通	地文のLR單筋純文上に、斜削の沈線を巡らして文様を構成。	P3北側壁下層	TP104
20	純文土器	深鉢	石英・雲母	灰	普通	底面純文上に斜削および焼行する斜削の沈線を施文。	北西部覆土下層	TP106
21	純文土器	深鉢	石英・雲母	灰	普通	沈線区画による層消純文によって文様を構成。地文はLR單筋純文施文。	北西部覆土下層	TP107
22	純文土器	深鉢	石英・長石	灰	普通	曲線的な沈線区画を行い、純文を施文。	覆土中	TP95
23	純文土器	深鉢	石英・赤色粘土	灰	普通	地文の沈線で円形または楕円形に区画し、緻密な小筋純文を充填。	覆土中	TP92 P45
24	純文土器	深鉢	石英・雲母	灰	普通	地文の深い窪広の沈線で区画し、緻密な小筋純文部と無文部を構成。	覆土中	TP108
25	純文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	普通	地文の深い窪広の沈線で区画し、緻密な半筋純文部と無文部を構成。	東部床面	TP103

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
26	敲石	(9.6)	6.3	4.5	(389)	安山岩	自然磨耗材。下端部に敲打痕。断面三角形で3面に磨痕、一部研磨材。	繩文面	Q1 R6
27	石斧円盤	4.1	4.2	1.6	46.4	安山岩	扁平な自然磨耗材。傾斜を敲打して形成。	北西部覆土中	Q3 R3
28	砥石	(8.7)	4.2	5.1	(182)	砂岩	滑らかな自然磨耗材。板状の断面1面に研磨痕。	中央部覆土下層	Q16

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
29	砥石	(11.6)	(4.0)	11.6	(590)	安山岩	扁平な自然石素材。板状の側面2面に研磨痕。	北西部覆土下壁	Q18
30	砥石	19.5	10.0	9.1	2,100	玄武岩	自然端素材。縦の破断面を利用した顯著な研磨痕。台石兼用か。	確認面	Q19
31	砥石	(13.3)	4.5	1.4	(181.5)	砂岩	扁平な自然石素材。表裏両面に研磨痕。先端部に赤色顔料付着。	北西部覆土下壁	Q17 PL41
32	四石	(23.1)	(10.7)	9.5	(2,400)	花崗岩	大半欠損。本來は板状自然端素材か。表面2、裏面1か所穿孔。側面は赤色。	P 3 内底面	Q15

### 第37号住居跡（第32・33図）

位置 調査区東部のA 7 j7区に位置し、丘陵性台地先端に近い緩斜面部に立地している。

重複関係 南側の大半を、古墳時代の第35号住居と弥生時代の第39号住居に掘り込まれ、北側の一部が残存している。北東部は第138号上坑に掘り込まれている。

規模と形状 北側に残存する壁が曲線的に巡ることから、平面形は径約4.0~5.0mの円形または橢円形と推定される。残存する壁高は最大15cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 平坦であり、残存する床の範囲内から硬化面は確認されなかった。

炉 確認されなかった。

ピット 確認されなかった。

覆土 4層に分層される。ロームブロックまたはローム粒子を含む第2・4層が、壁際からレンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 種別 色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量

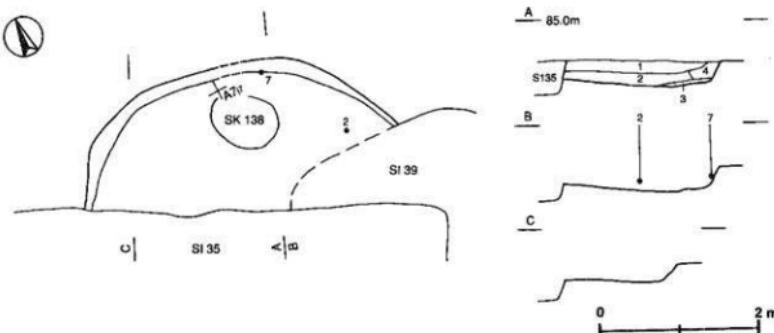
2 種別 色 ロームブロック中量

3 種別 色 ローム粒子少

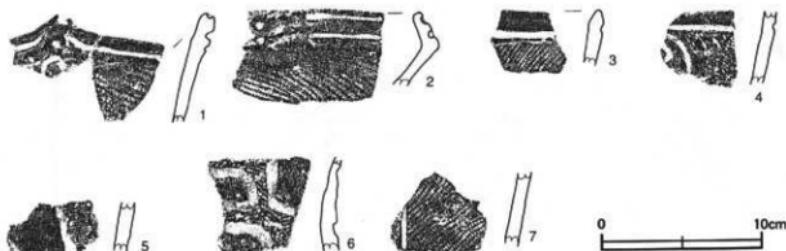
4 種別 色 ロームブロック微量

遺物出土状況 繩文土器片102点（円錐部片8、胴部片92、底部片2）と、混入と考えられる弥生土器片25点、土師器片17点が出土している。遺物は覆土中層から床面上で出土しているが、そのほとんどが小破片である。

所見 時期は、出土遺物から繩文時代後期前葉と考えられる。



第32図 第37号住居跡実測図



第33図 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	暗褐色	普通	口唇部に沈線、底頂部に刺突文と曲線的な沈線区画文施文。地文はRL単筋縄文。	覆土中	TP112
2	縄文土器	深鉢	石英・雲母	にい褐色	普通	口唇部は2個1單位の刺突文と横位の2条の沈線施文。腹部はRL単筋縄文施文。	東部床面	TP111
3	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にい褐色	普通	口唇部は無文で、横位の沈線で胴部と区別。胴部はLR単筋縄文施文。	北東部覆土中	TP113
4	縄文土器	深鉢	石英・長石	にい褐色	普通	横位の沈線および曲線的な沈線区画による磨消縄文を構成。	北西部覆土中	TP116
5	縄文土器	深鉢	石英・長石	にい褐色	普通	彫りの深い幅広の沈線による区画を行い磨消縄文を構成。	北西部覆土中	TP117
6	縄文土器	深鉢	石英・長石	にい褐色	普通	彫りの深い幅広の沈線で幾何学的な区画を行い磨消縄文を構成。	中東部覆土中	TP114
7	縄文土器	深鉢	石英・長石・絶縁子	灰黄褐色	普通	地文のLR単筋縄文上に沈線文を垂下。	北東部覆土中	TP115

### 第38号住居跡（第34～38図）

位置 調査区東部のA 7 : 9区に位置し、丘陵性台地先端部に近い平坦面に立地している。

重複関係 南東側の一部を、第42号住居に掘り込まれている。西側には第5号土坑が重複しているが、新旧関係は不明である。全体的に遺存状態は良好である。

規模と形状 南東側の壁と床を、第42号住居との重複のため欠いているが、平面形は長径6.64m、短径5.25mの梢円形である。炉の長軸をもとにした主軸方向は、N-32°-Eである。壁高は7～22cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

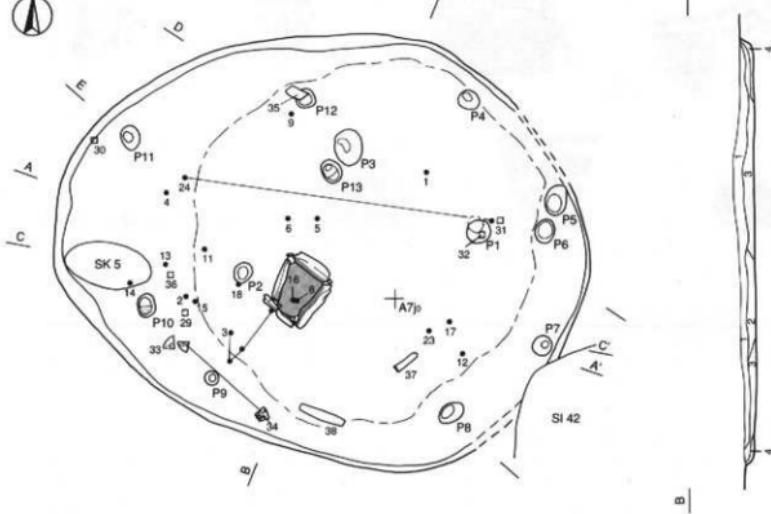
床 ほぼ平坦であるが、北西部から西部にかけて三日月状の範囲内にわずかな高まりが見られ、壁際から中央に向かって若干傾斜している。また、炉を開むように円形の範囲内で、硬化面が確認された。この高まり部分と円形の硬化面部分との境界にはやや段差があるものの、遺物や土層から重複関係を捉えることはできなかった。住居の拡張または建替えによって形成された部分と推定する。

炉 南東寄りに、長軸87cm、短軸71cmの長方形の石臼炉が敷設されている。炉の長軸方向は、N-32°-Eである。長さ24～67cmの扁平な花崗岩の自然礫を、4方向からやや外傾するよう立てて組み、コーナー部には小さな礫を埋ませている。炉の掘り方の深さは36cmで、炉床までの深さは15cmである。内部は被熱のため、赤変硬化している。また、炉石の内面も赤変しており、ひびが入り脆くなっているものもある。

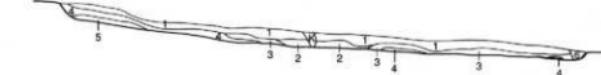
#### 炉土層解説

1 植 赤褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	4 にい赤褐色	燒土粒子多量、燒土ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
2 煙赤褐色	燒土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 鮎 色	ローム粒子中量、炭化粒子・鹿沼バクス微量
3 煙赤褐色	燒土粒子微量		

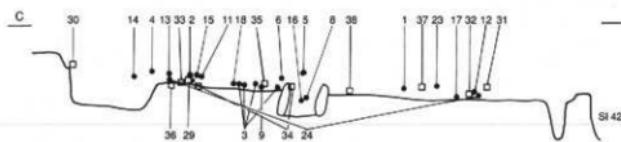
(A)



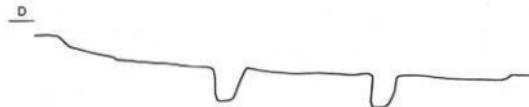
A 84.2m



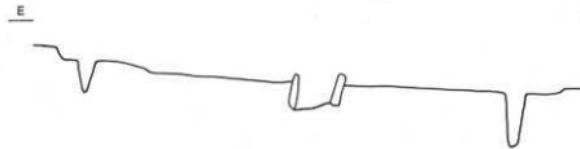
C



D

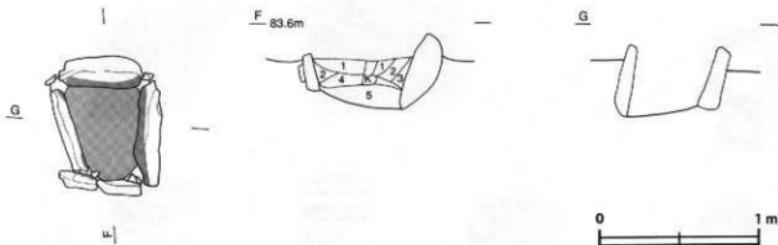


E



0 2 m

第34図 第38号住居跡実測図（1）



第35図 第38号住居跡実測図（2）

ピット 13か所で、深さは21~65cmである。硬化面内に確認されたP 1~P 3は深さ30~43cmで、規模と配置から主柱穴と考えられるが、南東側には確認されなかった。また、P 4~P 12は深さ21~65cmで、壁際を周回するように配置されており、補助柱穴と考えられる。P 3に隣接するP 3も、補助柱穴と推定される。

覆土 6層に分層される。全体的に褐色を基調とし、粘性としまりは普通である。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

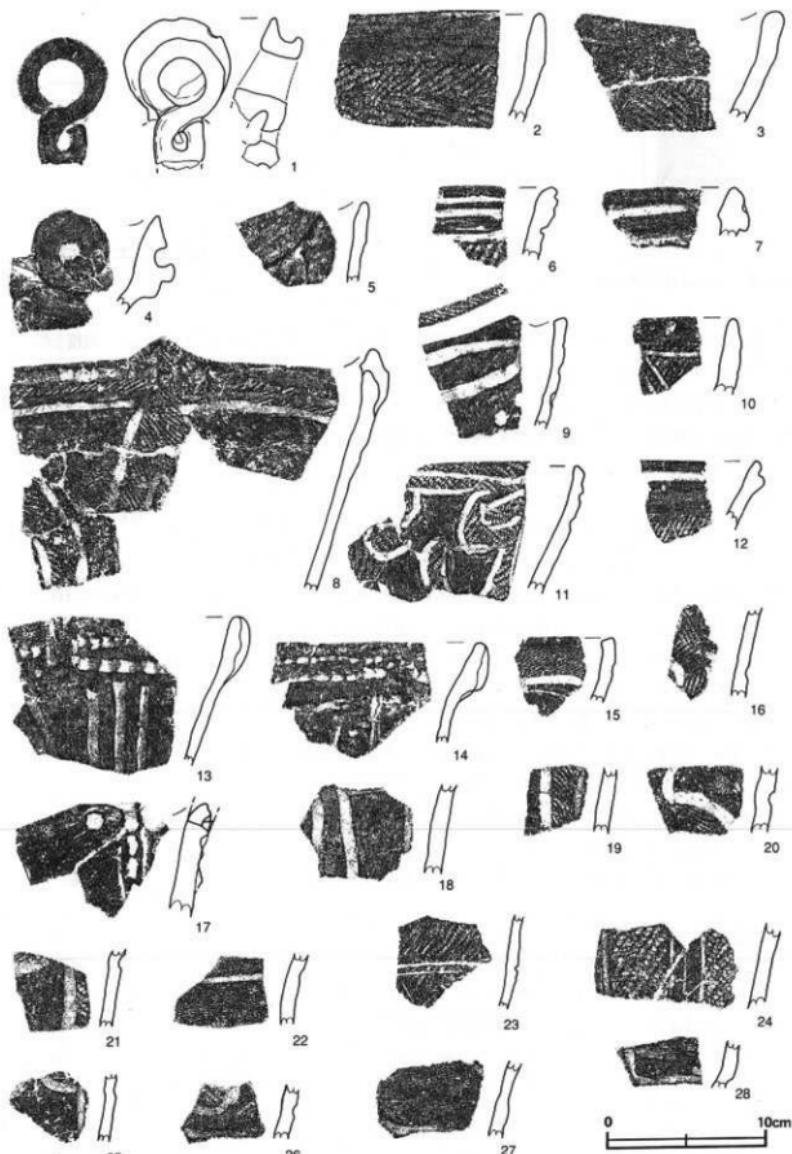
1 黒 褐 色	ローム粒子少量。焼土粒子・炭化粒子微量	4 黑 色	ローム粒子中量。鹿沼バミス微量、炭化粒子極微量
2 暗 褐 色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量	5 明 褐 色	ロームブロック微量
3 褐 色	炭化粒子・ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 墓 褐 色	ローム粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片486点（口縁部片54、胴部片427、底部片5）、石器9点（石斧2、磨石2、石皿2、凹石1、砥石2）、石製品3点（石棒2、独钻石1）、剥片15点と、混入と考えられる弥生土器片11点、土師器片12点、須恵器片1点が出土している。繩文土器は、全城の覆土下層から床面上で多量に確認されているが、小破片が多くを占めている。また、炉の覆土下層からも、第36図8・16などの繩文土器片が検出された。さらに、多種の石器や石製品が、覆土下層及び床面上から出土している。第37図34は南壁際と南西部の床面上から、二つに破損した状態で出土したものである。石製品のうち、第38図36は床面に突き刺された状態で出土した。37・38は南東部と南部の床面から、いずれも横位でわずかに浮いた状態で出土している。

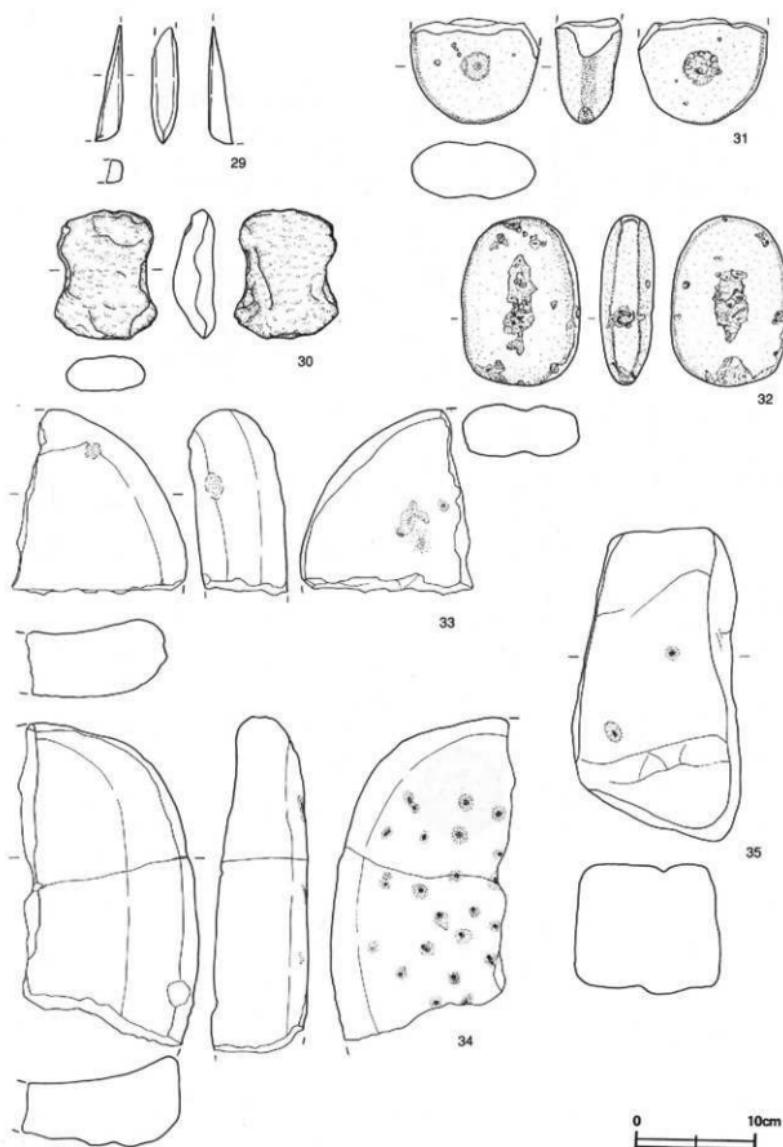
所見 堅固な石圓炉の付設や、2点の大型石棒と独钻石の出土は特徴的である。被熱痕が見られる石棒や、破損した状態で出土した石皿片の接合などと合わせ、呪術または祭祀的な行為を彷彿とさせる特異な性格を有していた住居と推定する。時期は、出土土器及び遺構の形態からおおむね繩文時代中期末葉と考えられる。

第38号住居跡出土遺物観察表（第36~38図）

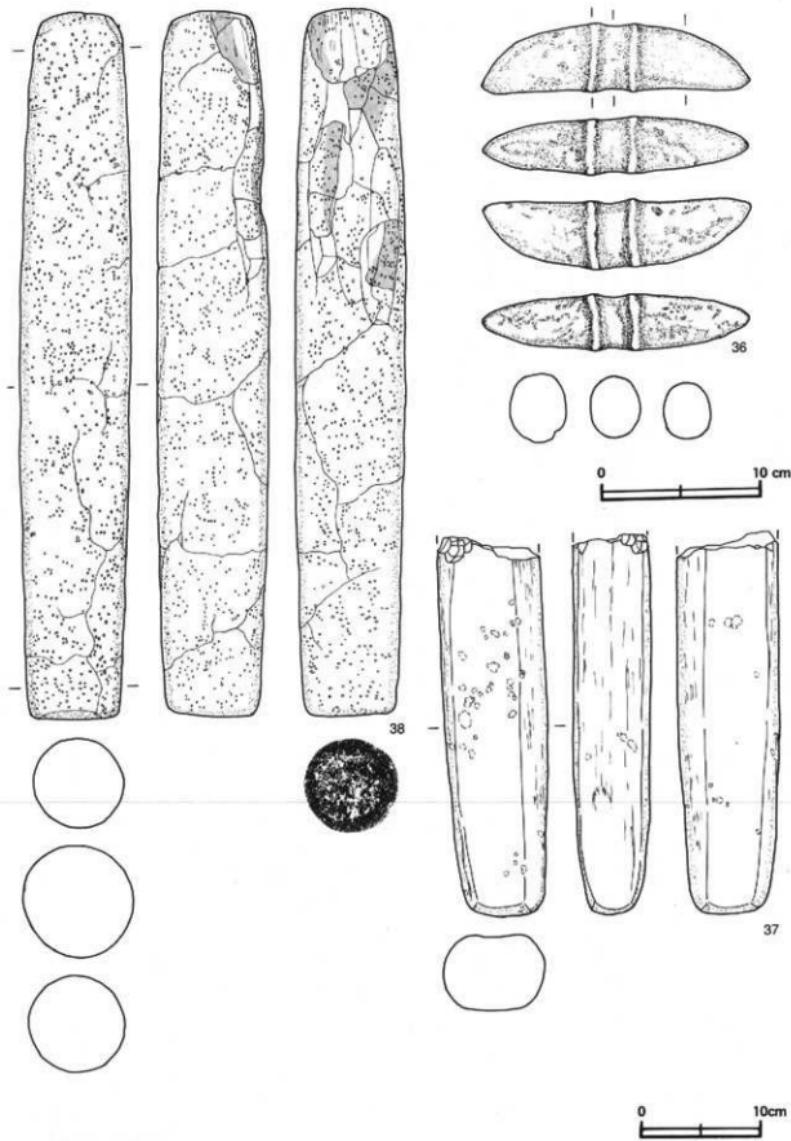
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	繩文土器	深鉢	石英・長石	こい青	普通	把手部片、環状の縞帯を巡らして外側は8の字状、側面は済草状。	北部床面	TP118 PL4
2	繩文土器	深鉢	石英・長石・紫母	棕	普通	口縁部鋸角的、口縁部は微隆起線を作り無文帯形成。胴部LR單縞繩文を羽状に施す。	南西部床面	TP121
3	繩文土器	深鉢	石英・長石	棕	普通	口縁部は微隆起線を作り無文帯形成。胴部はLR單縞繩文を施す。	中央部床面	TP122
4	繩文土器	深鉢	灰石・紫母・白色柱石	こい青	普通	底頭部に溝状の捻りを作り出した突起を配置。口縁部は微隆起帶を形成。	西部床面	TP129 PL4
5	繩文土器	深鉢	石英・長石・紫母	こい青	普通	ナゾリによる曲線的な微隆起帶で無文帯を形成。	北東側覆土中層	TP127
6	繩文土器	深鉢	石英・長石・紫母	こい青	普通	口縫部は横位に3条の沈痕を巡回。胴部は単縞繩文を施す。	中央部覆土下層	TP188
7	繩文土器	深鉢	石英・長石・紫母	こい青	普通	口縫部肥厚。横位に沈縫施す。	南西部覆土上層	TP237



第36図 第38号住居跡出土遺物実測図（1）



第37図 第38号住居跡出土遺物実測図（2）



第38図 第38号住居跡出土遺物実測図（3）

番号	施設	断面	幅	高さ	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
8	焼土上器	深鉢	石英・長石・ 雲母・赤色粘土	墨	青褐色	底部面部は肥厚し。陶文は施した跡を有を持つ。上唇部底ト下唇部に半輪縫文 施文の跡と辺縫を有なし。腰部の山根状の凹部前面による沿縫構文に施文。	南西部覆土下層 TP119 PL4		
9	焼文土器	深鉢	石英・長石	灰	青褐色	口縫部に浅し半輪縫文施文。口縫部を直線で斜円形に区画し斜縫に平行施文施文。	P12付近下層 TP126		
10	焼文土器	深鉢	石英・長石	灰	青褐色	口縫部はやや鋭角的で口縫部斜円形形成。單筋縫文上に施文と斜縫の 流域で文様を構成。	南西部覆土中 TP130		
11	焼文土器	深鉢	石英・長石・赤色粘土	灰	青褐色	R.L半輪縫文を地文とし、曲線的な沈縫区画を行い浪沿部を形成。	西部覆土下層 TP120 PL4		
12	焼文土器	深鉢	石英・長石・赤色粘土	墨	青褐色	口縫部は墨文で、口縫部底下に沈縫を形成。側縫にR.L單筋縫文を施文。	東部底面 TP128		
13	焼文土器	深鉢	石英・長石・墨	墨	青褐色	底面部に数段隕帶を貼付。口縫部は有筋斜縫で斜円形に区画。側縫部は墨文で幅広の比較文を呈す。	南東部覆土下層 TP123 PL4		
14	焼文土器	深鉢	石英・長石・赤色粘土	灰	青褐色	底面部に細隕隕帶を貼付。口縫部は有筋斜縫で斜円形に区画。側縫部は墨文で幅広の比較文を呈す。	P10付近床面 TP124 PL4		
15	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で1段階を以て2段。区画内に橢圓な單筋縫文を充填。	西北部覆土下層 TP238		
16	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で直線的な区画文を構成。区画内に橢圓な單筋縫文を充填。	北西部覆土中 TP239		
17	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	底面部に幅広の沈縫で直線的な区画文を構成。側縫部から割文変化した様子と沈縫を兼ね。	東部底面 TP125		
18	焼文土器	深鉢	石英・長石・純灰	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で直線的な区画文を構成。区画内に橢圓な單筋縫文を充填。	P 2付近床面 TP132		
19	焼文土器	深鉢	石英・長石・純灰	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で直線的な区画文を構成。区画内に橢圓な單筋縫文を充填。	西北部覆土中 TP557		
20	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で直線的な区画文を構成。区画内に橢圓な單筋縫文を充填。	南東部覆土中 TP560		
21	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で直線的な区画文を構成。区画内に橢圓な單筋縫文を充填。	西北部覆土中 TP556		
22	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で直線的な区画文を構成。区画内に橢圓な單筋縫文を充填。	西北部覆土中 TP432		
23	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	口縫のR.L半筋縫文上に横縫で斜縫と斜縫の沈縫を施文して文様を構成。	東部覆土下層 TP133		
24	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	墨	青褐色	地文のR.L半筋縫文上に沈縫区画による崩落痕重文を施文。崩落部に泥縫を1条示す。	東部底面 TP131		
25	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で曲線的な区画文を構成。	南西部覆土中 TP519		
26	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で曲線的な区画文を構成。	南西部覆土中 TP520		
27	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	墨	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で直線的な区画文を構成。	南西部覆土中 TP548		
28	焼文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	青褐色	脇の深い幅広の沈縫で曲線的な区画文を構成。	北西部覆土中 TP518		

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	香 袋	出土位置	備考
29	軽量石斧	9.7	(2.2)	(2.2)	(44.0)	凝灰岩	定角式。刀部平面形は円刃。断面形は同刃。	南西部覆土下層 Q3	
30	打製石斧	10.7	8.5	3.5	389	安山岩	枯れの浅い分筋縫。表面剥離に自然剥離。刀部は両面加工。	西北部埋蔵床面 Q8 R6	
31	磨石	3.8	10.1	5.3	(590)	輝石安山岩	白熱石墨材。全表面を研磨面に使用。表面磨擦痕深。表面向面にくまみ有り。	P 1 東側底面 Q5 R4	
32	磨石	34.0	9.8	4.4	862	輝石安山岩	白熱石墨材。全表面を研磨面に使用。断面削平。表面向面にくまみ有り。	P 1 上部底面 Q5 R4	
33	刮削器	(15.5)-(14.3)	(7.8)	(1.8)	(1,850)	輝石安山岩	表面から裏面削除。棒部は枝状に突出し直面内凹。裏面に30度穴孔して凹凸彫刻。	南西部床面 Q2 R4	
34	刮削器	(23.0)	(34.7)	(8.0)	(3,050)	輝石安山岩	端部から裏面削除。端部は後後に丸出しし直面内凹。下端に流し口有り。裏面に2か所穿孔して内部と裏面。被熱焼け。	南西部床面 Q2 R4	
35	円石	28.0	14.0	11.0	5,790	砂岩	口部無素材。表面に2か所空孔。	P 12.1. 那須原 Q2	
36	楕円石	16.6	4.2	3.6	351	凝灰岩	表面は均等に磨耗し若干灰り気味。全面に磨擦痕有り。斜の上面は平坦。	P 10 北東部底面 Q3 R4	
37	石棒	(31.7)	8.4	6.2	(3,580)	輝石安山岩	頭部欠損。表面前面はやや平滑で頭部は扁平な横円形。全面を丁寧に研磨成形。表面に骨板のくまみ有り。	東部底面 Q2 R4	
38	石棒	55.8	9.2	9.3	(7,990)	安山岩	大型の椭圆石棒。全面を丁寧に研磨成形するが、基部底面のみ研磨なし。先端部周辺に擦痕による骨付痕と剥離有り。全体にヒビ割れ顯著。	南部覆土下層 Q3 R4	

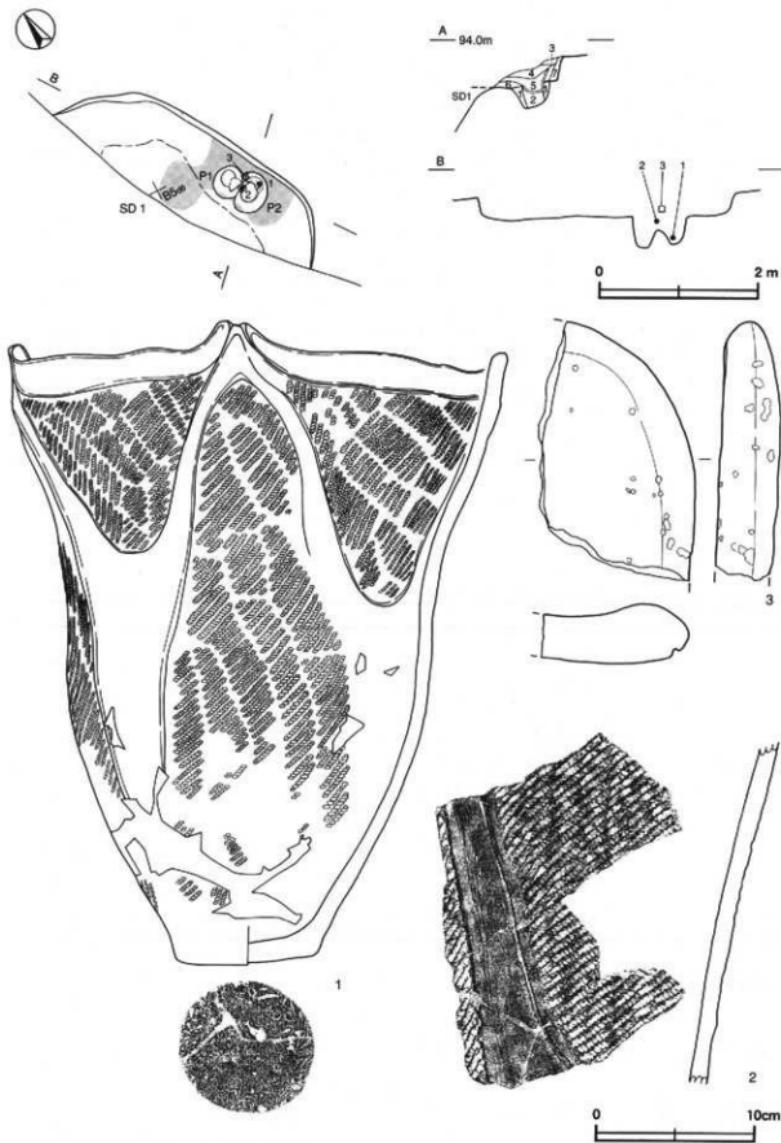
#### 第44号住居跡（第39図）

位置：洞査区中央部のB 5・6区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

重複関係：第1号壙の前方部と後部が接する位置の墳丘封土上で確認され、大部分は封土とともに、第1号溝によって削平されている。

規模と形状：北東側の壁と床を残存するだけで、平面形は明確でないが、径3.70m以上の円形または梢円形と推定される。主軸方向は明確にできない。壁高は最大27cmで、ほぼ直立している。

床：遺存する部分は平坦で、中央寄りに硬化面が確認された。また、壁際のピット周辺に焼土が認められた。



第39図 第44号住居跡・出土遺物実測図

**ピット** 2か所。いずれも埠際で検出され、鹿沼バミス層の地山を掘り込んでいる。P 1は深さ32cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。P 2は深さ42cmで、土器を埋設していた。

P 2 土層解説

1 深 黒 色 鹿沼バミス中層、焼土粒子・ローム粒子微量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量。  
以炭化粒子極微量

**覆土** 5層に分層される。覆土各層には焼土粒子や炭化粒子を含むとともに、ローム粒子や鹿沼バミスが確認され、平行な堆積状況を示すことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

3 深 黒 色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、炭化物	6 赤 黒 色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、 鹿沼バミス微量
4 深 黑 色	焼土粒子・炭化粒子少量、炭化物・ローム粒子微量	7 明 黑 色	焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス少量
5 程暗赤褐色	焼土粒子中層、焼土ブロック・炭化粒子少量、 炭化物・ローム粒子・鹿沼バミス微量		

**遺物出土状況** ほぼ完形の深鉢1点と縄文上器片4点(脇部片4), 石器1点(右III), 刃片2点と、混入と考えられる弥生土器片5点が出土している。また、床面の焼土内からは炭化材がわずかに検出された。遺存状況が良くないため、遺物は極少量であるが、第39図1の深鉢がピット内に埋設された状態で確認された。

**所見** 東壁際付近の炭化材と焼土の分布から、焼失住居の可能性が高い。また、埋設土器も検出され、特異な性格を持つ住居と推定される。時期は、ピット内出土土器から、縄文時代中期末葉と考えられる。

第44号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	鉢底	口径	器高	底径	胎土	色調	施版	手法の着目	出土位置	備考
1	縄文上器・深鉢	30.5	40.2	9.0	石英・長石	赤褐色	青色	口縁部に微隆起線を伴う無文帶が造出。腹部は腹背部から連び字状の 横筋起線により無文部と縄文部を区別。口縁部と腹部の微隆起線は波状で、 腹部の突起に連続。底面にはR.L単節縄文を充填。	波状横筋 R.L単節縄文を充填。	P 2付近床面	PLA3
<hr/>											
番号	種別	鉢底	胎土	色調	焼成				手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文上器・深鉢	石英・雲母	灰褐色	普通	R L 単節縄文上に、微隆起線で幅広な無文帯を構成。					P 2付近床面	TP135
<hr/>											
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重ね	材質			特徴	出土位置	備考
3	石皿	21.6	(33.2)	4.9	(1,260)	安山岩	周縁から裏面を丁寧に研削。側縁部は肥厚し皿部は緩やかに内傾。下 面になだらかな波状形成。 周部に保付石。			P 2付近床面	Q31 PL42

第45号住居跡 (第40・41図)

**位置** 洞査区中央部のB 5+0区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

**重複関係** 第1号墳の後円部南東側の埴丘封土下で確認され、東側部分は遺存しない。また、中央部から東部の床面は木棍による搅乱を受けている。

**規模と形状** 遺存する壁と床の範囲から、推定長径約4.2m、短径3.8mの不規則円形と推定される。主軸方向も明確にできないが、長径をもとにした主軸方向は、N-65°-Eである。壁高は最大34cmで、わずかに外傾して立ち上がっており。

**床** 遺存する部分はほぼ平坦である。北西部と南西部の壁寄りに、硬面の広がりが確認された。

**炉** 床面が擾乱を受けているため明確ではないが、やや北寄りに長径80cm、推定短径60cmほどの範囲で、焼土の散布が確認された。この位置に地床炉が付設されていたと考えられる。覆土の第5層が仰上面の層に当たり、掘り込みは確認されなかった。

**ピット** 2か所。深さはP 1が27cm、P 2が19cmで、P 1は規模と位置から主柱穴と考えられる。P 2の性格は不明。

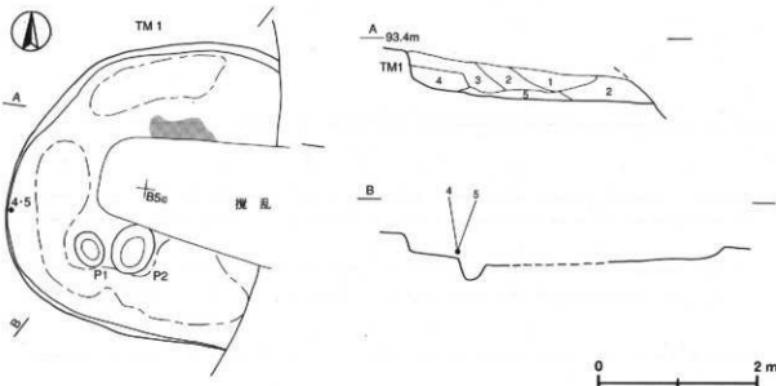
覆土 5層に分層される。焼土粒子や炭化粒子を含む層が多く、ロームや鹿沼バミスも確認されている。ブロック状の堆積状況を示すことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 白 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	4 黒 色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス少量
2 明褐色	焼土粒子・炭化物・ロームブロック・鹿沼バミス少量	5 赤褐色	焼土粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子・鹿沼バミス少量
3 黑 色	炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 ほぼ完形の縄文土器1点と縄文土器片11点（胴部片10、底部片1）、混入と考えられる弥生土器片4点が出土している。また、第41図は木根によって搅乱された覆土中から出土している。遺存状態が良くないため遺物は極少量であるが、4・5は床面上から出土したものである。

所見 搅乱により壺形土器は原位置を留めていなかったが、本跡に伴うものと推定される。時期は、遺構の形態及び出土土器から、縄文時代中期末葉と考えられる。

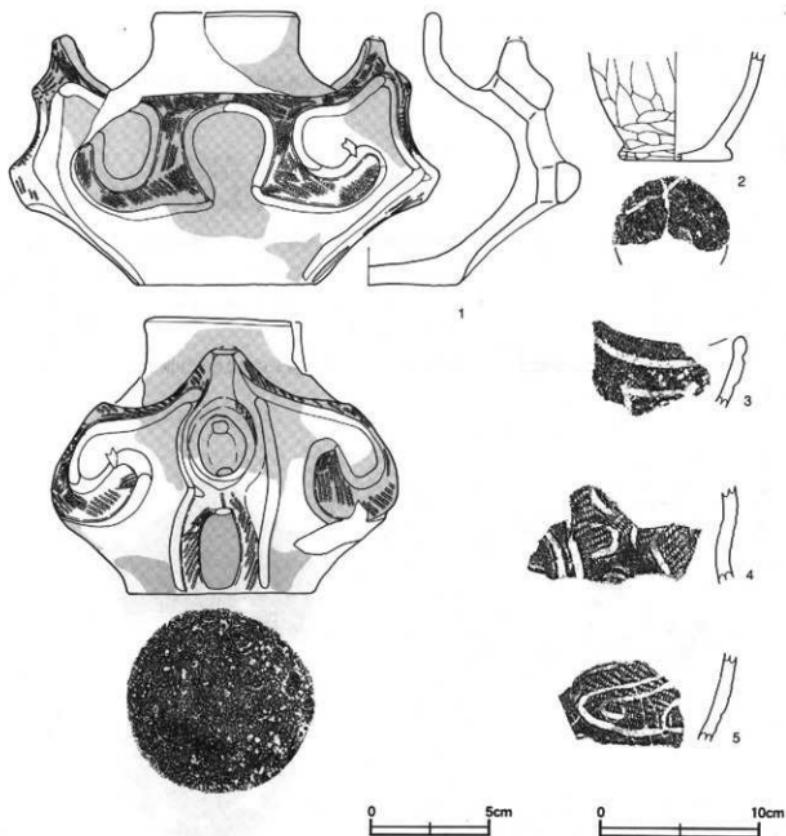


第40図 第45号住居跡実測図

第45号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	深さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	壺	[5.8]	11.4	5.4	石英	CSIV普通	普通	口縁部無文帶形成。胴部前後両面に舟手状の隆起を対称的に配して左右の突起と連結。突起部は貫通孔により舟手を形成。胴部隆起上に単線縄文施文。隆起部付近には沈線を附せず、無文部のケズリを作り舟手により浮影状の文様作出。一部赤色顔料の付着痕有り。	複数層覆土中	TM1 G5 PL30
2	縄文土器	深鉢	一	[6.8]	7.5	砂・粘・結け	明赤褐	普通	底部の周縁突出。胴部と底面無文。	複数層覆土中	TM1 H9

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	石英・長石	橙	普通	波頭部から口沿部直下に沈線と縄文を施文。口縁部は沈線による区画文施文。	覆土中	TP138
4	縄文土器	深鉢	砂・粘・結け	にわき粘	普通	L R 単線縄文上に、曲線的な加沈線などを施文し文様を構成。一部縄文剥落。	南西壁際床面	TP139
5	縄文土器	深鉢	石英・長石	明赤褐	普通	L R 単線縄文上に、曲線的な沈線を配して文様を構成。一部縄文剥落。	南西壁際床面	TP140



第41図 第45号住居跡出土遺物実測図

## (2) 土 坑

検出した土坑は、貯蔵穴、陥し穴、その他の土坑に大別される。貯蔵穴としての機能と用途を持つものとしては、フラスコ状・袋状・円筒状の形態を呈する土坑を抽出した。陥し穴については、形状や規模などをもとに判断し抽出した。土坑の解説は、貯蔵穴と陥し穴を中心に、遺構の残存状況や遺物の出土状況が良好なものについて行い、その他の土坑については一覧表に記載した。

### ① 貯蔵穴

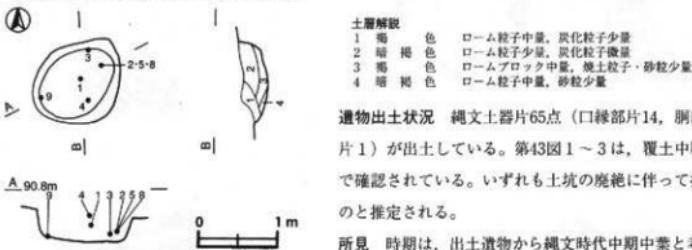
#### 第1号土坑（第42～44図）

**位置** 椰査区中央部のB 6-2区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い南向き緩斜面に立地している。

**確認状況** 第1号墳後円部南東側の墳丘裾部で確認され、上部は古墳の構築により削平されたと考えられる。

**規模と形状** 開口部は長径1.24m、短径1.02m、底部は長径1.02m、短径0.80mの楕円形である。深さは32cmで、底面はほぼ平坦である。壁はやや袋状を呈し、長径方向はN-46°-Eである。

**覆土** 4層に分層される。ロームブロックやローム粒子、砂粒を含む層が確認され、不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。



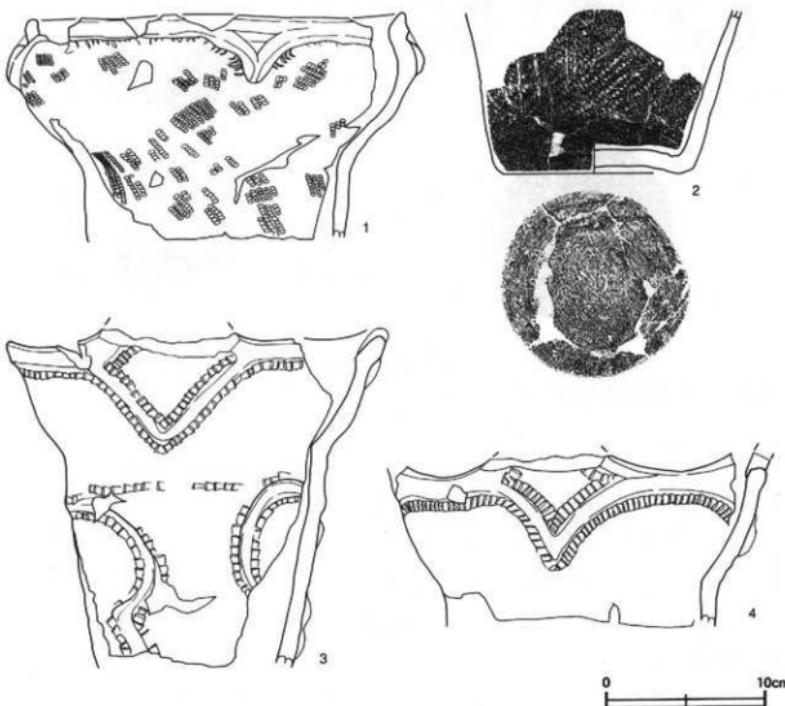
第42図 第1号土坑実測図

#### 土層解説

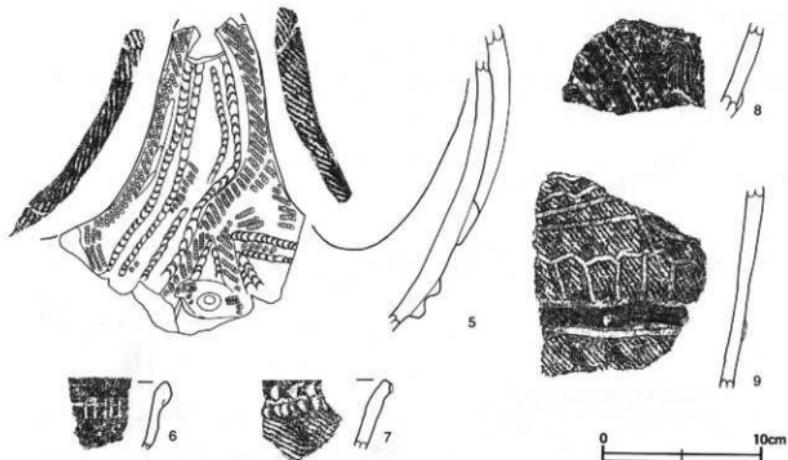
1	黄褐色	ローム粒子中量, 漢化粒子少量
2	灰褐色	ローム粒子少量, 漢化粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック中量, 硫土粒子・砂粒少量
4	黒褐色	ローム粒子中量, 砂粒少量

**遺物出土状況** 繩文土器片65点（口縁部片14、胴部片50、底部片1）が出土している。第43図1～3は、覆土中層から底面上で確認されている。いずれも土坑の廃絶に伴って投棄されたものと推定される。

**所見** 時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第43図 第1号土坑出土遺物実測図（1）



第44図 第1号土坑出土遺物実測図（2）

第1号土坑出土遺物観察表（第43・44回）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	23.0	(14.0)	—	石英・玉砂・雲母	暗赤褐色	普通	口唇部は陰滑により肥厚し、内面に棱を有する。4単位のV字形に隆帯を貼付し、隆帯貼付部に結節沈線文が施る。LR單錐繩文を施す。着火が著しい。	北部底面	PH1 25 PL30
2	縄文土器	深鉢	—	(10.2)	12.1	石・玉砂・砂利	二二身	普通	地文のRL・L單錐繩文上に、2単位の沈線文を施す。底面は上げ焼成で無し。	北東部土下層	PL15 26
3	縄文土器	深鉢	[23.4]	(21.0)	—	石英・玉砂・砂利	にこい青	普通	波状口縁で、口縁部は肥厚して内面に棱を有する。波頂部からV字形に隆帯を貼付。肩部も隆起が蛇行。隆帯貼付部と肩部上端に結節沈線文を施す。	北東部土下層	PL44 26
4	縄文土器	深鉢	—	(10.6)	—	石英・玉砂・雲母	にこい青	普通	波状口縁で、口縁部は肥厚して内面に棱を有する。波頂部からV字形に隆帯を貼付し、隆帯と口縁に沿って幅広の結節沈線文を施す。	北東部土下層	PL12 26
5	縄文土器	深鉢	—	(22.3)	—	石英・雲母	にこい青	普通	大波状口縁の波頭部。隆帯により区画文と環状の突起を形成。口唇部と隆帯上はRL・LR單錐繩文を施す。貼付部に2列1単位の結節沈線文を施す。	北東部土下層	PL45 26

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	縄文土器	深鉢	砾・粘土・純粘土	にこい青	普通	口唇部は肥厚。口唇部直下に横位にカギミ日列を施す。	覆土中	TP146
7	縄文土器	深鉢	砾・粘土・純粘土	明赤	普通	口唇部直下に2列の系文を施す。口唇部は少し單錐繩文を斑状に施す。	覆土中	TP147
8	縄文土器	深鉢	砾・粘土・純粘土	にこい青	普通	波状の条線文上に、曲線的な隆帯を貼付。隆帯の両側に2列の結節沈線文を施す。	北東部覆土下層	TP149
9	縄文土器	深鉢	砾・粘土・純粘土	にこい青	普通	RL・L單錐繩文上に横位の隆帯貼付。複数の短距離と横位の波状沈線文等で文様描出。	南西部底面	TP148

第3号土坑（第45回）

位置 調査区中央部やや北寄りのA 6・9区に位置し、丘陵性台地の北東斜面に立地している。

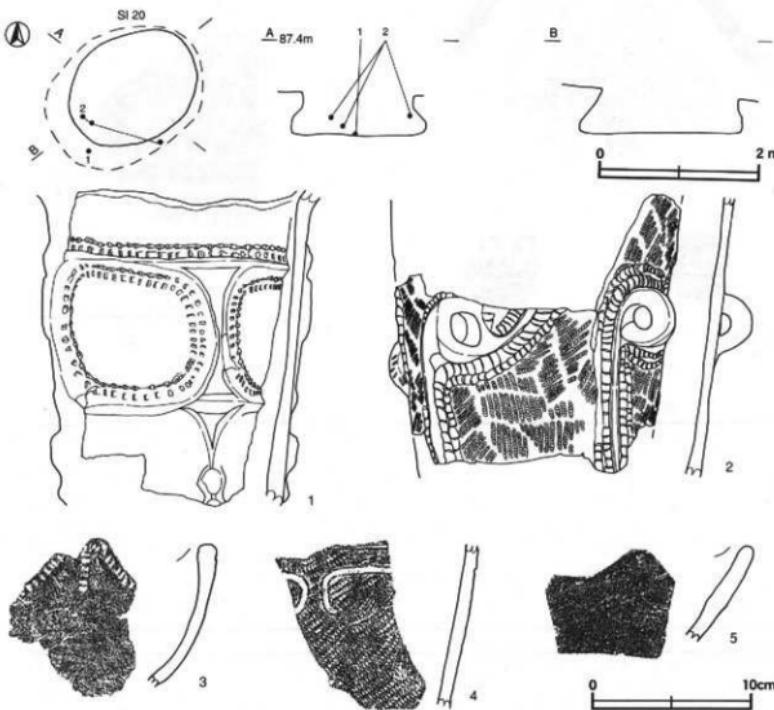
重複関係 本跡の上部に、第20号住居の床面が構築されている。

規模と形状 開口部は長径1.68m、短径1.31m、底部は長径2.06m、短径1.06mの梢円形である。深さは56cmで、底面は平坦である。壁はフラスコ状を呈し、長径方向はN-55°-Eである。

覆土 崩落により土層図が作成できなかったが、覆土は全体的に黒褐色土を基調とし、粘性と締まりに欠けている。単一層に近いことから人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器片14点（口縁部片3、胴部片11）が出土しているが、出土量は少ない。第45図1・2は、いずれも壁際寄りの底面から出土しており、遺棄または投棄されたものと判断される。

所見 時期は、出土土器と遺構の形態から縄文時代中期中葉と考えられる。本跡廃絶後に埋め戻され、第20号住居跡が構築されたものと判断する。



第45図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	胎土	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	—	15.5	—	良石・石英・雲母 赤色粒子	橙	普通	胴部上半は焼位の隆起と、造形による楕円形の区画文を形成。隆起に沿って2列のキザミ目を送る。下半にはY字状に隆起を垂下し、指腹による押圧。	西面部裏面 西斜面	TP35 西斜面
2	縄文土器	深鉢	—	17.5	—	石英・長石・雲母	こいき	普通	L字型縦縞文上に隆起を曲線状に貼付。胴部中央で渦巻状となり、凹環を形成。内環は4単位で配置の高さが異なる。腹蓋貼付部に、粘附沈線文施文。	西底部裏面 ・南東部裏面	TP31 東斜面

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	赤	褐	波底部反張状。口唇直下に斜面沈線文があり、底面からわざわざに粘附沈線文垂下。	覆土中	TP153
4	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	こいき	普通	腹面に施文された少し平滑な縞文上に、複数の沈窪と斜手状の沈窪により文様造成。	覆土中	TP154
5	縄文土器	浅鉢	石英・長石・雲母	橙	普通	波底口縁で、波頂部は双輪状を呈する。内面に縫を有する。胴部は丁寧に研磨。	覆土中	TP152

#### 第4号土坑（第46・47図）

**位置** 調査区中央部や北寄りのA 6+9区に位置し、丘陵性台地の北東斜面に立地している。

**重複関係** 第120号土坑に南東部を掘り込まれている。

**規模と形状** 開口部とくびれ部は、長径0.62m、短径0.54mのほぼ円形で、底部は長径2.60m、短径1.94mの不整規円形である。深さは102cmで、底面は平坦である。壁はプラスコ状を呈し、長径方向はN-60°-Wである。

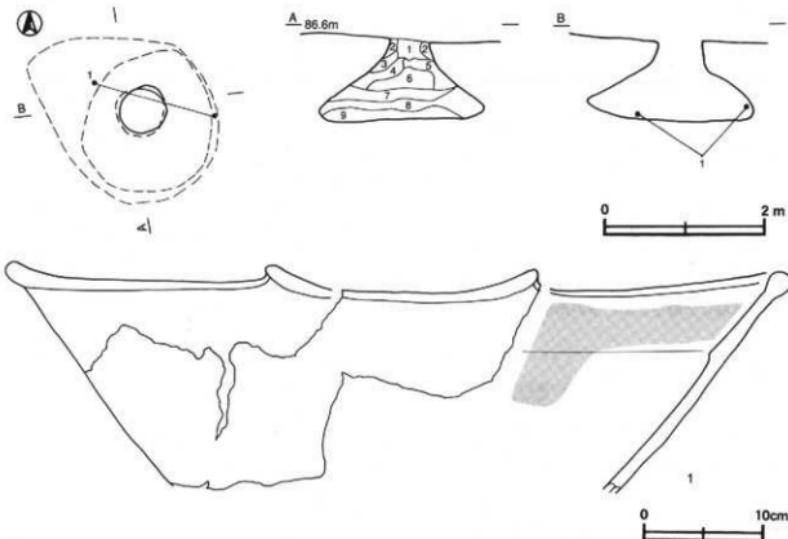
**覆土** 9層に分層される。全体的に褐色土を基調としている。第1～6層はブロック状、第7～9層は平行的な堆積状況を示し、各層にロームブロックやローム粒子、炭化粒子を含んでいることから、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

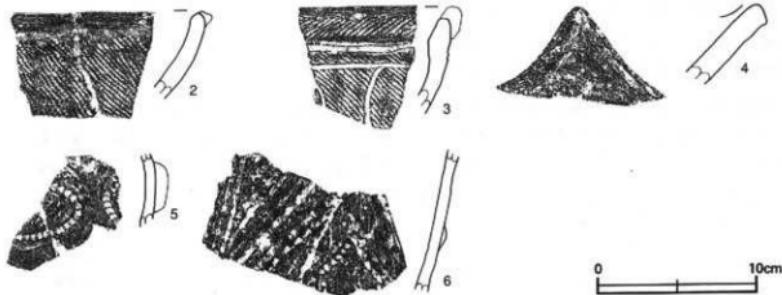
1 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、炭化物微量	6 紫褐色	ローム粒子・鹿沼バミスブロック中量、炭化粒子・鹿沼バミス少量
2 褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	7 黑褐色	鹿沼バミス少量、炭化物・ロームブロック・鹿沼バミスブロック微量
3 紫褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土ブロック・焼土粒子微量	8 紫褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・鹿沼バミス少量
4 黑褐色	炭化粒子・ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	9 黑褐色	鹿沼バミス多量、炭化粒子中量、炭化物・ローム粒子少量
5 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

**遺物出土状況** 繩文土器片29点（口縁部片24、胴部片5）、剥片1点と、混入と考えられる弥生土器片と土師器片が覆土上層から出土している。底面からは、人頭大の自然縄1点が確認された。繩文土器は小破片が多く、第46図1は底面上から出土している。土坑発掘に伴って投棄されたものと推定される。

**所見** 時期は、出土土器と造構の形態から繩文時代中期中葉と考えられる。



第46図 第4号土坑・出土遺物実測図（1）



第47図 第4号土坑出土遺物実測図（2）

第4号土坑出土遺物観察表（第46・47図）

番号	種別	器種	口径	器高	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
1	縄文土器	浅鉢	[底面]	[底面]	—	黒美・赤色柱子	黒褐	普通	波面部は双頭状を呈し堅厚する。内面に棱を有する。内・外面とも丁寧に研磨され、内面の一部に赤彩の痕跡が残る。	北西端面 ・底面土層	P155

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部は表面貼付により肥厚して外側、口縁部はRし單範模文を縦方向に施文。	覆土中	TP156
3	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部は表面貼付により肥厚、内面に棱を有する。RL単範模文上に、垂直的な丸窓で文様掲出。	覆土中	TP157
4	縄文土器	浅鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	波状口縁で、波底部は外輪しながら突出。口縁部は模文で、内・外面は丁寧に研磨。	覆土中	TP158
5	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	暗褐色	普通	口縁部は黒帶で輪郭の区画文を形成。黒帯に沿って区画内に輪廊模文を施文。	覆土中	TP159
6	縄文土器	深鉢	石英・長石	明赤褐色	普通	V字状に黒帯を貼付し、黒帯模文を施文。朝那に輪廊模文を重複して文様掲出。	覆土中	TP160

### 第37号土坑（第48図）

位置 調査区西端部のB 2 g9区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 開口部は長径1.43m、短径1.34m、底部は長径0.85m、短径0.74mのほぼ円形である。深さは86cmで、底面はほぼ平坦である。壁はわずかに外傾して立ち上がり、円筒状を呈している。長径方向はN-36°-Wである。

覆土 5層に分層される。壁の崩落が確認され、レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

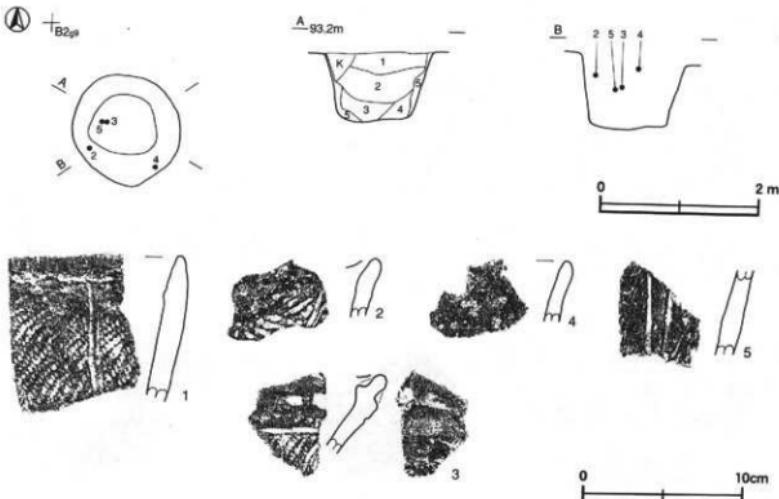
#### 土層解説

1	胎土	色	ロームブロック少量、後土粒子極微量
2	胎土	色	ロームブロック少量、炭化粒子極微量
3	胎土	色	ロームブロック中量、炭化粒子極微量

4	にぶい褐色	ロームブロック中量
5	にぶい褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片10点（口縁部片6、胴部片4）が出土している。すべて小破片で、ほとんどが中央部や西寄りの覆土中から出土している。第48図2・3・5は、覆土中層から出土したものである。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から、縄文時代後期前葉と考えられる。



第48図 第37号土坑・出土遺物実測図

第37号土坑出土遺物観察表 (第48図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にい・褐	普通	口唇部は鋭角的。LR單範縄文上に、手裁竹管による平行沈線が垂下。	覆土中	TP220
2	縄文土器	深鉢	石英・長石	褐	普通	底面部から口縁部に縦帶貼付。陰帯下部は、LR單範縄文を軸方向に施文。	西部覆土中層	TP221
3	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にい・褐	普通	口縁部は沈縫区画で無文帯形成。底面部内面に斜文文、軸部にLR單範縄文施文。	北西部覆土中層	TP222
4	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部片で、無文帯を形成。	南東部覆土中層	TP223
5	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にい・褐	普通	無文の崩壊部片で、2条1単位の沈縫を垂下。	北西部覆土中層	TP224

第109号土坑 (第49図)

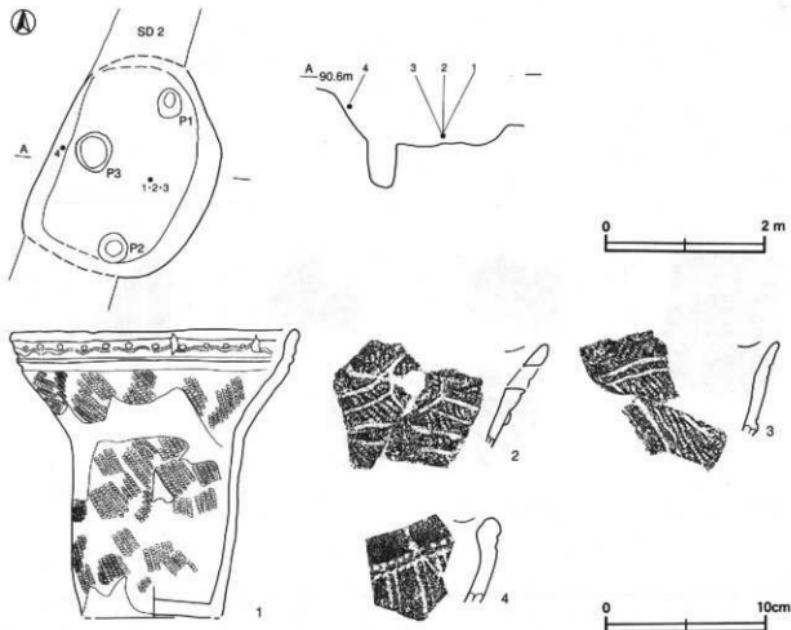
位置 調査区中央部のB 6 fs区に位置し、丘陵性台地の尾根部の平坦面に立地している。

重複関係 西側は、南北方向に走る第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 平面形は長径2.73m、短径2.06mの楕円形で、底部は長径2.50mと短径1.60mの楕円形と推定される。深さは54cmである。底面は皿状を呈し、ピットが壁際で、3か所検出された。P 1は北東側に位置し、径約35cm、深さ26cm、P 2は南側に位置し、径約38cm、深さ21cm、P 3は西側に位置し、径45cm、深さ56cmである。壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-22°-Eである。

遺物出土状況 縄文土器片21点(口縁部片9、胴部片10、底部片2)と、混入と考えられる土師器片4点が出士している。遺物のほとんどは、第2号溝による掘り込みを受けなかった東部寄りの覆土下層から出土している。第49図1は欠損した状態で、2・3の土器片とともに東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代中期中葉と考えられる。



第49図 第109号土坑・出土遺物実測図

第109号土坑出土遺物観察表 (第49図)

番号	種別	基盤	口径	器高	胎土	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	陶丸土器	深鉢	17.8	17.9	[8.6]	石英・長石・雲母	にいも模	普通	口縁部直下に、交差刺突による連續コ字状文と比較が施加。口縁下部から胴部は擦耗が著しいが、LR単筋縞文を堤方向に施文。底面は無文。	東部覆土下層	P109-106

番号	種別	基盤	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縞文土器	深鉢	石英・雲母	にいも模	普通	波頭部アリ貫通孔を有する。LR単筋縞文上に、2列1単位の曲屈的な沈溝文を施文。	東部覆土下層	TP164
3	縞文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にいも模	普通	口縁部直下と口縁部に、LR単筋縞文を施文。隣帶と波線で文様を構出。	東部覆土下層	TP165
4	縞文土器	浅鉢	石英・長石・雲母	にいも模	普通	口縁部は縦巻胎台により肥厚。口縁下部には、複数列の平行するキザミ目列を施文。	西部覆土中層	TP166

第117号土坑 (第50図)

位置 調査区の東部A 6 ; 7区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北東向き緩斜面に立地している。

重複関係 上面は、東西方向に走る第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は径1.50m、底部は径1.15mほどの円形である。深さは46cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がり、わずかに袋状を呈している。長径方向はN-82°-Eである。

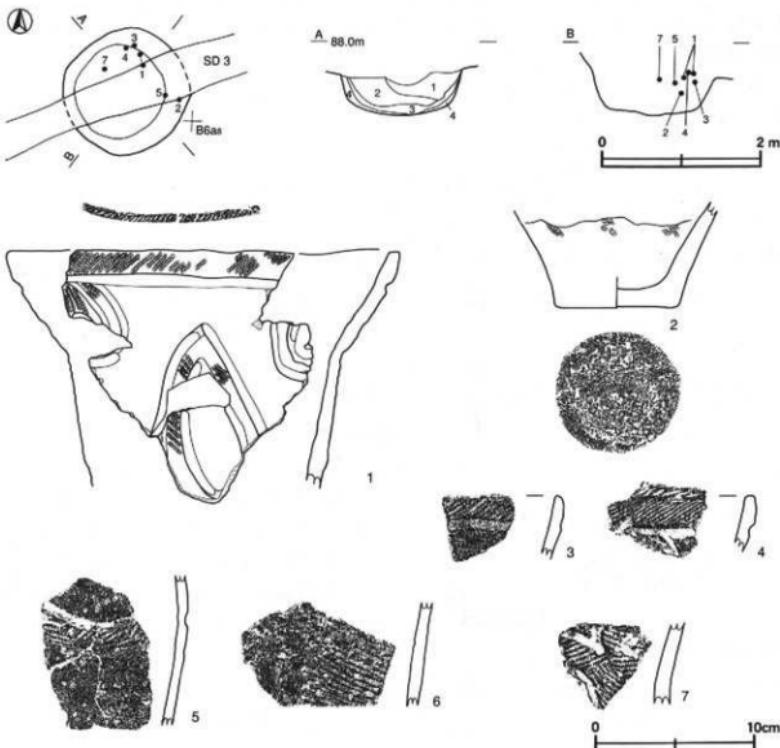
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	3 黒褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子微量、焼土粒子極微量	4 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 繩文土器片60点（口縁部27、胴部片31、底部片2）、剝片1点が出土している。遺物は小破片がほとんどで、主に北部から東部にかけての縫隙付近で確認された。第50図2・3・5は、覆土中層からの出土であり、覆土下層から底面上にかけての遺物出土は少ない。

所見 時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。



第50図 第117号土坑・出土遺物実測図

第117号土坑出土遺物観察表 (第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	胎土	釉土	色調	地威	手法の特徴	出土位置	備考
1	繩文土器	深鉢	[28.0]	[15.5]	—	石英・長石	に赤い帶	普通	口縁部は彰りの深い沈痕が周回し、口唇部直下にL字単節縄文を施す。腹部は、渦状及び指円状の沈痕区画と単節縄文の施文により文様を構成。	北部縫隙土壁上部	P56 3%
2	繩文土器	深鉢	—	[5.5]	7.5	石英・長石・黒母	に赤い帶	普通	地文にL字単節縄文を施す。胴部下層および底面は無文。	東部縫隙土壁	P56 3%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	縄文七器	深鉢	石英・長石	灰褐色	普通	口縁部に施された模様で火刷し。縄文部と表文斜形底。上部にL.R.單面繩文を施す。	北西部上中層	TP170
4	縄文土器	浅鉢	石英・長石・砂岩	灰褐色	普通	口縁部にR.L.單面繩文を施す。口縁部にL.R.單面繩文を施す。下部は丸底で文様焼成。	北西部上上層	TP171
5	縄文七器	深鉢	長石・雲母	灰褐色	普通	強度の沈進で曲線的な区画を行い、区画内に単品L.R.繩文を施す。	東部東上中層	TP172
6	縄文土器	深鉢	石英・長石	灰褐色	普通	L.R.平継繩文上に、なぞりによる横部前部を作り側面起縫が曲線的で綻び。	西上中	TP173
7	縄文土器	深鉢	石英・長石	灰褐色	普通	側面的な沈進区画をし、区画内にL.R.單面繩文を施す。縄文部と表文帶で文様焼成。	北西部上上層	TP174

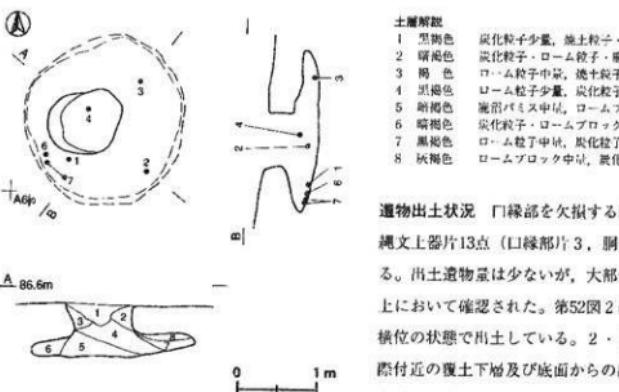
### 第120号土坑（第51・52図）

位置 調査区中央部や北寄りのA 6号区に位置し、丘陵性台地の北東斜面に立地している。

重複関係 北西部の底面は、第4号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径0.97m、短径0.84mの梢円形で、くびれ部はやや狭くなっている。底部は長径2.10m、短径2.01mの円形、深さは68cmである。底面は皿状で、壁はフラスコ状を呈している。長径方向はN-40°-Eである。

覆土 8層に分層される。全体的に褐色土を基調としている。ほとんどの層にロームブロックまたはローム粒子、炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示すことから、人為堆積と考えられる。



第51図 第120号土坑実測図

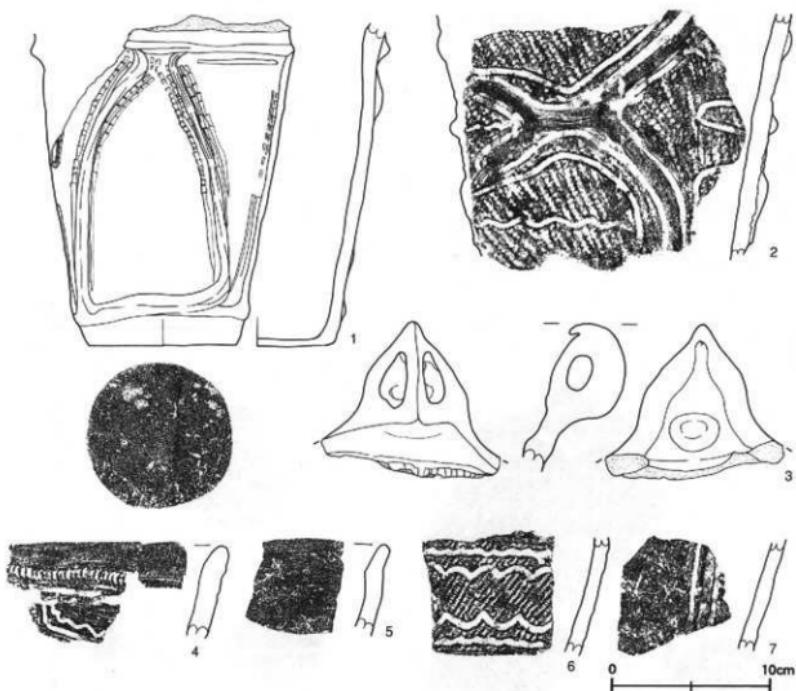
所見 時期は、出土土器と造構の形態から縄文時代中期中葉と考えられる。

土層解説	
1	黒褐色
2	暗褐色
3	褐色
4	黒褐色
5	暗褐色
6	暗褐色
7	黒褐色
8	灰褐色

遺物出土状況 口縁部を欠損する縄文土器の深鉢1点と縄文土器片13点（口縁部片3、胴部片10）が出土している。出土遺物量は少ないが、大部分が覆土下層から底面上において確認された。第52図2は、南西部の底面から横位の状態で出土している。2・6・7は、いずれも壁際付近の覆土下層及び底面からの出土である。これらの土器は、本跡の廃棄後に埋め戻される過程で、投棄されたものと推定される。

第120号土坑出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器色	口径	器高	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	墨体	-	9.0	石英・長石・砂岩	灰褐色	普通	周縁上端と下端に縦带を施し、直線的な横帯で連結させて、3単位の区画文を構成。縦帯に沿って半斜載骨を用意した平行する粘接圧縫文を施す。	南西部底面	西55m
2	縄文土器	墨体	-	13.0	-	墨色・石英粒子	褐	R.L.單面繩文上に曲線的な斜帶を施す。陳帝丸縫は腹部中央でX字状の模様。縫合沿用部に沈進文。さらに周縁部に沈進による蛇行文や波状文を施す。	南西部上層	北55m
3	表文土器	墨体	18.0	-	石英・長石	灰褐色	普通	波状の口縁部分。波頂部に環状の把手を有する。裏面の中央部はややくぼみ、先端部には削痕がなされている。口縁には爪形文を施す。	北西部上層	西55m



第52図 第120号土坑出土遺物実測図

番号	種別	器種	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	織文土器	深鉢	石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁に沿ってキザミ目列を施し、下部は曲線的な沈継により区画文を形成。	中央部覆土中層	TP177
5	織文土器	深鉢	石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部は外傾し、内側に様子有する。口縁部研磨。	覆土中	TP178
6	織文土器	深鉢	石英・長石	にぶい褐	普通	足し单面裏文地に、曲線の小さい波状沈継と向き合う連続状の沈継で文様捺出。	南西部底面	TP180
7	織文土器	深鉢	石英・雲母	にぶい褐	普通	底面を垂下させ、熱付部に沈継と結節沈継を沿わせて文様を構成。	南西部底面	TP181

### 第121号土坑（第53図）

位置 調査区中央部やや北寄りのA 6 i 0区に位置し、丘陵性台地の北東斜面に立地している。

規模と形状 開口部とくびれ部は、径0.8mほどの円形である。底部は長径1.53m、短径1.31mの楕円形で、深さは92cmである。底面は皿状で、壁はフラスコ状を呈している。長径方向はN-48°-Wである。

覆土 4層に分層される。全体的に褐色土を基調としている。各層にロームブロックまたはローム粒子、炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

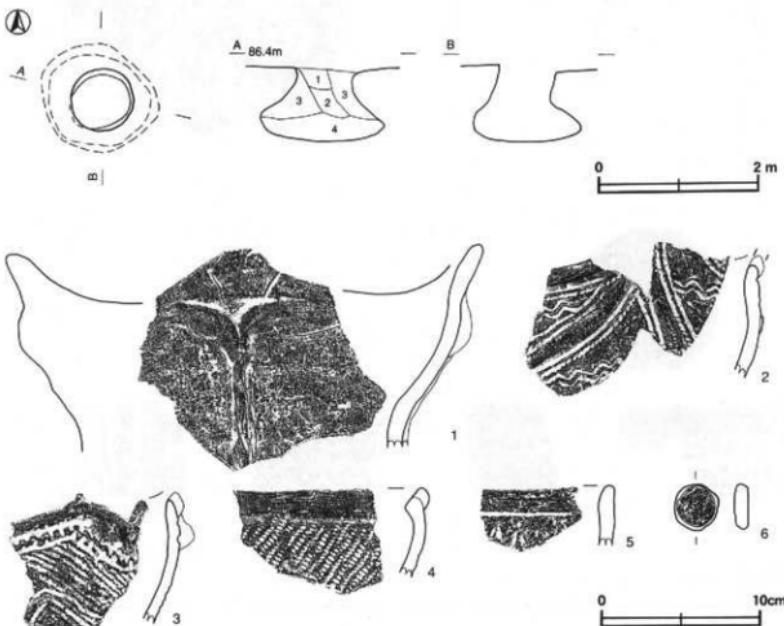
#### 土層解説

1 黒褐色 嫩土粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量  
2 黑褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子微量、炭化粒子微微量  
4 褐色 炭化粒子・ロームブロック・鹿沼バシス少量

遺物出土状況 縄文土器片22点（口縁部片14, 脊部片8), 土製品1点（土器片円盤）と、混入と考えられる弥生土器片と土師器片が、覆土上層から出土している。遺物は少なくすべて小片で、図示した土器はいずれも覆土中から出土したものである。

所見 時期は、出土土器と遺構の形態から、縄文時代中期中葉と考えられる。



第53図 第121号土坑・出土遺物実測図

第121号土坑出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	蓄高	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	12.2	11.5	—	長石・雲母	にふい青	普通 波渦底部にV字状の陰帯を施付し、陰帯を側部に累て垂下。口縁部は無文。	覆土中	P182 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	長石・雲母	灰	褐色	普通 波渦底部による区黄赤。胎内間に粗面沈継文がある。底面内中央には平行波状沈継文を施文。	覆土中	TP185
3	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にふい青	普通 波渦底部にV字状の陰帯を施付。口縁部に平行沈継文と交互斜交文。L字型凹窓文を施文。	覆土中	TP183	
4	縄文土器	深鉢	石英・雲母	にふい青	普通 口縁部に陰帯貼付。内面には棱を有する。R L単節縄文を施文。	覆土中	TP184	
5	縄文土器	深鉢	長石・石英	にふい青	普通 口縁に横位の粘着沈継文が周用。下部は唇面状に粘着沈継文を施文。	覆土中	TP186	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	土器片円盤	2.8	2.7	0.9	7.0	長石	明赤褐	普通 脚部片を素材。周縁を研磨。	覆土中	P182 5%	

### 第122号土坑（第54・55図）

**位置** 調査区中央部やや北寄りのA 6-10区に位置し、丘陵性台地の北東斜面に立地している。

**確認状況** 開口部北側は、調査区域外のため一部未調査である。くびれ部と底部は、全体の形状が捉えられた。

**規模と形状** 開口部は南東側にテラス状の広がりが見られるが、長径0.94m、短径0.83mの梢円形である。くびれ部はやや狭まり、底部は長径1.48m、短径1.29mの梢円形で、深さは90cmである。底面はほぼ平坦で、壁はフラスコ状を呈している。長径方向はN-11°-Wである。

**覆土** 8層に分層される。南側から北側に向かって流れ込み、レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

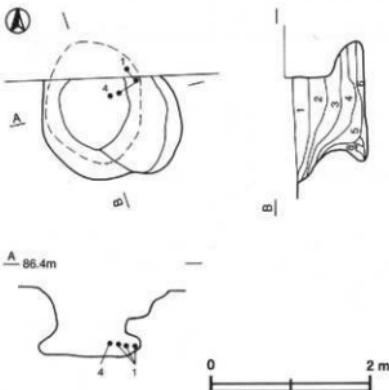
#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物極微量
2 黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量、燒土粒子極微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子極微量
4 灰褐色	炭化粒子・ロームブロック少量
5 黒褐色	ロームブロック中量、燒土粒子微量
6 黒褐色	ローム粒子・鹿沼バーミク少量
7 暗褐色	炭化粒子・ローム粒子少量
8 褐色	ロームブロック少量

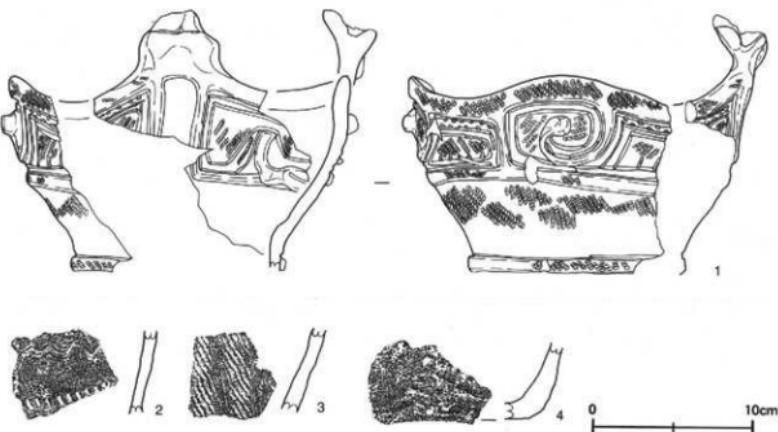
**遺物出土状況** 繩文土器片11点（口縁部片7、胴部片3、底部片1）が出土している。遺物は少なく小破片であり、主に覆土中層以下で確認された。

第55図1・4は、北東壁寄りの覆土下層から出土したものである。

**所見** 時期は、出土土器と遺構の形態から、繩文時代中期中葉と考えられる。



第54図 第122号土坑実測図



第55図 第122号土坑出土遺物実測図

第122号土坑出土遺物観察表（第55図）

番号	種別	器種	口径	器高	船土	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	埴文土器	盃形	20.8	13.2	-	石英・長石 に多い 骨渣	灰褐色	普通	4本足の直火。縁では、済渠と比較して厚め。1字径が直火は、「ちぎ」状に入りにくく下限した多 くを示す。背引形は土方型の形態で、背引部の底面部分には厚次の青釉貼付。表面は灰褐色で、底面は少し墨黒味で、全体的に墨黒味による墨黒味の字形と謂う文例出。底火は少し墨黒味で、墨引上にも残し て、	東北部櫛 上下層	P187 30%

番号	種別	器種	口径	器高	船土	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	陶文土器	深鉢	石英・雲母	黒	刷	普通	腹帶貼付による区分。貼付部にキザミ目列、器内面に成心の平行模様を施す。	覆土中	TP189		
3	陶文土器	深鉢	(石英・雲母)	黒	普通	なし	単線均文を範囲に施す。	覆土中	TP190		
4	陶文土器	浅鉢	(石英・雲母・鉄鉬)	にい褐色	普通	削平下唇と底面は無文。	中央部櫛 下層	TP191			

第141号土坑（第56～58図）

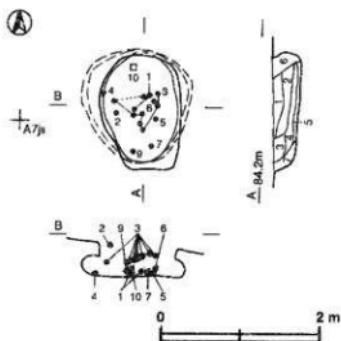
位置 調査区の東部A 7-18Kに位置し、丘陵性台地の先端部に近い平坦面に立地している。

規模と形状 開口部は長径1.35m、短径1.03m、底部は長径1.41m、短径1.23mの梢円形で、深さは38cmである。底面は平坦で、壁は袋状に内側して立ち上がっている。くびれ部の崩落により形状が整わないが、本来はフランク状を呈すると考えられる。長径方向はN-28°-Wである。

覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示していることから、人为堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	石	色	ロームブロック少量	被上枝子・炭化枝子微量	5	脱	色	ロームブロック少量	炭化枝子微量
2	泥	色	ローム枝子少量	被上枝子・炭化枝子微量	6	にい褐色	色	ロームブロック少量	
3	水	色	ロームブロック少量		7	明	褐色	ロームブロック多量	
4	土	色	被上枝子中	炭化枝子・ローム枝子少量					



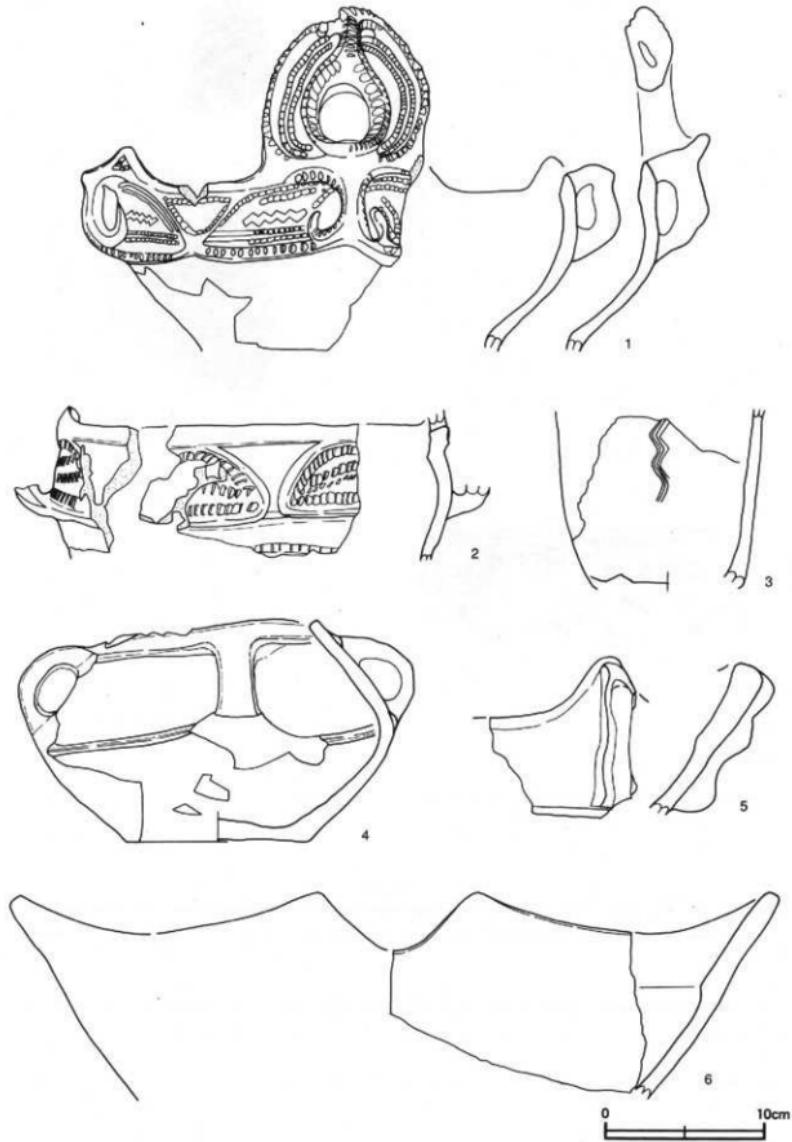
遺物出土状況 ほぼ完形に近い縄文土器の浅鉢2点と縄文土器片31点（口縁部片7、胴部片23、底部片1）、石器1点（磨石）、剝片2点が出土している。また、覆土上層からは混入と考えられる赤陶土器片と土器部片が確認された。形状をうかがえる遺物も比較的多く、第57図4・第58図7は覆土上層から、正位の状態で出土している。第57図1・第58図9は底面上、10は覆土下層から出土したものである。いずれも土坑の底面に伴って投棄されたものと推定される。

所見 時期は、出土土器と遺構の形態から縄文時代中期中葉と考えられる。

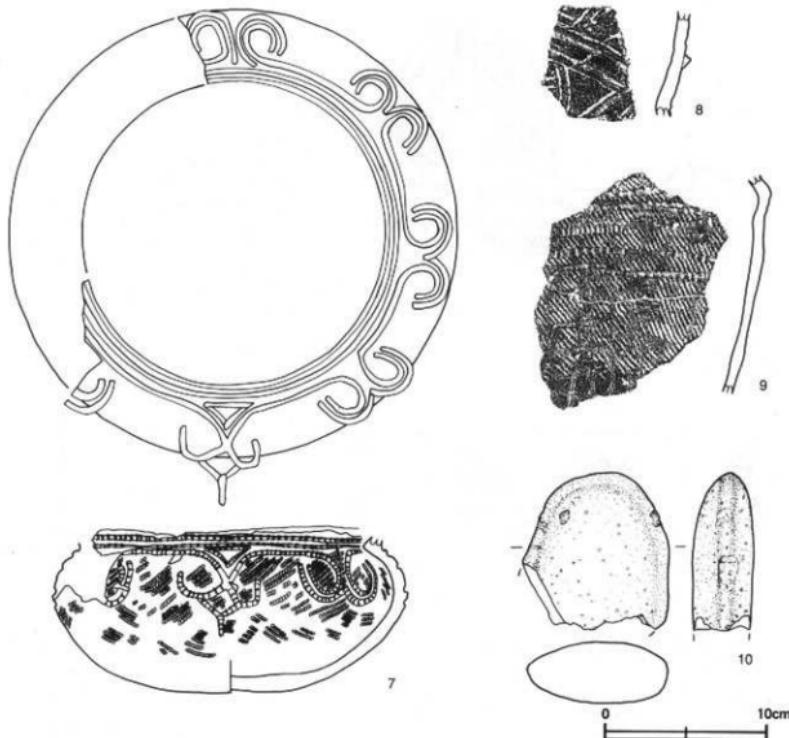
第56図 第141号土坑実測図

第141号土坑出土遺物観察表（第57・58図）

番号	種別	器種	口径	器高	船土	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	埴文土器	盃形	19.0	10.6	-	石英・雲母	褐	普通	4本足の直火。縁には墨黒味を帯び、うち1字径の底面に墨黒味を有する。丁字足は器身にこぼれ落ちる形態で、等高部にはキザミ目列を有し、長径内には網状泥文と成心の平行模様を施す。	中央部櫛 下層	P185 9%
2	埴文土器	深鉢	-	19.5	-	長石・雲母	にい褐色	普通	縁には墨黒味を有し、内部に修復を示す。裏部折唇を欠くが、裏部の把手を舟舟、口縁は盤唇型にあり沿岸形の底面を行かない。柄付部と口縁内にキザミ目列を有す。	西南部櫛 土上層	P186
3	埴文土器	深鉢	-	19.0	9.0	砂質	普通	底面周囲を欠損。底縁の垂直線を重ねる。胴部下端は墨黒味を有す。	西南部櫛 土上層	P187 30%	
4	埴文土器	瓦鉢	15.3	13.7	11.3	石英・雲母	二輪軸	普通	底面周囲を欠損。口縁部と胴部中央に底面を凹凸させ、底面の横断面をU字形とする。口縁部と底面に墨黒味を有す。	西南部櫛 土上層	P188 6%
5	埴文土器	浅鉢	3.9	-	3.8	砂質	褐	普通	内壁に接する柱を有し、丸窓から口縁にかけて輪状の墨黒味を有す。縁状の脚部の2部に、押打により複数に作成。1脚は無底、無支。	西南部櫛 土上層	P189 2%



第57図 第141号土坑出土遺物実測図（1）



第58図 第141号上坑出土遺物実測図（2）

番号	種別	器種	口径	器高	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
6	萬文土器	浅鉢	46.6	12.7	—	石英・雲母	において	普通	口縁部は波状を呈し、波頂部は双頭状と考えられる。内面には横溝を有する。内・外表面ともに丁寧な研磨。	中央墳丘下層 P106 36	
7	萬文土器	浅鉢	—	10.2	6.2	石英・長石・雲母	橙	普通	口唇直下に2列の結節沈線文が周回。胴部には結節沈線文による単位構成の文様が展開。7単位は向きの異なる渦巻文をX字状に配し、1単位は幾何学的文様。底文はL.R.単節繩文を施す。	東北側土・層 P107 36	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	萬文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	縫合による区画を行ない、縫合付近と区画内に曲線的な結節沈線文を施す。	覆土中	TP203
9	萬文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	R.L.単節繩文上に、横位および蛇行する結節沈線文を施す。	南部底面	TP202

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	手法の特徴	出土位置	備考
10	磨石	12.8	11.9	5.1	(1,060)	安山岩	表面面、側面研磨に使用。	北部覆土下層 QK33 PLA1	

## ② 陥し穴

### 第20号土坑（第59図）

位置 調査区西端部のC 2 b3区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

規模と形状 長径1.40m、短径1.30mの円形で、深さは86cmである。壁は直立し、底面は平坦である。長径方向はN-38°-Eである。

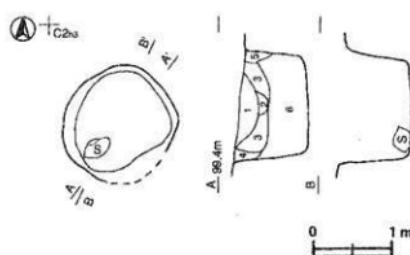
覆土 6層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色	炭化沙子・ロームブロック少量、 焼土粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子 少量、焼土粒子微量
4 黑褐色	ローム粒子少量、炭化粒子少量
5 黑褐色	ロームブロック少量
6 黑褐色	ロームブロック少、焼土粒子・ 炭化粒子微量

遺物出土状況 底面上で人頭大の自然縛が確認された。被熱痕を有し、一部赤変している。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第59図 第20号土坑実測図

#### 第42号土坑（第60図）

位置 調査区西端部のB 2-6区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.60m、短径0.97mの長径円形で、深さは108cmである。壁は直立している。断面形はU字状で、底面は平坦である。底面中央部には、逆木本を立てたと考えられるビットが、1か所検出された。長径方向はN-38°-Eである。

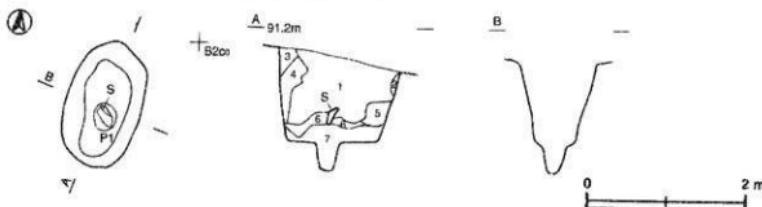
覆土 7層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック多い、焼土粒子微量	3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 黑褐色	ロームブロック微量	6 黑褐色	ローム粒子少量
3 黑褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	7 黑褐色	ロームブロック、泥炭バミス少量

遺物出土状況 覆土下層で自然縛が確認された。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第60図 第42号土坑実測図

#### 第45号土坑（第61図）

位置 調査区西端部のB 2-6区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

**規模と形状** 長径2.13m、短径1.75mの長梢円形で、深さは110cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。底面には、逆茂木を立てたと考えられるピットが、2か所検出された。長径方向はN-56°-Wである。

**覆土** 7層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

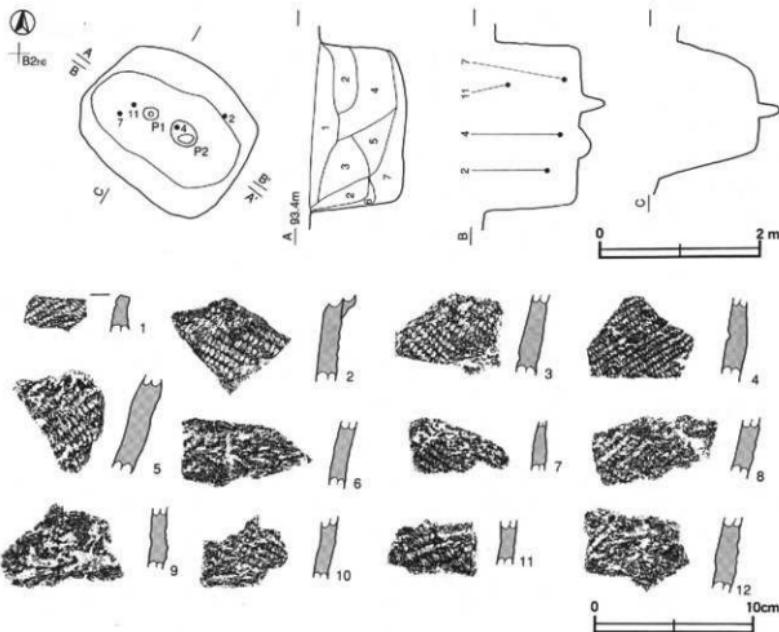
#### 土層解説

1 黒 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒 暗色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 黒 暗色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	6 暗 暗色	ロームブロック中量
3 黒 暗色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗 色	ロームブロック多量

4 黒 暗色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 縄文土器片25点（口縁部片1、胴部片24）が出土している。すべて小破片であり、中央部の覆土中層から下層にかけて出土したものである。また、わずかに自然疊も確認されている。

**所見** 時期は、出土遺物と造構の形態から、縄文時代前期前半以前と考えられる。



第61図 第45号土坑・出土遺物実測図

第45号土坑出土遺物観察表（第61図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	長石・織維	黒 暗	普通	口縁部は角張り。口縁部直下からR.L.單面縄文を横方向に施文。	覆土中	TP204
2	縄文土器	深鉢	長石・織維	黒 暗	普通	横位に纏帯貼付。R.L.單面縄文を横方向に施文。	北東基盤下層	TP205
3	縄文土器	深鉢	長石・石英・織維	暗	普通	R.L.單面縄文を縦方向に施文。	覆土中	TP206

番号	種別	器種	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	管考
4	縄文土器	深鉢	長石・石英・鐵鐵	黒	普通	L R 単節縄文を斜め方向に施す。	中央部覆土下層	TP207
5	縄文土器	深鉢	長石・雲母・鐵鐵	黒	普通	L R 単節縄文を斜め方向に施す。	覆土中	TP208
6	縄文土器	深鉢	長石・石英・鐵鐵	明	普通	R L 単節縄文を横方向に施す。	覆土中	TP209
7	縄文土器	深鉢	長石・石英・鐵鐵	赤	滑	R L 単節縄文を横方向に施す。	北西部覆土下層	TP215
8	縄文土器	深鉢	長石・鐵鐵	黒	普通	R L 単節縄文を横方向に施す。羽状構成。	覆土中	TP211
9	縄文土器	深鉢	長石・石英・鐵鐵	明	普通	L R 単節縄文を横方向に施す。	覆土中	TP212
10	縄文土器	深鉢	長石・鐵鐵	黒	普通	R L 単節縄文を横方向に施す。	覆土中	TP214
11	縄文土器	深鉢	長石・石英・鐵鐵	明	滑	R L 単節縄文を斜め方向に施す。	北西部覆土上層	TP213
12	縄文土器	深鉢	長石・鐵鐵	明	普通	R L 単節縄文を横方向に施す。	覆土中	TP210

### 第50号土坑（第62図）

位置 調査区西端部のB 2 g区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.30m、短径0.86mの長楕円形で、深さは90cmである。壁はほぼ直立している。短径方向の断面形はU字状で、底面は平坦である。底面中央部には、逆茂木を立てたと考えられるピットが、1か所検出された。長径方向はN-53°-Eである。

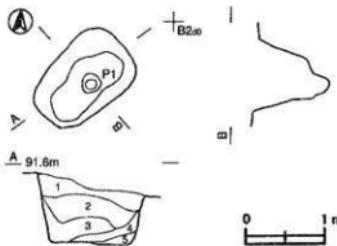
覆土 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示すことから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、燒土粒子極微量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子極微量
- 3 噴褐色 ロームブロック中量、灰化粘土極微量
- 4 斑褐色 ロームブロック多量
- 5 褐褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

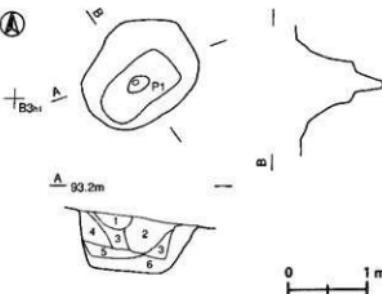


第62図 第50号土坑実測図

### 第52号土坑（第63図）

位置 調査区西端部のB 3 g区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.56m、短径1.24mの不整規円形で、深さは102cmである。壁はやや外傾して立ち上がっている。短径方向の断面形はU字状で、底面は平坦である。底面中央部には、逆茂木を立てたと考えられるピットが、1か所検出された。長径方向はN-40°-Eである。



第63図 第52号土坑実測図

覆土 6層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 にぼい褐色	ロームブロック中量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 灰褐色	ローム粒子中量、鹿沼バシス微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	6 明褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

第56号土坑（第64図）

位置 調査区西部のB 3-3区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.67m、短径1.31mの楕円形で、深さは88cmである。壁はほぼ直立している。開口部にはテラス状の広がりを持ち、長径方向の底面付近ではやや袋状を呈している。底面は平坦である。長径方向はN-E 36°-Eである。

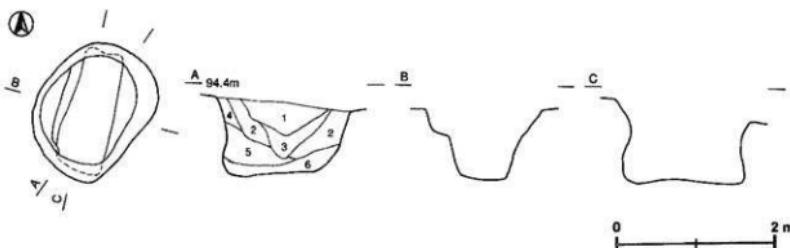
覆土 6層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 灰褐色	ロームブロック・ローム粒子中量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	6 にぼい褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第64図 第56号土坑実測図

第59号土坑（第65図）

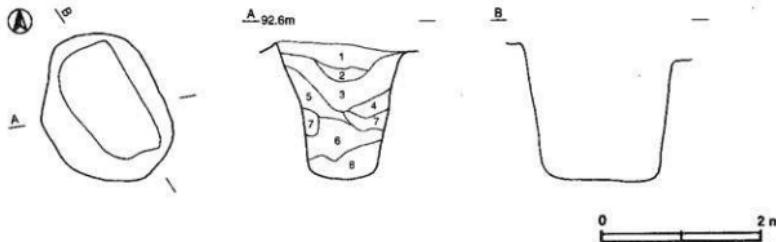
位置 調査区西部のB 3-2区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.96m、短径1.45mの長楕円形で、深さは174cmである。壁は直立している。短径方向の断面形はU字状で、底面は平坦である。長径方向はN-32°-Wである。

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	鹿沼バシス多量、ローム粒子少量、炭化物極微量	5 黒褐色	ローム粒子多量
2 黑褐色	ローム粒子微量、炭化物・鹿沼バシス極微量	6 黒褐色	ローム粒子中量、炭化物極微量
3 黑褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	7 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
4 黑褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	8 明褐色	ローム粒子少量、鹿沼バシス微量



第65図 第59号土坑実測図

遺物出土状況 網文土器片20点（胴部片20）、剥片1点が覆土上層から出土している。いずれも縄片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器と遺構の形態から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

#### 第60号土坑（第66図）

位置 調査区西部のB 3 12区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 平面形は、長径2.14m、短径1.16mの不整規円形である。壁は外傾して立ち上がりっているが、ほとんどは流失したものと考えられ、深さは最大18cmである。底面は皿状を呈しており、中央部には逆茂木を立てたと考えられるビットが、2か所確認された。長径方向はN-52°-Eである。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を

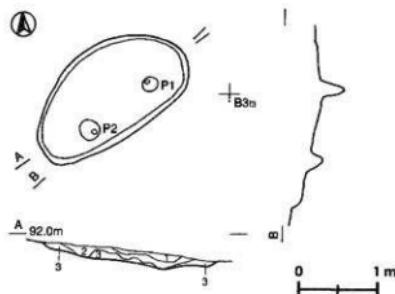
示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説	
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化粒 子極微量
2 黄褐色	ローム粒子少量、炭化粒子極微量
3 暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 壁のはほとんどを流失して深さは浅いが、ビットの配置と遺構の形態から陥し穴と判断する。

時期は、形態から縄文時代と考えられる。

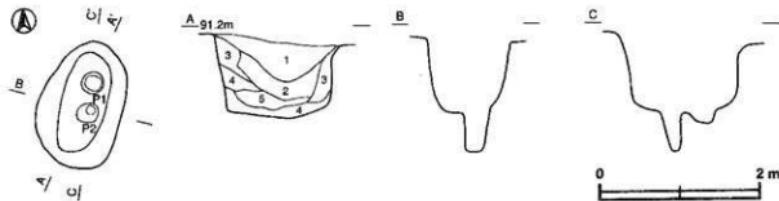


第66図 第60号土坑実測図

#### 第61号土坑（第67図）

位置 調査区西端部のB 3 13区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.60m、短径1.04mの長楕円形で、深さは90cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。底面中央部とやや北寄りには、逆茂木を立てたと考えられるビットが、2か所確認された。長径方向はN-5°-Eである。



第67図 第61号土坑実測図

覆土 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量
3 極暗褐色	ロームブロック微量

4 暗褐色	ロームブロック少量
5 暗褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

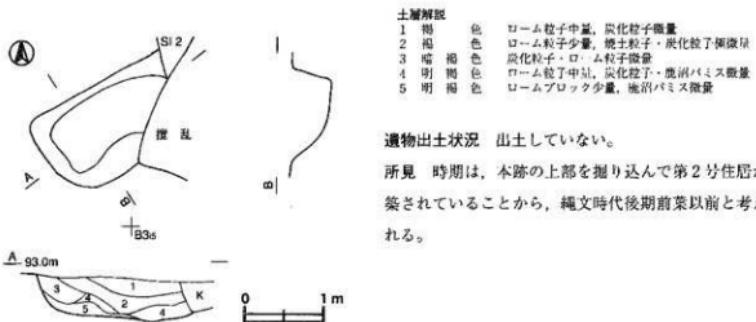
第66号土坑（第68図）

位置 調査区西部のB 3 h4区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

重複関係 北東側の上層部は、第2号住居に掘り込まれている。さらに、南東側の一部は風倒木痕による搅乱を受けている。

規模と形状 推定長径約2.20m、短径1.12mの長辯円形で、深さは48cmである。壁はやや外傾して立ち上がり、底面は平坦である。長径方向はN-58°-Eである。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。



第68図 第66号土坑実測図

第69号土坑（第69図）

位置 調査区西部のC 3 a6区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

**規模と形状** 長径0.82m, 短径0.62mの長楕円形で、深さは76cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。底面に逆茂木を立てたと考えられるピットが、1か所確認された。長径方向はN-17°-Wである。

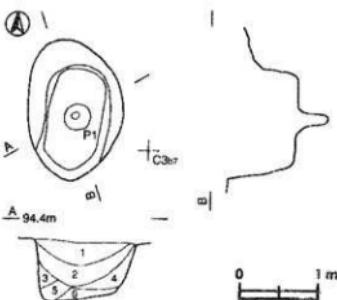
**覆土** 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

1 黒褐色	炭化粒子・ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子極微量
3 明褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子極微量
5 深褐色	ロームブロック少量
6 褐色	ローム粒子多量

**遺物出土状況** 覆土中層から下層にかけて、こぶし大以下の自然礫が約90点確認された。自然礫の大部分は、被熱の痕跡を有しており、本跡の埋没過程で、投棄されたものと推定される。

**所見** 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第69図 第69号土坑実測図

**第71号土坑（第70図）**

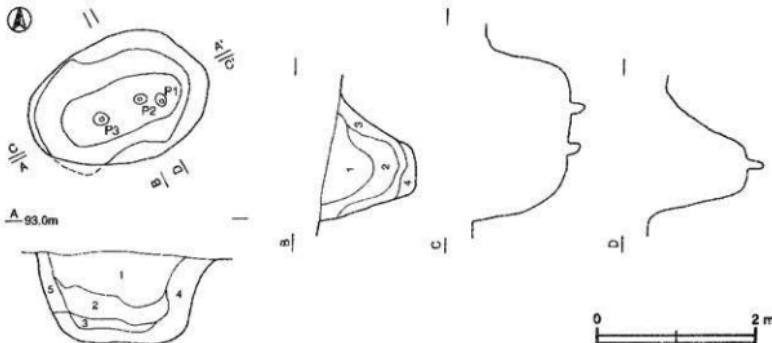
**位置** 調査区西部のB3+7区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

**規模と形状** 長径2.28m, 短径1.62mの長楕円形で、深さは111cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。短径方向の断面形状は、U字状を呈している。底面中央部には、逆茂木を立てたと考えられるピットが、3か所確認された。長径方向はN-63°-Eである。

**覆土** 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

1 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
3 深褐色	ロームブロック中量



第70図 第71号土坑実測図

**遺物出土状況** 覆土中層から底面付近で、自然縛3点が出土している。本跡の埋没過程で、投棄されたものと推定される。

**所見** 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

#### 第72号土坑（第71図）

**位置** 調査区西部のB 3 g7区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

**規模と形状** 長径1.42m、短径1.12mの長楕円形で、深さは110cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

短径方向の断面形状は、U字状を呈している。底面中央部には、逆茂木を立てたと考えられるピットが、1か所確認された。長径方向はN-22°-Eである。

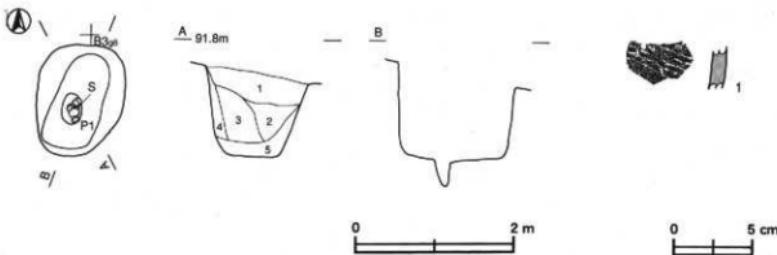
**覆土** 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	にぶい褐色	ロームブロック中量
2	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化粒子極微量	5	にぶい褐色	ローム粒子多量
3	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量			

**遺物出土状況** 第71図1の縄文土器片1点が、覆土中から出土している。また、覆土中層から底面付近で、こぶし大から人頭大の自然縛3点が確認された。

**所見** 時期は、出土土器と遺構の形態から、縄文時代早期後葉以前と考えられる。



第71図 第72号土坑・出土遺物実測図

第72号土坑出土遺物観察表（第71図）

番号	種別	器種	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	長石・雲母・磁鐵	灰褐	普通	貝殻条痕を斜め方向に施す。	覆土中	TPP216

#### 第78号土坑（第72図）

**位置** 調査区西部のB 3 g9区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

**規模と形状** 長径1.86m、短径1.35mの不整楕円形で、深さは86cmである。壁はほぼ直立し、開口部の北東側は緩やかに外傾している。底面は平坦で、中央部には逆茂木を立てたと考えられるピットが、1か所確認された。長径方向はN-50°-Eである。

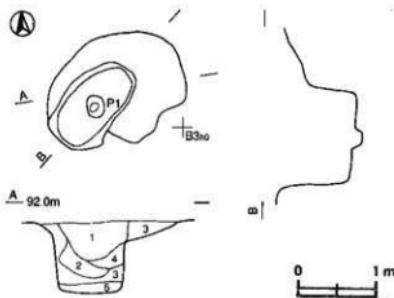
**覆土** 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

1	黒褐色	ロームブロック微量
2	黒褐色	ローム粒子少量
3	褐色	ロームブロック少量
4	褐色	ローム粒子微量
5	褐色	ロームブロック極微量

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第72図 第78号土坑実測図

**第79号土坑 (第73図)**

**位置** 調査区西部のB 3+8区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

**規模と形状** 長径2.20m、短径1.58mの不整規円形で、深さは70cmである。壁はほぼ直立し、開口部では緩やかに外傾している。底面は平坦で、中央部には逆茂木を立てたと考えられるピットが、1か所確認された。長径方向はN-50°-Wである。

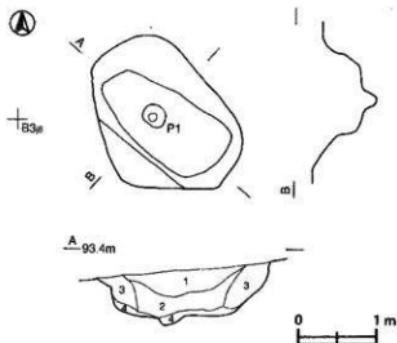
**覆土** 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

1	黒褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量
3	灰褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4	褐色	ロームブロック中量

**遺物出土状況** 覆土中層において、自然発生点が確認された。

**所見** 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



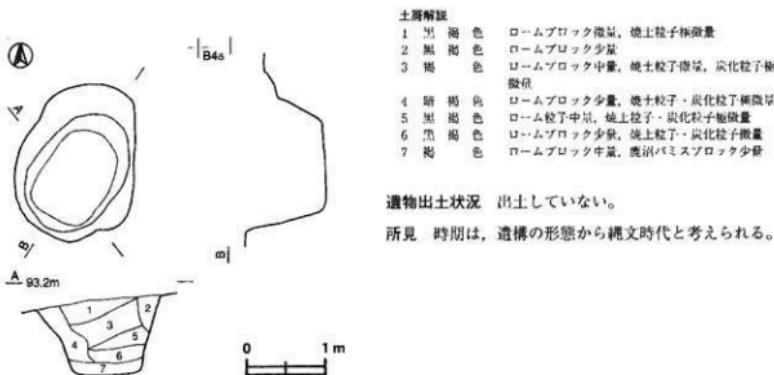
第73図 第79号土坑実測図

**第83号土坑 (第74図)**

**位置** 調査区西部のB 4+4区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

**規模と形状** 長径1.97m、短径1.53mの不整規円形で、深さは93cmである。壁はやや外傾して立ち上がり、底面は平坦である。長径方向はN-20°-Eである。

覆土 7層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。



第74図 第83号土坑実測図

#### 第85号土坑（第75図）

位置 調査区西部のB 4 hs区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

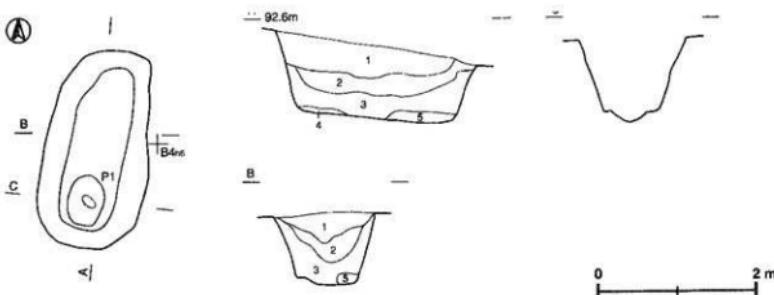
規模と形状 長径2.48m、短径1.35mの長楕円形で、深さは98cmである。壁はほぼ直立し、短径方向の断面形は、逆台形を呈している。底面は平坦で、中央部には逆茂木を立てたと考えられるピットが、1か所確認された。長径方向はN-10°-Eである。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説			
1 黒褐色	ローム粒子少量、燒土粒子極微量	4 褐褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子中量	5 褐褐色	ロームブロック微量
3 褐色	ロームブロック中量、燒土粒子微量、炭化粒子極微量		

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺構の形態から、縄文時代と考えられる。



第75図 第85号土坑実測図

### 第90号土坑（第76図）

位置 洞庭区西部のB 4 14区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

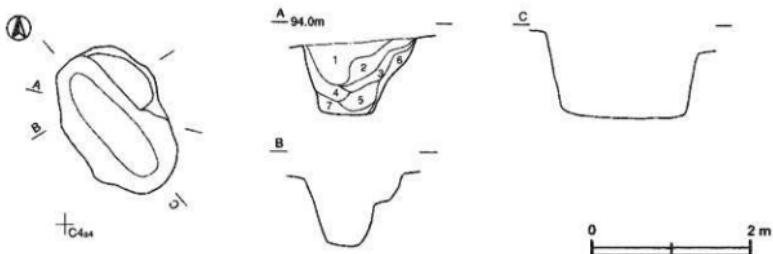
規模と形状 長径1.94m、短径1.32mの長楕円形で、深さは95cmである。壁はほぼ直立している。短径方向の断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。長径方向はN-42°-Wである。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック微量
2 黄褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	6 棕褐色	ローム粒子多量
3 黄褐色	ローム粒子中量	7 黑褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量
4 暗褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 出土していない。



第76図 第90号土坑実測図

所見 時期は、造構の形態から縄文時代と考えられる。

### 第93号土坑（第77図）

位置 調査区西部のB 4 16区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.41m、短径0.92mの長楕円形で、深さは64cmである。壁はほぼ直立している。短径方向の断面形は逆台形状で、底面は平坦である。長径方向はN-4°-Wである。

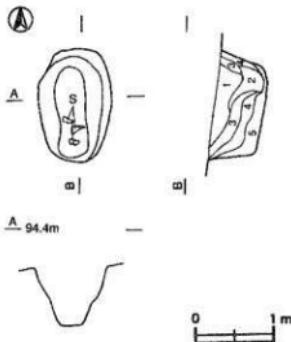
覆土 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量
4 棕褐色	ロームブロック少量
5 黑褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 底面上において、自然発生点が確認された。

所見 時期は、造構の形態から縄文時代と考えられる。



第77図 第93号土坑実測図

### 第101号土坑（第78図）

位置 調査区中央部のB 5 g2区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.80m、短径0.80mの長楕円形で、深さは48cmである。壁はほぼ直立している。短径方向の断面形はU字状で、底面は平坦である。長径方向はN-5°-Eである。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

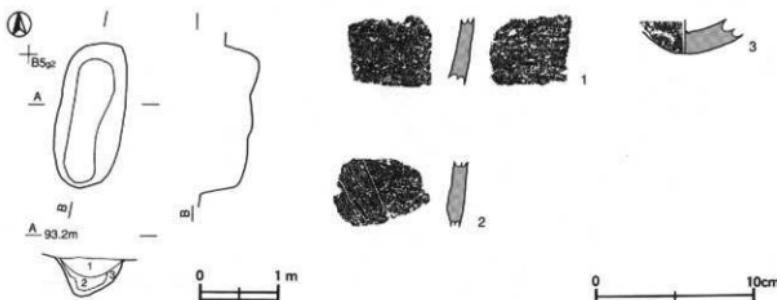
#### 土層解説

1	黒褐色	ローム粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量

3	褐色	ロームブロック少量
---	----	-----------

遺物出土状況 繩文土器片6点（胴部片5点、底部片1）、剥片5点と、混入と考えられる土師器片が覆土上層から出土している。第78図1-3は細片であり、いずれも覆土中から出土したものである。

所見 時期は、出土土器と遺構の形態から、縄文時代早期後葉以前と考えられる。



第78図 第101号土坑・出土遺物実測図

### 第101号土坑出土遺物観察表（第78図）

番号	種別	器種	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	長石・雲母・磁鐵	にぶい褐	普通	表裏両面に貝殻条痕を横方向に施文。密着が著しい。	覆土中	TP217
2	縄文土器	深鉢	長石・雲母・磁鐵	にぶい褐	普通	細密な条痕文を斜め方向に施文。	覆土中	TP218
3	縄文土器	深鉢	長石・赤玉子・磁鐵	にぶい褐	普通	尖底部片。無文。	覆土中	TP219

### 第110号土坑（第79図）

位置 調査区南東部のB 6 f7区に位置し、丘陵性台地の南東斜面部に立地している。

規模と形状 長径1.97m、短径1.53mの長楕円形で、深さは86cmである。壁はほぼ直立している。短径方向の断面形は逆台形状で、底面は平坦である。長径方向はN-40°-Wである。

覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

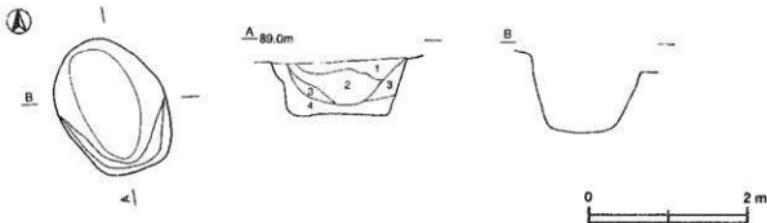
#### 土層解説

1	褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子少量

3	褐色	ローム粒子少量、鹿沼バミス微量
4	明褐色	鹿沼バミス中量、ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第79図 第110号土坑実測図

#### 第115号土坑（第80図）

位置 調査区北東部のA 6-15区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径2.16m、短径1.24mの長楕円形で、深さは96cmである。壁はほぼ直立している。短径方向の断面形はU字状で、底面は平坦である。長径方向はN-24°-Eである。

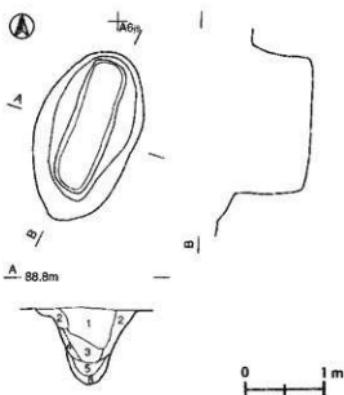
覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・鹿沼バミス板微量
2 灰褐色	ローム粒子中量、鹿沼バミス板微量
3 黑褐色	ロームブロック・鹿沼バミス板微量
4 灰褐色	ローム粒子中量
5 灰褐色	ローム粒子少量、鹿沼バミス板微量
6 黄褐色	ロームブロック・鹿沼バミス板微量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第80図 第115号土坑実測図

#### ③ その他の土坑

遺構の形態や遺物の出土状況から、明確に貯蔵穴または陥落穴と判断できない土坑を、その他の土坑とした。11坑の解説は遺物の出土状況が良好なものについて行い、それ以外は一覧表に記載した。

#### 第74号土坑（第81図）

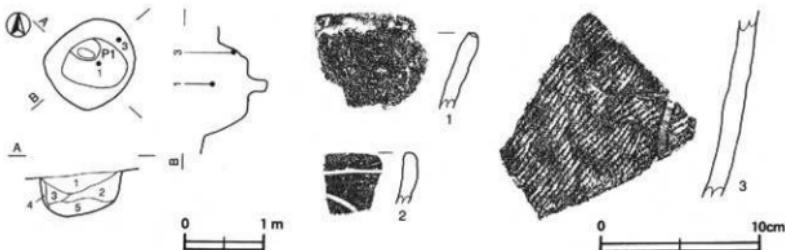
位置 調査区西部のB 3-15区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.12m、短径1.04mの円形で、深さは54cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がりっている。また、底面の北部寄りには、ピットが1か所確認された。長径方向はN-19°-Eである。

覆土 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量、燒土粒子微量
2 灰褐色	ロームブロック微量、炭化粒子微量
3 黄褐色	ローム粒子少量、炭化粒子少少、燒土粒子微量



第81図 第74号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片6点（口縁部片2、胴部片4）と、混入と考えられる土師器片3点が出土している。すべて小破片で、第81図1は覆土中層から、3は北東壁際の底面付近から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉と考えられる。

第74号土坑出土遺物観察表（第81図）

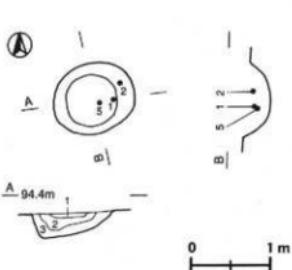
番号	種別	部様	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	礫・石・粘土	明黄褐	普通	口唇部にキザミ施文。口縁は無文帶を形成。	中央部覆土中層	TP225
2	縄文土器	深鉢	長石・雲母	褐	普通	口唇部直下に沈線が周回。下方に曲線的な沈線施文。	覆土中	TP226
3	縄文土器	深鉢	長石・雲母	橙	普通	L R 単節縄文上に、曲線的な沈線を施文。	北東壁際底面	TP227

第88号土坑（第82・83図）

位置 調査区西部のC4 a4区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.00m、短径0.91mの円形で、深さは30cmである。底面は皿状を呈し、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がっている。長径方向はN-61°-Eである。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

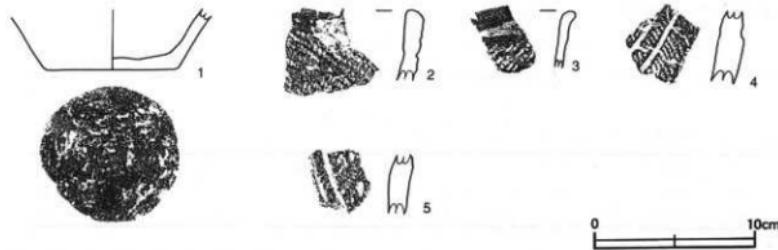


第82図 第88号土坑実測図

土層解説		
1	暗	褐色
2	暗	褐色
3	褐	褐色
		ローム粒子・炭化粒子微量
		ローム粒子少量
		ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片22点（口縁部片2、胴部片19、底部片1）と、混入と考えられる弥生土器片1点、土師器片4点が出土している。すべて小破片であり、中央部やや東寄りの覆土中層から下層で出土している。第83図1・2は覆土中層から、5は覆土下層からの出土である。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉と考えられる。



第83図 第88号土坑出土遺物実測図

第88号土坑出土遺物観察表 (第83図)

番号	種別	器種	口径	器高	胎土	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	圓土器	深鉢	—	(3.7)	8.1	石英・長石・雲母 少量	にせい質	普通	腹部下端と底面無文。	東部腹上中層	PZ28 TP28
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	粗	普通	口唇部下からR.L.單節縄文を横方向に施す。	北東部腹土中層	TP229			
3	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にせい質	普通	口唇部は肥厚して外反。口縁にR.L.單節縄文を施す。	腹土中	TP230			
4	縄文土器	深鉢	長石・雲母	粗	普通	R.L.單節縄文上に、曲線的な平行沈線と列点文により文様を描出。	腹土中	TP231			
5	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	粗	普通	單節縄文を施し、曲線的な平行沈線と列点文により文様を描出。	中央部腹土下層	TP232			

第92号土坑 (第84図)

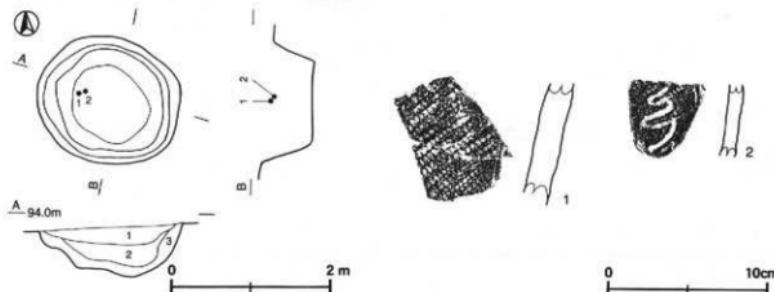
位置 調査区西部のB 4 j4区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.80m、短径1.57mの楕円形で、深さは54cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-60°-Wである。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量 3 開色 ロームブロック少量  
2 灰褐色 ロームブロック微量、炭化粒子極微量



第84図 第92号土坑、出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片5点(胴部片)と、混入と考えられる土師器片2点が出土している。遺物はわずかで、すべて小破片である。第84図1・2は、ほぼ中央部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉と考えられる。

第92号土坑出土遺物観察表 (第84図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	灰・灰・絶縁	明黄褐	普通	R L单館縄文上に、平行沈線文を垂下。	中央部覆土上層	TP233
2	縄文土器	深鉢	長石・雲母	橙	普通	葉手状の沈線文により文様を構成。	中央部覆土上層	TP234

第102号土坑 (第85図)

位置 調査区中央部のC 4 a9区に位置し、丘陵性台地の尾根部の平坦面に立地している。

規模と形状 長径1.54m、短径1.52mの円形で、深さは62cmである。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がりっている。長径方向はN-40°-Eである。

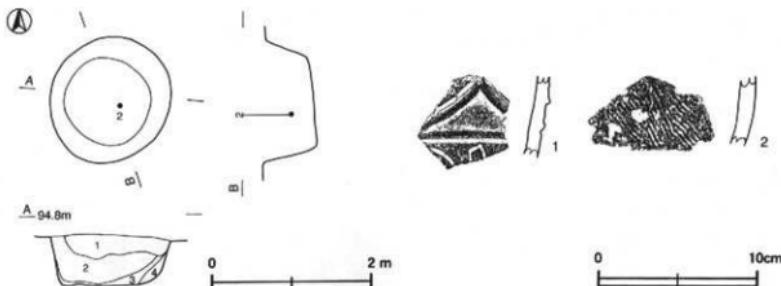
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子極微量	3	灰褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	ローム粒子・燒泥バミス少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	4	にぶい褐色	ローム粒子中量、焼泥バミス少量

遺物出土状況 縄文土器片8点(胴部片)、剥片1点と、混入と考えられる弥生土器片10点、土師器片9点が出土している。すべて小破片であり、中央部の覆土中層から下層における出土である。また、自然隕2点も確認されている。第85図2は、中央部覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代中期中葉と考えられる。



第85図 第102号土坑・出土遺物実測図

第102号土坑出土遺物観察表 (第85図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	段階による区画文を構成。縫合に沈線を沿わせ。肩部も沈線文により文様抽出。	覆土中	TP162
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	Rの無鉢縄文を縱方向に施す。	中央部覆土中層	TP161

### 第127号土坑（第86図）

位置 調査区東部のB 6 c 0区に位置し、丘陵性台地の尾根部の緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.76m、短径1.64mの円形で、深さは72cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上っている。長径方向はN-0°である。

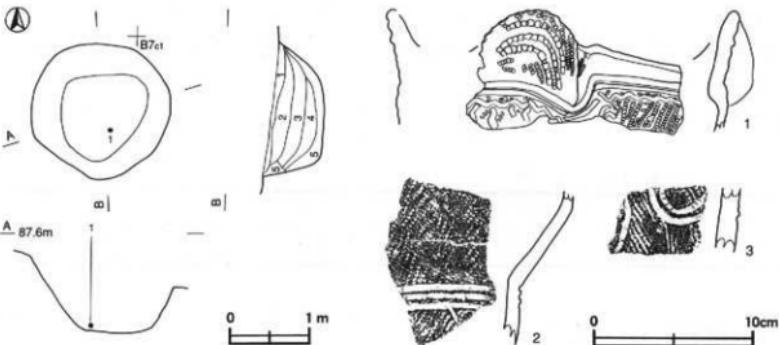
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	4	灰褐色	ロームブロック少量
2	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子極微量	5	にぶい褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			

遺物出土状況 純文土器片11点（口縁部片7、胴部片4）が出土している。すべて小破片であり、覆土中層から下層における出土である。また、覆土中層からはわずかに自然疊も確認されている。第86図1は中央部底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から純文時代中期中葉と考えられる。



第86図 第127号土坑・出土遺物実測図

### 第127号土坑出土遺物観察表（第86図）

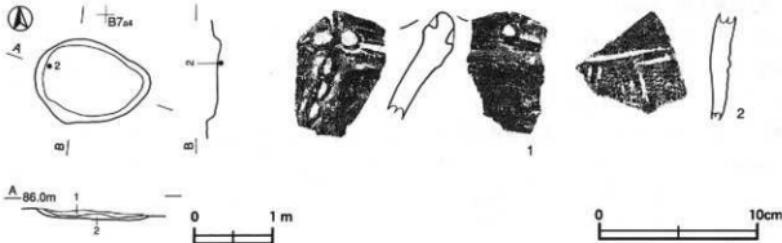
番号	種別	器種	口径	器高	始土	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	純文土器	深鉢	(23.5)	(7.0)	-	石英・雲母	橙	普通	輪唇より眉状の把手を作出。把手部口唇はキザミを加え、把手内はR L 単筋縄文上に列の結節沈線文施文。口縁部はS R 単筋縄文上に、平行沈線と眉状の沈線施文。	中央部底面	TP2 56

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	純文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	腹部筋曲。R L 単筋縄文上に、3列の平行沈線文を施回。	南部覆土中	TP193
3	純文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	L R 単筋縄文上に、曲線的な沈線と結節沈線で文様構成。	南部覆土中	TP194

### 第129号土坑（第87図）

位置 調査区東部のB 7 a 3区に位置し、丘陵性台地の尾根部の緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.43m、短径1.06mの楕円形で、深さは10cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上っている。長径方向はN-76°-Wである。



第87図 第129号土坑・出土遺物実測図

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 底 間 色 ローム粒子少量、燒土粒子極微量

2 に近い褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 繩文土器片7点（口縁部片4、胴部片3）が出土している。すべて小破片であり、第87図2は北西部壁際の底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉と考えられる。

第129号土坑出土遺物観察表（第87図）

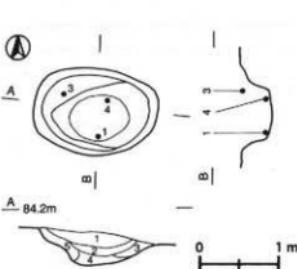
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	長石・雲母	に近い黄褐色	普通	波痕部から判点を加えた疊合重下。口縁表裏面に円形刻突文と沈線施文。	覆土中	TP235
2	縄文土器	深鉢	長石・雲母	に近い褐色	普通	単節縞文上に、横位と縱位の平行沈線文を施して文様を構成。	北西壁際底面	TP236

第140号土坑（第88・89図）

位置 調査区東部のA 7js区に位置し、丘陵性台地先端部に近い平坦面に立地している。

規模と形状 長径1.54m、短径1.10mの楕円形で、深さは48cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がっている。長径方向はN-87°-Wである。

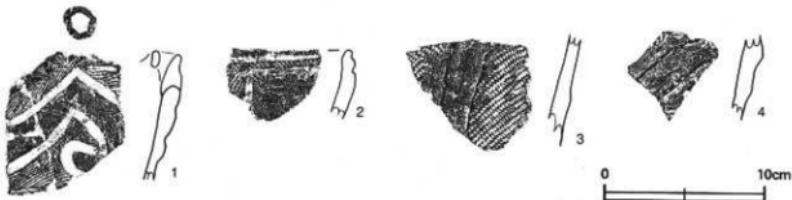
覆土 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。



- 土層解説  
 1 底 間 色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、燒土粒子極微量  
 2 間 色 ロームブロック中量、炭化粒子極微量  
 3 に近い褐色 ロームブロック中量、燒土粒子極微量  
 4 間 色 ロームブロック中量、炭化粒子少量  
 5 壁 色 ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片12点（口縁部片7、胴部片5）と、混入と考えられる弥生土器片3点、土師器片3点が出土している。すべて小破片であり、主に中央部の覆土中層から底面における出土である。第89図1・4は底面から、3は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。



第89図 第140号土坑出土遺物実測図

第140号土坑出土遺物観察表（第89図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	石英・雲母	黒	褐	普通	表面裏面に舟口状の把手作出。地文にR L 単節縄文施文。丁字状の沈線区画で磨消縄文を構成。	中央部底面 D28 PLH
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰	褐	普通	R L 単節縄文を地文とし、直線的な沈線区画により磨消縄文を構成。	覆土中 TP241
3	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	黒	褐	普通	曲線的な微隆起縫区画を行い、R L 単節縄文を縱方向に施文。	北東部覆土中層 TP242
4	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	において	褐	普通	曲線的な微隆起縫区画を行い、R L 単節縄文を縱方向に施文。	中央部底面 TP243

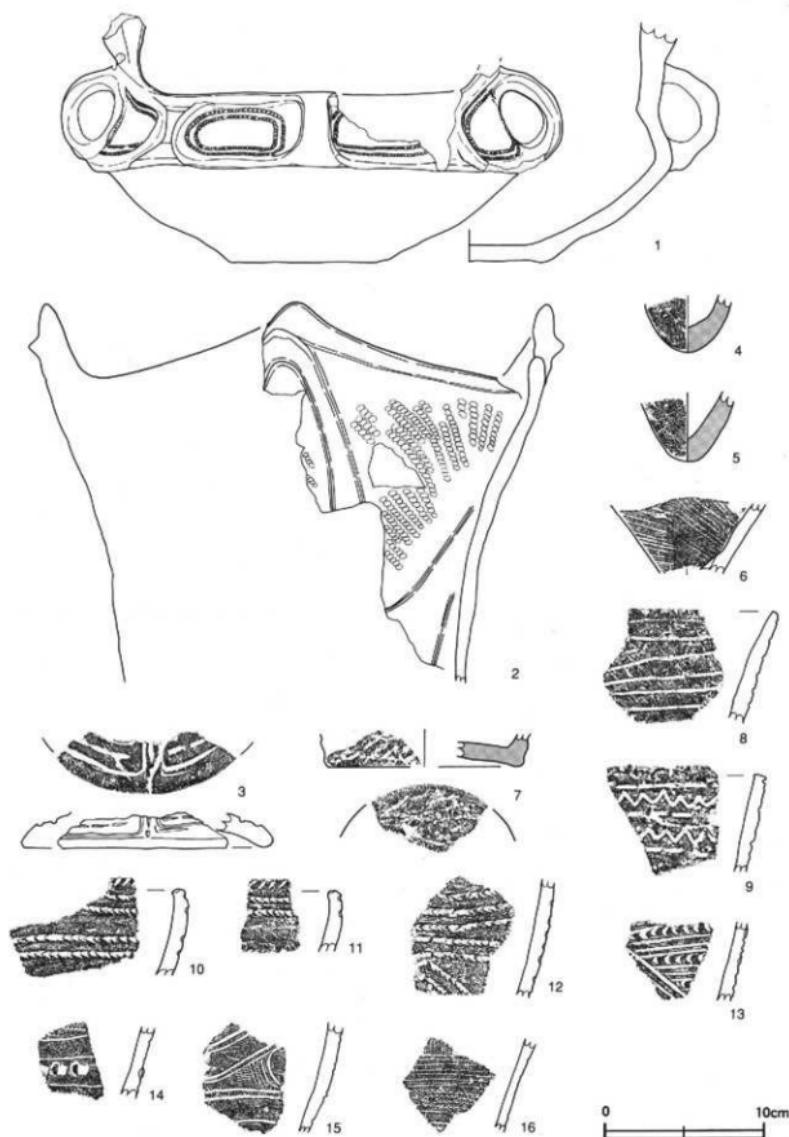
### (3) 遺構外出土遺物（第90～93図）

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。

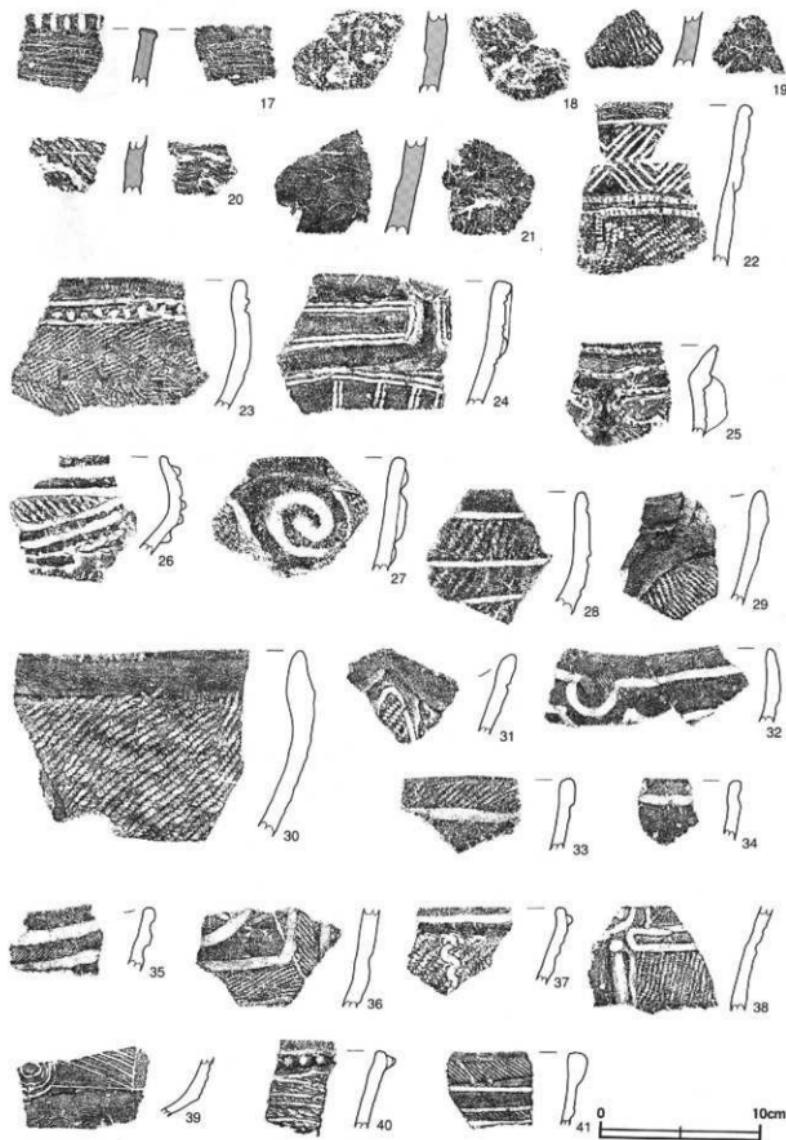
遺構外出土遺物観察表（第90～93図）

番号	種別	器種	口径	器高・底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
1	縄文土器	浅鉢	—	15.6 9.6	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	単位構成で縫状把手を有し、向き合う2単位の口縁には、両手の把手を作出。陰面により舟円形の作文式を構成。斜紋内には2委単位の細節化縄文を複数に施文。	表土中 TP96 PLH		
2	縄文土器	深鉢	[11.0]	24.0	—	石英・長石・雲母	にいわ	普通	口縁部は微隆起縫を伴う無文帯。底頂部から突起を作り逆ヒ文字状の微隆起縫で支撑を構成。地文は単節L R 縄文を施文。	TM1 盆中 TP97 中期	
3	縄文土器	蓋	—	(2.1) [15.6]	石英・長石・雲母	灰黄	普通	蓋形土器の底部部。沈線による区画文と刺突文で文様を構成。	B7 [K] 表土中 TP98 早期		
4	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	長石・繊維	灰 褐	普通	尖底部分。表面は擦痕状。	TM2 盆中 TP99 中期	
5	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	石英・長石・繊維	にいわ	普通	尖底部分。表面は擦板状。	SK02 覆土中 TP100	Ⅳ期
6	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	石英・長石・赤玉子	にいわ	普通	表面にヘタ状工具で条縫状の文様施文。	TM1 盆中 TP101	Ⅳ期
7	縄文土器	深鉢	—	(2.1) [12]	長石・繊維	にいわ	普通	脚部と底部にL R 単節縄文を施文。底面は上げ底状。	SK04 覆土中 TP102	Ⅳ期	

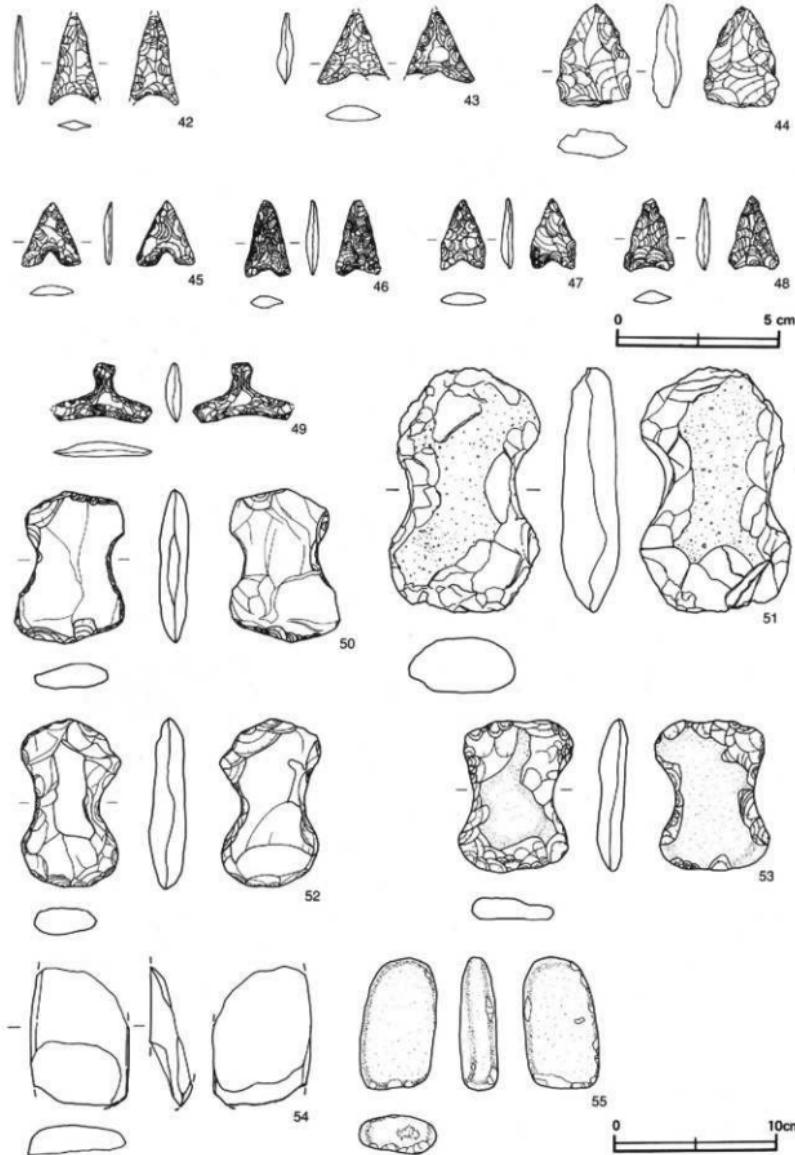
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	縄文土器	深鉢	石英・長石	にいわ	普通	ヘタ状工具による形成痕有り。横に沈線文を施文。	C24b区表土中 TP705 早期	
9	縄文土器	深鉢	長石・赤玉子	にいわ	普通	口唇部内側に連続キザミ目。口縁部に横位の平行沈線と扇面状の沈線施文。	TM2 盆土中 TP706 早期	
10	縄文土器	深鉢	石英・長石	にいわ	普通	口唇部に連続キザミ目。口縁部と脇部に2委単位の小割みなし引き沈線文周辺。	TM1 盆土中 TP707 早期	
11	縄文土器	深鉢	石英・長石	にいわ	普通	口唇部に連続キザミ目。口縁部に2委単位の小割みなし引き沈線文周辺。	TM2 盆土中 TP708 早期	
12	縄文土器	深鉢	石英・長石	にいわ	普通	曲線または直線状に、2委単位の小割みなし引き沈線文を施文。	S19 覆土中 TP709 早期	
13	縄文土器	深鉢	石英・長石	明赤褐	普通	平行沈線を向きを変えて斜位に施文。沈線間に爪形の刺突文施文。	C24b区表土中 TP710 早期	
14	縄文土器	深鉢	石英・長石・赤玉子	にいわ	普通	横位に細節化縄文。沈線間に貝殻復縄文と抉りのするとい刺突文を加えて文様構成。	SK08 覆土中 TP711 早期	
15	縄文土器	深鉢	石英・長石	にいわ	普通	平行沈線を曲線状に配して文様区画。区画内に貝殻復縄文充填。	表土中 TP712 早期	
16	縄文土器	深鉢	石英・長石・繊維	にいわ	普通	横位と縦位に細沈線を密に施文。沈線間の一部に貝殻復縄文を充填して文様構成。	S11号土壌土中 TP713 早期	
17	縄文土器	深鉢	石英・長石・繊維	にいわ	普通	口唇部に連続するキザミ目。表裏両面に条痕文施文。	S14 覆土中 TP714 早期	



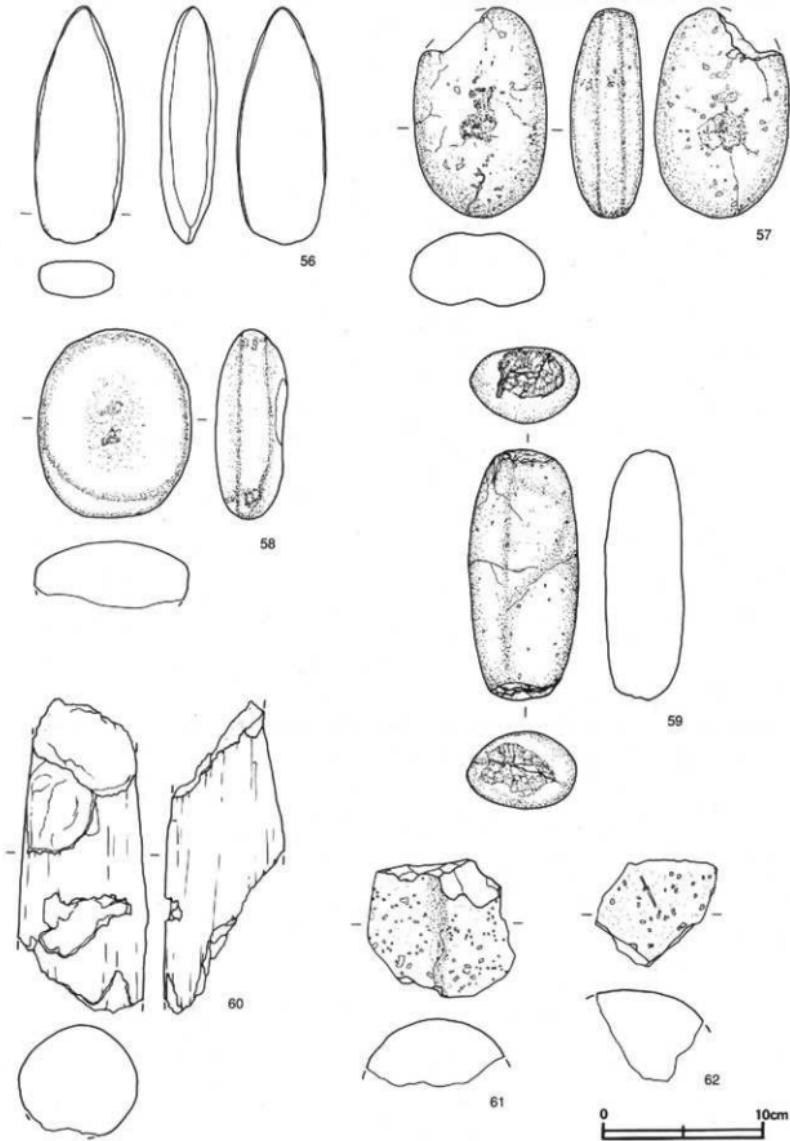
第90図 遺構外出土遺物実測図（1）



第91図 遺構外出土遺物実測図（2）



第92図 遺構外出土遺物実測図（3）



第93図 遺構外出土遺物実測図（4）

番号	種別	部様	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	表面に織文捺文。裏面は滑吸状。剥落有る。	S14 蓋土中	TP715 中段
19	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	表面に条状文捺文。裏面は滑吸状。	表土中	TP716 中段
20	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	表面に織文捺文。裏面は滑吸状。	S14 蓋土中	TP717 下段
21	縄文七器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	表面向面は擦痕状。	TM 1 戚土中	TP718 端
22	縄文土器	深鉢	石英・長石・殿	にいわ	普通	傾斜面には縦條文と横條文を構成。斜面部は直し單面織文上に斜面捺文を施す。	A 6 長表土中	TP719 中段
23	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	口縁部に平行凹彎周囲。斜面部に複数窪穴を有する。側面部はR字型輪塗文施す。	表土中	TP720 下段
24	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	口縁部は扇形で斜状文を構成。隆起付け脚と脇面部に2条単位の斜面捺文を施す。	B 3 区表土中	TP721 中段
25	縄文七器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	口縁部は隆起で斜状文を構成。口凹部底内と斜面付け脚部に斜面捺文を施す。	C 6 長表土中	TP722 中段
26	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	R字型輪塗文上に隠れ面を貼り合わせて支脚を構成。貼付け部に沈量を伴う。	TM 1 戮土中	TP722 中段
27	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	R字型輪塗文上に溝底の縦帶を貼り合わせて支脚を構成。貼付け部に沈量を伴う。文様を構成。	TM 2 盆土中	TP723 中段
28	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にいわ	普通	縦條文。側面部は斜面端面上に、傾斜部に平行する斜槽を施す。	B 7 表土中	TP724 中段
29	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	口縫部側面起線を伴う無文部。側面部と口縫部側面部と斜面起線が往々笠置文混用。	TM 1 戮土中	TP725 中段
30	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	ね	普通	側面部側面起線を伴う無文部。側面部R字型輪塗文施す。一部を磨削。	B 1 区表土中	TP726 中段
31	縄文土器	深鉢	石英・長石	ね	普通	口縫部側面斜縫を伴う無文部。底面部から進むに従って傾斜起線と側面部斜縫に遷る。	表土中	TP727 中段
32	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	傾斜の沈量で一部半円を組み入れて口縫と平行に区画。区画内に複数個の单屈輪文文。	A 7 区表土中	TP728 中段
33	縄文土器	深鉢	石英・長石	ね	普通	傾斜の沈量で底部の右側側面に凹印し、右側部5cm下に複数個の单屈輪文文。	A 7 区表土中	TP729 中段
34	縄文土器	深鉢	石英・長石	にいわ	普通	傾斜の沈量で傾斜の直輪筋を押出しし、口縫直角下に複数個の单屈輪文文。	C 6 区表土中	TP730 中段
35	縄文土器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	傾斜の沈量で口縫と平行に区画し、区画内に複数個の单屈輪文文。	S135 蓋土中	TP731 中段
36	縄文七器	深鉢	石英・長石・磁鐵	にいわ	普通	傾斜の沈量で斜脚および側面部に凹印し、側面部に斜脚と单屈輪文文。	B 1 予予表土中	TP732 中段
37	縄文土器	深鉢	石英・長石	にいわ	普通	口縫部に斜脚と凹印が認め。弱めは左半部端面上に平行式腰足を施す。	S124 極上	TP733 極上
38	縄文土器	深鉢	石英・長石	ね	普通	R字型輪塗文上に、割突文と斜脚的な沈量を施して文様を構成。	A 7 戮土中	TP734 極上
39	縄文土器	盆	石英・長石	普通	側面斜面に斜脚と凹凸状の沈量により、傾斜的な文様を呈す。	B 7 区表土中	TP735 傾斜	
40	縄文土器	深鉢	長石	にいわ	普通	口縫部側面に過度側面に生えた丸頭脚。側面斜面上に斜め状の凹凸を呈す。	TM 1 戮土中	TP736 傾斜
41	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にいわ	普通	傾斜斜面。口縫部側面に斜面捺文。側面部は横設の沈量と斜面捺文の発起部。	TM 1 戮土中	TP737 傾斜

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
42	石 磨	27	(1.5)	0.3	( 398 )	チャート	阿易生基盤。両面滑削。基部の抉りは浅い。	第 1 号土器地土中	TP812
43	石 磨	21.1	(2.0)	0.5	( 126 )	チャート	西島無基盤。両面滑削。基部の抉りは浅い。	S16 蓋土中	TP813
44	石 磨	32	2.3	0.8	5.5	チャート	西島無基盤。両面滑削。基部の抉りは浅い。	S17 戮土中	TP814
45	石 磨	29	1.8	0.2	0.7	チャート	西島無基盤。両面滑削。基部の抉りは浅い。	C 3 予予表土中	TP815
46	石 磨	23	1.3	0.4	0.8	メノウ	西島無基盤。両面滑削。基部の抉りは浅い。	T M 2 戮土中	TP816
47	石 磨	23	1.4	0.5	0.9	チャート	西島無基盤。両面滑削。基部の抉りは浅い。	表土中	TP817
48	石 磨	22	1.5	0.4	0.9	チャート	西島無基盤。両面滑削。基部の抉りは浅い。	S16 戮土中	TP818
49	石 磨	36	(6.0)	0.9	( 113 )	チャート	表裏面同士も丁寧な刮削調査。	第 1 号土器地土中	TP819
50	打製石斧	9.1	6.8	1.9	125.7	石	自然端を素材。折れの浅い斜削形。表裏面間に自然面残存。刃部は両面削正。	A 7 区表土中	TP820
51	打製石斧	14.9	9.2	3.6	626.0	安山岩	自然端を素材。折れの深い斜削形。表裏面間に自然面残存。刃部は両面削正。	T M 1 蓋土中	TP821
52	有柄石斧	10.1	6.2	2.4	155.1	安山岩	自然端を素材。折れの深い斜削形。表裏面間に自然面残存。刃部は両面削正。	表土中	TP822
53	打製石斧	9.2	7.2	1.9	133.6	安山岩	自然端を素材。折れの深い斜削形。表裏面間に自然面残存。刃部は両面削正。	T M 1 戮土中	TP823
54	整製石斧	8.0	6.0	(2.6)	(117.0)	凝灰岩	刃部の片側と帯面欠損。刃部の片面と帯面欠損。	C 1 6 区表土中	TP824
55	整製石斧	8.1	4.7	2.5	164.9	玄武岩	刃部に研削感。刃部は欠損し縦横削正有。側面と両端に鋸切。	S114 蓋土中	TP825
56	整製石斧	14.5	5.6	3.5	449	凝灰岩	刃部の片面と帯面欠損。	S110 戮土中	TP826
57	石 破	13.0	8.3	4.5	(79.0)	安山岩	自然端を素材。全面を滑削面にて使用。表裏面にくぼみ有り。	表土中	TP827
58	石 破	11.5	9.6	4.5	(79.0)	安山岩	自然端を素材。全面を滑削面にて使用。表裏面にくぼみ有り。裏面一部欠損。	A 5 予予表土中	TP828

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	参考
59	鐵石	15.5	6.8	3.0	740	鐵	自然輝を有材。鋸面を研磨。両端部に敲打痕有り。	A 8号土器上中	新潟県
60	G棒	(19.5)	(8.2)	(7.3)	(1220)	鐵泥片岩	大形石棒の体部片。全表面磨擦面。破損断面。	TM 1 墓土中	Q300
61	石棒	(9.2)	(8.5)	(4.2)	(300)	安山岩	大形石棒の体部片。表面は丁寧に研磨整形。	TM 1 墓土中	Q300
62	石棒	(6.7)	(7.4)	(5.6)	(240)	安山岩	大形石棒の体部片。表面は丁寧に研磨整形。	TM 1 墓土中	Q310

表2 繩文時代住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁構造	内部施設	覆土	主な出土遺物	時期	新潟関係(旧→新) その他		
				長軸(延長)× 短軸(幅)(m)	高さ(cm)									
1	B2a	N-34°-E	[円] 形	5.00 × [5.00]	34	鍛鉄	-	6	9	-	自然	縄文土器、四石	後期前葉 SK11→小野→SK20	
2	B3a	N-14°-W	[不整方形]	[4.20] × 3.92	18	鍛鉄	-	3	-	1	自然	縄文土器	後期前葉 SK06・本跡	
3	B3a	N-68°-E	[圓] 形	4.80 × 3.70	18	鍛鉄	-	2	1	-	自然	縄文土器	後期前葉 本跡→SK16	
4	B4a	N-7°-E	[椭円] 形	3.88 × 3.70	18	平坦	-	3	-	-	1 例・焼	縄文土器、円石	後期前葉	
12	B6a	N-57°-W	[円] 形	5.00 × [5.00]	7	平坦	-	3	5	-	1 自然	縄文土器	トヨタ先 本跡・第1号土器	
13	B6c	N-32°-W	[椭円] 形	[5.10] × 4.20	28	鍛鉄	-	-	-	-	自然	縄文土器、土器片付盤	中期中葉 本跡・第3分ノ目	
16	B6b	N-45°-W	[円] 形	[5.00] × [5.00]	4	鍛鉄	-	5	-	-	1 自然	縄文土器	中期中葉 本跡→TM4	
20	A6a	N-42°-W	堀丸長方形	4.66 × 3.78	6-36	平坦	-	3	3	1	自然	縄文土器、模形石器、四石、銀石	SK3・本跡・SD3	
21	A7a	-	[椭丸方形]	3.42 × [0.64]	7-26	平坦	-	-	-	-	自然	縄文土器、石器	後期前葉	
27	B7a	-	[椭丸方形]	4.03 × [1.00]	17	平坦	-	-	-	-	自然	縄文土器、磨石	後期前葉 本跡→SK21、SK21、SK22	
30	B7e	N-4°-E	[円] 形	5.05 × 4.70	16	鍛鉄	-	3	-	-	自然	縄文土器、磨石、紙幣	後期前葉	
33	B7s	N-35°-W	[円] 形	5.16 × [5.00]	28	鍛鉄	-	2	4	-	1 人骨	縄文土器	後期前葉 本跡・SM43、SKR、SKR9	
34	B7s	N-47°-W	円 形	5.15 × 4.90	9-47	鍛鉄	-	6	6	-	1 人骨	縄文土器、石製刃具、石器、門石、鉄石	後期前葉	
37	A7g	-	[左右対称]	[5.00] × [1.00]	15	平坦	-	-	-	-	自然	縄文土器	後期前葉 本跡→SK5、SK10、SK38	
38	A7e	N-32°-E	[椭円] 形	6.84 × 5.25	7-22	土器	-	3	10	-	1 自然	打削石斧、磨石、石器、石器、石器	後期前葉 本跡・SM42	
44	B5a	-	[左右対称]	[1.70] × [3.70]	27	平坦	-	1	-	1	-	人骨	縄文土器、石器	後期前葉 本跡・TM1、SD1
45	B5a	N-65°-E	[不整円形]	[4.20] × [3.80]	34	平坦	-	1	1	-	1 人骨	縄文土器	後期前葉 本跡→TM1	

表3 繩文時代貯蔵穴一覧表

土坑 番号	位置	延伸(地 方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	土器	主な出土遺物	新潟関係(旧→新) その他	
				最窄(狭)× 最寬(広)(m)	底部(長)×(幅)(m)							
1	B6a	N-46°-E	[椭円] 形	1.24 × 1.02	1.02 × 0.80	32	袋状	平坦	人骨	-	縄文土器	-
3	A6a	N-55°-E	[椭円] 形	1.68 × 1.31	2.06 × 1.06	56	7ラス式	平坦	人骨	縄文土器	本跡→SI20	
4	A6a	N-60°-W	円 形	0.62 × 0.54	2.60 × 1.94	102	7ラス式	平坦	人骨	縄文土器	本跡→SK120	
37	B2a	N-36°-W	[椭円] 形	1.43 × 1.31	0.85 × 0.74	86	円筒狀	平坦	自然	-	縄文土器	-
109	B6c	N-22°-E	[椭円] 形	2.73 × 2.06	2.30 × 1.60	51	外傾	圓狀	-	3	縄文土器	本跡→SD2
117	A6a	N-82°-E	円 形	1.50 × 1.50	1.10 × 1.15	46	外傾	平坦	自然	-	縄文土器	本跡→SI3
120	A6a	N-40°-E	[椭円] 形	0.97 × 0.84	2.10 × 2.01	68	7ラス式	圓狀	人骨	-	縄文土器	SK 4 → 本跡
121	A6a	N-45°-W	円 形	0.80 × 0.80	1.53 × 1.31	92	7ラス式	圓狀	人骨	-	縄文土器	-
122	A6a	N-11°-W	[椭円] 形	0.94 × 0.83	1.48 × 1.29	90	7ラス式	平坦	自然	-	縄文土器	-
141	A7a	N-28°-W	[椭円] 形	1.33 × 1.03	1.41 × 1.23	38	7ラス式	平坦	人骨	-	縄文土器、帶石	-

表4 繩文時代陥し穴一覧表

土坑番号	位置	長径(幅) 方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	付	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新) その他
				周長(長径×短径)(m)	高さ(cm)						
20	C2a	N-36°-E	円形	1.40 × 1.30	86	直立	平坦	人為	-	縄文土器	
42	B2e	N-38°-E	長楕円形	1.60 × 0.97	108	直立	平坦	人為	1	縄文土器	
45	B2a	N-36°-W	長楕円形	2.13 × 1.75	110	直立	半坦	人為	2	縄文土器、縄	
50	B2e	N-33°-E	長楕円形	1.30 × 0.86	90	直立	半坦	人為	1		
52	B3g	N-40°-E	不整円形	1.56 × 1.24	102	外傾	平坦	人為	1		
56	B3g	N-36°-E	楕円形	1.67 × 1.31	88	直立	半坦	人為	-		
59	B3g	N-32°-W	長楕円形	1.96 × 1.45	171	直立	半坦	自然		縄文土器、鉢片	
60	B3g	N-52°-E	不整円形	2.14 × 1.16	18	外傾	圓状	自然	2	-	
61	B3g	N-5°-E	長楕円形	1.60 × 1.04	90	直立	平坦	人為	2	-	
66	B3a	N-38°-E	長楕円形	(2.20) × 1.12	48	外傾	平坦	自然	-		平跡-S I 2
69	C3e	N-17°-W	長楕円形	0.82 × 0.62	76	直立	平坦	自然	1	縄文土器	
71	B3g	N-63°-E	長楕円形	2.28 × 1.62	111	外傾	半坦	人為	3		
72	B3g	N-22°-E	長楕円形	1.42 × 1.12	110	直立	平坦	人為	1	縄文土器、縄	
78	B3g	N-50°-E	不整円形	1.86 × 1.35	86	直立	半坦	人為	1	-	
79	B3a	N-50°-W	不整円形	2.20 × 1.58	70	直立	半坦	自然	1	縄文土器	
83	B4	N-20°-E	不整円形	1.97 × 1.53	93	外傾	半坦	人為	-	-	
85	B4a	N-10°-E	長楕円形	2.48 × 1.35	98	直立	平坦	自然	1	-	
90	B4g	N-42°-W	長楕円形	1.94 × 1.32	95	直立	半坦	自然	-		
93	B4g	N-1°-E	長楕円形	1.41 × 0.98	64	直立	半坦	人為	-	縄文土器	
101	B5g	N-5°-E	長楕円形	1.80 × 0.80	48	直立	半坦	自然	-	縄文土器、鉢片	
110	B6g	N-40°-W	長楕円形	1.97 × 1.53	86	直立	半坦	自然	-		
115	A6g	N-24°-E	長楕円形	2.16 × 1.24	96	直立	半坦	人為	-		

表5 繩文時代その他の土坑一覧表

土坑番号	位置	長径(幅) 方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	付	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新) その他
				周長(長径×短径)(m)	高さ(cm)						
53	C3a	N-53°-E	楕円形	3.00 × 1.26	18	外傾	半坦	自然	-	縄文土器、縄	
55	C3a	N-8°-E	不整円形	3.60 × 2.36	50	外傾	半坦	自然	-	縄文土器、縄	
74	B3a	N-19°-E	円形	1.12 × 1.04	54	外傾	半坦	人為	1	縄文土器	
88	C4a	N-61°-E	円形	1.00 × 0.98	30	緩斜	圓状	自然	-	縄文土器	
89	C4a	N-49°-E	楕円形	1.04 × 0.91	33	外傾	半坦	自然	-	縄文土器	
92	B4g	N-60°-W	楕円形	1.80 × 1.57	54	外傾	半坦	自然	-	縄文土器	
95	B4g	N-78°-E	長楕円形	2.26 × 1.66	54	外傾	半坦	自然	-	縄文土器、縄	
103	C4a	N-40°-E	円形	1.54 × 1.52	62	外傾	半坦	自然	-	縄文土器、鉢片	
103	B6g	N-12°-E	円形	1.25 × 1.25	60	外傾	半坦	自然	-	縄文土器	
112	B6g	N-82°-E	円形	1.18 × 1.14	28	外傾	半坦	自然	-	縄文土器、四石	
127	B6g	N-0°-E	円形	1.76 × 1.64	72	緩斜	平坦	自然	-	縄文土器	
129	B7a	N-76°-W	楕円形	1.43 × 1.06	10	緩斜	半坦	自然	-	縄文土器	
132	A7g	N-16°-E	楕円形	1.22 × 0.78	20	外傾	錯斜	自然	-	縄文土器	
139	A7g	N-15°-E	楕円形	1.22 × 0.88	23	外傾	圓状	自然	-	縄文土器、縄	
140	A7g	N-87°-W	楕円形	1.54 × 1.10	48	緩斜	半坦	人為	-	縄文土器	

## 2 弥生時代の遺構と遺物

後期前半の住居跡17軒と土器棺墓1基が確認された。これらの遺構は、調査区南部から東部にかけて分布し、丘陵性台地の南側斜面部から南東側平坦部に立地している。以下、遺構と主要な出土遺物について記述する。

### (1) 堪穴住居跡

#### 第5号住居跡（第94・95図）

位置 調査区中央部のC4・B8区に位置し、丘陵性台地の尾根部の平坦面に立地している。

確認状況 西側の壁と床は木根のために、確認できなかった。竈上上層にも木根が入り込んで擾乱が著しいが、中層以下で形状を捉えることができた。また、ほぼ中央部は第108号土坑に掘り込まれている。

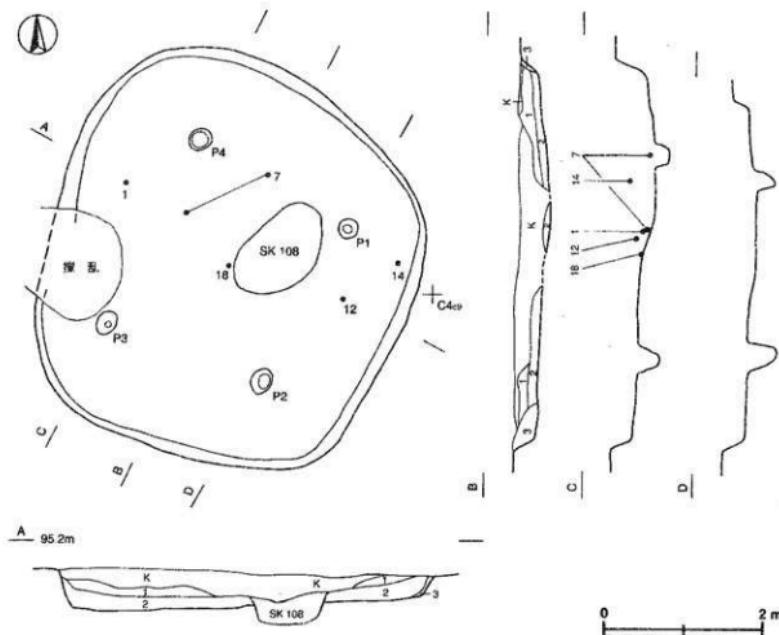
規模と形状 西側の壁が一部遺存しないが、平面形は長径4.92m、短径4.68mの不整円形と考えられる。南北の長径をもとにした主軸方向は、N-27°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は最大で34cmである。

床 わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。全体的に床面の締まりは弱く、硬化面は確認されなかった。

炉 確認されなかった。第108号土坑に掘り込まれたものと考えられる。

ピット 4か所。P1-P4は深さ19-36cmで、その規模と配置から柱穴と考えられる。

覆土 3層に分層される。上層は木根による擾乱が入り込んでいるが、堆積から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。



第94図 第5号住居跡実測図

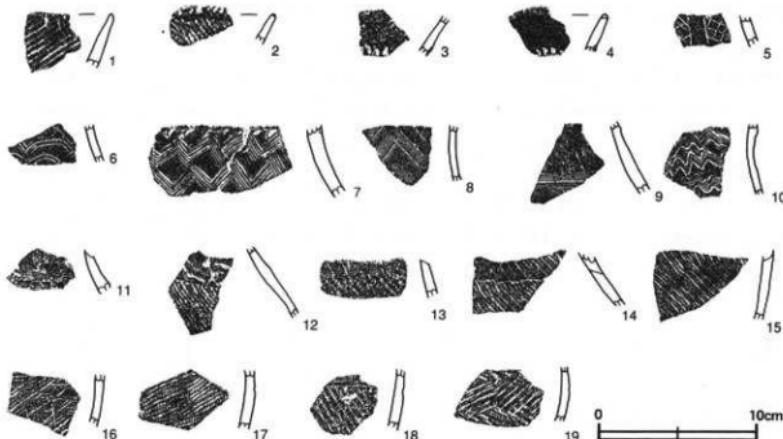
## 土器解説

1 灰褐色 ローム粒子少量、燒化粒子微量  
 2 灰褐色 ローム粒子中量、燒化粒子微量

3 にぶい褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 弥生土器片158点（口縁部片13、頸部片21、胴部片122、底部片2）と、流れ込みと考えられる縄文土器片77点、土師器片8点、網片23点が出土している。遺物は全域の覆土中層から床面にかけて、散在した状態で確認されており、すべて小破片である。第95図1・7・18は、床面上から出土している。

所見 時期は、出土土器及び造構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



第95図 第5号住居跡出土遺跡実測図

第5号住居跡出土遺物観察表 (第95図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	明褐色	普通	口縁部キザミ。口縁部附加条一種（附加2条）、縄文施文。	北西部床面	TP244
2	弥生土器	壺	長石	にぶい褐色	普通	口縁部縄文原体押圧。口縲部附加条一種（附加2条）、縄文施文。	東部覆土中	TP245
3	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐色	普通	口縲部RL单筋縄文施文。口縲部下端に縄文原体押圧。	北東部覆土中	TP262
4	弥生土器	壺	長石	にぶい褐色	普通	口縲部キザミ。口縲部下端に縄文原体押圧。	覆土中	TP246
5	弥生土器	壺	長石	にぶい褐色	普通	頭部單波線による鋸区画後、斜格子状文施文。無文のスリット形成。	東部覆土中	TP261
6	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐色	普通	頭部平行波線による連弧文充填。	覆土中	TP259
7	弥生土器	壺	長石・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縲部下端に刺突文。頭部鶴歯状工具（6本鶴歯）による鋸齒状文。	北西部床面	TP247 PL45
8	弥生土器	壺	石英・長石・雜	にぶい褐色	普通	頭部鶴歯状工具（8本鶴歯）による鋸齒状文充填。	北東部覆土中	TP249
9	弥生土器	壺	石英・長石・雜	にぶい褐色	普通	頭部鶴歯状工具（7本鶴歯）による横走文を2列施文。	北東部覆土中	TP256
10	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐色	普通	頭部鶴歯状工具（6本鶴歯）による波状文充填。	南西部覆土中	TP248
11	弥生土器	壺	石英・長石	黄褐色	普通	頭部鶴歯状工具（8本鶴歯）による横区画後、锯齿状文施文。	北東部覆土中	TP260
12	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい赤褐色	普通	頭部鶴歯状工具（4本鶴歯）による波状文。頭部RL单筋縄文施文。	東部覆土下層	TP254
13	弥生土器	壺	長石	にぶい褐色	普通	頭部RL单筋縄文施文。	東部覆土中	TP255
14	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種（附加2条）、縄文施文。	東部覆土下層	TP253
15	弥生土器	壺	長石・雲母	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種（附加2条）、縄文施文。	南東部覆土中	TP250
16	弥生土器	壺	石英・長石	褐色	普通	胴部附加条一種（附加2条）、縄文施文。	南西部覆土中	TP258

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
17	赤陶土器	壺	長石・雲母	にぶい褐	普通	網附加条一様(附加1条)織文施文。	北東部底土中	TP252
18	赤陶土器	壺	石英・長石	明	褐	網附加条一様(附加2条)織文施文。羽状構成。	中央部底面	TP257
19	赤陶土器	壺	石英・長石	墨	褐	普通 網附加条一種(附加2条)織文施文。羽状構成。	北東部底土中	TP251

### 第6号住居跡（第96・97図）

位置 調査区中央部のC 5 e区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い南向き急斜面に立地している。

確認状況 北西側の約3分の1は道路下部分で、調査区域外のため未調査である。南東側の壁と床の一部は、斜面部のために流失している。

規模と形状 遺存する壁の形状と床の範囲から、東西軸3.74m、推定される南北軸4.0m前後の隅丸方形と考えられる。南北軸をもとにした主軸方向は、N-26°-Wである。壁はやや外傾して立ち上がっており、壁高は最大25cmである。

床 緩やかに南東側に向かって傾斜し、中央からやや北東寄りのピットに囲まれた範囲内が踏み固められている。

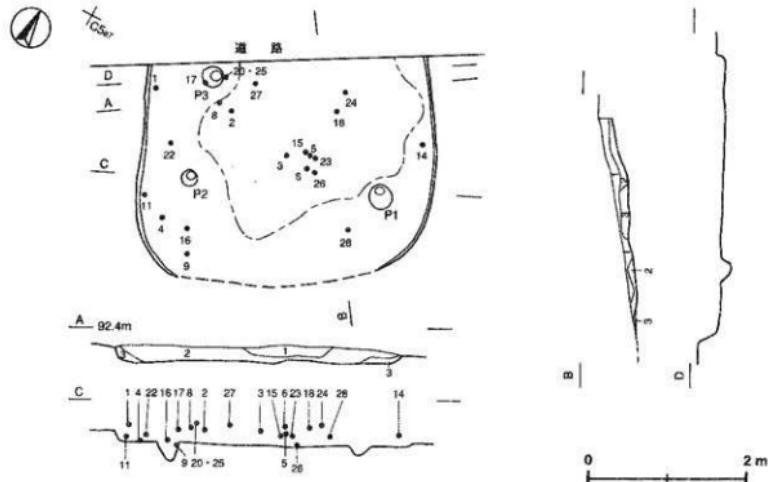
炉 やや北寄りの調査区域際で、径約80cmの円形の範囲内に、わずかに焼土の散布が確認された。掘り込みは確認されなかったが、周囲に硬化面が広がっていることから、この位置に地床炉が付設されていたものと判断する。ピット 3か所。P 1～P 3は深さ14～23cmで、その規模と配置から柱穴と考えられる。

覆土 3層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層ともローム粒子を含んでいる。壁際から床面の傾斜に沿って緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 壁 壁 色 ローム粒子少量、焼土粒子極微量  
2 壁 壁 色 ローム粒子中量、炭化粒子極微量

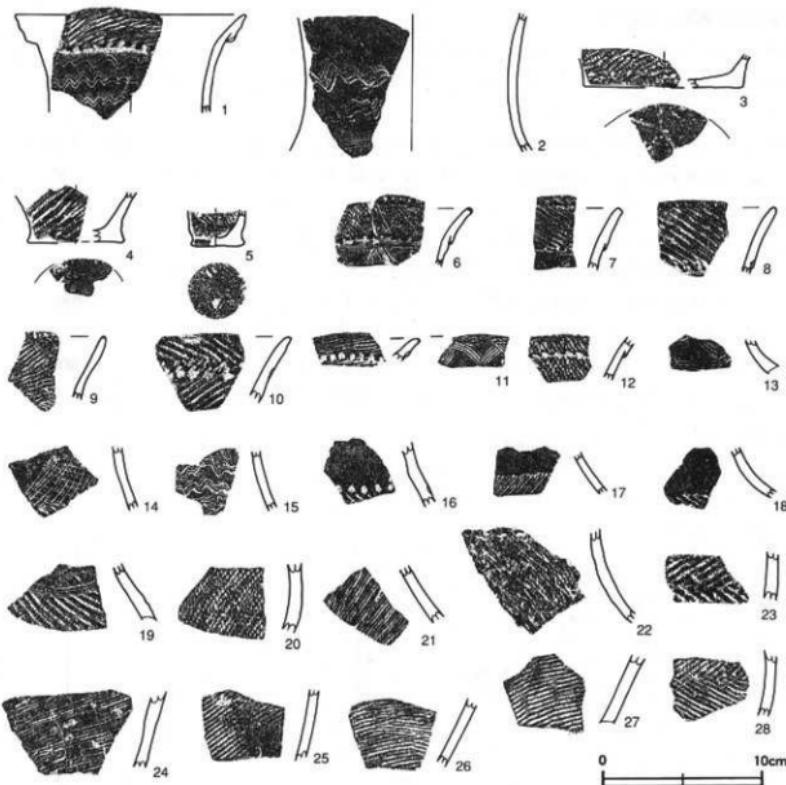
- 3 床 色 ロームブロック少量



第96図 第6号住居跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片133点（口縁部片9、頸部片30、胴部片84、底部片10）と、流れ込みと考えられる縄文土器片11点、石器2点（石鏃）、剝片21点が出土している。遺物の多くは小破片で、全城の覆土下層から床面上で確認されている。第97図1～5は、いずれも床面上から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期前半と考えられる。



第97図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表 (第97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	[14.6]	[6.1]	—	石英・長石	暗褐色	普通	口唇と口縁部下端縄文原形押捺。複合口縁部附加型一種（対加2条）縄文。底部複曲状工具（5本側面）による波状文。	西壁床表面 PL45	P263 5%
2	弥生土器	壺	—	(8.5)	—	石英・長石・輝	橙	普通	腹部複曲状工具（8本側面）による波状文と、肩部との区画に横走文施文。	中央部床面 PL45	P271 5%
3	弥生土器	壺	—	[19]	[10.0]	石英・長石・輝	暗褐色	普通	腹部L.R.半面縄文施文。底部木炭痕	中央部床面 P289	5%

番号	種別	器種	口径	底径	底深	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	陶土器	盃	-	(3.1)	6.2	石英・長石	青白	普通	側部附加条一様(附加2条) 横文施文、底部付文。	西西南部床面	TP268 5%
5	陶土器	(ニアガラ)	(2.3)	3.5	石英長石褐色斑子	橙	青白	底部R.L單弦縫文施文、底部無文。僅子口直垂有り。	中央部床面	TP290 5%	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	陶土器	盃	石英・長石	に赤い斑	普通	R.L單弦縫文施文、口縁下面部はキザミ。無底8条半底の横文と側面状様横文施文。	中央部下口	TP264
7	陶土器	盃	石英・長石	赤	青白	口縁と複合口縫部附加条一様(附加2条) 陶文。下端にキザミ。	南東部腰上	TP267
8	陶土器	盃	石英・長石	に赤い斑	普通	口縁と複合口縫部附加条一様(附加2条) 陶文。下端横文無体焼正。	西部床面	TP265
9	陶土器	盃	石英・長石	に赤い斑	普通	口縁と複合口縫部附加条一様(附加2条) 陶文施文。	南西部床面	TP269
10	陶土器	盃	石英・長石・鐵	橙	普通	口縁キザミ。口縁並羽状の附加条一様(附加2条) 陶文と縱縫部押正。	東北尾上土	TP275
11	陶土器	盃	石英・長石	橙	普通	口縁と複合口縫部表面に織条伴縫文施文。下端部横文無体焼正。内面に強筋状工具(木棒拂拭)による施文痕跡。	東北尾上土	TP270
12	陶土器	盃	石英・長石	に赤い斑	普通	R.L單弦縫文施文。口縁下面部は横文無体焼正。	東東部腰上	TP268
13	陶土器	盃	石英・長石	に赤い斑	普通	頭蓋横断状工具(6本刷毛)による横位の凹凸化、頭蓋状文施文。	南東部腰十巾	TP287
14	陶土器	盃	石英・長石・鐵	青	普通	頭蓋による区画と斜格子状文、底部附加条一様(附加2条) 陶文。	東東部腰下	TP281
15	陶土器	盃	石英・長石	に赤い斑	普通	内面頭蓋横断状工具(4本刷毛)による横位文光沢。	中央部床面	TP286
16	陶土器	盃	石英・長石	明	青白	口縁附加条一様(附加2条) 陶文。下端に横文無体焼正。無鉛無石。	南西部床面	TP283
17	陶土器	盃	石英・長石	灰	青白	頭蓋無し。底部附加条一様(附加2条) 陶文施文。	西北部腰上	TP284
18	陶土器	盃	石英・長石	青	普通	頭蓋無し。頭蓋附加条一様(附加2条) 陶文施文。	中央部腰十巾	TP285
19	陶土器	盃	石英・長石	明	青白	頭蓋8条半底の横文と頭蓋附加条一様(附加2条) 陶文施文。	南東部腰十巾	TP274
20	陶土器	盃	石英・長石	に赤い斑	普通	頭蓋附加条一様(附加2条) 陶文施文。	南東部腰十巾	TP276
21	陶土器	盃	長石	に赤い斑	普通	朝治附加条一様(附加1条) 陶文施文。	南東部腰十巾	TP277
22	陶土器	盃	石英・長石・鐵	に赤い斑	普通	頭蓋附加条一様(附加1条) 陶文施文。	西部床面	TP272
23	陶土器	盃	石英・長石	青	普通	頭蓋附加条一様(附加2条) 陶文施文。羽状焼成。	中央部床面	TP266
24	陶土器	盃	石英・長石・鐵	橙	普通	頭蓋附加条による頭蓋的文。	中央部床面	TP273
25	陶土器	盃	石英・長石	青	普通	頭蓋附加条一様(附加2条) 陶文施文。	西北部腰上	TP278
26	陶土器	盃	石英・長石	に赤い斑	普通	頭蓋附加条一様(附加2条) 陶文施文。	中央部床面	TP279
27	陶土器	盃	石英・長石	明 黄	青白	頭蓋附加条一様(附加2条) 陶文施文。	中央部床面	TP282
28	陶土器	盃	石英・長石・青白	に赤い斑	青白	頭蓋附加条一様(附加2条) 陶文施文。羽状構成。	南東部腰十巾	TP280

### 第7号住居跡(第98~100図)

位置 洞谷区中央部のC 5 番地に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い南向き急斜面に立地している。

確認状況 北西側の約半分は道路下部分で、調査区域外のため未調査である。北東側と南西側の壁を確認したが、南東側の壁と床の一部は、斜面部のため流失している。

規模と形状 潜存する壁の形状と床の範囲から、東西幅4.54m、推定される南北軸4.0m前後の隅丸長方形と考えられる。南北軸をもとにした主軸方向は、N=27°Wである。土駆団から確認される壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は最大で62cmである。

床 ほぼ平地で、中央から壁際付近までに踏み固められた面が確認された。

炉 調査した範囲内で、焼土の散布や灰の掘り込みなどは確認されなかった。

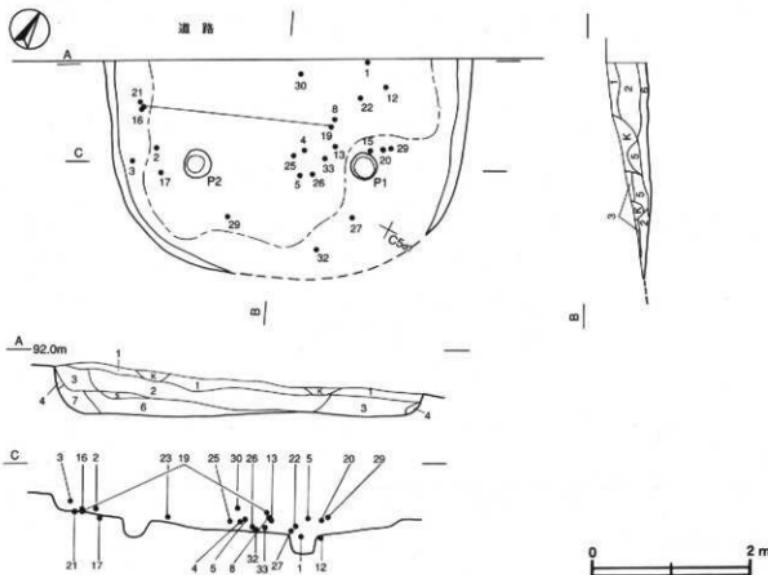
ピット 調査範囲内で、2か所確認された。P 1 の深さ25cm、P 2 の深さ24cmで、その規模と配置から柱穴と考えられる。

覆土 7層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層ともロームブロックまたはローム粒子を含んでいる。壁際から地形の傾斜に合わせて緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

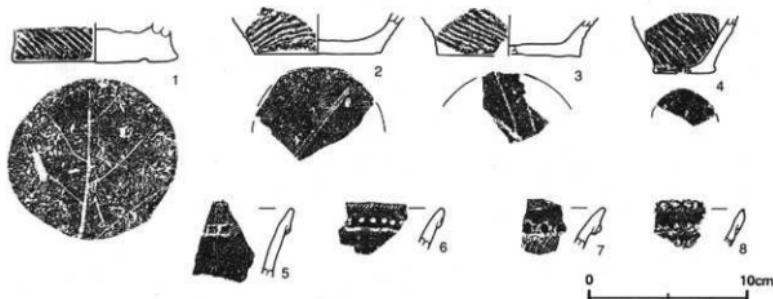
土層解説		ロームブロック少量、炭化粒子極微量		ロームブロック少量、炭化粒子極微量	
1 黒褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック中量	6 暗褐色	ロームブロック多量
2 墓褐色	ローム粒子少量、燒土粒子極微量	7 暗褐色	ロームブロック中量		
3 底褐色	ローム粒子少量、燒土粒子極微量				
4 灰褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量				

遺物出土状況 弥生土器片189点（口縁部片17、頸部片19、胴部片143、底部片10）と、流れ込みと考えられる繩文土器片23点、洞片5点、古鏡1点が出土している。遺物は全域の覆土下層から床面上で確認されているが、小破片が多く、器形をうかがえるものはなかった。第99図1は、正位で床面上から出土している。

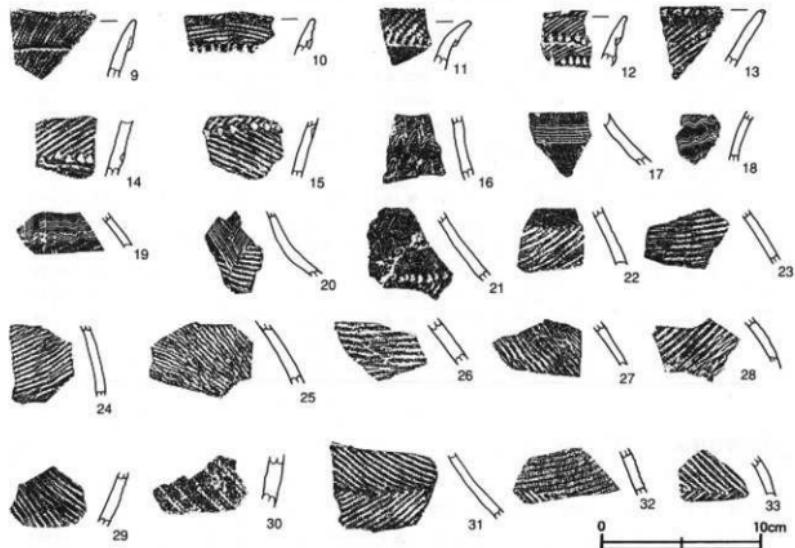
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期前半と考えられる。



第98図 第7号住居跡実測図



第99図 第7号住居跡出土遺物実測図（1）



第100図 第7号住居跡出土遺物実測図（2）

第7号住居跡出土遺物観察表（第99・100回）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(2.9)	10.4	石英・長石・輝	橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）楕文施文。底部木葉痕。	北東部床面	P320 10%
2	弥生土器	壺	-	(2.5)	[8.8]	石英・長石・輝	明赤	普通	胴部附加条一種（附加2条）楕文施文。底部木葉痕。	北西部壁土層	P321 5%
3	弥生土器	壺	-	(2.5)	[9.0]	石英・長石・赤鉄	白	普通	胴部附加条一種（附加2条）楕文施文。底部木葉痕。	北西部壁土層	P322 5%
4	弥生土器	壺	-	(3.6)	[4.0]	良石・赤色粒子	にぶい	普通	胴部附加条一種（附加2条）楕文施文。底部木葉痕。	中央部壁土層	P323 10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
5	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい	黒	普通	口唇部楕文施文。複合口縁下端部に横位の平行弦線とキザミ施文。	中央部壁土下層	TP294
6	弥生土器	壺	石英・長石	黒	褐	普通	口唇部楕文施文。口縁に連続する円形突穴施文。	南西部壁土中	TP299
7	弥生土器	壺	石英・長石	黒	褐	普通	口唇と腰部に附加条一種（附加2条）楕文施文。口唇部無文。下端にキザミ。	南東部壁土中	TP297
8	弥生土器	壺	石英・長石	赤	褐	普通	口唇部と口縁部下端に楕文原体押圧。	中央部壁土下層	TP300
9	弥生土器	壺	石英・長石	黒	褐	普通	口唇部と口縁から腰部にかけて附加条一種（附加1条）楕文施文。	南西部壁土中	TP292
10	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい	褐	普通	口唇と口縁部に附加条一種（附加2条）楕文施文。下端部に楕文原体押圧。	南西部壁土中	TP293
11	弥生土器	壺	白色粒子	にぶい	褐	普通	口唇と口縁部に附加条一種（附加2条）楕文施文。口縁部下端に刺突文。	南西部壁土中	TP298
12	弥生土器	壺	石英・長石	灰	褐	普通	口唇と口縁部に附加条一種（附加2条）楕文施文。下端部に楕文原体押圧。	東部床面	TP295
13	弥生土器	壺	石英・長石・赤色粒子	明赤	褐	普通	口唇部楕文原体押圧。口唇部附加条一種（附加2条）楕文施文。	中央部壁土下層	TP296
14	弥生土器	壺	石英・良石・赤色粒子	明赤	褐	普通	口唇部附加条一種（附加2条）楕文施文。下端部原体押圧。頭部捲描文。	南東部壁土中	TP305
15	弥生土器	壺	石英・良石・赤色粒子	橙	普通	口唇部楕文原体押圧。口縁部附加条一種（附加2条）楕文施文。	中央部壁土下層	TP304	
16	弥生土器	壺	石英・長石・赤色粒子	明赤	褐	普通	頭部捲曲状工具（5本脚）による波状文充填。	西壁際床面	TP306
17	弥生土器	壺	石英・長石・赤色粒子	明赤	褐	普通	頭部捲曲状工具（7本脚）による横走文施文。	南西部床面	TP313
18	弥生土器	壺	長石・赤色粒子	黒	褐	普通	頭部捲曲状工具（5本脚）による波状文。	南東部壁土中	TP319

番号	種別	断面	形状	色調	被成	手法の特徴	出土位置	備考
19	弥生土器	壺	純石	にほい緑	普通	底部表面凹凸（5本割れ）による底（磨光素面状）と、側部附加条（側溝文施文）。	中央部壠土層	TP314
20	赤土七唇	壺	灰・黄・灰白・赤丹	明赤・褐	普通	側部附加条（10本割れ）による底（磨光素面）。側部附加条一體（附加2条）。縦文施文。	東部壠土下層	TP318
21	弥生土器	壺	灰・灰白・赤丹	明赤・褐	普通	側部附加条一體（附加2条）純文。上部は結節部押圧。	西部床面	TP291
22	弥生土器	壺	灰・灰白・灰透子	棕	普通	底部無文。側部附加条一體（附加2条）縦文施文。	中央部床面	TP307
23	弥生土器	壺	石英・灰石	にほい緑	普通	側部附加条一體（附加2条）縦文施文。	南部壠土下層	TP308
24	弥生土器	壺	石英・赤色較子	にほい緑	普通	側部附加条（附加2条）縦文施文。	南西部壠土中	TP309
25	弥生土器	壺	石英・灰石・青透子	棕	普通	側部附加条無縦文施文。	中央部壠土層	TP302
26	弥生土器	壺	石英・灰石	にほい緑	普通	側部附加条一體（附加2条）縦文施文。	中央部床面	TP310
27	弥生土器	壺	灰石	にほい緑	普通	側部附加条一體（附加2条）縦文施文。	南西部壠土下層	TP311
28	弥生土器	壺	石英・灰石	にほい緑	普通	側部附加条一體（附加2条）縦文施文。	南西部壠土中	TP315
29	弥生土器	壺	石英・灰石	にほい緑	普通	側部附加条一體（附加2条）縦文施文。	東部壠土下層	TP303
30	弥生土器	壺	石英・灰石・赤丹子	灰	普通	側部附加条一體（附加1条）縦文施文。	中央部壠土層	TP317
31	弥生土器	壺	石英・灰石	にほい緑	普通	側部附加条一體（附加2条）縦文施文。羽状構成。	南西部壠土中	TP301
32	弥生土器	壺	石英・灰石・青透子	にほい緑	普通	側部附加条一體（附加2条）縦文施文。羽状構成。	南部床面	TP312
33	弥生土器	壺	石英・灰石	にほい緑	普通	側部附加条一體（附加2条）縦文施文。羽状構成。	中央部壠土下層	TP316

### 第8号住居跡（第101～103図）

位置 椰柵区南部のC 6号区に位置し、丘陵性台地縁辺部の南向き急斜面に立地している。

確認状況 約13度の傾斜地で確認された。他の遺構との重複はない、遺存状況は良好である。

規模と形狀 東西の長軸4.08m、南北の短軸3.53mの隅丸長方形である。南北の軸をもとにした主軸方向は、N=40°-Wである。壁はわずかに外傾して立ち上がりっている。壁高は斜面部に立地しているため、北側と南側で大きく異なり、北側で最大82cm、南側で最小8cmである。

床 ほぼ平坦で、炉を開むように中央部から壁際付近まで、踏み固められた硬化面が見られる。

炉 やや南西寄りで、4か所のピット間の中央部に付設されている。長径108cm、短径65cmの不整梢円形を呈し、炉床部の深さは約8cmである。炉床は全体的に赤変し、中央部が直径45cmほどの円形の範囲内で、レンガ状に硬化している。

#### 炉土層解説

- |         |                            |          |                         |
|---------|----------------------------|----------|-------------------------|
| 1 番 赤褐色 | 炭化粒子中量、燒土粒子・炭化物少量、ウレム粒子微量  | 3 にほい赤褐色 | ローム粒子中量、燒土粒子少額、燒土ブロック微量 |
| 2 番 赤褐色 | 燒土粒子中量、燒土ブロック・炭化粒子・ウレム粒子少量 |          |                         |

ピット 4か所。P 1～P 4の深さは25～68cmで、P 3がやや浅いが、規模と配置からいずれも柱穴と考えられる。

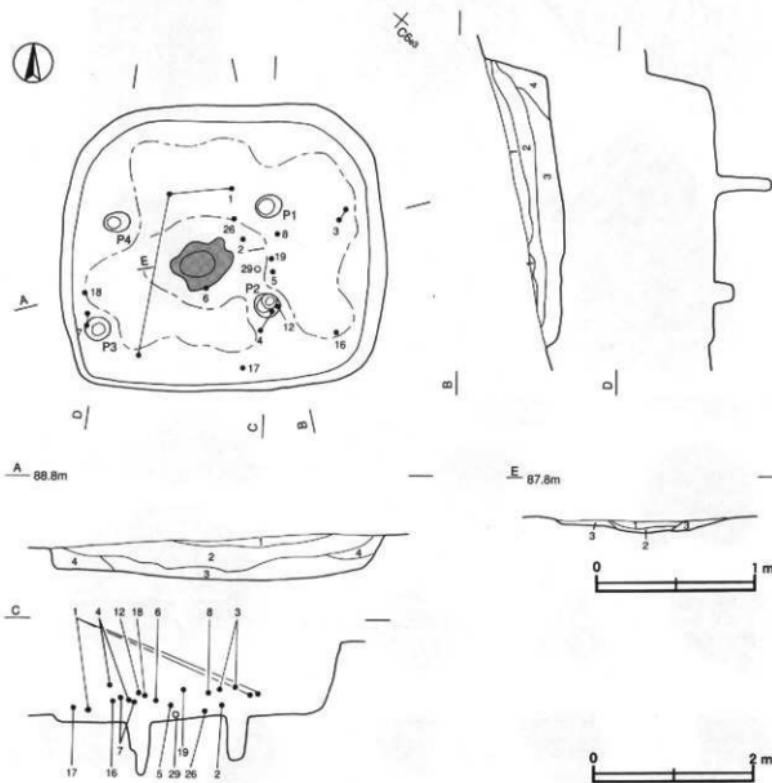
覆土 4層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層ともローム粒子を含んでいる。壁際から地形の傾斜に合わせて緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- |        |                     |        |                |
|--------|---------------------|--------|----------------|
| 1 壁面褐色 | ローム粒子少額、炭化粒子微量      | 3 壁面褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 床面褐色 | ローム粒子少額、燒土粒子・炭化粒子微量 | 4 明褐色  | ローム粒子中量        |

遺物出土状況 弥生土器片724点（口縁部37、頸部74、胴部589、底部片24）、上製品2点（紡錘車、土器片円盤）と、流れ込みと考えられる縦文土器片26点、石器1点（石礫）、剥片15点が出土している。遺物量は多いが、ほとんどが小破片で、形狀を復元できるものはなかった。主に中央部から南側を中心とする覆土中層から床面上で確認されている。床面上から出土した遺物は、全体量に比較して少ない。第102図1は散在した状態で覆土下層から、2～7も覆土下層から出土している。第103図29は、中央部の床面上から出土している。

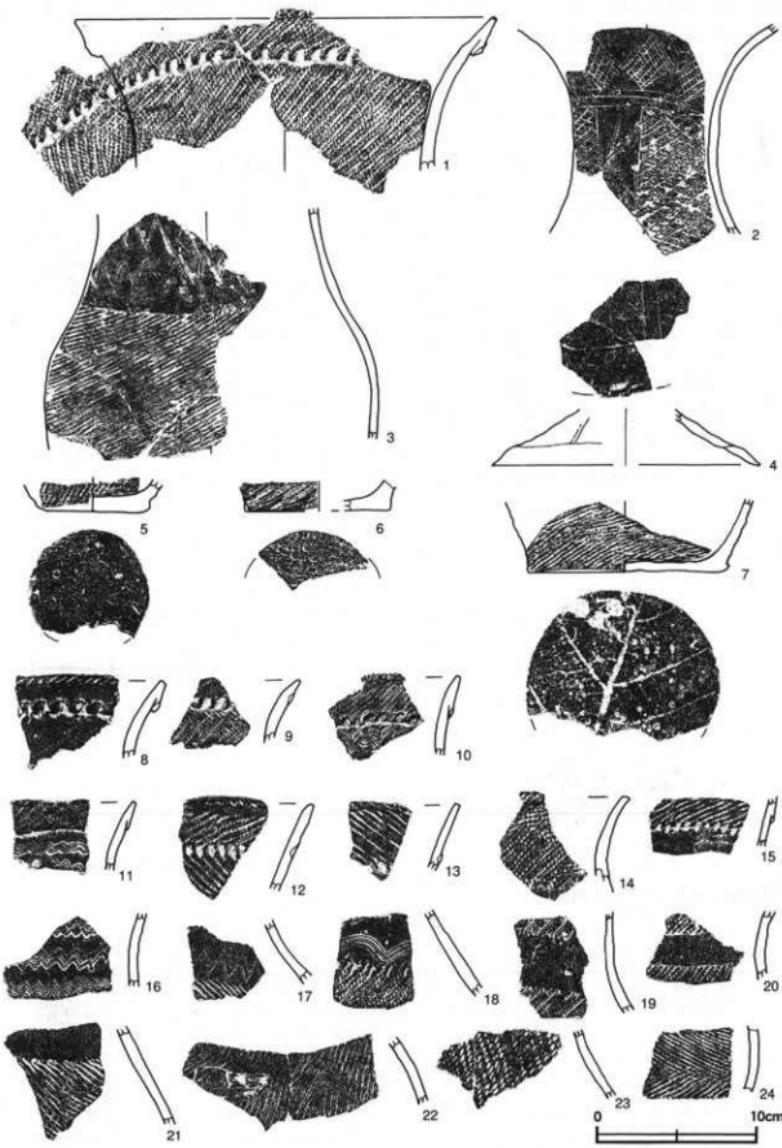
所見 遺物の出土状況から、その多くは住居廃絶時に投棄された可能性が高いと推測される。時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



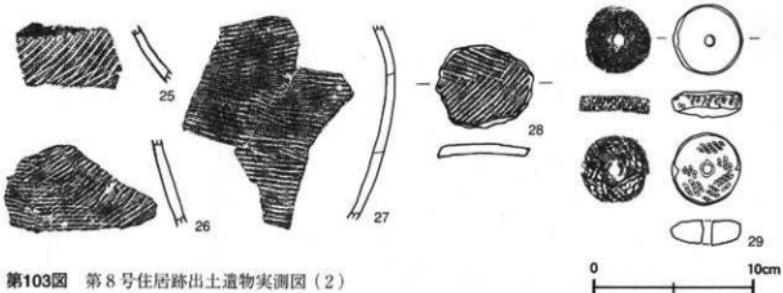
第101図 第8号住居跡実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第102図）

番号	種別	器種	口径	深さ	底形	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	[26.4]	(9.6)	一	石英・長石・礫	明赤	焼	口唇部繩文施文。口縁部と腹部にL字型縦縫繩文施文。口縁部下端を指屈面付。	東部居住土下層 PL45	P524 10%
2	弥生土器	壺	—	(11.0)	一	石英・長石・礫	こぶし灰	普通	3条の平行沈縫で文縫帶区画。口縁部は変形区画内に格子文施文。腹部は縫目縫により格子文と斜文のスリット施文。	中央部居住土上層 PL31	P536 10%
3	弥生土器	壺	—	(11.0)	一	石英・長石・礫	こぶし灰	普通	腹部脚附斜工具（4本脚附）による波状文を2段施文。	東部居住土下層 PL45	P525 5%
4	弥生土器	壺	[16.8]	(3.5)	一	石英・長石	黒	褐	段位に細沈縫施文。輪積みによる形成痕残存。	東部居住土上層 PL29	P529 5%
5	弥生土器	壺	—	(2.0)	7.1	石英・長石	こぶし灰	普通	脚附附加条一種（附加2条）縫文施文。底部無文。	中央部居住土上層 PL50	P550 5%
6	弥生土器	壺	—	(1.5)	[9.0]	石英・長石・赤色板子	こよい灰	普通	脚附附加条一種（附加1条）縫文施文。底部帯目模。	中央部居住土下層 PL51	P551 5%
7	弥生土器	壺	—	(4.3)	12.0	石英・長石・赤色板子	褐	普通	脚附附加条一種（附加2条）縫文施文。底部木質痕。内面剥離。	西側居住土下層 PL49	P549 5%



第102図 第8号住居跡出土遺物実測図（1）



第103図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	陶生土器	壺	長石・雲母・赤色粘土	にぶい褐	普通	口縁部に附加条一種(附加2条)施文。口縁部下端を狭い指頭押圧。	中央部覆土下層	TP327
9	陶生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部と口腹から腹部に附加条一種(附加1条)施文。口縁部下端指頭押圧。	北西部覆土中	TP333
10	赤生土器	壺	長石・雲母	黒	褐	口縫部純文施文。複合口縫部に附加条一種(附加2条)施文。口縫部下端純文施文。	中央部覆土下層	TP331
11	赤生土器	壺	石英・長石	灰	褐	複合口縫部に附加条一種(附加1条)施文。頭部側面工具(6本櫛齒)による波状文充填。	中央部覆土中	TP330
12	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい褐	普通	口縫部純文原体押圧。口縫部附加条一種(附加2条)純文施文。羽状構成。中央に結節部押圧。	南東部覆土下層	TP328
13	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい褐	普通	口縫部と口縫部附加条一種(附加2条)純文施文。下端純文原体押圧。	南東部覆土中	TP332
14	赤生土器	壺	長石	にぶい青黒	普通	口縫部と口縫部SLR單節純文施文。	南東部覆土中	TP338
15	赤生土器	壺	長石・雲母	にぶい棕	普通	口縫部附加条一種(附加2条)施文。口縫部下端純文原体押圧。頭部側面工具(4本櫛齒)による波状文充填。	南東部覆土中	TP334
16	赤生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	頭部側面工具(6本櫛齒)による波状文充填。	東南部覆土下層	TP336
17	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい赤褐	普通	頭部8条単位の波状描画。脇部附加条一種(附加2条)純文施文。	南東部覆土下層	TP340
18	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい赤褐	普通	頭部側面工具(5本櫛齒)による波状文。脇部SLR單節純文施文。	西南部覆土下層	TP342
20	赤生土器	壺	石英・長石・輝	にぶい褐	普通	口縫部と脇部附加条一種(附加2条)純文施文。頭部無文帶形成。	北西部覆土中	TP337
19	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい黄褐	普通	口縫部と脇部附加条一種(附加1条)純文施文。頭部無文帶形成。	中央部覆土中層	TP335
21	赤生土器	壺	長石	にぶい褐	普通	頭部附加条一種(附加2条)純文施文。	覆土中	TP341
22	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい褐	普通	頭部附加条一種(附加2条)純文施文。	覆土中	TP344
23	赤生土器	壺	長石	黒	褐	脇部SLR單節純文施文。	覆土中	TP339
24	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい棕	普通	脇部附加条一種(附加2条)純文施文。羽状構成。	覆土中	TP347
25	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい棕	普通	頭部附加条一種(附加2条)純文施文。	北西部覆土中	TP346
26	赤生土器	壺	石英・長石・赤色粘土	にぶい棕	普通	頭部附加条一種(附加2条)純文施文。	中央部床面	TP345
27	赤生土器	壺	石英・長石	黒	褐	頭部附加条一種(附加2条)純文施文。	北西部覆土中	TP343

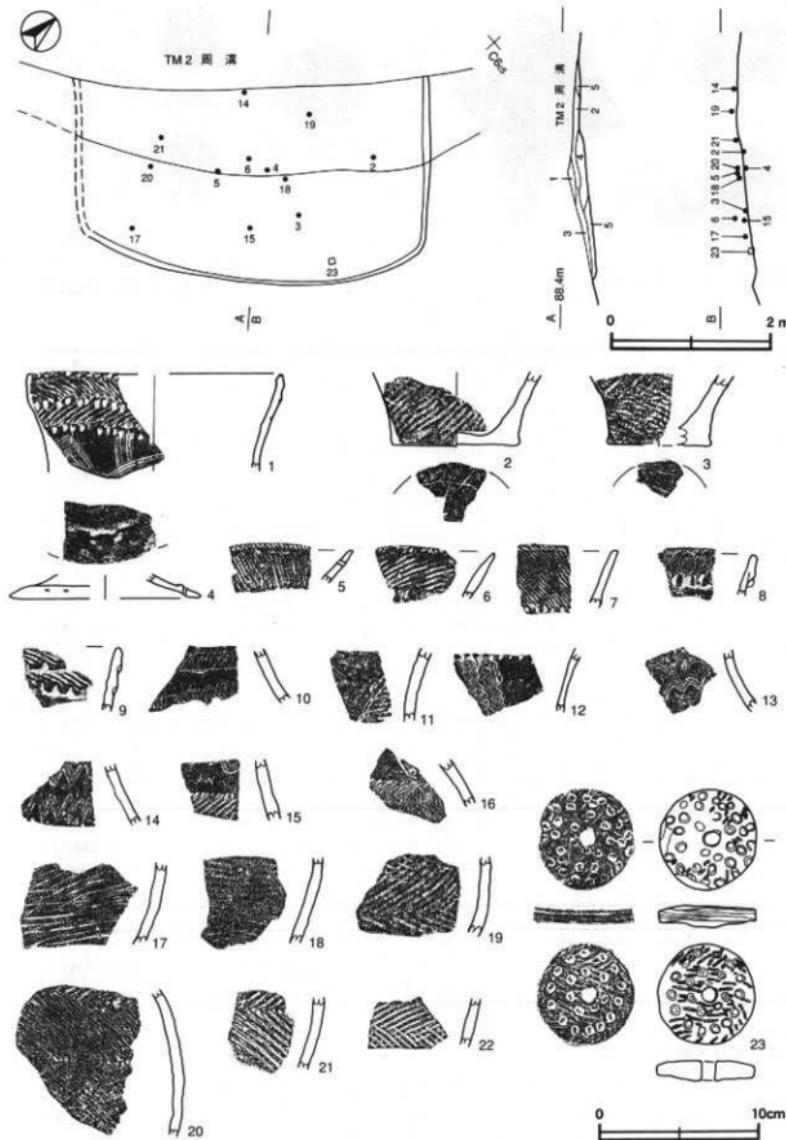
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考	
28	土器円盤	5.7	5.1	1.0	28	石英・長石・雲母	灰	黄褐	普通	脇部部の周縁濃離。附加条一種(附加2条)の羽状純文施文。	北西部覆土中	DP11
29	筋織車	4.3	4.4	1.7	30	石英・長石・雲母	にぶい棕	普通	上面無文。側面と下面にSLR單節純文施文。	中央部床面	DP3 PL43	

#### 第9号住居跡(第104図)

位置 調査区南東部のC 6 c5区に位置し、丘陵性台地縁辺の南東斜面に立地している。

重複関係 第2号墳の周溝によって掘り込まれている。また、南西側の壁と床の一部は、木根による搅乱を受けている。

規模と形状 東西軸は約4.5m、南北軸の長さは明確にできない。平面形は、遺存する東コーナー部の形状か



第104図 第9号住居跡・出土遺物実測図

ら隅丸長方形と考えられる。南北軸をもとにした主軸方向は、N-45°-Wである。壁はわずかに外傾して立ち上がっている。残存する壁高は、最大で15cmである。

**床** 地形に沿って、緩やかに南東部に傾斜している。硬化面は確認されなかった。

**炉** 確認されなかった。

**ピット** 確認されなかった。

**覆土** 遺存する覆土は薄いが、5層に分層される。各層ともローム粒子を含み、壁際から地形の傾斜に合わせて緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土器解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼上粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ローム粒子中量
2 黄褐色	ローム粒子少量、焼上粒子極微量	5 褐色	ロームブロック少量
3 黑色	ローム粒子少量、炭化粒子極微量		

**遺物出土状況** 弥生土器片276点(口縁部片14、頸部片30、肩部片218、底部片14)、土製品1点(紡錘車)と、流れ込みと考えられる繩文土器片7点が出土している。遺物量は多いが、すべてが小破片で形状を復元できるものはなかった。主に南東部を中心とする覆土下層から床面上で確認されている。第104図1は南西部の覆土中から、2~4・23は床面上から、それぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表 (第104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	断土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1 弥生土器	器	一	16.0	(6.0)	-	長石	黒	普通	口縁部及底付部に斜削痕・縫合跡・張り目等による歪曲及び凹凸がある。肩に斜削痕及び底付部に下落痕による歪曲及び凹凸。	南西部裏土中	P362 5%
2 弥生土器	器	-	(4.8)	[8.0]	石英・長石	にぶい黒	普通	腹部R.L.単施純文施文。底部木更裏。	東部床面	P372 10%	
3 弥生土器	器	一	(4.5)	[6.4]	長石・石英・赤玉子	明赤褐	普通	腹部附加条・一種(附加2条) 繩文施文。底部木更裏。	南西部床面	P373 5%	
4 弥生土器	器	一	[12.0]	(1.4)	石英・長石・赤玉子	明赤褐	普通	輪郭線による底付部が既成として残る。2段の焼成面で有り、	中央部床面	P374 5%	
									輪郭線による底付部が既成として残る。	PL43	

番号	種別	器種	断土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
5 弥生土器	高杯	石英・長石・赤玉子	明赤褐	普通	口縁部とL部に附加条一種(附加1条) 繩文施文。2個1單位の焼成底穿孔有り。	中央部裏土上層	TP354		
6 弥生土器	壺	石英・長石	灰	褐	普通	口唇とL口縁部附加条一種(附加2条) 繩文施文。口縁下端剥離現れ。	中央部裏土上層	TP355	
7 弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黒	普通	口縁部とL口縁部にR.L.単施鶴嘴文施文。口縁部下端剥離現れ。	南西部裏土中	TP356		
8 弥生土器	壺	石英・長石・赤玉子	にぶい黒	普通	口縁部と複合口縁部附加条一種(附加1条) 繩文。口縁下端剥離現れ。	東部裏土中	TP357		
9 弥生土器	壺	石英・長石・赤玉子	明赤褐	普通	L口唇部と複合口縁部に附加条一種(附加2条) 繩文施文。2段の複合口縁部下端を指揮押す。	南西部裏土中	TP358		
10 弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黒	普通	腹部側面凹面内に斜削子目文施文。	南西部裏土中	TP359		
11 弥生土器	壺	石英・長石・鶴嘴	明	褐	普通	腹部各部の凹面内に格子目文施文。	南西部裏土中	TP360	
12 弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黒	普通	L口下端剥離現れ押す。腹部側面凹面(7本輪廻)による輪廻状紋。	南西部裏土中	TP369		
13 弥生土器	壺	石英・長石・赤玉子	明	褐	普通	腹部側面L口(6本輪廻)による波状文。腹部凹面に横走文施文。	南西部裏土中	TP360	
14 弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黒	普通	腹部側面L工具(6本輪廻)による波状文施文。	中央部床面	TP371		
15 弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黒	普通	腹部側面L工具(4本輪廻)による波状文と單丸線の波状文。側面附加条一種(附加2条) 繩文施文。	中央部床面	TP367		
16 弥生土器	壺	灰・灰・赤玉子	にぶい	褐	普通	腹部側面の多条繩文。腹部側面不明の附加条繩文施文。	南西部裏土中	TP368	
17 弥生土器	壺	石英・長石	黒	褐	普通	腹部附加条一種(附加1条) 繩文施文。	南西部裏土中	TP362	
18 弥生土器	壺	石英・長石	黒	褐	普通	腹部附加条一種(附加2条) 繩文施文。	中央部裏土下層	TP363	
19 弥生土器	壺	石英・長石	浅	灰	普通	腹部附加条一種(附加2条) 繩文施文。剖状焼成。	中央部床面	TP364	
20 弥生土器	壺	石英・長石・赤玉子	にぶい	褐	普通	腹部附加条一種(附加2条) 繩文施文。剖状焼成。	南西部裏土中	TP365	
21 弥生土器	壺	石英・長石・赤玉子	墨	褐	普通	腹部附加条一種(附加2条) 繩文施文。剖状焼成。	西部床面	TP370	
22 弥生土器	壺	長石・白赤玉子	にぶい	褐	普通	腹部附加条一種(附加2条) 繩文施文。剖状焼成。	南西部裏土中	TP369	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
23	劫鏃車	6.2	6.0	1.3	52	石英・長石、雲母	にぶい 黄褐色	普通	上下向縦加条模文と竹管状工具の刺突文施文、輪面 浅溝周回。	東部床面	DP4 PL43

### 第10号住居跡（第105・106図）

位置 調査区南東部のC 6号区に位置し、丘陵性台地縁辺の南東斜面に立地している。

重複関係 北側の大半は、道路下部分で調査区域外のため未調査である。西側は第2号墳の周溝に掘り込まれ、南側の壁と床の一部は、第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 遺存状態が良くないため、規模は明確にできないが、東西軸は推定約5.0mである。平面形は東西の壁と東コーナー部の形状から、隅丸方形と考えられる。南北の壁をもとにした主軸方向は、N-30°-Wである。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。遺存する壁高は、最大で25cmである。

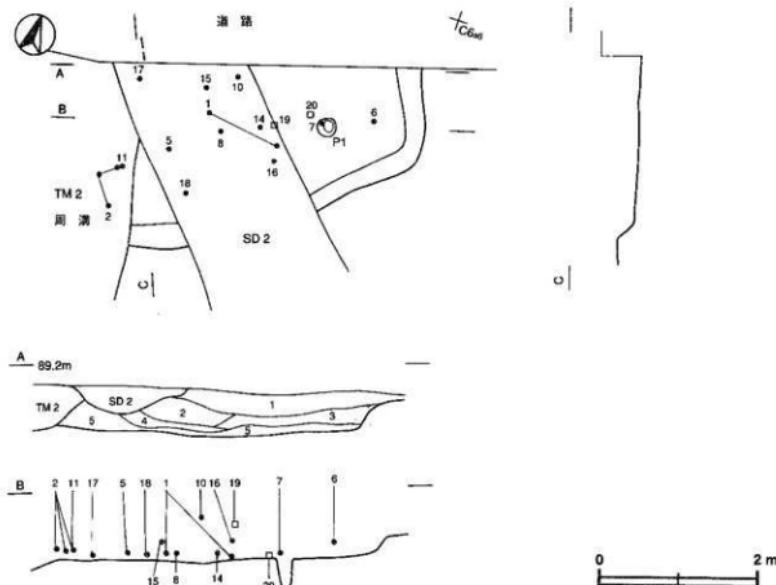
床 ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

炉 調査した範囲内では、確認されなかった。

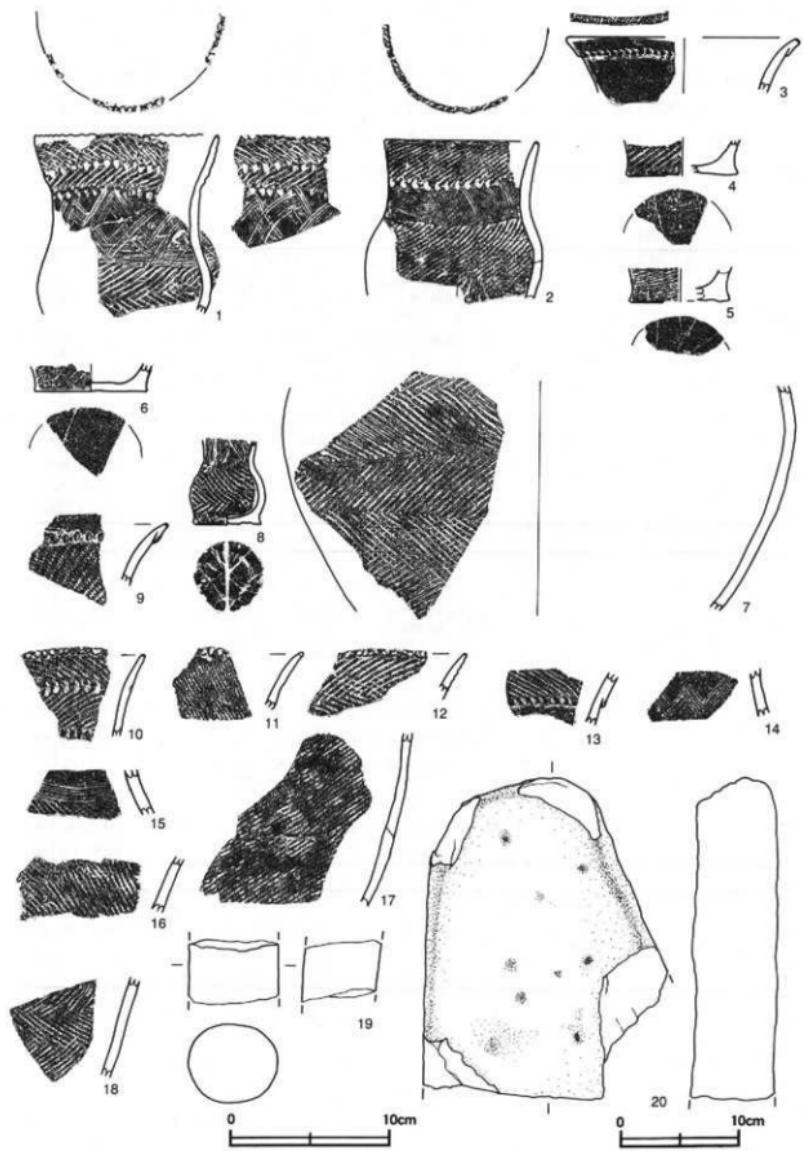
ピット 1か所。P1は深さ39cmで、規模と配置から柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層される。各層にローム粒子を含み、壁際から地形の傾斜に合わせて緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説			4 柱			5 施		
1	泥	色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	2	泥	色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	
2	泥	色	ローム粒子中量、燒土粒子、炭化粒子少量	3	泥	色	ローム粒子多量、炭化粒子・焼胡バミス少量、燒土粒子微量	



第105図 第10号住居跡実測図



第106図 第10号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 口縁部を欠損するミニチュア土器 1 点、弥生土器片 179 点（口縁部片 21、頸部片 20、胴部片 132、底部片 6）、石器 2 点（焼成石斧、磨石）と、流れ込みと考えられる縄文土器片 4 点、剥片 1 点が出土している。遺物量は少なく、すべて小破片であった。また、全城の覆土上層から、こぶし大の自然礫が約 10 点検出されている。第 106 図 1 は、中央部の覆土下層から破損した状態で出土している。8 は中央部の覆土下層から横位で出土している。19 は中央部の覆土上層、20 は東南部の床面上から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。

第 10 号住居跡出土遺物観察表 (第 106 図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底性	断面	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	[24]	[11]	一	砾・灰・赤茶色	にふい型	普通	口部縦溝文底押印、頸部壹種（附加 2 種）縄文を羽状に施文。口縁は羽状縫合の中央に底部底押印。下層に羽状文、焼成石斧工具（7 本側面）による横走文と垂直状の文様。	中央部下層	P375 10% PL31
2	弥生土器	壺	96	[9.7]	一	長石・赤茶色	にふい型	普通	口部縦溝文施文。口縫部と側部にしま單追縄文施文。口縫部下端に結節部押印。	中央部下層	P374 40% PL31
3	赤茶色土器	壺	[34]	[3.4]	一	長石・青母	にふい型	普通	口部縦溝文施文。蓋口縫部等に蓋に付着による遺状斜突丸。底部底印内に斜引子目文兆現。スリット状に墨芯部形成。	覆土上	P377 5%
4	弥生土器	壺	-	[24]	[7.0]	石英・長石	にふい型	普通	側部附加条一様（附加 2 種）縄文施文。底部木葉斑。	覆土中	P389 5%
5	弥生土器	壺	-	[24]	[6.1]	石英・白色粘子	釋	普通	側部縦明小羽附加条底施文。底部木葉斑。	中央部下層	P390 5%
6	赤茶色土器	壺	-	[17]	[7.0]	長石・赤茶色	にふい型	普通	側部附加条壹種（附加 2 種）縄文施文。底部木葉斑。	中央部下層	P391 5%
7	弥生土器	壺	-	[35]	一	石英・長石	にふい型	普通	側部附加条一様（附加 2 種）縄文施文。羽状構成。	東南部床面	P382 5%
8	赤茶色土器	壺	-	[5.3]	4.2	砂・長石・赤茶色	灰・黄・褐	普通	側部附加条一様（附加 2 種）縄文施文。底部木葉斑。	中央部下層	P376 80% PL31

番号	種別	器種	底性	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	弥生土器	壺	民石・青母	にふい型	普通	口部縦溝文施文。複合口縫部等で下唇指捺押印。頭部 J 型手筋縦溝文施文。	覆土中	TP379
10	弥生土器	壺	灰石・長石	にふい型	普通	口部縦溝文底押印。J 型手筋附加条一様（附加 2 種）縄文施文。羽状構成で結節部押印。	中央部上層	TP378
11	弥生土器	壺	石英・長石	にふい型	普通	口部羽状。口縫部附加条一様（附加 2 種）縄文施文。	中央部上層下段	TP381
12	弥生土器	壺	長石	にふい型	普通	J 型手筋附加条。口縫部附加条一様（附加 2 種）縄文。羽状構成。	覆土中	TP380
13	弥生土器	壺	石英・長石	にふい型	普通	J 型手筋附加条。羽状構成。	覆土中	TP387
14	弥生土器	壺	石英・長石	にふい型	普通	側部縦底凹状工具（6 本側面）による鉛錠状文施文。	中央部下層	TP386
15	弥生土器	壺	石英・長石	黃	燒	側部と側面曲面に側面削状工具（7 本側面）による横走文施文。頭部に波状文。頭部附加条一様（附加 2 種）縄文施文。	中央部下層中段	TP388
16	赤茶色土器	壺	石英・長石・建	にふい型	普通	頭部附加条一様（附加 2 種）縄文施文。	東部覆土下層	TP384
17	弥生土器	壺	石英・長石・赤茶色	にふい型	普通	頭部附加条一様（附加 2 種）縄文施文。	中央部床面	TP383
18	赤茶色土器	壺	長石	にふい型	普通	頭部附加条一様（附加 2 種）縄文施文。羽状構成。	南部覆土下層	TP385

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
19	焼成石斧	[4.0]	[7.7]	[4.9]	[191]	安山岩	赤・黄・青	普通	大型始刃石斧。全刃丁寧な削成。刃部と基部欠損。	中央部覆土上層	Q37
20	磨石	[26.9]	[19.3]	7.2	[6400]	花崗岩	にふい型	普通	自然石磨石。表面研磨に使用。中央部にくぼみと微細な凹凸有り。石面または白石膏用ワックス面赤茶。	東南部床面	Q38 PL42

第 11 号住居跡 (第 107・108 図)

位置 利用区東南部の B 6 ハウスに位置し、丘陵性台地縁辺の南東緩斜面部に立地している。

重複関係 第 4 号墳の墳丘下に構築されており、北東隅は周溝に掘り込まれている。さらに、東側から南側は斜面部のため、壁と床が流失しており遺存状況は良くない。

規模と形状 遺存部分が限られているため、規模は明確にできないが、北西側から西側にかけての壁とピット

の位置から、平面形は長径5.5m、短径4.5mほどの楕円形と考えられる。柱穴と推定されるピットと炉の位置をもとにした主軸方向は、N-10°-Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、遺存壁高は最大で5cmである。

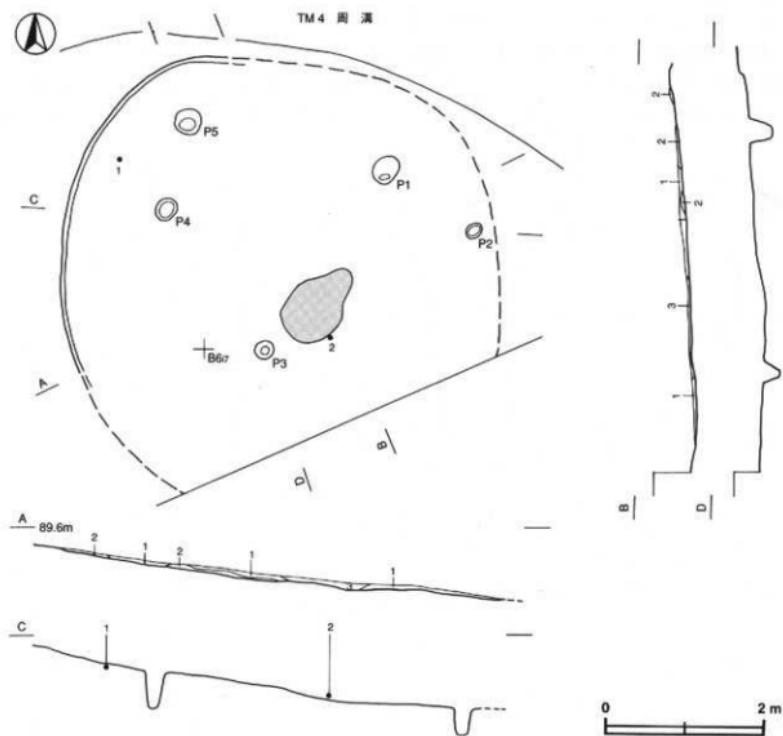
床 西側から東側に向かってやや傾斜し、東側の床は流失している。硬化面は確認されなかった。

炉 南側寄りに長径約110cm、短径約70cmの楕円形の範囲内に、わずかに焼土の散布が確認されたので、この位置に炉が付設されていたと考えられる。掘り込みは確認されなかった。

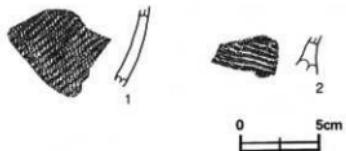
ピット 5か所。P1-P5は深さ27-48cmで、P1・P4・P5は、規模と配置から柱穴と考えられる。P2・P3の性格は不明である。

覆土 遺存する覆土はわずかであるが、3層に分層される。墻際から地形の傾斜に合わせて、緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土質解説				
1	褐色	色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	3
2	暗褐色	色	ロームプロック少量、炭化粒子微量	褐色



第107図 第11号住居跡実測図



遺物出土状況 弥生土器片2点（胴部片）のみの出土である。第108図1は北西壁際寄りの床面上から、2は炉と推定される位置に接した中央部の床面上から出土している。  
所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。

第108図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表 (第108図)

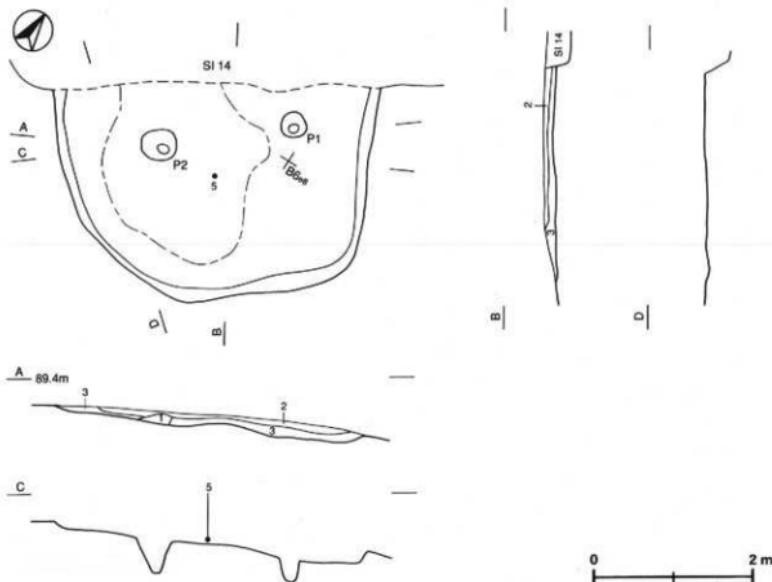
番号	種別	器種	胎土	色調	流域	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	器	石英・長石・雲母	褐	普通	胴部LR単節繩文施文。	北西壁際床面	TP392
2	弥生土器	器	石英・長石	灰褐色	普通	胴部附加条一種(附加2条)繩文施文。	中央部床面	TP393

第15号住居跡 (第109・110図)

位置 調査区東部のB6-e7区に位置し、丘陵性台地中央部の緩斜面に立地している。

重複関係 北西側は第14号住居に掘り込まれ、南東側の約半分が遺存している。

規模と形状 遺存する壁の形状と柱穴と考えられるピットの位置から、東西の短径4.05m、南北の推定長径5.0m前後で、平面形は橢円形と考えられる。南北の長径をもとにした主軸方向は、N-40°-Wである。壁は緩



第109図 第15号住居跡実測図

やかに外傾して立ち上がり、遺存する壁高は最大で16cmである。

床 緩やかに北東側に向かって傾斜している。南西寄りに、踏み固められた硬化面が確認された。

炉 遺存する範囲内では、確認されなかった。

ピット 2か所。P1は深さ29cm、P2は深さ38cmで、いずれも規模と配置から柱穴と考えられる。

覆土 遺存する覆土は薄いが、3層に分層される。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	褐色	ロームブロック少量 鹿沼バミス微量	3	暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子極微量
2	褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス微量、燒土粒子 子鉢微量			

遺物出土状況 弥生土器片17点（頸部片5、胴部片12）と、流れ込み及び混入と考えられる繩文土器片29点、土師器片8点が出土している。遺物量は少なく、すべて小破片である。ほとんどが覆土中に確認されており、第110図5は、床面上で出土したものである。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



第110図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表 (第110図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
1	弥生土器	盃	石英・長石	橙	普通	頭部撫歯状工具（6本櫛歯）による鉤型条線文施文。	東部覆土中	TP398	
2	弥生土器	盃	石英・長石・雲母	褐	灰	普通	頭部撫歯状工具（1本櫛歯）による連弧文施文。	東部覆土中	TP397
3	弥生土器	壺	石英	にぶい黄緑	普通	頭部附加条一様（附加2条）繩文施文。	東部覆土中	TP396	
4	弥生土器	盃	石英・長石	橙	普通	頭部撫歯不明の附加条繩文施文。	東部覆土中	TP395	
5	弥生土器	盃	石英・長石	にぶい黄緑	普通	頭部附加条一様（附加2条）繩文施文。羽状構成。	中央部床面	TP394	

第18号住居跡 (第111図)

位置 調査区東部のB 6 d9区に位置し、丘陵性台地中央部の平坦面に立地している。

確認状況 他の遺構との重複はない、遺存状況は良好である。

規模と形状 平面形は、長径5.48m、短径4.61mの不整楕円形である。南北の長径と柱穴と考えられるピットをもとにした主軸方向は、N-36°-Wである。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は7~22cmである。

床 北西から南東側に向かって、緩やかに傾斜している。硬化面は確認されなかった。

炉 確認されなかった。

ピット 4か所。P1~P4の深さは48~57cmであり、規模と配置から柱穴と考えられる。

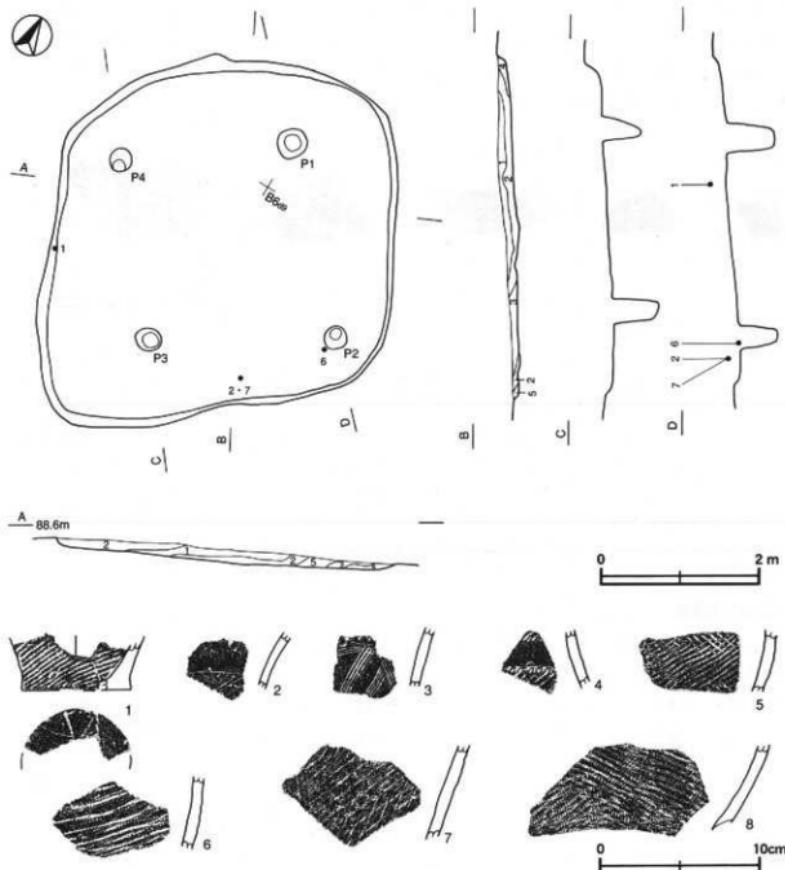
覆土 5層に分層される。鹿沼バミスを含む第1層に確認され、第2層と第3層が交互に堆積していることから、第1~3層は人為堆積で、壁際からレンズ状の堆積状況を示している第4・5層は自然堆積と考えられる。

## 土質解説

1 白 色	ロームブロック少量	4 明 橙 色	ローム粒子中量
2 黄 色	ロームブロック少量	5 黑 暗 色	ローム粒子中量、炭化粒子極微量
3 黑 暗 色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子極微量		

遺物出土状況 弥生土器片89点（口縁部片5、頸部片13、胴部片69、底部片2）と、流れ込み及び混入と考えられる繩文土器片17点、土師器片17点が出土している。遺物は少なく、すべて小破片である。ほとんどが、中央部から南東部壁際にかけての覆土中層から下層で確認された。第111図6は南東部の床面上、8はP4の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



第111図 第18号住居跡・出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表（第111図）

番号	種別	出土地	口径	容積	底形	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	陶土土器	東	13.0	16.8L	平底・長石	山砂・鐵	普通	割部附切条一種（附加2条）繩文施文。伝形木製器。	内側直下7m	P309	5%

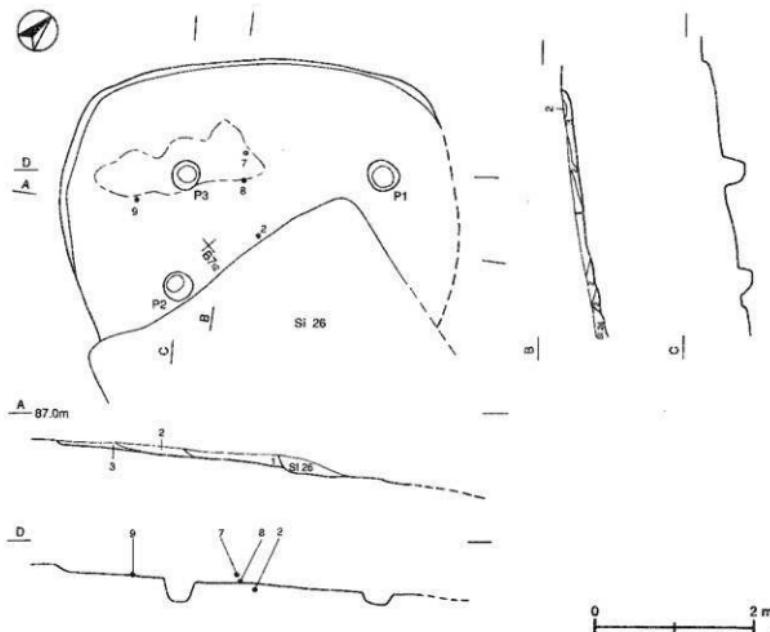
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
2	陶土_器	甕	石灰・長石	灰 黄	燒	普通	頭部を横位区画。区画内に斜格子目文施文。	南部後上下等	TP406
3	陶土土器	甕	石灰・長石	に赤い斑	普通	頭部彫畫状工具（5本輪歯）による横走文と山形文施文。	北西部腹土中	TP404	
4	陶土土器	甕	山砂・長石・鈍籽灰	明 赤	燒	普通	口縁部と側部附加条一種（附加2条）繩文施文。	覆土中	TP405
5	陶土土器	甕	石灰・長石	明 赤	燒	普通	側部附加条一種（附加2条）繩文施文。羽状構成。	南内部裏土中	TP402
6	陶土土器	甕	石灰・長石・壁	に赤い斑	普通	開部附加条一種（附加1条）繩文施文。	南東部床面	TP403	
7	陶土土器	甕	石灰・長石・鐵	飛	普通	側部施不明の純条体による繩文施文。	南部腹土下層	TP401	
8	陶土土器	甕	石灰・長石	に赤い	普通	側部SLR単節繩文施文。内面削摩。	P 4 覆土中	TP400	

第25号住居跡（第112・113図）

位置 調査区東部のB 7 c2区に位置し、丘陵性台地中央部の南東向き緩斜面に立地している。

重複関係 東側から南側部分を第26号住居に掘り込まれている。また、緩斜面部に当たることから、北東側と南西側の壁と床が流失している。

規模と形状 遺存する壁と床面から推定すると、長径約4.9m、短径4.0mで、平面形は橢円形と考えられる。



第112図 第25号住居跡実測図

南北の長径と柱穴と考えられるピットをもとにした主軸方向は、N-40°-Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、遺存する壁高は最大で12cmである。

床 北西から南東側に向かって、緩やかに傾斜している。P.3の周間に、わずかに硬化面が確認された。

炉 確認されなかった。

ピット 3か所。P.1-P.3の深さは15~26cmであり、規模と配置から柱穴と考えられる。

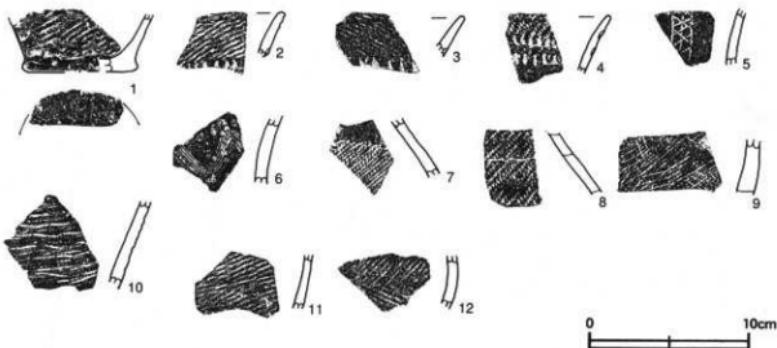
覆土 3層に分層される。壁際から中央に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黑褐色	ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子極微量	3 明褐色	ロームブロック少量
2 黄褐色	ローム粒子少量、炭化粒子極微量		

遺物出土状況 弥生土器片48点（口縁部片6、頸部片5、胴部片35、底部片2）と、流れ込み及び混入と考えられる繩文土器片16点、土師器片31点が出土している。遺物は少なく、すべて小破片である。主に中央部の覆土下層から床面上で確認された。第113図2・8・9は、中央部から南部にかけての床面上から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



第113図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表（第113図）

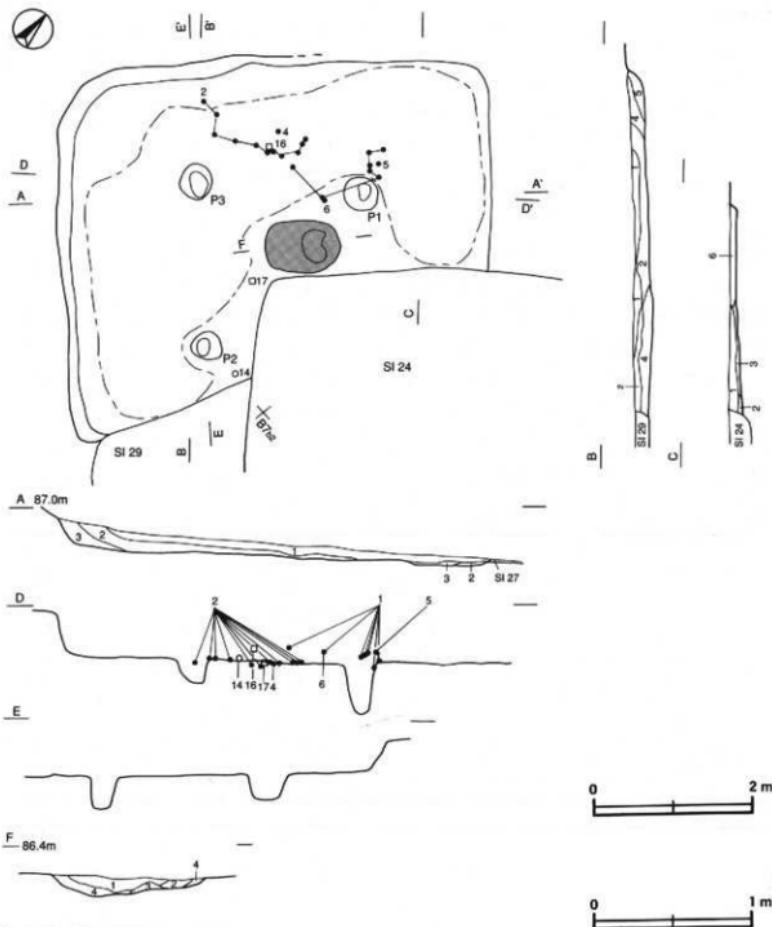
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	—	(3.6)	[7.3]	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	胴部附加条一種（附加2条）繩文施文。底部木柵痕。	南東部覆土中	TP418 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	弥生土器	壺	砂・長石・白色粒子	にぶい褐	普通	口唇と複合口縁部附加条一種（附加2条）繩文。下端楕円形原形押印。	中央部床面	TP407
3	弥生土器	壺	石英・長石	灰 黃褐色	普通	口唇と複合口縁部附加条繩文不明。口縁部下端に楕円形原形押印。	北東部覆土中	TP409
4	弥生土器	壺	石英・長石	黒	普通	複合口縁部L.R單節繩文施文。口唇部と口縁部下端に楕円形原形押印。	南東部覆土中	TP408
5	弥生土器	壺	長石	灰	普通	頭部に単孔狀による縱位の3条の沈線と斜格子目文施文。	南東部覆土中	TP417
6	弥生土器	壺	長石・赤色粒子	明赤 暗赤	普通	頭部単孔狀工具（6本櫛齒）による平行行文施文。	南東部覆土中	TP414
7	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐	普通	胴部附加条一種（附加1条）繩文施文。	中央部覆土中	TP413
8	弥生土器	壺	長石・赤色粒子	明赤 暗赤	普通	胴部附加条二種（附加2条）繩文施文。	中央部床面	TP415
9	弥生土器	壺	石英・雲母	明赤 暗赤	普通	胴部附加条一種（附加1条）繩文施文。	南部床面	TP411

番号	種別	器種	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	弥生土器	壺	長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	腹部附加条一種（附加1条）縄文施文。	南東部覆土中	TP410
11	弥生土器	壺	石英・長石	灰	褐	普通	腹部附加条一種（附加2条）縄文施文。	北東部覆土中
12	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	腹部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP416

### 第28号住居跡（第114～116図）

位置 調査区東部のB 7 a1区に位置し、丘陵性台地中央部の平坦面に立地している。



第114図 第28号住居跡実測図

**重複関係** 北側部分は第27号住居跡をわずかに掘り込んでいる。また、東側部分は第24号住居と第29号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 他の住居跡との重複はあるが、壁と床面の遺存状況は良好である。遺存する壁と床面の範囲から、長軸5.34m、短軸は推定4.5mで、平面形は隅丸長方形と考えられる。南北軸と炉の位置をもとにした主軸方向は、N-40°-Eである。壁はやや外傾して立ち上がり、遺存する壁高は最大で37cmである。

**床** ほぼ平坦である。炉を開むように踏み固められており、壁際まで硬化面が広がっている。

**炉** ほぼ中央に付設されている。長径96cm、短径65cmの梢円形で、床面を14cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内の覆土は4層に分層され、炉床面は被熱し変硬化している。

#### 炉土層解説

1 黑 色	燒土粒子中量、炭化物・炭化粒子少量、ローム 粒子・底沼バミス微量	3 鳴 橋 色	燒土粒子多量、燒土ブロック中量、炭化粒子・底 沼バミス少量、ローム粒子微量
2 紅 黑 色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、底沼バ ミス微量	4 黑 橙 色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・底沼バミス少 量、炭化物微量

**ピット** 3か所が確認された。P1-P3の深さは33-67cmで一定ではないが、規模と配置から柱穴と考えられる。北東側の柱穴と想定するピットは、第24号住居によって掘り込まれたものと考えられる。

**覆土** 6層に分層される。壁際から中央に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 鳴 橋 色	炭化粒子中量、炭化物・ロームブロック少量
2 紅 黑 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	5 楠 色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、燒土粒子微量
3 黑 橙 色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 橙 色	ロームブロック中量、燒土粒子少量

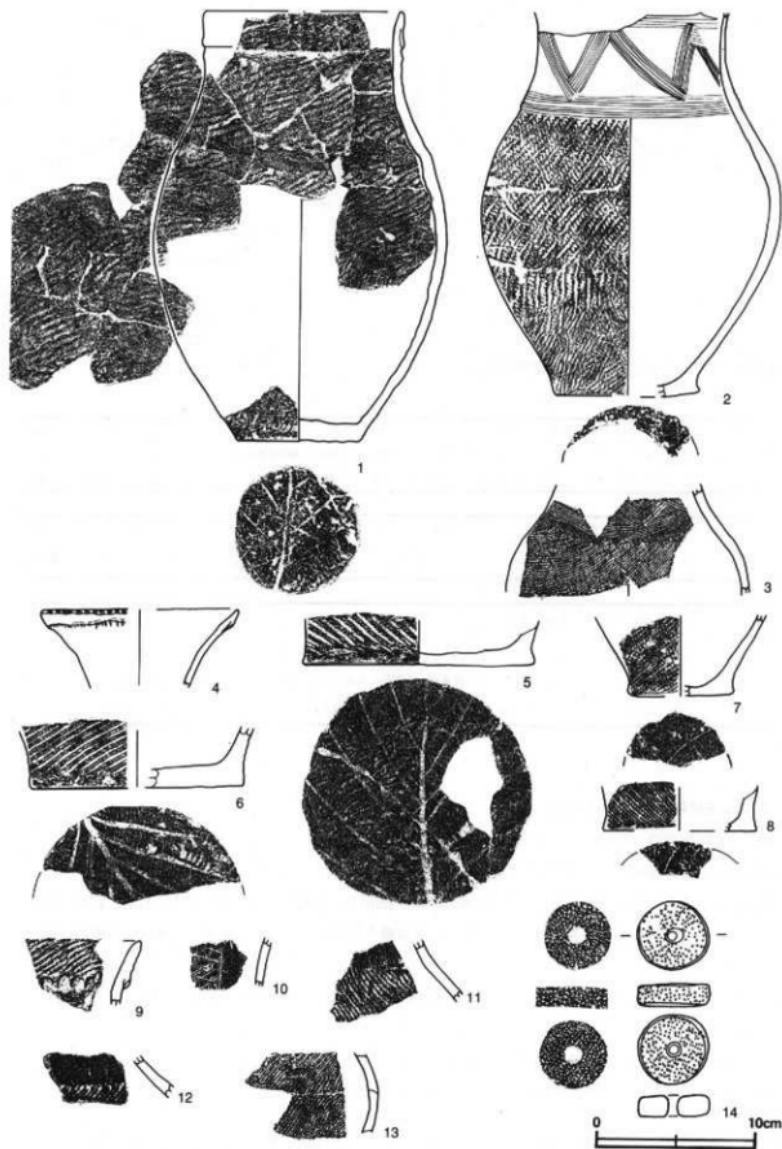
**遺物出土状況** 形状が復元できた壺形土器2点と弥生土器片278点(LJ縁部片12、頸部片20、胴部片238、底部片8)、土製品1点(紡錘車)、石器3点(磨石、敲石、石頭)と、流れ込み及び混入と考えられる縄文土器片16点、土師器片31点が出土している。遺物は比較的多いが、ほとんどが小破片である。主に中央部から北西部の覆土中層から床面上で確認されている。形状が復元できた第115図1・2は、いずれも散在した状態で床面上から出土している。5・6は覆土下層、14と第116図17は床面上からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。

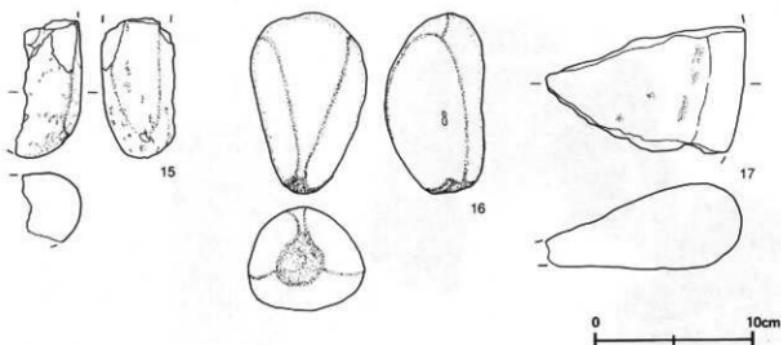
第28号住居跡出土遺物観察表 (第115・116図)

番号	機種	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	後成	手法の特徴	出土位置	備考
1	赤土土器	壺	[12.2]	[26.8]	7.7	石英・長石 ・雲母	に赤い網	普通	口縁部下端にキザミ。口縁部から胴部にL字の無鉛 縄文施文。底部木質裏。	中央部 [上四部底]	P420 35%
2	弥生土器	壺	-	[22.5]	[9.0]	石英・長石 ・雲母	に赤い網	普通	腹部側面状工具(6本櫛向)による横文と山形文。胴部 背筋加条一様(附加2条)縄文施文。櫛目下邊にはR単筋 縄文施文。底部木質裏。頭部から側面にL字に壓付施文。	西側表面 M31	P419 80%
3	赤土土器	壺	-	[7.0]	-	石英・長石 ・雲母	に赤い網	普通	腹部側面状工具(6本櫛向)による横文と山形文。 胴部側面附加条一様(附加2条)縄文施文。	南東部覆 土中 PL5	P421 5%
4	赤土土器	壺	[12.3]	[5.1]	-	石英・長石 ・雲母	に赤い網	普通	口等部に縄文施文。口縁部下端に櫛形のキザミ。	西側表面 M22	15%
5	赤土土器	壺	-	[22.8]	14.4	石英・長石 ・雲母	に赤い網	普通	腹部側面附加条一様(附加2条)縄文施文。底部木質裏。内凹消済。	北東部上手 M21	P420 5%
6	赤土土器	壺	-	3.6	[13.3]	石英・長石 ・雲母	明赤泥	普通	腹部側面附加条一様(附加2条)縄文施文。底部木質裏。	赤土土器上 M20	P420 5%
7	赤土土器	壺	-	5.0	[6.6]	石英・長石 ・雲母	に赤い網	普通	腹部側面附加条一様(附加1条)縄文施文。底部木質裏。	北東部上手 M20	P430 5%
8	赤土土器	壺	-	[2.8]	[9.5]	石英・長石・雲母 ・石英	に赤い網	普通	腹部側面附加条一様(附加2条)縄文施文。底部木質裏。	質土中 PL31	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	後成	手法の特徴	出土位置	備考
9	赤土土器	壺	石英・長石 ・雲母	に赤い網	普通	口縁部と窓口縁部に附加条一様(附加2条)縄文施文。口縁部下 端指輪押出し。頭部に模様の多条縦文施文。	東南部覆土中 TP423	
10	赤土土器	壺	石英・長石 ・雲母	に赤い網	普通	頭部沈線による模様面画後、斜筋状状文施文。無文のスリット形成。	P2覆土中 TP427	
11	赤土土器	壺	石英・長石	塵	普通	頭部無文削形。頭部附加条一様(附加2条)縄文施文。	覆土中 TP425	



第115図 第28号住居跡出土遺物実測図（1）



第116図 第28号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
12	赤生土器	壺	石英・長石	褐	普通	腹部側面工具(6本鉤痕)の波状文。胴部附加条一種(附加2条)純文。	南西部覆土中	TP426
13	赤生土器	壺	石英・長石	にぶい褐	普通	腹部附加条一種(附加2条)純文施文。	南東部覆土中	TP424

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	粘土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
14	軽輪車	4.3	4.4	1.5	35	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	上・下面と側面斜交文光面。孔は使用により上下面からロート状に開口。	南東部床面	DP5 PL43

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
15	磨石	(8.6)	(4.1)	(4.7)	(183)	安山岩	自然磨素材。表裏面、側面研磨に使用。	南西部覆土中	Q41
16	敲石	11.1	7.3	6.6	704	安山岩	自然磨素材。下端部と上面の一部に敲打痕。側面に運付着。	西部覆土下層	Q40 PL40
17	石皿	(12.4)	(7.9)	(5.2)	(616)	安山岩	表裏両面を使用。縁に縫有り。	中央部床面	Q39

### 第32号住居跡(第117・118図)

位置 調査区東部のB 7 b2区に位置し、丘陵性台地中央部の平坦面に立地している。

重複関係 北西側部分は、第24号住居と第29号住居に掘り込まれている。

規模と形状 遺存する壁と床面から、長径4.56m、短径3.6mで、平面形は楕円形と考えられる。長径と炉の位置をもとにした主軸方向は、N-7°-Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、遺存する壁高は最大で12cmである。

床 北西から南東に向かってやや傾斜している。南側寄り部分は、炉を囲むように踏み固められて、硬化面が広がっている。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径75cm、短径52cmの楕円形で、床面を21cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内の覆土は5層に分層され、炉床面は被熱し赤変硬化している。

#### 炉土層解説

1 墓赤褐色	焼土粒子中量。炭化粒子・ローム粒子少量	4 赤褐色	焼土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 墓赤褐色	焼土ブロック中量。ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 明褐色	ロームブロック中量。焼土粒子少量
3 墓赤褐色	焼土粒子中量。炭化粒子少量		

ピット 確認されなかった。

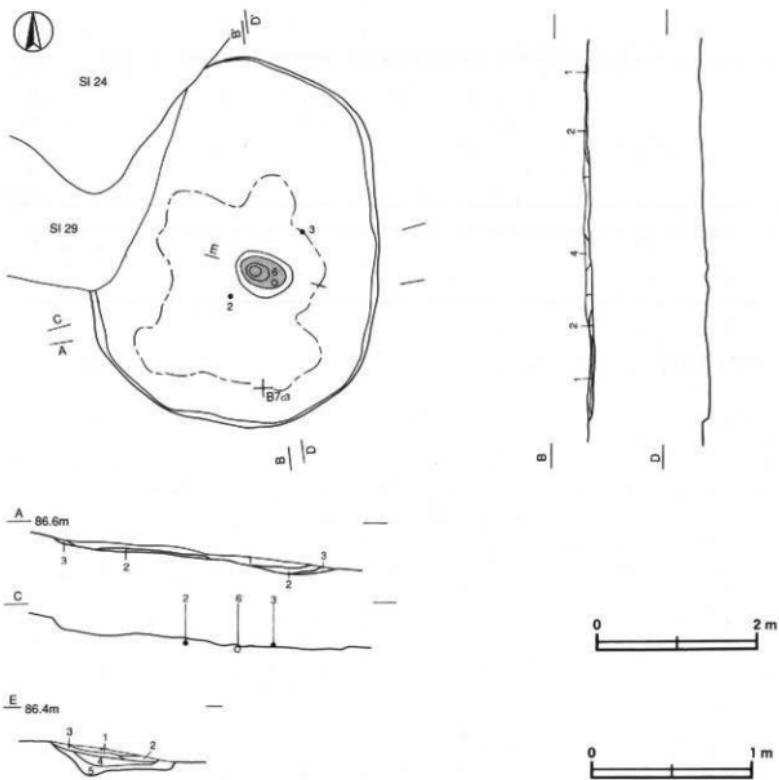
覆土 4層に分層される。縁際から中央に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土質解説

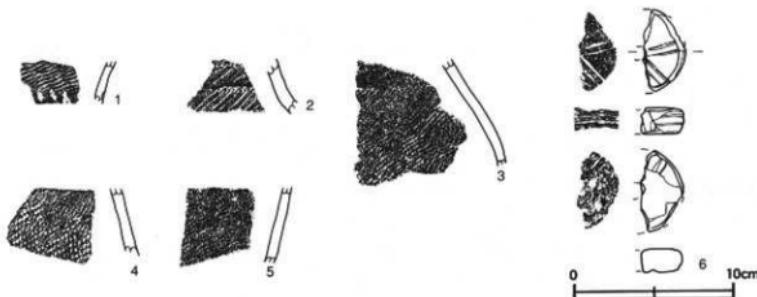
1	褐	色	ローム粒子少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量	3	褐	色	燒土粒子多量
2	明	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	4	褐	色	燒土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量

遺物出土状況 弥生土器44点（口縁部片3、頭部片6、胴部片35）、土製品1点（紡錘車）と、流れ込みと考えられる繩文土器片44点、剥片2点が出土している。遺物量は少なく、すべて小破片である。主に中央部炉周辺の覆土下層から床面上で確認されている。また、覆土中から自然縫が約10点確認され、うち3点は被熱痕を有していた。第118図2・3は床面上、6は炉床上から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



第117図 第32号住居跡実測図



第118図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表 (第118図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	陶生土器	壺	石英・長石 にぶい赤褐	普通	複合口縁部附加条一種(附加2条)織文。口縁部下端織文原体押圧。	北西部覆土中	TP437	
2	陶生土器	壺	石英・長石 灰	普通	頸部無文帯形成。口縁と頸部附加条一種(附加1条)織文施文。	中央部床面	TP436	
3	陶生土器	壺	EK-長E-蛇足子壺 明 赤 褐	普通	頸部無文帯形成。胴部L R 単筋織文施文。	中央部床面	TP435	
4	陶生土器	壺	石英・長石・輝 明 赤 褐	普通	胴部L R 単筋織文施文。	印覆土中	TP434	
5	陶生土器	壺	石英・長石・輝 明 赤 褐	普通	胴部L R 単筋織文施文。	南東部覆土中	TP433	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
6	紡錘車	(5.0)	(2.6)	1.6	(20)	石英・長石・雲母	橙	普通	上・下面2条1単位の沈線を放射状に施文。側面2条単位の沈線間開。	炉床面	DP6 PL43

第36号住居跡 (第119・120図)

位置 調査区東部のB 7 a9区に位置し、丘陵性台地先端部に近い緩斜面に立地している。

確認状況 南西コーナー部付近は、木根による搅乱を一部受けている。また、覆土上層にも木根が入り込んでいたが、覆土下層と床面の広がりから遺構の規模と形状を捉えることができた。

規模と形状 遺存する壁と床面から、南北軸4.58m、東西軸4.54mで、平面形は隅丸方形と考えられる。南北軸とピットを柱穴の配列として捉えた主軸方向は、N - 6° - Wである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、遺存する壁高は9~15cmである。

床 西側から東側に向かってやや傾斜している。東側寄りの炉を囲む範囲は、踏み固められて硬化面が広がっている。また、床面の北側から西側にかけて、焼土や炭化物の散布が確認された。

炉 中央部からやや北西寄りに付設されている。長径42cm、短径36cmの梢円形で、掘り込みはなく床面を直接炉床とした地床炉と推定される。炉の南東側に細長い自然縫を用いた炉石2点が据えられており、炉床には焼土の散布が確認された。炉石はいずれも被熱痕を有し、脆くなっている。

ピット 4か所。P 1~P 4の深さは38~66cmで、規模と配置から柱穴と考えられる。

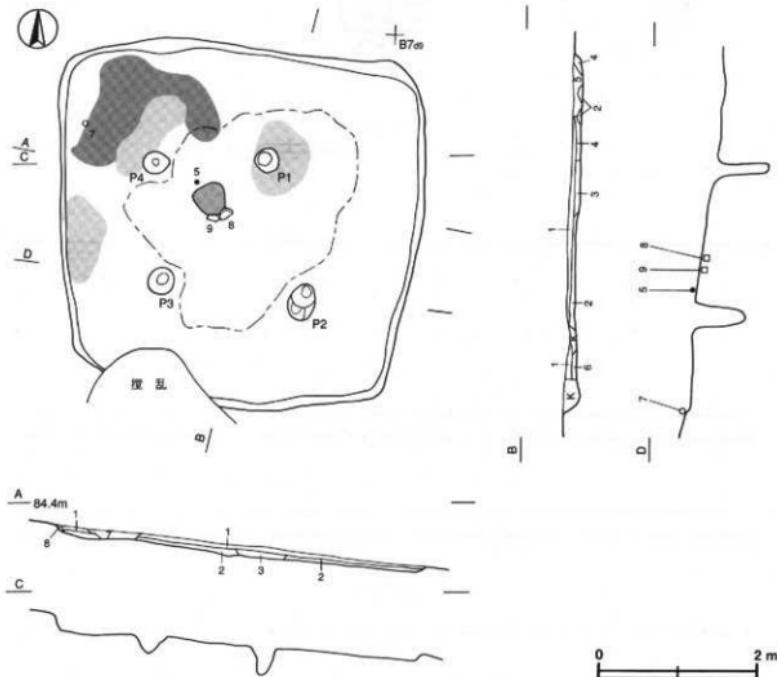
覆土 8層に分層される。全体に平行的な堆積状況を示していることから、人为堆積と考えられる。

土層解説

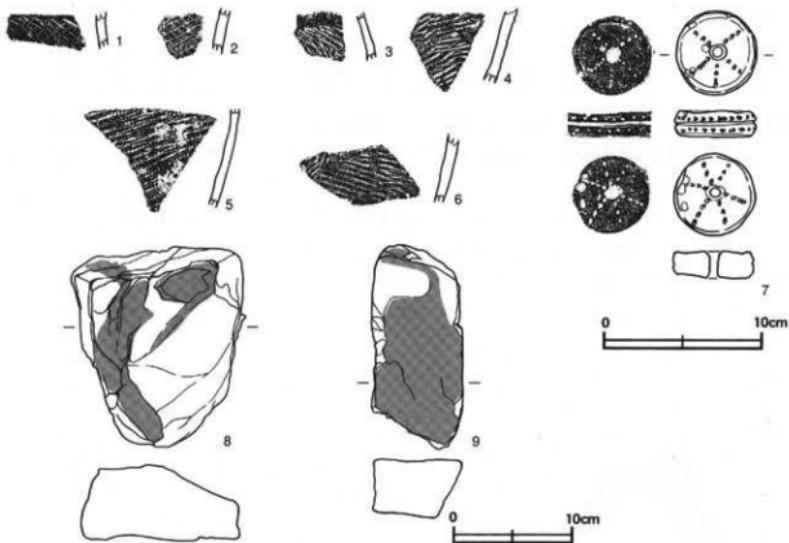
1 灰褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 灰褐色	炭化粒子中量、炭化材・ローム粒子少量
2 にぶい褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極微量	6 にぶい褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子極微量
3 にぶい赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	7 灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
4 灰褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量	8 にぶい褐色	ローム粒子多量、焼土粒子極微量

遺物出土状況 弥生土器片14点（頸部片3, 脊部片11）、土製品1点（紡錘車）、炉石2点と、流れ込み及び混入と考えられる縄文土器片109点、土師器片7点が出土している。本跡に伴う遺物は少なく、すべて小破片である。主に覆土下層から床面上で確認されている。覆土上層からは、埋め戻しの際に流れ込んだと考えられる多量の縄文土器片が出土している。こぶし大以上の自然礫が12点ほど確認され、半数は被熱痕を有している。第120図5は中央部の床面上、7は西壁際の床面上から出土したものである。

所見 覆土中に焼土粒子と炭化粒子が含まれ、北側から西側の床面には、炭化物や焼土が貼り付くように確認されたことなどから、焼失した住居と考えられる。時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



第119図 第36号住居跡実測図



第120図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表 (第120図)

番号	種別	器種	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄橙	普通	頭部上端に横枝沈線。頭部斜格子目文施文。	覆土中	TP442
2	弥生土器	壺	石墨・長石・鉄鉱子	にぶい黄橙	普通	頭部斜格子目文施文。	覆土中	TP443
3	弥生土器	壺	石英・長石・輝	にぶい黄橙	普通	頭部無文帶形成。副部附加条一種(附加2条)繩文施文。	覆土中	TP439
4	弥生土器	壺	石英・長石	褐	普通	副部附加条一種(附加2条)繩文施文。	覆土中	TP438
5	弥生土器	壺	石英・長石・輝	にぶい黄橙	普通	副部附加条一種(附加1条)繩文施文。	中央部床面	TP440
6	弥生土器	壺	石英・長石	明	褐	副部附加条一種(附加2条)繩文施文。	覆土中	TP441

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	粘土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
7	砂輪車	5.0	5.1	1.6	55	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	上・下間に放射状の刺突文施文。側面に周割する沈線と上下に連続刺突文を施文。上面周縁に後有り。	西壁際床面	DP7 PL43

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
8	炉石	16.8	14.7	6.4	1,940	砂岩	被熱して赤変。	伊南東部	Q42
9	炉石	16.9	7.8	4.8	1,270	砂岩	被熱して赤変。ヒビが入り脆弱。一部剥付着。	伊南部	Q43

第39号住居跡 (第121図)

位置 調査区東部のA7号区に位置し、丘陵性台地先端部に近い平坦面に立地している。

重複関係 西側の大半を、第35号住居に掘り込まれている。北側は第37号住居跡と床面が同一であることを確認したが、重複部分の壁を明確にすることはできなかった。

**規模と形状** 北東側から東側に遺存する壁と床面から、規模は長径約5.2m、短径4.0m前後と推定される。平面形は梢円形と考えられ、長径をもとにした主軸方向は、N-13°-Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、遺存する壁高は最大で10cmである。

**床** 平坦であり、遺存する範囲内に硬化面は確認されなかった。

**炉** 確認されなかった。

**ピット** 確認されなかった。

**覆土** 2層に分層される。遺存する覆土は薄いが、各層にローム粒子を含み、平行な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

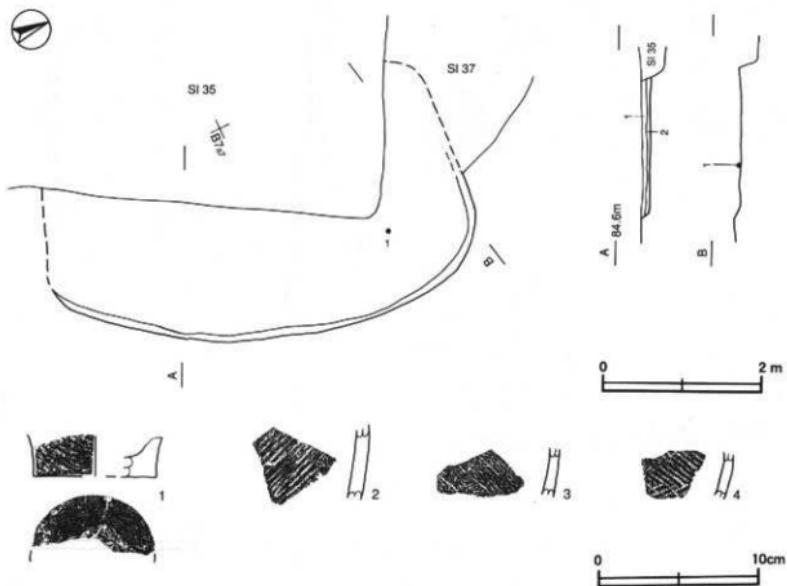
**土層解説**

1 底 色 ローム粒子少量、焼土粒子極微量

2 周 色 ロームブロック中量、焼土粒子極微量

**遺物出土状況** 弥生土器片49点（頸部片4、胴部片44、底部片1）、石器1点（砥石）と、流れ込み及び混入と考えられる縄文土器片11点、土師器片21点が出土している。遺物は少なく、すべて小破片である。ほとんどが覆土中層から床面上で確認されている。第121図1は北東部の床面上、2~4は南東部の覆土中から、それぞれ出土したものである。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。



第121図 第39号住居跡・出土遺物実測図

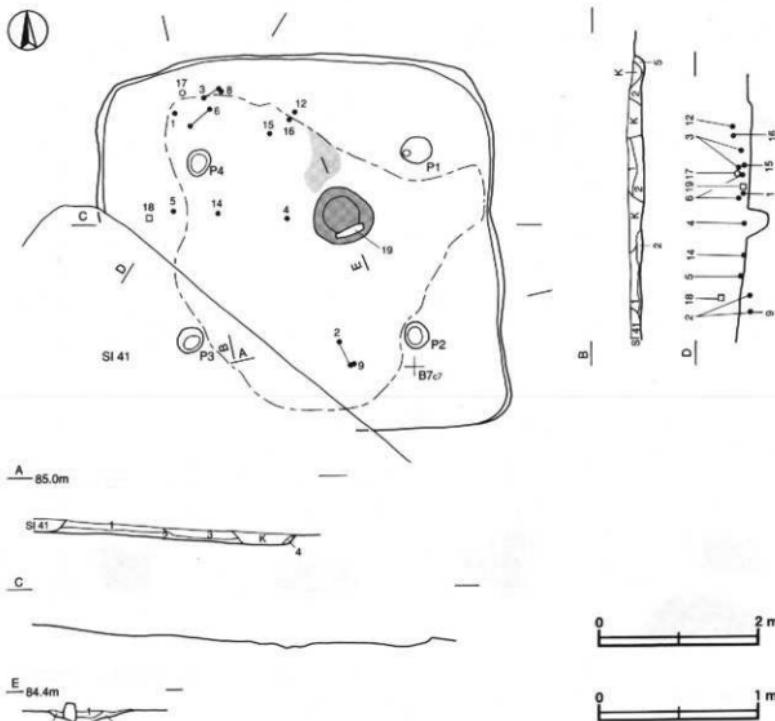
第39号住居跡出土遺物観察表 (第121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	陶生土器	壺	—	[2.5] [7.7]	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	胴部R L 単沿縄文施文。底部無文。		北東部床面	P147 5%
2	陶生土器	壺	石英・長石・灘	褐色	灰	普通	胴部輪縄不明の附加条縄文施文。			南東部覆土中	TP444
3	陶生土器	壺	石英・長石	褐色	灰	普通	胴部絆条縄文施文。			南東部覆土中	TP445
4	陶生土器	壺	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	胴部附加条一様(附加2条) 縄文施文。羽状構成。				南東部覆土中	TP446

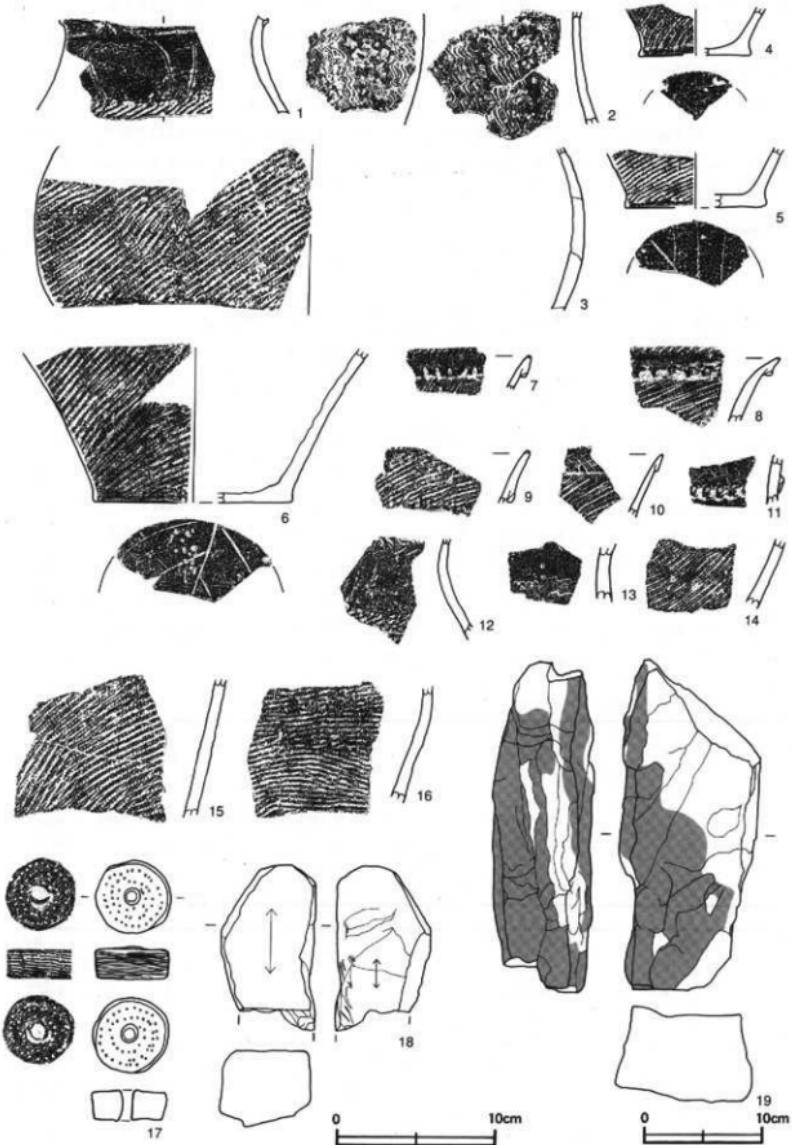
第40号住居跡 (第122・123図)

位置 調査区東部のB 7 b6区に位置し、丘陵性台地先端部に近い平坦面に立地している。

重複関係 南西側は、第41号住居と床面の高さをほぼ同じにして重複している。また、南側の壁の一部は、壁の立ち上がりが確認されなかった。



第122図 第40号住居跡実測図



第123図 第40号住居跡出土遺物実測図

**規模と形状** 遺存する壁と床面から、東西の長軸4.94m、南北の短軸4.70mで、平面形は端丸方形と考えられる。南北軸と炉の位置をもとにした主軸方向は、N=5°-Wである。壁はやや外傾して立ち上がり、遺存する壁高は最大で15cmである。

**床** ほぼ平坦であり、炉を囲むように4か所のピットの内側部分に硬化面が確認された。

**炉** 中央部やや北東寄りに付設されている。長径77cm、短径70cmの梢円形で、床面を16cmほど掘り込んだ地床炉である。南東部に柱状の自然礫を用いた炉石が据えられている。炉内および炉石には赤変が見られ、炉床部の中央は硬化している。

#### 炉土層解説

1 焼 黒褐色	炭化粒子中量、地上粒子・ローム粒子少量、焼土ブロック微量	3 極 黑褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 断赤褐色	燒土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量		

**ピット 4か所** P1-P4の深さは27~32cmで、規模と配置から柱穴と考えられる。

**覆土** 5層に分層される。遺存する覆土は薄く、一部木根による擾乱が入り込んでいる。各層にロームブロックやローム粒子を含み、小規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 極 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、燒土粒子極微量	4 極 色	ローム粒子多量、鹿沼バミス微量
2 第三層 白	ロームブロック中量、燒土粒子少量	5 黒褐色	ローム粒子中量
3 黒褐色	炭化粒子・ロームブロック少量		

**遺物出土状況** 弥生土器片179点（口縁部片8、頸部片13、胸部片154、底部片4）、土製品1点（紡錘車）、石器1点（石刀）、炉石1点と、流れ込み及び混入と考えられる縄文土器片29点、上部器片31点が出土している。また、剥片が10点確認されたが、石英が7点、チャートが3点である。遺物は少なく、すべて小破片である。ほとんどが中央部から北西部にかけての覆土下層および床面上で確認されている。第123図1・3・5は覆土下層、2・4・5は床面上から出土している。17は北部壁際の覆土下層から出土したものである。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。

第40号住居跡出土遺物観察表（第123図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	船上	色調	焼度	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(6.1)	-	石英・長石・輝	に赤い	普通	口縁部下端にキズ1。剥離部全周縁（附加2条）縦文施文。	北部覆土下層 PL43	5%
2	弥生土器	壺	-	(6.0)	-	石英・長石・輝	無	普通	面部上端に横向の多条繩様文。剥離部表面（6本剥離）による複数の波状文丸孔。	南部覆土下層 PL45	5%
3	弥生土器	壺	-	(3.0)	-	石英・長石・輝	光	普通	頸部附加条一様（附加2条）縦文施文。内田病跡。	北部覆土下層 PL41	5%
4	弥生土器	壺	-	(2.9)	1.63	55%灰土粒子多量	に赤い	普通	腹部附加条一様（附加1条）縦文施文。底部本焼痕。	北部床面 PL45	5%
5	弥生土器	壺	-	(3.4)	1.65	64%長石・輝石	に赤い	普通	腹部附加条一様（附加2条）縦文施文。底部本焼痕。	西部床面 PL46	5%
6	弥生土器	壺	-	(6.5)	2.24	46%長石・輝	に赤い	普通	腹部附加条一様（附加2条）縦文施文。底部本焼痕。	北部覆土下層 PL48	10%

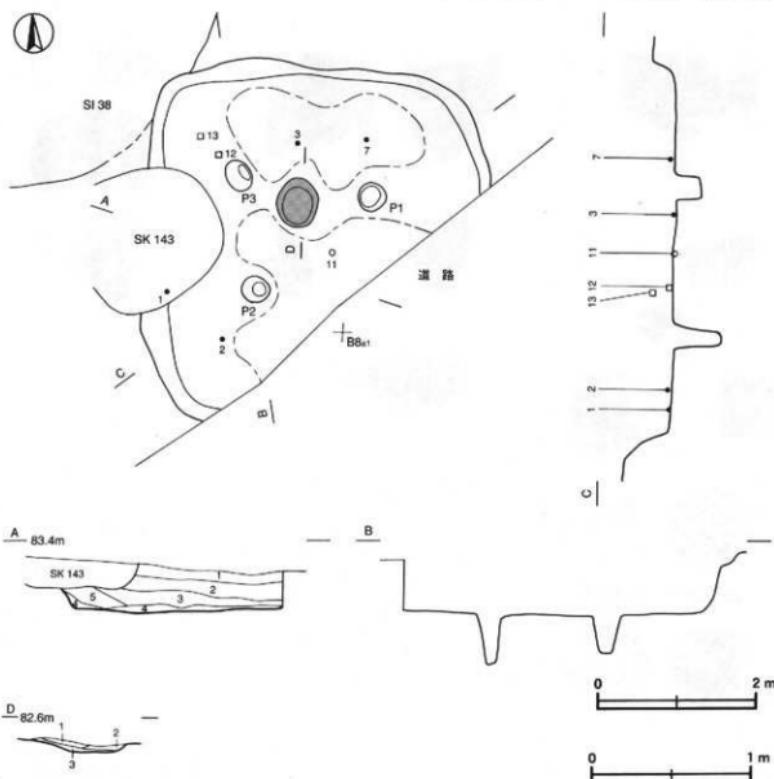
番号	種別	器種	船上	色調	焼度	手法の特徴	出土位置	備考	
7	弥生土器	壺	石英	褐	灰	普通	口縁部と頸部に附着条一様（附加1条）縦文施文。口縁部下端にキズ1。	南西部覆土下層 TP451	
8	弥生土器	壺	民石・玄母	に赤い	普通	口縁部と頸部に附着条一様（附加1条）縦文施文。口縁部下端に横切削痕。	北部覆土下層 TP449		
9	弥生土器	壺	石英・長石・輝	明	赤	普通	口縁部に附着条一様（附加2条）縦文施文。口縁部と底端下端に縄文壓痕。	南部床面 TP450	
10	弥生土器	壺	石英・輝石	褐	灰	普通	複合口縁部に斜格子目状文。腹部附加条一様（附加1条）縦文施文。	南部部覆土上中 TP452	
11	弥生土器	壺	石英・長石	明	赤	普通	頭部に焼落を呈した複合口縁部。頭部上半に平行状による斜格子目状文。	西北部覆土下層 TP463	
12	弥生土器	壺	石英・長石	灰	褐	普通	口縫部と腰削附加条一様（附加2条）縦文施文。	北部覆土下層 TP460	
13	弥生土器	壺	石英・長石	明	褐	普通	頭部附加条一様（附加2条）縦文施文。	北部覆土下層 TP462	
14	弥生土器	壺	石英・長石	明	褐	普通	頭部附加条一様（附加2条）縦文施文。	中央部床面 TP461	
15	弥生土器	壺	石英・長石・輝	に赤い	普通	腹部附加条一様（附加2条）縦文施文。	北部後土下層 TP455		
16	弥生土器	壺	石英・長石	黑	褐	普通	腹部附加条一様（附加2条）縦文施文。一部灰付着。	北部覆土下層 TP456	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
17	筋鉢車	4.6	4.7	2.1	52	石英・長石・ 雲母付	にぶい 赤褐	普通	上下面に連續刺突文を渦状に施文。側面は熱系文 を施文。	北部壁際覆 土下層	DP8 PLA3
18	砥石	(10.3)	(6.0)	4.9	(427)	砂岩	柱状の自然縫素材。上・下面を研磨面に使用。被熱痕有り。一部赤変。			西部覆土中層	Q45
19	鉢石	27.5	11.6	8.5	3600	砂岩	柱状の自然縫素材。上面と側面に被熱痕有り。一部赤変。			炉南東部	Q44

#### 第42号住居跡（第124・125図）

位置 調査区東部のA 7 jo区に位置し、丘陵性台地先端部に近い平坦面に立地している。

重複関係 北西側で第38号住居跡を掘り込み、西側は第143号土坑に掘り込まれている。東側から南側は、調



第124図 第42号住居跡実測図

査区域外のため未調査である。

規模と形状 遺存する壁と床面から、南北の長軸4.52m、東西の短軸4.28mで、平面形は隅丸方形と考えられる。南北の長軸と炉の位置をもとにした主軸方向は、N-5°-Wである。壁はわずかに外傾して立ち上がり、壁高は27~58cmである。

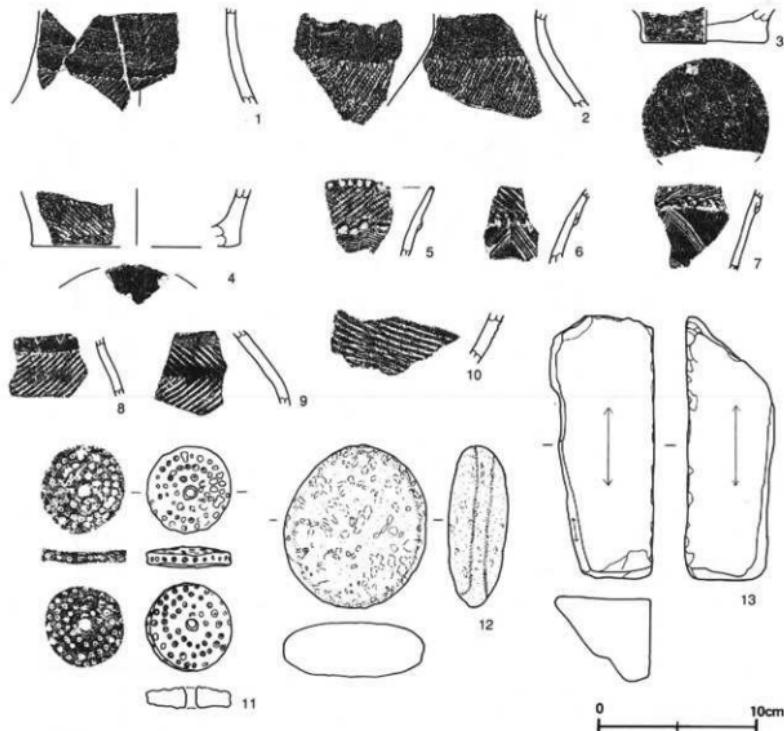
床 平坦であり、炉を囲むように南側と北側中央に硬化面が確認された。

炉 中央部やや北寄りに付設されている。長径62cm、短径52cmの橢円形で、床面を7cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土が散布し、炉底部の中央は赤変硬化している。

#### 炉土層解説

1	褐色	燒土粒子中量、燒土ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、炭化物・鹿沼バミス微量	3	暗褐色	燒土粒子中量、燒土ブロック・鹿沼バミス微量、炭化粒子・ローム粒子微量
2	褐色	燒土粒子少量、炭化粒子・鹿沼バミス微量			

ピット 調査範囲内で、3か所が確認された。P1~P3の深さは33~62cmで、規模と配置からいずれも柱穴と考えられる。



第125図 第42号住居跡出土遺物実測図

**覆土** 5層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層にローム粒子を少量含んでいる。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	4 褐褐色	ロームブロック中量
2 褐褐色	炭化粒子・ロームブロック少量	5 褐褐色	ロームブロック中量、炭化粒子極微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

**遺物出土状況** 弥生土器片66点(口縁部片3、頸部片6、胴部片32、底部片5)、土製品1点(紡錘車)、石器2点(磨石、砥石)と、流れ込み及び混入と考えられる繩文土器片79点。土師器片6点が出土している。遺物は少なく、すべて小破片である。ほとんどが全城の覆土中層から床面上で確認されている。第125図1~3・11・12は床面上、13は覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び遺物の形態から弥生時代後期前半と考えられる。

第42号住居跡出土遺物観察表 (第125図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	-	(3.8)	-	石英・長石	にぶい	普通	頭部側面削下(8本側面)による波状文。頭部削加条一種(附加2条)繩文施文。	南西部床面	P147 54 PL45
2	弥生土器	壺	-	(5.9)	-	石英・長石	にぶい	普通	頭部焼文帯形成。頭部削加条一種(附加2条)繩文施文。	西西部床面	P168 54
3	弥生土器	壺	-	(2.0)	7.8	石英・長石・砂	にぶい	普通	頭部削加条繩文施文。底部木素痕。	北西部床面	P175 54
4	弥生土器	壺	-	(3.6)	(13.0)	石英・長石	にぶい	普通	頭部削加条一種(附加2条)繩文施文。底部木素痕。	北西部中層	P176 54

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴			出土位置	備考
5	弥生土器	壺	石英・長石・珪母	明赤褐	普通	口部繩文施文押付。口部部及腰部繩文施文。下部は指痕押付。頭部削面狀工具(6本側面)による波状文。			南部覆土中	TP466
6	弥生土器	壺	石英・長石	暗灰黄	普通	複合1.1.縦部附加条一種(附加2条)繩文施文。1.1.縦部下端に繩文削付。頭部削面狀工具(6本側面)による波状文。			北部覆土中	TP467
7	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	複合1.1.縦部附加条一種(附加2条)繩文施文。1.1.縦部下端に繩文削付。頭部削面狀工具(6本側面)による波状文。			北部床向	TP470
8	弥生土器	壺	石英・長石	黑褐	普通	頭部は波状の多角彫刻文。胴部削加条一種(附加2条)繩文施文。			覆土中	TP473
9	弥生土器	壺	長石	にぶい	普通	頭部D端に横位の多角彫刻文。胴部削加条一種(附加2条)繩文施文。			覆土中	TP471
10	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい	普通	頭部削加条一種(附加2条)繩文施文。			北部覆土中	TP474

番号	種別	長さ	幅	厚さ	東京	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
11	紡錘車	5.4	5.3	1.3	37	石英・長石	にぶい	普通	上・下端と側面に竹管状工具による円形削文。軽突文は上端が溝状、下端が3重の同心円状の構成。	中央部床面	DP9 PL43

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	磨石	10.2	8.0	3.7	350	安山岩	自然磨耗材。全面を研磨面に使用。	北西部床向	Q16 PL40
13	磨石	16.4	6.6	5.6	813	碧岩	柱状の自然磨耗材。3個面を研磨面に使用。	北西部覆土中層	Q47 PL41

第43号住居跡 (第126・127図)

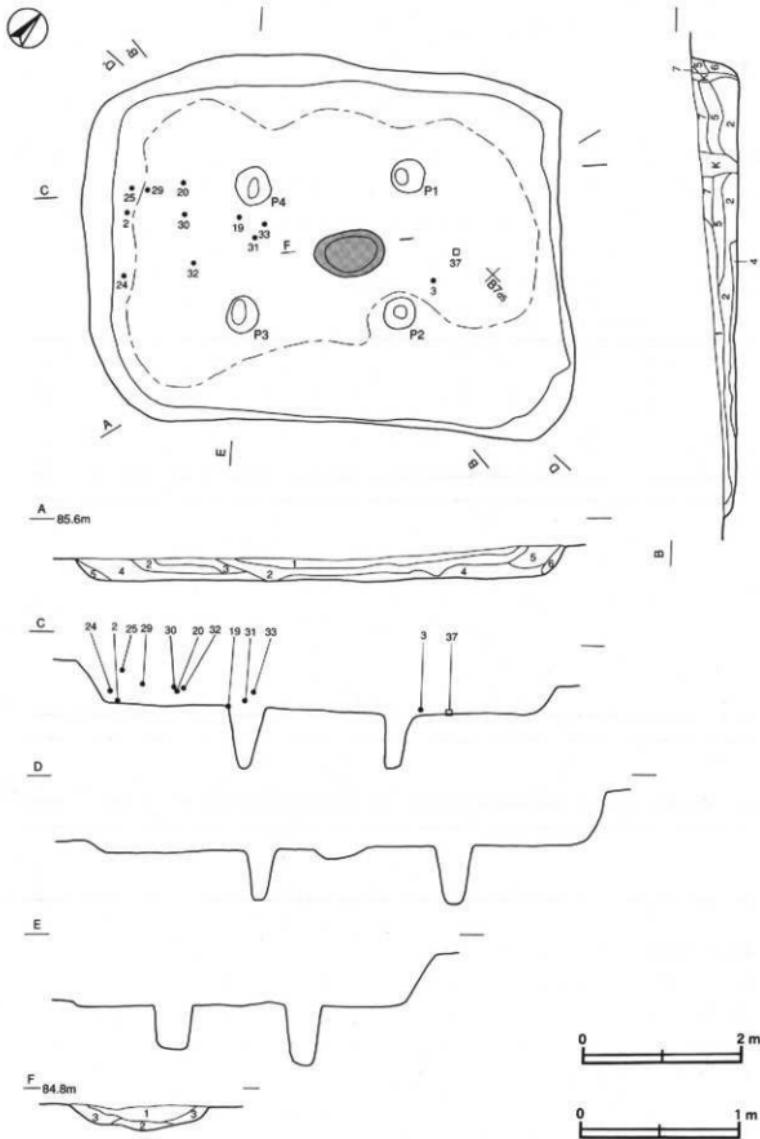
**位置** 調査区東部のB7d4区に位置し、丘陵性台地先端部に近い緩斜面に立地している。

**薙復関係** 北西側に南東部の壁を流失している第33号住居跡が隣接し、位置的に本跡が掘り込んでいる。

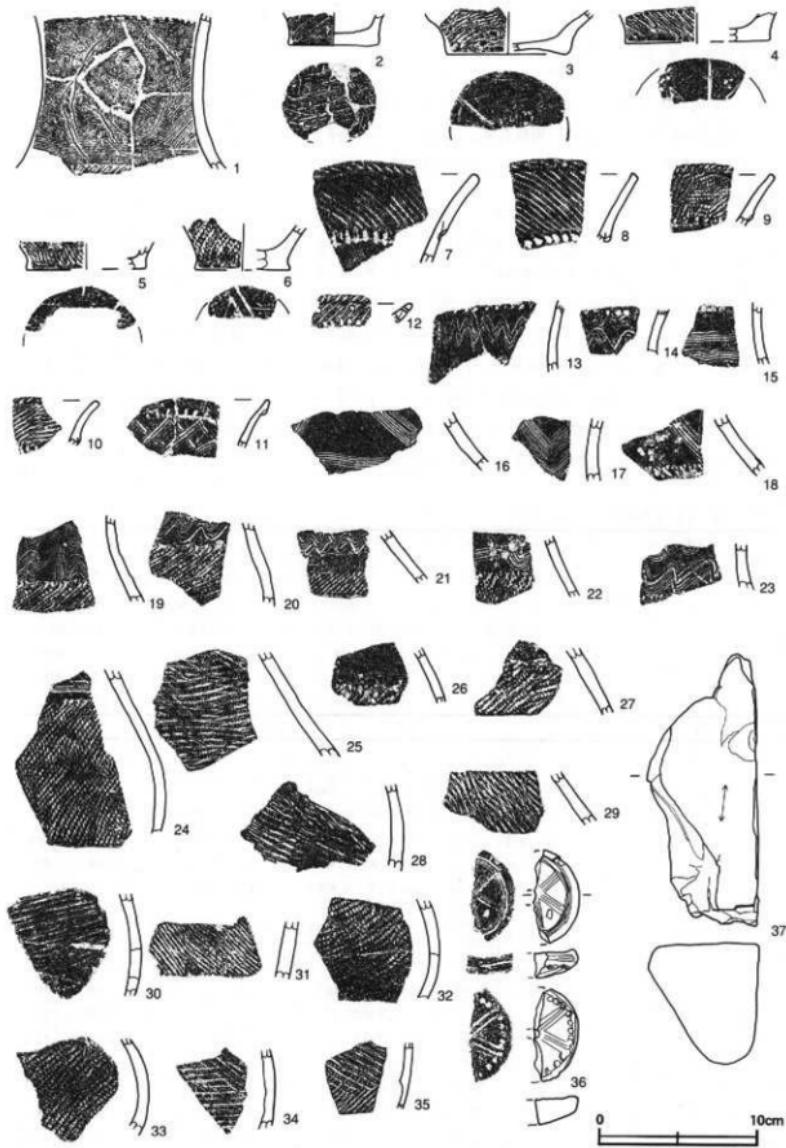
**規模と形状** 遺存状況は良好であり、長径6.08m、短軸4.58mで、平面形は隅丸長方形である。南北軸と炉の位置をもとにした主軸方向は、N=40°~Eである。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は8~67cmである。

**床** 平坦であり、東側の一部を除き、炉を開くように壁際まで踏み固められた硬化面の広がりが確認された。

**炉** 中央に付設されている。長径90cm、短径58cmの楕円形で、床面を15cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土が散布し、炉床部の中央は赤変硬化している。



第126図 第43号住居跡実測図



第127図 第43号住居跡出土遺物実測図

## 炉土層解説

- 1 黒褐色 塵土粒子・炭化粒子少量、炭化物・ローム粒子・鐵道バミス中量  
2 明赤褐色 塵土粒子・鐵道バミス中量、炭化粒子・鐵土粒子微量

ピット 4か所。P 1 ~ P 4 の深さは56~75cmで、規格と配置から柱穴と考えられる。

覆土 7層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層にローム粒子を含んでいる。斜面に沿うように累積からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

## 土層解説

- | 1 | 新褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量、塵土粒子極微量 | 4 | 黒褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量、塵土粒子・施道バミス微量 |
|---|-----|------------------------|---|-----|---------------------------|
| 2 | 褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子微量         | 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量            |
| 3 | 褐色  | ローム粒子多量、塵土粒子極微量        | 6 | 褐色  | ロームブロック中量、塵道バミス少量         |
|   |     |                        | 7 | 褐色  | ロームブロック微量、塵土粒子・炭化粒子極微量    |

遺物出土状況 弥生土器片305点(口縁部片18、頸部片30、胸部片241、底部片16)、上製品1点(紡錘車)、石器1点(砥石)と、流れ込みと考えられる縄文土器片112点が出土している。遺物は多量であるが、すべて小破片である。ほとんどが全域の覆土中層から下層で確認され、床面上から出土したものは少なかった。また、土器に混じってこぶし大以上の礫が、覆土の中層以下からまとまって出土している。そのうち半数の礫には、被熱の痕跡が認められた。第127図2・3・37は床面上、1・36は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器及び造構の形態から弥生時代後期前半と考えられる。

第43号住居跡出土遺物観察表 (第127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手述の特徴	出土位相	備考
1	弥生土器	甕	-	(9.5)	-	石英・長石・ガラス	灰褐色	普通	口縁部下部に新文灰、腹部側面切妻工具(5本鈎巣)による縦走文と山形文を重複。側面部加厚一枚(附加2条)縄文施文。	北西部覆土上	P503 5%
2	弥生土器	甕	-	(2.0)	5.6	石英・長石・褐色	灰褐色	普通	腹部および底面に附加葉一様(附加1条)縄文施文。	北西部未発見	P508 10%
3	弥生土器	壺	-	(2.7)	[7.6]	石英・長石・輝	明褐色	普通	腹部輪郭不明の附加葉縄文施文。底部木葉痕。	北東部未発見	P507 5%
4	弥生土器	甕	-	(1.8)	(9.0)	石英・長石	にいいろ	普通	腹部附加葉一条(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	北西部覆土上	P509 5%
5	弥生土器	甕	-	(1.5)	[7.4]	石英・雲母	にいいろ	普通	腹部R字軸輪縄文施文。底部木葉痕。	北西部未発見	P510 5%
6	弥生土器	甕	-	(2.9)	[6.0]	石英・長石・輝	にいいろ	普通	腹部R字軸輪縄文施文。底部木葉痕。	北西部覆土上	P511 5%

## 番号

## 種別

## 器種

## 断士

## 色調

## 焼成

## 手述の特徴

## 出土位相

## 備考

7	弥生土器	甕	石英・長石	にいいろ	普通	L1.5とL2.0縁部附加葉二種(附加2条)縄文施文。L1縁部下部輪郭線工具上(5本鈎巣)による波状文。	北東部覆土上	TP477 PLA5
8	弥生土器	壺	長石・雲母	にいいろ	普通	口縁と口輪部に附加葉一種(附加2条)縄文施文。L1縁部下部に横文原体押印。	北西部覆土上	TP478
9	弥生土器	甕	石英・長石・雲母	輝	灰	L1.5とL2.0縁部附加葉二種(附加2条)縄文施文。L1縁部下部輪郭線工具上(5本鈎巣)による波状文。	北西部覆土上	TP480
10	弥生土器	甕	長石・雲母	輝	灰	L1.5と口輪部に附加葉二種(附加2条)縄文施文。L1縁部下部輪郭線工具上(5本鈎巣)による波状文。	北西部覆土上	TP481
11	弥生土器	壺	石英・長石	輝	普通	輪郭線工具(3本鈎巣)による波状文。頭部連続輪郭線文施文。口縁部下部に横突起。	北西部覆土上	TP479
12	弥生土器	坏	長石	にいいろ	普通	口縁と口輪部に附加葉二種(附加2条)縄文施文。2個単位の焼成前筋孔有り。L1縁部下部に横突起文施文。	東南部覆土上	TP482
13	弥生土器	甕	石英・長石	輝	普通	L1縁部下部横突起文。頭部連続輪郭工具(6本鈎巣)による波状文施文。	北東部未発見	TP496
14	弥生土器	壺	石英・長石	にいいろ	普通	L1縁部下部横突起文。頭部連続輪郭工具(4本鈎巣)による波状文施文。	西北部覆土上	TP512
15	弥生土器	甕	長石・雲母	にいいろ	普通	頭部連続輪郭工具(5本鈎巣)による波状文施文。	北西部覆土上	TP506
16	弥生土器	甕	石英・長石	輝	灰	頭部連続輪郭工具(8本鈎巣)による横走文と山形文施文。	南東部未発見	TP491
17	弥生土器	甕	長石	にいいろ	普通	頭部連続輪郭工具(8本鈎巣)による山形文を重畠施文。	北西部覆土上	TP503
18	弥生土器	甕	石英・長石	にいいろ	普通	頭部連続輪郭工具(6本鈎巣)による山形文。頭部附加葉二種(附加2条)縄文施文。	北西部覆土上	TP497
19	弥生土器	甕	石英・長石	にいいろ	普通	頭部連続輪郭工具(8本鈎巣)による波状文。頭部附加葉一種(附加1条)縄文施文。	中央部未発見	TP492
20	弥生土器	甕	石英・長石	にいいろ	普通	頭部連続輪郭工具(8本鈎巣)による波状文。頭部附加葉一種(附加1条)縄文施文。	北西部未発見	TP493
21	弥生土器	甕	石英・長石・輝	輝	普通	頭部連続輪郭工具(8本鈎巣)による波状文。頭部附加葉二種(附加1条)縄文施文。	北西部覆土上	TP498

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
22	弥生土器	壺	石英・長石	黄	褐	普通	腹部網状状工具(5本複合)による波状文。肩部L.R單路繩文施文。北西部覆土中	TP502	
23	弥生土器	壺	石英・長石	黄	褐	普通	肩部網状工具(8本複合)による波状文実填。	北西部覆土中	TP501
24	弥生土器	壺	石英・長石・輝	にぶい褐	普通	腹部網状工具(5本複合)による波状文。肩部L.R單路繩文施文。	東南部覆土下層	TP484	
25	弥生土器	壺	石英・長石・輝	にぶい褐	普通	肩部網状工具(5本複合)による波状文。肩部L.R單路繩文施文。	東南部覆土中	TP486	
26	弥生土器	壺	(未定)	赤	褐	普通	腹部無文帶形成。肩部附加条一種(附加2条)繩文施文。	北東部覆土中	TP503
27	弥生土器	壺	石英・長石・輝	にぶい褐	普通	腹部附加条一種(附加2条)繩文施文。	北東部覆土中	TP513	
28	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐	普通	腹部附加条一種(附加2条)繩文施文。一部縫付着。	北東部覆土中	TP487	
29	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐	普通	腹部附加条一種(附加2条)繩文施文。	東南部覆土下層	TP494	
30	弥生土器	壺	石英・長石	赤	褐	普通	肩部附加条一種(附加2条)繩文施文。	南西部覆土下層	TP488
31	弥生土器	壺	石英・長石・輝	赤	褐	普通	輪廓不明の沿坑柔繩文施文。	中央部床面	TP490
32	弥生土器	壺	長石	明	黄	普通	肩部L.R單路繩文施文。	東部覆土下層	TP485
33	弥生土器	壺	長石	赤	褐	普通	肩部L.R單路繩文施文。一部縫付着。	中央部覆土下層	TP489
34	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄褐	普通	肩部附加条一種(附加2条)繩文施文。羽状構成。	P2覆土中	TP504	
35	弥生土器	壺	石英・長石・輝	赤	普通	肩部附加条一種(附加2条)繩文施文。羽状構成。	北西部覆土中	TP499	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
36	柄鍬	5.7	(28)	1.7	(22)	石英・長石・雲母	にぶい褐	骨通	上曲線齒狀工具(4本複合)による波状状と周回する文様施文。側面 埋め込み。下面は放射状の繊維状と竹管状工具の円形突起を回向。	東南部覆土中	DP10 PL43

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
37	砾石	(17.0)	7.0	7.6	(1,140)	砂岩	柱状の自然離解体。上面を研磨面に使用。			北東部床面	Q48

## (2) 土器棺墓

### 第124号土坑(第128・129図)

位置 調査区東部のB7e1区に位置し、丘陵性台地中央の南東向き緩斜面に立地している。

規模と形状 平面形は長径0.76m、短径0.60mの梢円形で、深さは20cmである。底面は皿状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。長径方向はN-62°-Eである。

覆土 4層に分層される。ロームブロックやローム粒子、砂粒を含む層が確認され、平行な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック少量、炭化粒子極微量
- 2 にぶい褐色 ロームブロック中量
- 3 白 色 砂粒混入、ローム粒子極微量
- 4 褐 色 ロームブロック微量

遺物出土状況 腹部下半が残存する弥生土器の大形壺1点と

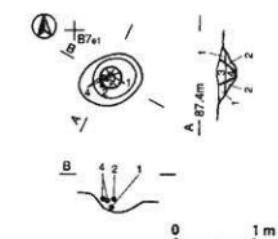
弥生土器片5点(頸部片1、肩部片4)が出土している。第

129図1は、正位の状態で底面上から出土している。2~4

は、1とは異なる同一の土器と考えられ、2は覆土中層から、

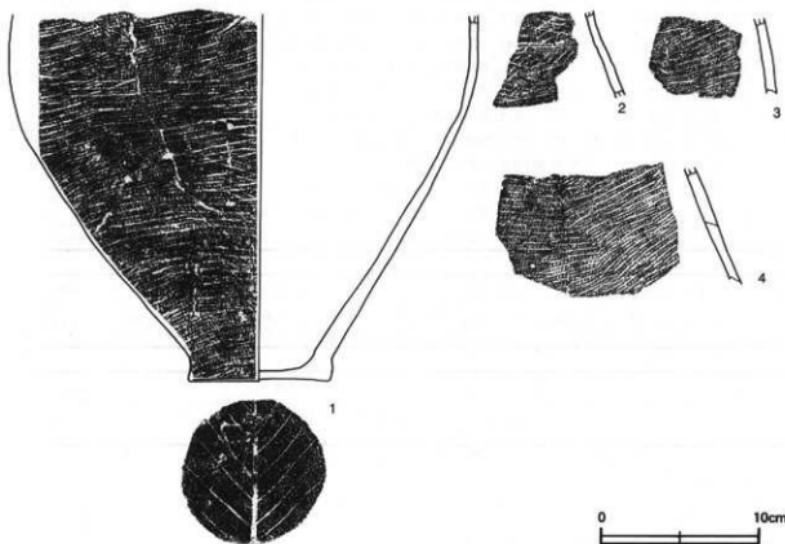
4は散在した状態で壺の内部から出土している。なお、壺の

内部から骨片等は検出されなかった。



第128図 第124号土坑実測図

所見 骨片等は検出されなかったが、遺構の形態と土器の埋設状況から土器棺墓と推定される。第129図の大型壺が土器棺として使用され、2~4などの破片からなる別個体の土器が、蓋としての機能を果たしていたものと推定される。時期は、遺構の形態と出土土器から弥生時代後期前葉と考えられる。



第129図 第124号土坑出土遺物実測図

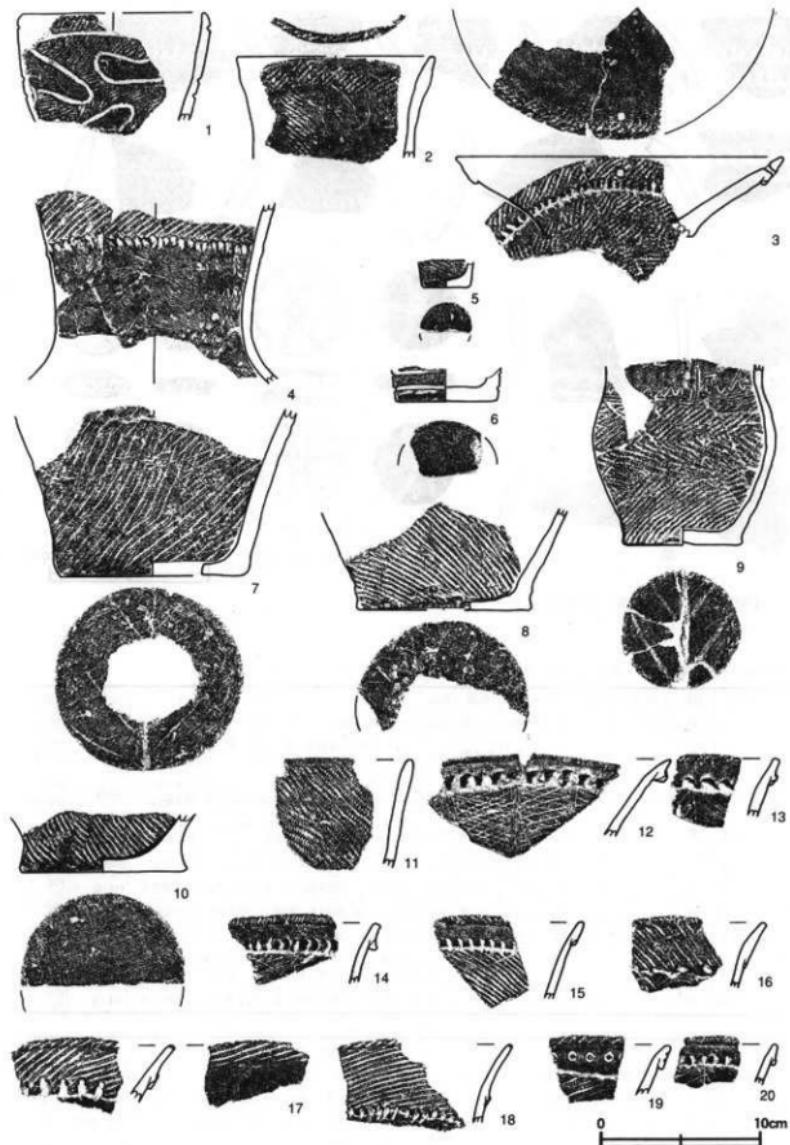
第124号土坑（土器棺墓）出土遺物観察表（第129図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	—	(22.8)	9.0	石英・長石 ・赤色粒子	褐	普通	肩部附加条一種（附加2条）縦文施文。底部木葉痕。 表面一部煤付着。裏面一部剥離。	中央部底面 PS17 50% PL31	

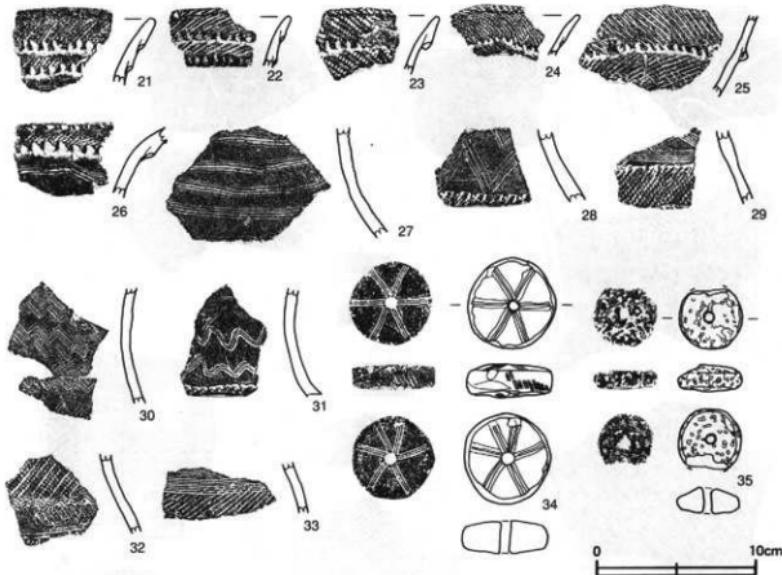
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	弥生土器	壺	石英・長石	にふい黄褐	普通	頭部鄭齒状工具（4本鄭齒）による横走文と縱区画文を施文後、單刃 鋸による斜格子目状文充填。肩部附加条一種（附加2条）縦文施文。	PS16上唇南西 515 514同一	
3	弥生土器	壺	石英・長石	にふい黄褐	普通	肩部附加条一種（附加2条）縦文施文。	覆土中	TP515
4	弥生土器	壺	石英・長石	にふい黄褐	普通	肩部附加条一種（附加2条）縦文施文。	中央部沿口部内	TP514

### (3) 遺構外出土遺物（第130・131図）

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第130図 遺構外出土遺物実測図（1）



第131図 遺構外出土遺物実測図（2）

遺構外出土遺物観察表（第130・131図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	発生土器	壺	[11.6]	[6.6]	—	石英・長石・雲母	に赤い場	普通	L.R單輪縞文を地とし、茎部の沈線区面により唇部縞文を展開。	B5区表土中 7/6 PL45	P728 中期 後期
2	発生土器	壺	[22.4]	[6.4]	—	石英・長石・雲母	明赤・樹	普通	口唇と口縁部に附加条一種（附加2条）縞文を横位施文。施文部によって文様抽出。	SD1裏土中 5/6 PL45	P729 後期
3	発生土器	高杯	[20.4]	[4.9]	—	石英・長石	に赤い場	普通	複合口縁部に孔有り。口縁下端部は原体押圧。年部表面と口縁部から施文の一帯に附加条一種（附加2条）縞文施文。	SD1裏土中 10/6 PL45	P730 後期
4	発生土器	壺	—	[11.2]	—	石英・長石・赤鉄子	に赤い場	普通	口縁部に附加条一種（附加2条）縞文施文。下端部は原体押圧。頭部磨擦状工具（木本椎函）による波状文光沢。	TM1盛土中 5/6 PL45	P768 後期
5	発生土器	壺	[ニキニ7.7]	[1.5]	3.1	石英・長石	に赤い場	普通	頭部附加条一種（附加2条）縞文施文。底部無文。	B6区表土中 5/6 PL45	P741 後期
6	発生土器	壺	—	[2.0]	[6.5]	長石・雲母	に赤い場	普通	肩部は横位の沈線区面により唇部縞文を展開。底部無文。	TM1盛土中 5/6 PL45	P742 中期
7	発生土器	壺	—	[10.1]	[11.4]	石英・長石・雲母	に赤い場	普通	頭部附加条一種（附加1条）縞文施文。底部木葉痕。底部附段成段穿孔。	TM1盛土中 5/6 PL45	P743 後期
8	発生土器	壺	—	[6.3]	[10.8]	石英・長石	に赤い場	普通	頭部附加条一種（附加2条）縞文施文。底部木葉痕。	SD3裏土中 5/6 PL45	P764 後期
9	発生土器	壺	—	[11.2]	7.4	6素・長石・赤鉄子	に赤い場	普通	頭部は頭部状工具（木本椎函）による波状文と棒臼の仄面文。頭部は附加条一種（附加2条）縞文施文。羽状構成。底部木葉痕。	TM1盛土中 5/6 PL45	P761 後期
10	発生土器	壺	—	[3.5]	10.4	石英・長石	褐	普通	頭部附加条一種（附加2条）縞文施文。底部布目痕。	TM1盛土中 5/6 PL45	P745 後期

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
11	発生土器	壺	石英・長石	に赤い場	普通	口縁部から頭部に附加条一種（附加2条）縞文施文。	TM1盛土中 5/6 PL45	P765 縞文
12	発生土器	壺	石英・長石・赤鉄子	浅黄・褐	普通	折返し口縁部縞文。下端部所圧。頭部に捺壓文による鋸歯面と格子状の沈線施文。	SD1裏土中 5/6 PL45	P766 縞文
13	発生土器	壺	石英・長石	明赤・褐	普通	折返し口縫。口縫部に附加条縞文施文。下端部所圧。頭部に捺壓と斜窓の沈線施文。	TM2面透裏土中 5/6 PL45	P767 縞文
14	発生土器	壺	石英・長石	黒・褐	普通	折返し口縫。口縫部附加条縞文施文。下端部爪形のキザミ。頭部に捺壓区面と格子状の沈線施文。	TM1盛土中 5/6 PL45	P768 縞文

番号	種別	器種	断土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	弥生土器	壺	石英・長石	灰	普通	新近山形。口唇部と底面に附加条一様(附加2条)純文施文。口唇下端部底脚付。	C 2 区表土中	TM 2 見出
16	弥生土器	壺	石英・長石	明赤褐色	普通	口唇部と口縁部に附加条一様(附加2条)純文施文。口唇下端部底脚付。	TM 2 濡溝土中	TM 2 見出
17	弥生土器	壺	石英・長石	明赤褐色	普通	折返し口様。口唇と口縁部に附加条一種(附加2条)純文施文。下端部底脚付。	SI35 複土中	TM 2 見出
18	弥生土器	壺	石英・長石	に赤い緑	普通	複合口様。口唇と口縁部に附加条一様(附加2条)純文施文。下端部底脚付。	B 7 区表土中	TM 2 見出
19	弥生土器	壺	石英・長石	に赤い緑	普通	折返し口様。口唇と口縁部に附加条一種(附加2条)純文施文。口縁部に竹管状の突突文。	B 6 区表土中	TM 2 見出
20	弥生土器	壺	石英・長石	褐	普通	折返し口様。口唇部に附加条純文施文。下端部底脚付。颈部に縦区画と斜子状の沈窓施文。	B 6 区表土中	TM 2 見出
21	弥生土器	壺	石英・長石	褐	普通	2段の複合口様。口唇部に附加条一様(附加2条)純文施文。下端部底脚付。	B 5 区表土中	TM 2 見出
22	弥生土器	壺	石英・長石	黒	普通	2段の複合口様。口唇と口縁部に附加条一種(附加2条)純文施文。下端部底脚付。	C 6 区表土中	TM 2 見出
23	弥生土器	壺	長石	に赤い緑	普通	複合口様。口唇から腹部に附加条一様(附加2条)純文施文。下端部キザミ。	表土中	TM 2 見出
24	弥生土器	壺	石英・長石	に赤い緑	普通	複合口様。口唇と口縁部に単純純文施文。下端部底脚付突突文。	表土中	TM 2 見出
25	弥生土器	壺	石英・長石	褐	普通	口唇と底部附加条一種(附加2条)純文施文。羽状構成。口唇下端部底脚付。コブ状突起付粘。	SD 1 複土中	TM 2 見出
26	弥生土器	壺	石英・長石	明赤褐色	普通	2段の複合口様。附加条一種(附加2条)純文施文。下端部底脚付。颈部薄削状T片で横様の直状文。	TM 1 売土中	TM 2 見出
27	弥生土器	壺	石英・長石	明赤褐色	普通	頸部に撻刷状工具(5本撻刷)による横様の直状文充填。	表土中	TM 2 見出
28	弥生土器	壺	石英・長石	に赤い緑	普通	頭部薄削状工具(4本撻刷)による山形文。側部附加条一種(附加2条)純文施文。	TM 2 濡溝土中	TM 2 見出
29	弥生土器	壺	石英・長石	に赤い緑	普通	頭部薄削状工具(5本撻刷)の山形文と直状文。腹部附加条一種(附加2条)純文施文。	SI14 複土中	TM 2 見出
30	弥生土器	壺	石英・長石	に赤い緑	普通	頭部薄削状工具(6本撻刷)による波状文を。茎葉被せながら充填。	SI35 複土中	TM 2 見出
31	弥生土器	壺	長石	褐	普通	頭部薄削状工具(4本撻刷)による波状文。頭部附加条一種(附加2条)純文施文。	TM 1 複土中	TM 2 見出
32	弥生土器	壺	石英・長石	褐	普通	頭部附加条一種(附加2条)純文施文。頭部上半に斜格状文と筋條文による文様帯充填。	SI14 複土中	TM 2 見出
33	弥生土器	壺	石英・長石	に赤い緑	普通	頭部薄削状工具(7本撻刷)の横様区画と波状文。頭部附加条一種(附加2条)純文施文。	TM 1 売土中	TM 2 見出

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重り	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
34	筋垂車	5.6	5.4	2.1	67.8	石英・長石	に赤い緑	普通	上下両面に輪状工具(3本撻刷)による放射状の文様施文。側面の一部にLR单簡純文施文。	TM 1 売土中	DP13 PL43
35	筋鋸車	3.6	3.9	1.6	32.7	石英・長石・雲母	に赤い緑	普通	上下両面と側面に竹管状工具による網文充填。	B 7 区表土中	DP14 PL43

表6 弥生時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	半圓形	規格		床面	壁構	内部施設			覆土	主な出土品物	時期	備考		
				長軸(柱径) ×	高さ(柱高) (cm)			柱穴	柱頭	ビット	火口					
5	C4	N-27-E	不整円形	4.82	4.68	34	平坦	-	4	-	-	-	自然	弥生土器	良賀原手本跡-SK108	
6	C5a	w-26-W	「倒丸方型」	1.00	× 3.74	25	鍛鉄	-	3	-	-	-	1	自然	弥生土器	良賀原手本跡-SK108
7	C5a	N-27-W	「丸丸方型」	4.82	× 4.00	62	平坦	-	2	-	-	-	自然	弥生土器	良賀原手本跡-SK108	
8	C6a	N-40-W	「丸丸方型」	4.82	× 3.33	8-12	平坦	-	4	-	-	-	1	自然	弥生土器、筋垂車、筋鋸車、土器	良賀原手本跡-SK108
9	C5e	N-45-W	「丸丸方型」	1.50	× 2.80	15	鍛鉄	-	-	-	-	-	自然	弥生土器、筋垂車	良賀原手本跡-TM 2	
10	C6a	N-30-W	「倒丸方型」	1.00	× 2.30	25	平坦	-	1	-	-	-	自然	弥生土器、骨石斧、岩石	良賀原手本跡-TM 2, SD 2	
11	B6a	N-10-E	「倒丸方型」	1.50	× 1.50	5	鍛鉄	-	3	-	2	-	1	自然	弥生土器	後期手本跡-SK14
15	B6a	N-40-W	「倒丸方型」	1.05	× 3.00	16	鍛鉄	-	2	-	-	-	自然	弥生土器	良賀原手本跡-SK14	
18	B6a	N-36-W	「不整円形」	5.85	× 4.84	7-12	鍛鉄	-	4	-	-	-	1	自然	弥生土器	良賀原手本跡-SK14
25	B7a	N-40-E	「倒丸方型」	1.90	× 4.00	12	鍛鉄	-	3	-	-	-	自然	弥生土器	善通寺手本跡-SK126	
28	B7a	N-10-E	「丸丸方型」	5.34	× 4.56	37	平坦	--	3	-	-	-	1	自然	弥生土器、筋垂車、鍛鉄	善通寺手本跡-SK127-4号-SK128
32	B7a	N-7-E	「丸丸方型」	3.56	× 3.18	12	鍛鉄	-	-	-	-	-	1	自然	弥生土器、筋垂車	善通寺手本跡-SK124, SK129
36	B7a	N-6-W	「丸丸方型」	3.58	× 4.24	9-15	鍛鉄	-	4	-	-	-	1	人為	弥生土器、筋垂車、鍛鉄	良賀原手本跡-SK141
39	A7g	N-13-E	「倒丸方型」	1.50	× 1.50	10	平坦	-	-	-	-	-	人為	弥生土器、鍛鉄	SK177-本跡-SK135	
40	H7a	N-5-W	「丸丸方型」	4.54	× 4.70	15	平坦	-	4	-	-	-	1	人為	弥生土器、筋垂車、鍛鉄	後期手本跡-SK141
42	A7g	N-5-W	「丸丸方型」	4.52	× 4.28	27-30	平凹	-	3	-	-	-	1	自然	弥生土器、鍛鉄	SK138-本跡-SK143
43	H7a	N-40-E	「丸丸方型」	6.08	× 4.36	9-17	平凹	-	4	-	-	-	1	自然	弥生土器、筋垂車、鍛鉄	SI33-本跡

### 3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、古墳4基、堅穴住居跡11軒、土坑2基、溝跡1条を、調査区の中央部から東部において確認した。以下、それぞれの遺構と出土遺物について記述する。

#### (1) 古 墳

##### 第1号墳（第132～145図）

位置 調査区中央部のB5～C5区にかけて位置し、標高92～95mの丘陵性台地の尾根部先端に近い緩斜面に立地している。

確認状況 調査前の現況は山林である。これまで町が実施してきた分布調査などでは、前方部と後円部が2基の円墳として捉えられていた古墳である。分布調査の結果と照合すると、前方部が松田古墳群9号墳（讃古墳）に、後円部が8号墳（天王塚古墳）にそれぞれ該当する。後円部墳丘上からは、石塔の一部と考えられる石材も確認されており、古墳の呼称とともに信仰の対象とされてきたことがうかがわれる。後円部と前方部の墳頂付近には撲乱部が存在し、さらに、前方部では昭和初期に調査されたといわれる痕跡が、トレチ状に残っているのが確認された。墳丘の南部は、町道により一部削平されていた。

重複関係 後円部の北側には中世の土塁が連結し、付随施設と考えらえる第1号掘によって、くびれ部から周溝の一部が掘り込まれている。後円部の墳丘下では、縄文時代の第44・45号住居跡と時期不明の第2号土坑が確認された。

規模と形狀 墳丘の全長40m、周溝を含む全長44mの前方後円墳である。後円部の墳丘径は約21m、前方部の墳丘長約16m、墳丘幅はくびれ部で約13m、最大幅22mである。墳丘の主軸方向は、N-45°-Eである。

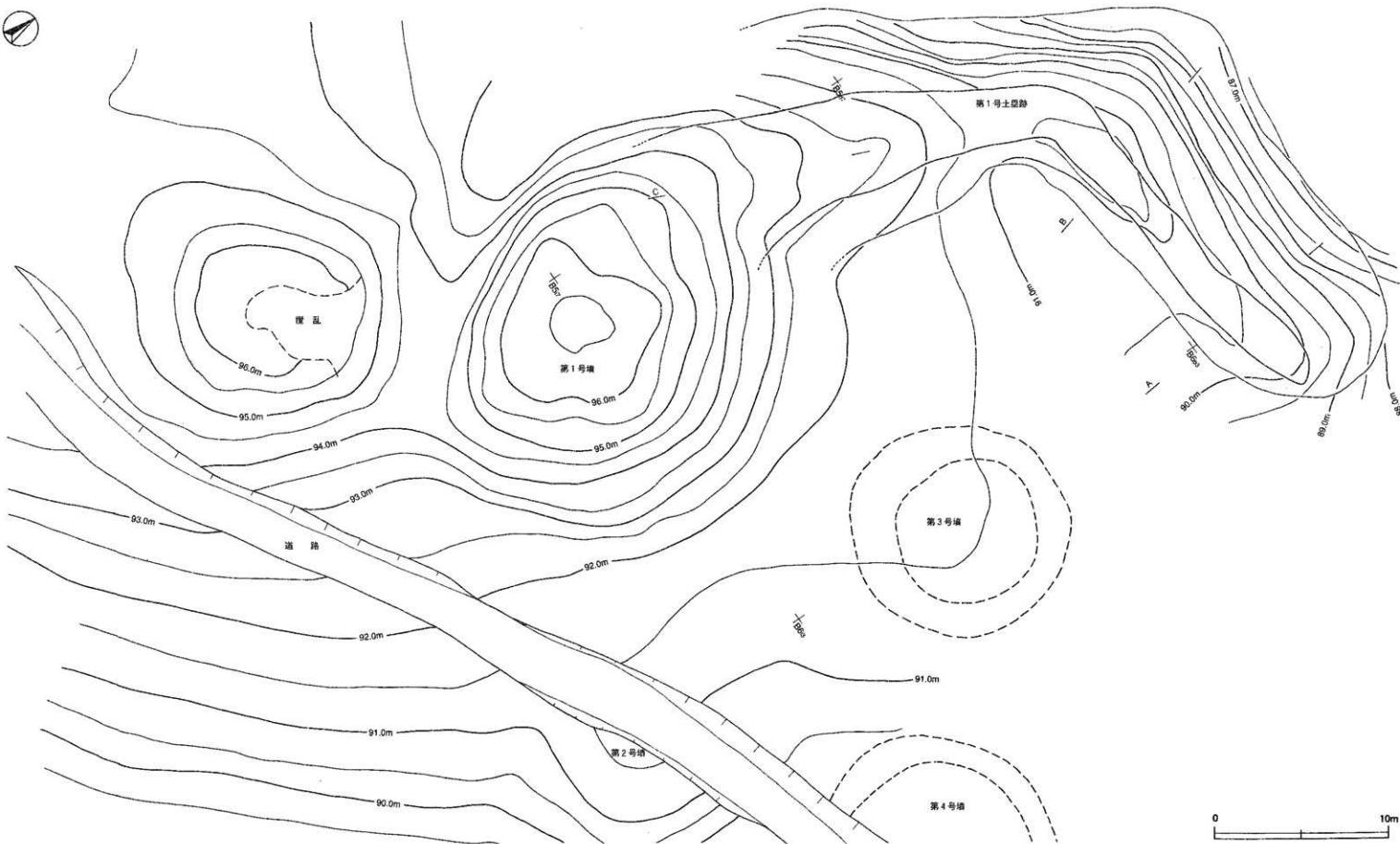
墳丘 後円部高約3.8m、前方部高約2.0mである。遺存状況は比較的良好であるが、後円部墳頂付近には盜掘痕が、前方部中央からくびれ部には既掘痕と第2号掘が確認され、築造時の状況をとどめていない。墳丘の一部は、ローム層の上面を30～50cmほど削り出し、黒色土からなる旧表土層上面を基底部としている。前方部と後円部の盛土は、いずれも主に暗褐色土と褐色土を用いて突き固めている。

前方部の築造は、南東側が急斜面となるため、下部は水平面を保ちながら盛土を行ない、上部は中央から円錐上に盛土をしたと考えられる。後円部も周辺は水平面を保ちながら築造しているが、南東部寄りには高さ約50cmほどのなだらかな盛土層が確認された。墳丘下の埋葬施設の構築に伴い、先行して盛土されたものと推定される。その後、墳丘下部は中心からの円錐状の盛土と、周辺からの平坦状の盛土を組み合わせながら構築し、埋葬施設を据える高さで一度平坦な整地面を造り出したと考えられる。墳丘上部は、埋葬後に盛土をして完成させたと考えられ、上部の土層は下部に比較して締まりのない上層となっている。

周溝 前方部の北側から南西側にかけて確認されたが、くびれ部から後円部にかけては確認できなかった。規模は、前方部南西側で最大幅3.2m、深さ60cm、北側で最大幅9.4m、深さ40cmである。全体の形状は、残存する周溝から判断すると、くびれ部に並行してわずかに周溝の幅がせばまる部分があるものの、梯形に近いものであったと考えられる。

埋葬施設 後円部の墳丘内と墳丘下で、それぞれ埋葬施設が確認された。いずれも埋葬形態は粘土槅であり、墳丘内の埋葬施設を第1主体部、墳丘下の埋葬施設を第2主体部とした。

第1主体部は、後円部のほぼ中心部に位置し、墳頂部から1.1m下の標高95.4mで粘土槅が確認された。掘り方は、長さ5.5m、幅2.7mの長方形で、主軸方向は墳丘の主軸にはば並行し、N-50°-Eである。掘り方の中央部は、横断面形が緩やかな弧状を呈しており、確認面からの深さは最大で45cmとなっている。この掘り込ま



第132図 第1～4号墳、第1号土塁跡現況図

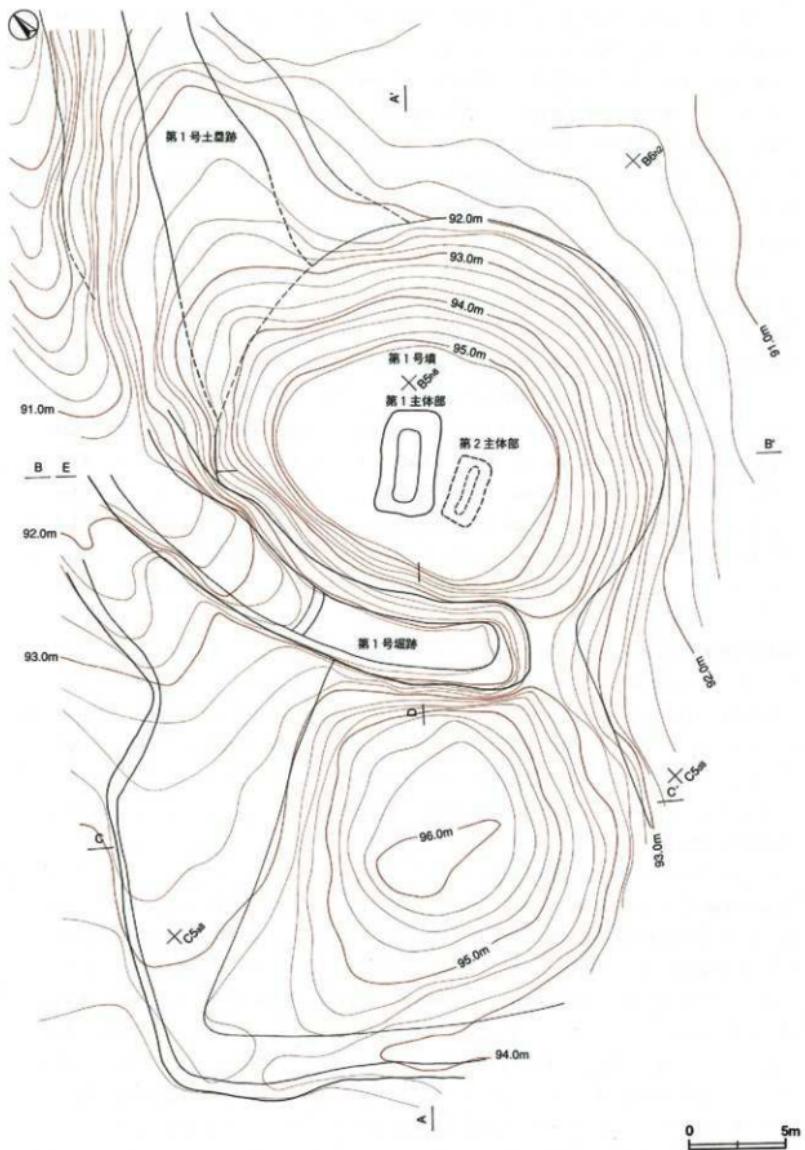
れた部分に、長さ3.7m、幅1.3~1.5m、内法の長さ3.1m、幅0.7~0.8m、確認面からの深さ20~25cmの粘土塗が構築されていた。粘土の厚さは、棺床部で10~15cmで、周囲は25~40cmほどである。また、両端部には小口の裏面に詰められたと考えられる粘土が、約30cm入り込んで確認された。なお、上部の被覆粘土などは確認されなかった。この粘土塗の形状や痕跡から、木棺は小口面をやや内側に持つ割竹形木棺と推定される。

第2主体部は、後円部の中心から南東寄りに位置し、第1主体部とは水平方向で南側に3.5mほど離れている。墳頂部から2.9m下がった、標高93.6mの墳丘下部で確認され、第1主体部との比高は、約1.8mである。掘り方は、旧表土上面からローム層を掘り込み、最深部は鹿沼バミス層に達している。長さ3.4m、幅1.8mの長方形で、主軸方向はN-55°-Eであり、第1主体部の主軸方向とはわずかにずれが見られる。この粘土塗は、埋葬直後から墳丘の盛土によって密封保護されたことから、木棺の腐朽後に上部の被覆粘土が崩落した痕跡が確認された。また、調査中に主体部東側部分は崩落してしまい、粘土塗の形状が捉えられなかつたが、土層断面からは、上圧によって縮まった埋土の遺存部分の下方には、被覆粘土が剥離して崩落したためにできた空洞部分の存在が確認された。この空洞部分から判断すると、粘土塗の断面形状は円形で、径約60cmと推定することができる。掘り方の中央部は、横断面形が半円状を呈しており、旧表土層上部の確認面からの深さは、最大で約90cmとなっている。この掘り込まれた部分に、長さ2.3m、幅55~60cm、内法の長さ2.1m、幅50cmの粘土塗が構築されている。粘土の厚さは、棺床部と側縁部とともに5~10cmほどである。また、粘土塗を固定するために、周囲にも厚さ10cmの粘土を貼っている。両端部には小口の裏面に詰めたと考えられる粘土が確認され、東側部分で約30cm、西側部分では40cm入り込んでいる。東西両側の小口部分と棺床の一部には、赤彩の痕跡が確認された。このような粘土塗の形状や痕跡から判断すると、木棺は小口面をやや内側に持つ割竹形木棺と推定される。さらに、粘土塗に残存した赤色顔料の痕跡は、木棺から転写されたものと推定され、木棺は赤彩されていたと考えられる。

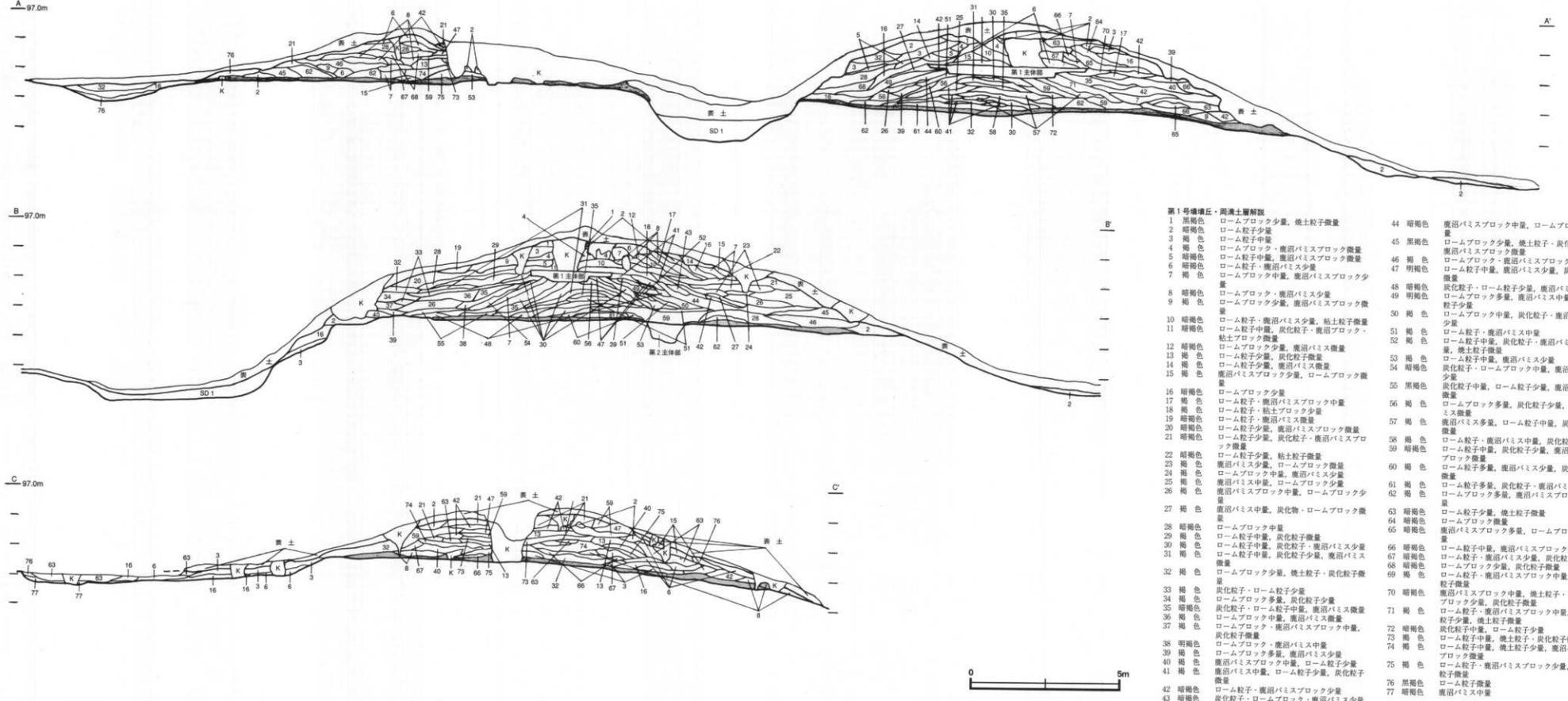
**遺物出土状況** 周溝からは繩文土器片40点、弥生土器片100点、土師器片39点、須恵器片16点、石器1点(凹石)、剣片5点、埴輪片1点が出土している。また、トレンチを設定して調査した範囲の墳丘内からも、繩文土器片329点、弥生土器片441点、土師器片41点、土製品1点(紡錘車)、石製品3点(石棒片)、石器3点(打製石斧2、磨石1)などが、混在した状態で出土している。これらの遺物は、周囲の繩文時代から古墳時代の住居跡などから出土しているものと差異はなく、すべて古墳建造に伴う削平と積み上げによって混入したものと考えられる。第135図1~4は、外部施設から出土した遺物である。1・4は後円部封土上層から、2・3は周溝覆土中から出土している。

第1主体部からは、銅鏡1面、直刀2口、刀子2点、鉄鏃26点、ガラス小玉205点が出土している。第141図208の銅鏡は、中央部やや南寄りの覆土上層から、鏡面を棺の内側に向けた斜位の状態で出土している。第142図209の直刀は中央部から南西部において、覆土上層から刃部を棺の外側、切先を棺の南側に向けて、210の直刀は北東部から中央部において、覆土上層から刃部を棺の外側、切先を棺の南側に向けて、それぞれ出土している。211・212の刀子は中央部の覆土下層と中層から、213~236の鉄鏃は、主に覆土下層から鎌身部を東側に向けてまとめて出土している。第139図5~145、第140図146~207のガラス小玉の大部分は、中央部を中心とした覆土下層から散乱した状態で出土している。なお、鉄鏃2点と小玉2点は細片のため、実測図未掲載である。直刀と鉄鏃は、覆土下層からやや浮いた状態で出土しており、出土状況から棺外副葬と考えられる。また、多数のガラス小玉は、出土位置から判断すると被葬者の首から胸にかけての位置に当たる。

第2主体部からは、第144図237の銅鏡1点が出土している。南東部の棺床上から出土しており、出土位置から判断すると、被葬者の左手首に装着していたと考えられる。



第133図 第1号墳、第1号堀跡、第1号土塁跡実測図

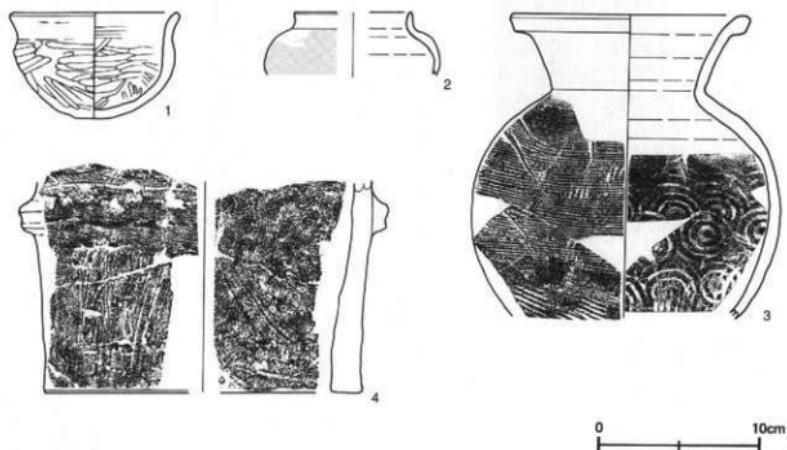


第134図 第1号填土層図

所見 墳丘と周溝の形態及び構築状況から、前方後円墳であることが確認できた。後円部には2基の主体部を有しており、規模や主軸方向に若干の差異が認められるものの、いずれも粘土構で、小口面をやや内側に持つ割竹形木棺を納めていたと考えられる。しかし、副葬品に相異が見られ、被葬者の地位や性格などと密接に関係するものと思われる。

墳丘内の第1主体部の被葬者は、古墳の規模や副葬品の出土状況などから、首長級の人物であったと考えられる。墳丘下の第2主体部の被葬者は、前方後円墳を築造する過程で、何らかの事態または理由により先行して埋葬されたものと推定する。それは構造や構築方法が類似する墳丘内の第1主体部の被葬者と、決して無関係ではなく、深い縁故関係などがあった人物と考えられる。

時期は、古墳の形態や外部施設からの出土遺物などから古墳時代後期で、第1主体部が鉄鎌の形態から6世紀前半、第2主体部がそれより若干古い時期と推定される。



第135図 第1号墳墳丘・周溝出土遺物実測図

第1号墳墳丘・周溝出土遺物観察表（第135図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土器	环	10.2	6.5	1.2	珪・石・灰・粘土	明赤褐	普通	口縁部内・外面横クロナデ。体部内・外面ヘラミガキ。	後円部斜土上層	P502 85% PL32
2	瓦	瓦	[7.2]	[3.9]	—	長石・黒色粒子	灰 黃	普通	口縁部内・外面、体部内面横クロナデ。肩部に重ね焼き痕。腹部から体部に自然釉。	周溝覆土中	P503 15%
3	須磨器	壺	14.5	(18.6)	—	石英・長石	灰	普通	口縁部内・外面クロナデ。体部外面カキ目調整・タタキ。体部内面同心円状当て具振。肩部に自然釉。	北西延溝覆土中	P504 20% PL23
4	埴輪	円筒	—	(13.0)	[19.4]	石英・長石	橙	普通	基部外側ハケ目調整。基部内面ヘラナデ。凸起部模様。	後円部斜土上層	DP12 5% PL43